

一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I

鳥取県東伯郡羽合町

MINAMIDANI

南谷ヒジリ遺跡

MINAMIDANI MEOTO DUKA

南谷夫婦塚遺跡

MINAMIDANI

南谷19～23号墳

UBAGATANI

乳母ヶ谷第2遺跡

UNO

宇野3～9号墳

1991

財団法人 鳥取県教育文化財団

建設省 倉吉工事事務所

正 誤 表

一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

ページ	行	誤	正
挿図目次	5	挿図51・・・72	挿図51・・・72・73 **
挿図目次	15	挿図61・・・80・83	挿図61・・・82・83 **
10	13	* 甌	* 甌
"	"	* 壺	* 壺
50	6	** 褐灰色	** 灰褐色
69	2	* 建てた	* 立てた
"	38	* こちら	* こちら
74	12	* (56)	* (57)
"	15	** 築造計画	** 築造時期
85 挿表 7	南谷19号墳 出土遺物欄	* 脚付碗	* 脚付碗
115	23	** 基盤層自体から	* 基盤層自体が
156 挿表 17	キャプション	* 出土時観察表⑦	** 出土土器観察表⑦
159 挿表 20	キャプション	* 出土時観察表②	** 出土土器観察表②
160 挿表 21	キャプション	* 出土時観察表③	** 出土土器観察表③

序

東郷池周辺は、古くから遺跡の宝庫として知られています。東郷池の北東に位置する羽合町にも国史跡の橋津古墳群や砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡など全国に知られる遺跡があります。

このたび、建設省の委託を受け、一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う発掘調査が当財団によって羽合町で行われました。

この調査で、集落跡3か所と古墳12基が調査され、砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡の空白期間を埋める時期の集落跡が丘陵地で調査されたことや特異な埋葬形態をもつ前方後円墳が調査されたことは、郷土の歴史を解き明かしていくうえで貴重な資料を与えてくれました。

この貴重な調査結果を後世に伝えていくことが我々の責務だと思っております。また、これらの資料を歴史の解明に役立てていただくことが、われわれ調査したものの一同の切なる願いであります。

最後に、交通の不便な所にもかかわらず調査に参加していただきました地元の方々をはじめ、ご協力いただいた方々、その他関係各位に対して心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山を經由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）まで約80kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに東伯郡羽合町及び泊村地内において、将来の国土開発幹線道路として当面、活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である羽合道路の整備を進めています。

羽合道路は、泊村原地内でインターチェンジより現道9号及び⑤倉吉青谷線とアクセスし、羽合町長瀬でインターチェンジによって北条道路一般道とアクセスしますが、途中東郷湖が見渡せる位置にサービスエリアが予定されている延長6kmの県中部地方ではじめての高規格道路で、昭和61年度に国道9号のバイパス事業として事業に着手しましたが、63年度に高規格な機能を持たすよう構造変更を行い、同年用地買収に着手しました。今年度からは、羽合町橋津地内において橋梁下部工事にも着手し、本格的な工事にはいりました。

このルートには、全部で10か所の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うことになりました。

このうち今年度は、工事の予定工程等を考慮し調整した結果、「乳母ヶ谷所在遺跡群」（報告書乳母ヶ谷第2遺跡・字野3～9号墳）「南谷古墳群」（報告書南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳）「南谷所在遺跡群」（報告書南谷ヒジリ遺跡）の3か所について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。残りの7か所についても工事工程等と調整を行い、3年度4年度で引き続き発掘委託契約を締結し、発掘調査を進めてもらう予定です。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持っていることにご理解をいただければ幸に存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成 3年 3月

建設省 倉吉工事事務所長







福 井 良

例 言

1. 本報告書は、1990年度一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う羽合町大字南谷字ヒジリ地区（南谷ヒジリ遺跡）、南谷字夫婦塚地区（南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳）、宇野字乳母ヶ谷地区（乳母ヶ谷第2遺跡・宇野3～9号墳）の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本報告書に記載した南谷ヒジリ遺跡、南谷夫婦塚遺跡は周知の南谷遺跡と区別するために大字と小字名を並べ、南谷19～23号墳、宇野3～9号墳は周知の南谷古墳群、宇野古墳群の一連として、乳母ヶ谷第2遺跡は周知の乳母ヶ谷遺跡と区別するために小字名に第2を追加し命名したものである。
3. 本報告書に記載した遺跡の所在地は、南谷ヒジリ遺跡が羽合町大字南谷字ヒジリ325・327、南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳が南谷字夫婦塚173-1ほか4筆、乳母ヶ谷第2遺跡・宇野3～9号墳が宇野字乳母ヶ谷2332ほか12筆、字馬廬1199-8ほか5筆である。
4. 本報告書で示す標高は建設省センター杭を使用し、南谷ヒジリ遺跡はNa92（X：-55992.801 Y：-40724.449）の21.761m、南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳はNa88+20（X：-56068.809 Y：-40352.764）の68.780m、乳母ヶ谷第2遺跡・宇野3～9号墳はNa83+80（X：-56175.772 Y：-39926.331）の86.919mを起点とした標高値で方位は磁北である。X、Y：は国土座標第5系である。
5. 本報告書に記載の地形図は国土院発行の1/50000地形図「青谷・倉吉」、調査区位置図は羽合町の1/2500地形図「都市計画計画図5」を使用した。
6. 本報告書の作成は調査員の討議に基づくものである。
本報告書本文については調査員が分担して執筆し、執筆担当者名は目次に記載した。
押図のうち、遺構実測は調査員、補助員の分担、及び業者委託して行なった。
遺構の浄写、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行なった。
遺構写真は発掘担当調査員が、遺物写真は山根・近藤・小谷が撮影した。
本書の編集は米田が行なった。
7. 出土遺物、図面、スライド等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。ただし、出土遺物は将来的に羽合町教育委員会に移管する予定である。
8. 南谷19号墳盛土下で検出した土壌内埋土の脂肪酸分析を、ズコーシヤ総合科学研究所（帯広市）に委託した。
9. 南谷ヒジリ遺跡の焼失住居内炭化物を学習院大学理学部年代測定室の木越邦彦教授に¹⁴Cの測定をお願いした。
10. 本年度調査区出土の石器、石棺材を鳥取大学教育学部の赤木三郎教授に材質鑑定していただいた。
11. 岡山大学文学部の稲田孝司教授に石器についての助言と現地にて土層・調査方法の指導助言をいただいた。
12. 現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々に指導・助言・協力していただいた。
伊藤和彦、加藤隆昭、絹見安明、木村良男、国田修二郎、久保稷二朗、小原貴樹、真田廣幸、清水真一、杉谷愛象、杉本寿一、土井珠美、中野知照、西尾克己、根鈴輝雄、根鈴智津子、平川誠、町田勝則、松下利秀、宮本正保、森下哲哉

（五十音順、敬称略）

凡 例

1. 本報告書における方位は、すべて磁北を示す。
2. 本報告書における遺構記号は次のように表す。なお、掘立柱建物跡の柱穴のビット番号は、建物毎の番号とビット群の番号がある。
S I : 竪穴住居跡 SK : 土坑・土坑 SB : 掘立柱建物跡 SD : 溝状遺構 SX : 埋葬施設
SS : 段状遺構 P : 柱穴・ビット
3. 本報告書における遺物記号は次のように表す。
Po : 土器・土製品 S : 石器・管玉 F : 鉄製品
4. 本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。
遺構図—竪穴住居跡 : 1/60、土坑・土坑 : 1/20・1/30、埋葬施設 : 1/20・1/40
掘立柱建物跡 : 1/60、溝状遺構 : 1/40・1/100・1/200、段状遺構 : 1/80・1/100 (断面 1/80)、
古墳 : 1/100 (断面 1/60)・1/200 (断面 1/60・1/80)、土塁 : 1/400 (断面 1/40)
ビット群 : 1/200・1/300
遺物図—土器 : 1/3・1/2・1/4、土玉 : 1/2、鉄製品 : 1/2、管玉 : 1/1
石器 : 1/2・1/4
5. 土器実測図の内、縄文土器・弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗りで表現した。遺物実測図中における記号は以下の通りとする。
→ : ケズリ方向 (砂粒の動きで判断した)、┌──┐ : 掘り範囲、┌─┐ : 敲打範囲
 : 敲打面、● Po : 床面出土土器
6. 発掘調査時における遺構番号と報告書の遺構番号は基本的に一致する。ただし、検出段階で遺構と認定して掘り下げた結果、現代の耕作に伴う肥料穴等と分かったものは乱札として遺構から外した。その結果遺構番号に欠番が生じた。欠番となった遺構は、南谷夫婦塚遺跡 SK01、SK02である。また、南谷19号墳 SX01を報告時には、「南谷19号墳盛土下埋葬施設」と改名した。
7. 遺物には、遺跡名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に記載した。遺跡名は次の略号を用いた。南谷ヒジリ遺跡=MH、南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群=MM、乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群=UB2。実測した遺物については、実測者の名前の頭文字を使った実測者番号 (F-1、Y-3等) を2mm×5mm程度のシールに記し、それを個体毎に貼り付け、実測図原図にもその番号を記した。
8. ビットの規模は (長さ×短径-深さ) cm で表した。竪穴住居の規模は壁溝を除いた床面の規模である。墳丘の規模は、墳端 (裾) までの計測値を用いた。
9. 遺構図における表示は以下の通りである。
 : 焼土、 : 炭化物、 : 貼床、
 : 赤色顔料、 : 粘土、
10. 遺物観察表については以下の通りとする。
(1) 遺構番号の前にアルファベットを付けて出土した遺跡を表した。Hは南谷ヒジリ遺跡、Mは南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群、Uは乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群のことである。
(2) 法量の欄の番号は次の通りとする。
①口径②器高③胴部最大径④底部径⑤複合口縁たちあがり長⑥須恵器环蓋径⑦須恵器环蓋口縁高⑧須恵器环身基部径⑨須恵器环身たちあがり高である。その他の計測値については、その都度、計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には数値の後に※印、残存値は同様に△印を付した。
(3) 手法の欄に記載されている成形・調整・施文の方向は、実測図で表された方向であり、左方向は土器を真上からみた際の反時計回り方向、右は時計回り方向である。
(4) 備考欄に記載してあるF-1等の番号は実測者番号である。
11. 本文中に「水土」と記載してあるものは、「大山・倉吉バミス (DKP)」のことである。

目 次

序	
序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	(米田) 1
第2節 調査の経過と方法	(米田) 1
第3節 調査体制	(米田) 4
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	(山栴) 5
第2節 歴史的環境	(近藤) 6
第3章 南谷ヒジリ遺跡の調査	
第1節 南谷ヒジリ遺跡の概要	(米田) 10
第2節 南谷ヒジリ遺跡の調査	(米田・山栴・近藤・小谷) 13
第4章 南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群の調査	
第1節 南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群の概要	(米田) 36
第2節 南谷夫婦塚遺跡の調査	(米田・山栴・小谷) 41
第3節 南谷古墳群の調査	(近藤・山栴) 58
第5章 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群の調査	
第1節 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群の概要	(米田) 87
第2節 乳母ヶ谷第2遺跡の調査	(山栴・米田) 90
第3節 宇野古墳群の調査	(近藤・米田) 98
第6章 遺構と遺物の検討	
第1節 前方後円墳の築造について	(近藤) 112
第2節 弥生土器・土師器のまとめ	(山栴) 116
第3節 まとめ	(米田) 122
註・参考文献	123
遺物実測図	124
遺物観察表	(米田・山栴・近藤) 150
特論1 南谷19号墳の土壌に残存する脂肪の分析	165
特論2 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書	171
写真図版	

挿 図 目 次

挿図1	道路建設ルートと調査区	3	挿図48	南谷19号墳周溝内土壌1	68
挿図2	羽合町の位置	5	挿図49	南谷19号墳周溝内土壌2	68
挿図3	周辺遺跡分布図	7	挿図50	南谷19号墳盛土下埋非難遺物出土状況	70・71
挿図4	南谷ヒジリ遺跡調査前地形測量図	11・12	挿図51	南谷19号墳盛土下埋非難遺物出土状況	72
挿図5	南谷ヒジリ遺跡遺構全体図	11・12	挿図52	南谷19号墳盛土内石片出土状況	74
挿図6	南谷ヒジリ遺跡S101遺構図	13	挿図53	南谷20号墳墳丘図	75
挿図7	南谷ヒジリ遺跡S102中央ビット	14	挿図54	南谷20号墳土層断面図	76
挿図8	南谷ヒジリ遺跡S102遺構図	15	挿図55	南谷20号墳石蓋土城遺構図	76
挿図9	南谷ヒジリ遺跡S103~05遺構図	17・18	挿図56	南谷21号墳墳丘図	77
挿図10	南谷ヒジリ遺跡S106炭化物・焼土出土状況	19	挿図57	南谷21号墳土層断面図	78
挿図11	南谷ヒジリ遺跡S106甌形土器出土状況	19	挿図58	南谷21号墳周溝内土壌遺構図	79
挿図12	南谷ヒジリ遺跡SK01遺構図	22	挿図59	南谷22号墳墳丘図	82・83
挿図13	南谷ヒジリ遺跡SK02遺構図	23	挿図60	南谷23号墳墳丘図	82・83
挿図14	南谷ヒジリ遺跡SK03遺構図	24	挿図61	南谷22号墳・23号墳土層断面図	80・83
挿図15	南谷ヒジリ遺跡SK04遺構図	26	挿図62	南谷22号墳石蓋土城遺構図	84
挿図16	南谷ヒジリ遺跡SB01遺構図	27	挿図63	南谷23号墳周溝内土壌遺構図	84
挿図17	南谷ヒジリ遺跡SB02遺構図	28	挿図64	南谷古墳群位置図	86
挿図18	南谷ヒジリ遺跡SB03遺構図	29	挿図65	乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群全体図	88・89
挿図19	南谷ヒジリ遺跡SB03P4内遺物出土状況	29	挿図66	乳母ヶ谷第2遺跡S101平面図	91
挿図20	南谷ヒジリ遺跡SD04遺構図	30	挿図67	乳母ヶ谷第2遺跡S101土層断面図	92
挿図21	南谷ヒジリ遺跡SD01遺構図	31	挿図68	乳母ヶ谷第2遺跡土層断面図(1)	93
挿図22	南谷ヒジリ遺跡SD02・SD03遺構図	32	挿図69	乳母ヶ谷第2遺跡土層断面図	94・95
挿図23	南谷ヒジリ遺跡S01遺構図	33	挿図70	乳母ヶ谷第2遺跡土層断面図(2)	94・95
挿図24	南谷ヒジリ遺跡S01遺構図	34	挿図71	乳母ヶ谷第2遺跡土層断面図(3)	96
挿図25	南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群調査前地形測量図	37・38	挿図72	乳母ヶ谷第2遺跡S01遺構図	97
挿図26	南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群遺構全体図	39・40	挿図73	宇野3号墳・4号墳墳丘図	99
挿図27	南谷夫婦塚遺跡S101中央ビット内遺物出土状況	41	挿図74	宇野3号墳・4号墳土層断面図	100
挿図28	南谷夫婦塚遺跡S101遺構図	43・44	挿図75	宇野5号墳主体部遺構図	101
挿図29	南谷夫婦塚遺跡S102遺構図	45	挿図76	宇野6号墳主体部遺構図	102
挿図30	南谷夫婦塚遺跡SK03遺構図	47	挿図77	宇野9号墳主体部遺構図	103
挿図31	南谷夫婦塚遺跡SK04遺構図	47	挿図78	宇野5号墳墳丘図	104
挿図32	南谷夫婦塚遺跡SK05遺構図	48	挿図79	宇野6号墳・9号墳墳丘図	104
挿図33	南谷夫婦塚遺跡SK06遺構図	49	挿図80	宇野5号墳・6号墳・9号墳土層断面図	105
挿図34	南谷夫婦塚遺跡SK07遺構図	50	挿図81	宇野7号墳土層断面図	106
挿図35	南谷夫婦塚遺跡SK08遺構図	51	挿図82	宇野7号墳墳丘図	107
挿図36	南谷夫婦塚遺跡SK10遺構図	52	挿図83	宇野7号墳石蓋土城遺構図	108
挿図37	南谷夫婦塚遺跡SK09遺構図	53	挿図84	宇野8号墳墳丘図	109
挿図38	南谷夫婦塚遺跡SK12遺構図	54	挿図85	宇野8号墳土層断面図	110
挿図39	南谷夫婦塚遺跡SK11遺構図	55	挿図86	宇野古墳群SK01遺構図	110
挿図40	南谷夫婦塚遺跡ビット群1	57	挿図87	宇野古墳群SK02遺構図	110
挿図41	南谷夫婦塚遺跡ビット群2	57	挿図88	宇野古墳群SK03遺構図	110
挿図42	南谷19号墳墳丘図	59	挿図89	京都府大宮町小池古墳群2号土城遺構図	114
挿図43	南谷19号墳盛土除去後平面図	60	挿図90	南谷19号墳築造段階	116
挿図44	南谷19号墳土層断面図(1)	61・62・63	挿図91	南谷ヒジリ遺跡S101・S102(1)土器実測図	124
挿図45	南谷19号墳土層断面図(2)	64・65	挿図92	南谷ヒジリ遺跡S102(2)土器実測図	125
挿図46	南谷19号墳周溝内遺物出土状況	66	挿図93	南谷ヒジリ遺跡S104土器実測図	126
挿図47	南谷19号墳主体部遺構図	67	挿図94	南谷ヒジリ遺跡S105(1)土器実測図	127

挿図95	南谷ヒジリ遺跡 S105(2)土器実測図	128
挿図96	南谷ヒジリ遺跡 S105(3)土器実測図	129
挿図97	南谷ヒジリ遺跡 S K01(1)土器実測図	130
挿図98	南谷ヒジリ遺跡 S K01(2)土器実測図	131
挿図99	南谷ヒジリ遺跡 S K02土器実測図	132
挿図100	南谷ヒジリ遺跡 S K03土器実測図	133
挿図101	南谷ヒジリ遺跡 S K04・S B01・S B03土器実測図	134
挿図102	南谷ヒジリ遺跡 S Dその他土器実測図	135
挿図103	南谷夫婦塚遺跡 S101・S102土器実測図	136
挿図104	南谷夫婦塚遺跡 S K04・S K05土器実測図	137
挿図105	南谷19号墳(1)土器実測図	138
挿図106	南谷19号墳(2)土器実測図	139

挿図107	南谷19号墳(3)土器実測図	140
挿図108	南谷21号墳土器実測図	141
挿図109	南谷22号墳・23号墳土器実測図	142
挿図110	南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群遺構出土土器実測図	143
挿図111	乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群土器実測図	144
挿図112	土製品実測図	145
挿図113	鉄器実測図	145
挿図114	管玉・石器実測図	146
挿図115	石器実測図(敲石・石鏃)	147
挿図116	石器実測図(砥石・石皿)	148
挿図117	石器実測図(石皿)	148

挿表目次

挿表1	南谷ヒジリ遺跡ピット群一覽表	35
挿表2	南谷ヒジリ遺跡壘穴住居跡一覽表	35
挿表3	南谷ヒジリ遺跡土坑一覽表	35
挿表4	南谷ヒジリ遺跡獨立柱建物跡一覽表	35
挿表5	南谷夫婦塚遺跡ピット群一覽表	56
挿表6	南谷夫婦塚遺跡土坑一覽表	85
挿表7	南谷古墳群一覽表	85
挿表8	宇野古墳群一覽表	111
挿表9	宇野古墳群埋葬施設他一覽表	111
挿表10	区画溝を有する前方後円墳	113
挿表11	南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表①	150
挿表12	南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表②	151
挿表13	南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表③	152

挿表14	南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表④	153
挿表15	南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑤	154
挿表16	南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑥	155
挿表17	南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑦	156
挿表18	南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑧	157
挿表19	南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表①	158
挿表20	南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表②	159
挿表21	南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表③	160
挿表22	南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表④	161
挿表23	乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群出土土器観察表	162
挿表24	土製品観察表	163
挿表25	鉄製品観察表	164
挿表26	管玉・石器観察表	164

図版目次

図版1	調査区遠景(南東上空より) 南谷ヒジリ遺跡調査前遠景(南東より) 南谷ヒジリ遺跡完掘状況(南上空より)
図版2	南谷ヒジリ遺跡 S101完掘状況(北より) 南谷ヒジリ遺跡 S101高坪(Po1)出土状況(南より) 南谷ヒジリ遺跡 S102完掘状況(東より)
図版3	南谷ヒジリ遺跡 S102床面遺物出土状況(東より) 南谷ヒジリ遺跡 S102床面遺物(Po8・S11)出土状況(東より) 南谷ヒジリ遺跡 S102床面遺物(Po8)出土状況(東より)
図版4	南谷ヒジリ遺跡 S103・04・05完掘状況(東より) 南谷ヒジリ遺跡 S105完掘状況(北より) 南谷ヒジリ遺跡 S104遺物出土状況(北より)
図版5	南谷ヒジリ遺跡 S105焼土・炭化物・遺物出土状況(北より) 南谷ヒジリ遺跡 S106壘(Po40)出土状況(北より) 南谷ヒジリ遺跡 S106甕形土器(Po68)出土状況(南より)
図版6	南谷ヒジリ遺跡 S K01遺物出土状況(北東より) 南谷ヒジリ遺跡 S K02遺物出土状況(北西より)

南谷ヒジリ遺跡 S K02土層断面	
図版7	南谷ヒジリ遺跡 S K03遺物(Po103)出土状況(南西より) 南谷ヒジリ遺跡 S K04遺物出土状況(南西より) 南谷ヒジリ遺跡 S K04焼土・炭化物出土状況
図版8	南谷ヒジリ遺跡 S B03完掘状況(東より) 南谷ヒジリ遺跡 S B03土器(Po126)・石出土状況(南より) 南谷ヒジリ遺跡 S X01完掘状況(北より)
図版9	南谷ヒジリ遺跡 S D01完掘状況(東より) 南谷ヒジリ遺跡 S D01完掘状況(南より) 南谷ヒジリ遺跡 S D02・03完掘状況(西より)
図版10	南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群調査前遠景(北西より) 南谷古墳群全景(北東上空より) 南谷夫婦塚遺跡全景(南西上空より)
図版11	南谷夫婦塚遺跡 S101掘出状況(南東より) 南谷夫婦塚遺跡 S101完掘状況(西より) 南谷夫婦塚遺跡 S101中央ピット内壘(Po156)出土状況(南東より)
図版12	南谷夫婦塚遺跡 S101 P5内石皿(S23)出土状況(北より)

南谷夫婦塚遺跡 S I 02完掘状況 (西より)
 南谷夫婦塚遺跡 S I 02穴内産 (Po162) 出土状況 (西より)
 図版13 南谷夫婦塚遺跡 S K 03石片検出状況 (西より)
 南谷夫婦塚遺跡 S K 04完掘状況 (西より)
 南谷夫婦塚遺跡 S K 04遺物出土状況 (西より)
 図版14 南谷夫婦塚遺跡 S K 05完掘状況 (南より)
 南谷夫婦塚遺跡 S K 06完掘状況 (東より)
 南谷夫婦塚遺跡 S K 07完掘状況 (西より)
 図版15 南谷夫婦塚遺跡 S K 08完掘状況 (西より)
 南谷夫婦塚遺跡 S K 08土層断面
 南谷夫婦塚遺跡 S K 09完掘状況 (南西より)
 図版16 南谷夫婦塚遺跡 S K 10完掘状況 (西より)
 南谷夫婦塚遺跡 S K 11完掘状況 (北西より)
 南谷夫婦塚遺跡 S K 12完掘状況 (西より)
 図版17 南谷夫婦塚遺跡ピット群 1 (東より)
 南谷夫婦塚遺跡ピット群 2 (北東より)
 南谷古墳群 (南谷19~23号墳) 完掘状況 (北より)
 図版18 南谷19号墳くびれ部北側かき出し土除去前 (東より)
 南谷19号墳完掘状況 (東より)
 南谷19号墳盛土除去後旧表土面検出状況 (東より)
 図版19 南谷19号墳主体部完掘状況 (西より)
 南谷19号墳後円部墳丘 (南側 B-B'ベルト) 盛土状況
 南谷19号墳後円部墳丘 (北側 B-B'ベルト) 盛土状況
 図版20 南谷19号墳くびれ部墳丘 (A-A'ベルト中央部) 盛土状況
 南谷19号墳前方部墳丘 (南側 C-C'ベルト) 盛土状況
 南谷19号墳前方部墳丘 (西側 A-A'ベルト) 盛土状況
 図版21 南谷19号墳後円部溝内遺物 (Po183) 出土状況 (北東より)
 南谷19号墳くびれ部北側溝内産 (Po186) 出土状況 (北西より)
 南谷19号墳区画溝検出状況 (東より)
 図版22 南谷19号墳区画溝埋め込中石材出土状況 (北西より)
 南谷19号墳区画溝完掘状況 (東より)
 南谷19号墳区画溝土層断面 (東より)
 図版23 南谷19号墳盛土下埋葬施設検出状況 (北西より)
 南谷19号墳盛土下埋葬施設土層断面東軸 (南東より)
 南谷19号墳盛土下埋葬施設土層断面北軸・西軸 (北より)
 図版24 南谷19号墳盛土下埋葬施設遺物出土状況 (西より)
 南谷19号墳盛土下埋葬施設須臾器重環出土状況 (南東より)
 南谷19号墳盛土下埋葬施設附葬・重環出土状況 (北東より)
 南谷19号墳盛土下埋葬施設埋り字版(鳳文F)出土状況(南東より)
 図版25 南谷20号墳石蓋土壌検出状況 (北より)
 南谷20号墳石蓋土壌完掘状況 (北より)
 南谷21号墳完掘状況 (東より)
 図版26 南谷21号墳周溝内遺物 (Po210) 出土状況 (南西より)
 南谷22号墳完掘状況 (北東より)
 南谷22号墳周溝内土器 (Po213-214)・石材出土状況 (北より)
 図版27 南谷22号墳周溝内石蓋土壌検出状況 (北より)
 南谷22号墳周溝内石蓋土壌完掘状況 (北より)
 南谷23号墳完掘状況 (東より)

図版28 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群調査前全景 (北上空より)
 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群調査後全景 (北西上空より)
 乳母ヶ谷第2遺跡作業風景
 図版29 乳母ヶ谷第2遺跡 S I 01完掘状況 (北より)
 乳母ヶ谷第2遺跡 S I 01中央ピット完掘状況 (北より)
 乳母ヶ谷第2遺跡 S I 01貼床除去後状況 (北東より)
 図版30 乳母ヶ谷第2遺跡土壘盛土除去後状況 (南より)
 乳母ヶ谷第2遺跡土壘盛土状況 (K-K'ライン)
 乳母ヶ谷第2遺跡土壘盛土状況 (A-A'ライン)
 図版31 宇野3号墳完掘状況 (北より)
 宇野4号墳完掘状況 (南東より)
 宇野5・6・9号墳完掘状況 (南東より)
 図版32 宇野5号墳主体部完掘状況 (西より)
 宇野6号墳周溝完掘状況 (北西より)
 宇野6号墳主体部完掘状況 (西より)
 図版33 宇野9号墳主体部完掘状況 (西より)
 宇野9号墳 S K 01完掘状況 (北西より)
 宇野7号墳完掘状況 (南より)
 図版34 宇野7号墳周溝内石蓋土壌検出状況 (北より)
 宇野7号墳周溝内石蓋土壌完掘状況 (南より)
 宇野8号墳完掘状況 (南東より)
 図版35 宇野古墳群 S K 02完掘状況 (南西より)
 宇野古墳群 S K 03完掘状況 (南西より)
 乳母ヶ谷第2遺跡 S S 01完掘状況 (南より)
 図版36 南谷ヒジリ遺跡 S I 01・S I 02出土土器
 図版37 南谷ヒジリ遺跡 S I 02・S I 04出土土器
 図版38 南谷ヒジリ遺跡 S I 05出土土器
 図版39 南谷ヒジリ遺跡 S I 05出土土器
 図版40 南谷ヒジリ遺跡 S I 05出土土器
 図版41 南谷ヒジリ遺跡 S K 01出土土器
 図版42 南谷ヒジリ遺跡 S K 01・S K 02出土土器
 図版43 南谷ヒジリ遺跡 S K 03出土土器
 図版44 南谷ヒジリ遺跡 S K 03・S B 03出土土器
 図版45 南谷ヒジリ遺跡 S D 01・S D 03・遺構外出土器・縄文土器
 図版46 南谷夫婦塚遺跡 S I 01・S I 02出土土器
 図版47 南谷夫婦塚遺跡 S K 04・S K 05出土土器
 南谷19号墳出土土器
 図版48 南谷19号墳・南谷19号墳盛土下埋葬施設出土土器
 図版49 南谷19号墳盛土下埋葬施設出土土器
 図版50 南谷21号墳出土土器
 図版51 南谷22号墳・23号墳・遺構外出土土器
 乳母ヶ谷第2遺跡 S I 01出土土器
 図版52 乳母ヶ谷第2遺跡 S I 01・土壘出土土器
 宇野4号墳・7号墳出土土器・土製品
 図版53 鉄製品・管玉
 図版54 石器
 図版55 石器・軽石・小石

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

羽合道路 鳥取県中部地域の交通混雑緩和を図るために、1973年より一般国道9号改築工事として北条バイパスの建設が進められ、1990年11月に全面開通した。さらに、この工事の一環として羽合道路が1986年度に自動車専用道路として都市計画決定され、事業に着手し、その後、1988年度に高規格道路として計画変更された。この道路は、現道9号の泊村園地内のインターチェンジから、羽合町長瀬のインターチェンジを抜け北条バイパスに結ぶものである。

周辺遺跡 また、計画地内周辺は橋津古墳群・南谷古墳群・宇野古墳群・園古墳群などの古墳群、南谷遺跡・乳母ヶ谷遺跡・宇野第一遺跡などが丘陵上に存在し、文化財の宝庫である。最近では、1985年8月に羽合町教育委員会によって小型箱式石棺の埋葬施設を持つ南谷18号墳の発掘調査がなされた。⁽¹⁾

発掘調査 この状況の中で、このように多くの遺跡が密集している地域でもあるので、建設に先立って計画地内の遺構・遺跡の広がりを確認する必要性が生じ、1988年度羽合町教育委員会と泊村教育委員会が国庫補助事業として、また、1989・1990年度に羽合町教育委員会が各丘陵の尾根を中心に試掘調査を行なった。⁽²⁾⁽³⁾ その結果によると南谷ヒジリ遺跡で土坑・ピット(T5)、南谷所在遺跡で溝状遺構1、南谷古墳群で古墳1・石蓋土壇(T2)、大山所在遺跡群で竪穴住居跡・孤立柱建物跡各1・古墳2・周溝1・土壇2(T3~T7・T9)、乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群で周溝2・土壇3・土塁(1989年度・1990年度)が確認された。なお、南谷古墳群については踏査によって前方後円墳1も確認された。

調査計画 これを受けて、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のため事前調査を委託した。これによって当文化財団が調査計画を作成し、それに基づき、中部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を担当することになった。本年度は南谷所在遺跡群1568㎡、南谷所在遺跡300㎡、南谷古墳群2240㎡、大山所在遺跡群8380㎡であったが、12月に南谷所在遺跡群(南谷ヒジリ地区)1250㎡、南谷古墳群(南谷夫婦塚地区)3018㎡、乳母ヶ谷所在遺跡(宇野乳母ヶ谷地区)5564㎡に変更となった。期間は1990年4月~1991年3月と予定された。

調査予定 来年度以降には、南谷所在遺跡、大山所在遺跡群、宇野第1遺跡、原第1遺跡、園7号墳の他に、南谷ヒジリ地区と南谷夫婦塚地区未調査部分の調査が予定されている。

第2節 調査の経過と方法

調査開始 現地での調査は4月1日から調査準備にかかり、4月3日に打ち合わせを行ない、南谷ヒジリ地区から調査を行なうこととした。

南谷ヒジリ 南谷ヒジリ地区には、鳥取県「急傾斜地崩壊危険区域」が含まれていたことから、ここの調査は来年度以降に先送りすることとし、その他の部分について測量を行なった。また、梨畑や人家が調査区の下に位置しているため、排土を流失させないように土留め柵を築いた。測量に用いた基準杭は建設省道路センター杭No91+60 [X: -55996.900 Y: -40684.661] (D-2杭)とNo92 [X: -55992.801 Y: -40724.449] (A-2杭)を使い、この2カ所を結ぶ延長線を東西基線とし、この基線に直交し、D-2杭を通る線を南北の基線とし、地区全体を10m方眼に区割りした。基線は南北を北から1~5、東西を西からA~Fとし、

設定した。グリッド名はグリッド南西で交差する基線を連記するものとした。4月10日からC3グリッドの人力による表土剥ぎに着手した。調査では住居跡や「コ」の字状の溝等が、ローム面において検出された。住居跡の中には焼失住居跡があり、構造材の炭化物が検出され、「C分析を行なった。「コ」の字状の溝は、崩壊危険区域に向かっていているため、来年度以降に調査することとした。調査は6月21日をもって終了した。調査面積は1250㎡であった。

南谷古墳群 南谷夫婦塚地区では羽合町の分布踏査と試掘調査で前方後円墳（南谷19号墳）と円墳（南谷20号墳）が確認されていたところである。この地区では基準杭として建設省道路センター杭No.91+60とNo.88+20〔X：-56068.809 Y：-40352.764〕を使い、南谷ヒジリ遺跡と同様にグリッドを設定した。このうち、H-4杭が〔X：-56035.546 Y：-40271.038〕とM-5杭が〔X：-56024.716 Y：-40221.214〕である。基線は南北を北から1～7、東西を西からA～Mと設定した。5月15日より調査前地形測量を開始した。この際、西側の切り土面で古墳（南谷22・23号墳）の周溝が確認され、調査範囲が西側に拡張されたが、用地買収の関係で南谷22号墳の一部が来年度以降の調査となった。古墳調査においては耕作による地形の改変が著しかったことと竹の根が密生していたために、羽合町の試掘結果をもとに表土剥ぎを調査員の指導のもと重機で行なった。しかし、南谷19号墳（前方後円墳）については盛土が部分的造成は行なわれていたが比較的良好に残っていたため墳丘から周溝までの範囲と土層を確認し、削平部分のみを重機で削いだ。19号墳は造成によって主体部は破壊されていたが、わずかにその痕跡は残っていた。また、盛土の断ち割りを行なった結果、盛土下埋葬施設と区画溝を持つことがわかった。なお、この特異な南谷19号墳盛土下埋葬施設の埋

南谷夫婦塚 土の脂肪酸分析をズコーシャ総合化学研究所に委託し、人体が埋葬されたものであると決定した。また、この古墳を調査中弥生土器が出土したことから、弥生時代の遺構が存在する可能性が考えられた。そのため19号墳の盛土断ち割りを行なったところ、竪穴住居跡2棟と貯蔵穴、ピット群が検出された。最終遺構実測を業者委託して、10月31日に3018㎡の調査を終了した。なお、遺物の中からスクレイパーが見つかったので、岡山大学文学部稲田孝司教授指導のもとトレンチ調査をおこなったがそれに伴うものは何も検出できなかった。

宇野古墳群 当初の計画では南谷所在遺跡、大山所在遺跡群を発掘予定であったが、用地買収の関係で急遽8月に宇野乳母ヶ谷地区を調査することになった。この地区では羽合町の試掘調査で古墳と土塁が確認されている。この地区も他の2地区と同様にグリッドを設定した。使用した建設省道路センター杭はNo.84〔X：-56172.669 Y：-39946.089〕とNo.83+80〔X：

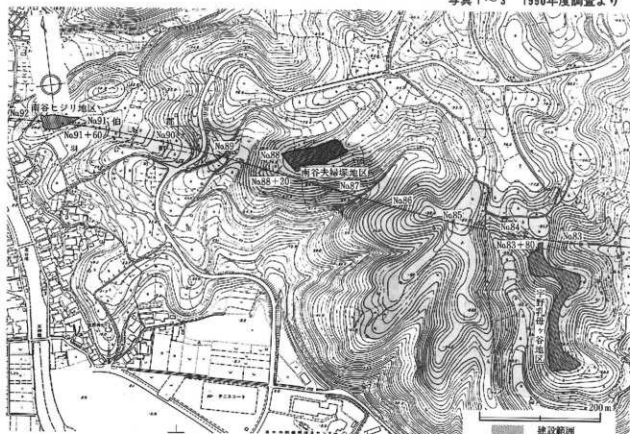
乳母ヶ谷第2遺跡 -56175.772 Y：-39926.331〕で、D-3杭が〔X：-56217.404 Y：-39895.004〕である。基線は南北を北から1～19、東西を西からA～Oと設定した。8月21日から表土剥ぎを始めたが、南谷古墳群と条件が似通っているため重機で行なった。斜面部分については測量の結果と重機によるトレンチの土層観察で調査範囲を設定（5480㎡）しながら掘り進めた。また、調査区北側に遺構の延びることが分かり、建設省、文化課と協議し、トレンチによって範囲を確認し、再協議の結果、84㎡の拡張となった。本調査区では、土塁（残存状況が悪いため土層断面図を作成する）の調査から始め、古墳・住居跡を調査をし、最終遺構実測を業者委託して、12月10日に5564㎡の調査を終了した。整理作業は3月31日で終了した。

調査日誌(抄)

- 4月10日 南谷ヒジリ遺跡の掘り下げ開始。
- 5月15日 南谷ヒジリ遺跡S I 03・04・05掘り下げ。SK01検出。
南谷夫婦塚地区調査前地形測量開始。
- 5月29日 南谷夫婦塚地区の調査開始。
- 6月21日 南谷ヒジリ遺跡調査終了。
- 8月4日 南谷ヒジリ遺跡・南谷古墳群現地説明会を開く。
- 8月10日 猛暑の中、南谷19号墳横丘断ち割り開始。
- 8月21日 南谷19号墳盛土中より麻製石斧出土。乳母ヶ谷地区の妻土剥ぎ開始。
- 8月24日 南谷19号墳くびれ部で区画溝を確認。
- 9月7日 南谷19号墳区画溝内で埋葬施設を検出。
- 9月11日 南谷19号墳盛土下埋葬施設で、須恵器の蓋環・通・脚付椀・壺、鉄製鍔(銀)先出土。
- 9月12日 南谷夫婦塚遺跡S I 01検出。
- 10月5日 乳母ヶ谷第2遺跡土塁の調査開始。
- 10月31日 南谷夫婦塚遺跡の調査終了。
- 11月16日 宇野4号墳周溝内で須恵器直口壺出土。宇野6号墳主体部検出。
宇野8号墳調査終了。乳母ヶ谷第2遺跡土塁調査終了。
- 11月30日 現地調査終了。
- 12月16日 南谷19号墳・南谷夫婦塚遺跡・乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群の現地説明会を開く。



写真1～3 1990年度調査より



挿図1 道路建設ルートと調査区

第3節 調査体制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもと下記の体制で実施された。

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西尾邑次（鳥取県知事）

副理事長兼常務理事 板田昭三

事務局長 若松良雄

財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター

所長 山根豊巳（鳥取県教育委員会文化課長）

次長 中島安一

調査指導係長 田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）

庶務係長 中村金一（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団中部埋蔵文化財調査事務所

所長 入江輝三

主任調査員 米田規人

調査員 山折雅美 近藤哲雄

調査補助員 小谷修一

○調査協力

下記の方々に発掘調査作業員、整理作業員として協力していただいた。

安達日出子、市橋貴志子、井手尾ひさの、伊藤恵美子、稲垣美智恵、岩室紀男、植原昭典、浦木伊都子、奥田和美、小倉厚子、神矢紀子、上本明子、吉川久子、木戸孝行、蔵益和美、蔵本重信、志田聡、杉原光雄、杉村秀吉、杉本鈴子、竹田肇、竹本富恵、田中園子、丹波稔、角田磨智子、津村勝子、中村勝恵、中村博子、中本和子、中本文子、長門茂、西垣吟枝、西原徳善、野崎悦子、浜口みち子、林博、羽田政夫、福田延子、藤田広子、藤田恭人、船越トシ子、松岡朋子、松本美恵、道家良平、森脇幸子、安田成行、山崎保子、山本清子、山本久美恵、山本さわ五、米澤牧子、米増幹雄

（敬称略）



写真4 発掘参加記念写真

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳥取県 南谷ヒジリ遺跡、南谷夫婦塚遺跡、南谷古墳群、乳母ヶ谷第2遺跡、宇野古墳群は、鳥取県東部羽合町に所在する。

鳥取県は本州の西部、中国地方の北東部に位置する。北は日本海、東は兵庫県、南は標高1200mを越える中国山地を県境として岡山県・広島県、西は島根県と接する。鳥取県の県域は、東西126km、南北61.85km、面積349.269km²で、日本全体の約1%を占める。鳥取県は旧国名でいえば、東が因幡国（現在の鳥取市・気高郡・八頭郡・岩美郡）、西が伯耆国であるが、地理的には伯耆国は大山を境として東伯耆（現在の倉吉市・東伯郡）、西伯耆（現在の米子市・境港市・西伯郡・日野郡）に分けられ、因幡合わせて東、中、西部の三地域に分けられる。各地域とも地勢は山がちで、山地が県総面積の86.3%を占める。それぞれの地域には千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）の県下を代表する河川が流れ、その下流域に東部の鳥取平野、中部の倉吉・北条・羽合平野、西部の米子平野が発達している。また各平野の海岸線には、鳥取平野の鳥取砂丘、倉吉・北条平野の北条砂丘・長瀬、米子平野の弓ヶ浜半島などの砂丘、砂州が発達している。その中でも代表的なものは鳥取砂丘で、東西長15km、南北幅最大2kmの規模を持ち、国立公園として県内外から観光客が訪れる。

羽合町 羽合町は、鳥取県の中央部に位置し、東には泊村、東郷池をはさんで東郷町、西には天神川を境に北条町、南は倉吉市と接している。北には日本海が、その波頭を光らせている。人口約7000人、面積12.4km²の田園風景の広がる町である。地形は、馬ノ山の低い丘陵と天神川の河口部に発達した長瀬砂丘、天神川から東郷池に向かって広がる羽合平野、東郷池とかなる。

東郷池 東郷池は、420haの淡水湖で、かつて後水期の海進で溺れ谷だったものが、その後の北条・長瀬砂丘の発達で湾口が塞ぎ止められてきた潟湖である。中心部での深さは6～8m、湖底より温泉が湧き出る。東郷池には、舎人川、東郷川、羽衣石川、埴見川が流れ込み、その水は橋津川を通して日本海に流れ込んでいる。池には淡水性の魚介類だけでなく、橋津川を逆流して流入する海水によって海産の魚介類が入る。最近では、漁をする人が少なくなったものの、以前は池の魚を生活の糧として捕っていた人も多かったようである。古くは、正嘉2（1258）年の「伯耆国河村郡東郷庄下地中分絵図」（柳沢真次郎所蔵）においても、池の中心に船と漁民が描かれており、東郷池における漁業が、領主の注目するところになっていたようである。また、交通においても、現在のように道路網が整備される以前は、船を使って池を渡る交通がかなり一般的であったようである。

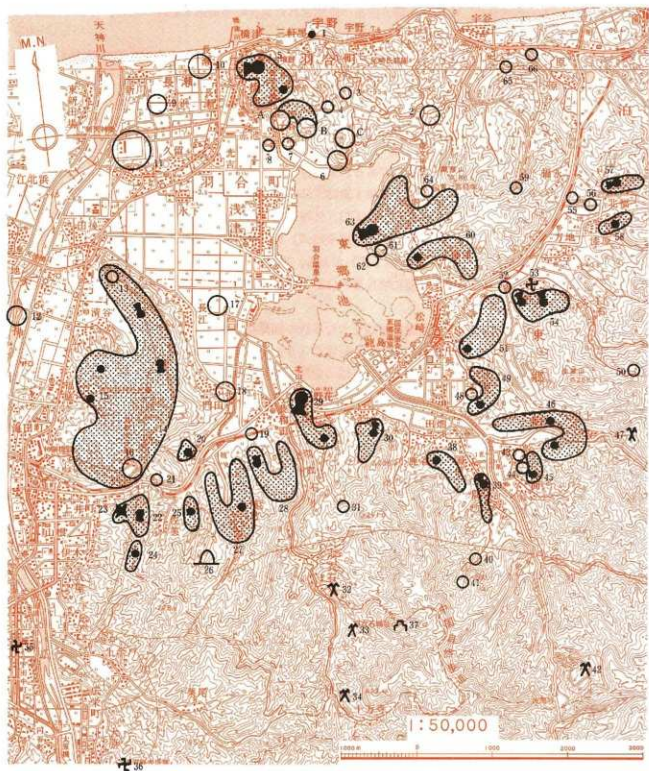
調査地域 この東郷池の北東にある丘陵から東郷池に向かって伸びる尾根上に存在するのが南谷ヒジリ遺跡、南谷夫婦塚遺跡、南谷古墳群、乳母ヶ谷第2遺跡、宇野古墳群である。いずれの遺跡も、東郷池、羽合平野を見渡せるところにあり、中でも南谷19号～23号墳が所在する尾根上からは日本海が一望でき、遠くは鳥取県西部の弓ヶ浜半島まで視野に入れることができる。



挿図2 羽合町の位置

第2節 歴史的環境

- 旧石器時代** 東郷池周辺に限らず鳥取県において遺構を伴う旧石器遺跡は確認されていないが、大山山麓の丘陵上でいくつかの旧石器が見つっている。淀江町小波出土の黒曜石製の東山・杉久保型系統のナイフ型石器⁽⁸⁾、関金町野津第三遺跡の黒曜石製ナイフ型石器⁽⁹⁾、倉吉市和田出土の石刃⁽¹⁰⁾、倉吉市上神⁽¹¹⁾及び船⁽¹²⁾出土の細石刃石核、倉吉市国府出土の搔器⁽¹³⁾、倉吉市中尾遺跡の国府型のナイフ型石器⁽¹⁴⁾などである。このうち、野津第三遺跡・中尾遺跡のナイフ型石器は県下では唯一のローム層中の発見であり、大変貴重なものである。
- 縄文時代** 県内では縄文時代早創期に盛行するとされる隆線土器群は発見されていないが、石器類
- 早創期** は二十数カ所で確認されている。中部地区では有茎尖頭器が、大栄町穂波、東伯町榎下、関金町笹ヶ平などで見つっている⁽¹⁵⁾。やはり大山山麓の丘陵上で発見であり、低地ではこの時期のものも見つかっていない。早期でも丘陵上・台地上だけに遺跡が確認されている。倉吉市取木遺跡では竅穴住居跡・炉跡の他、押型文の深鉢などが見つっている⁽¹⁶⁾。東郷池周辺においても、南谷19号墳(B)墳丘下より安山岩製のスクレイパーが見つかった。正確な時期は特定できないが、縄文時代人が海岸部の丘陵上にも足跡を残していたことが窺える。
- 前期** この時期になると気候が温暖になり海進が進み、この地域は広いラグーンが形成され、この周辺にも遺跡が確認されるようになる。北条町島遺跡は、前期から晩期にかけての遺跡で貝塚を伴う⁽¹⁷⁾。土器のほかには石器、丸木舟、貝、人骨、動物骨が検出されている。丸木舟は県内でも数例知られるに過ぎず、貴重なものである。また、花粉分析の結果や貝の種類から古環境の変化の様子を復元することができるようになった。
- 中期** この時期の遺跡は、倉吉市早ル林遺跡⁽¹⁸⁾、北条町船渡遺跡⁽¹⁹⁾などが知られるにすぎず、遺跡の密度も少ない。
- 後期** 後期になると遺跡の数は増加し、倉吉市津田峰遺跡⁽²⁰⁾・東伯町森藤第2遺跡⁽²¹⁾・関金町横峯遺跡⁽²²⁾ではこの時期の住居跡が見つっている。これらの住居の中央には、石組の炉が作られている。三朝町三朝高原穴谷遺跡⁽²³⁾では、貯蔵穴、落とし穴なども見つっている。この周辺では、北条町天神川下流遺跡⁽²⁴⁾(12)、東郷町北福第3遺跡⁽²⁵⁾(56)で磨削縄文土器
- 晩期** などが表採されている。晩期では、倉吉市松ヶ坪遺跡⁽²⁶⁾で、配石墓、土器棺墓、土壌が見つっている。なかでも、土器棺墓は県内においても岸本町林ヶ原遺跡⁽²⁷⁾とこしにしか見つかっておらず、この時期の葬制を知る貴重な資料である。長瀬高浜遺跡⁽²⁸⁾では刻目突帯文土器、北条町北尾遺跡⁽²⁹⁾でもこの時期の土器が出土している。時期ははっきりしないが、東郷町別所第2(40)・第6遺跡(41)、福永第3遺跡(59)、野花第2遺跡(31)、白石第1遺跡(50)でも縄文土器が表採されている⁽³⁰⁾。泊村宮の谷遺跡⁽³¹⁾では、漁撈具としての石鉾が見つっており、縄文人が海や湖で盛んに魚を獲っていたことが想像される。
- 弥生時代** 大陸から伝播した稲作は、日本列島をかなりの速さで北上したと考えられ、鳥取県でも前期には米子市目久美遺跡⁽³²⁾で水田跡が確認されている。東郷池周辺では水田跡は確認されていないが、稲作に伴う遺物が各所で見つっており、弥生時代水田跡が発見されるのも近いものと思われる。この時期には、天神川の沖積作用と日本海からの風によって形成された砂丘上に、羽合町長瀬高浜遺跡⁽³³⁾(11)が現れる。この遺跡は弥生時代前期から中世までの複合遺跡であるが、この時期の遺構には4棟の玉作工房跡のほか、土壌墓などがある。玉作工房跡は、日本でも最も古いものの一つである。長瀬高浜遺跡では中期の土壌墓がわずかに見られるが、後期の遺構は全く見られず、古墳時代に入ってからが最も栄える。東郷池周辺では、中期の遺跡は長瀬高浜の土壌墓を除いては確認されておらず、遺跡の密度が少なくなっ



- | | | | | | | | | | | | | | |
|---|------------|----|---------|----|----------|----|------------|----|---------|----|--------|--|----|
| | 古墳 | | 古墳群 | | 遺跡 | | 寺院跡 | | 園跡 | | たたら跡 | | 城跡 |
| A | 南谷ヒシジ遺跡 | 8 | 南谷貝塚遺跡 | 20 | 片平4号墳 | 32 | 羽衣石第1生産遺跡 | 44 | 高辻第3遺跡 | 56 | 北福第3遺跡 | | |
| B | 南谷夫婦塚遺跡 | 9 | 初助北遺跡 | 21 | 佐美遺跡 | 33 | 羽衣石第2生産遺跡 | 45 | 高辻古墳群 | 57 | 北福古墳群 | | |
| | 南谷19-23号墳 | 10 | 橋津古墳 | 22 | 山根古墳群 | 34 | 羽衣石第3生産古墳群 | 46 | 川上古墳群 | 58 | 藤原古墳群 | | |
| C | 乳母ヶ谷第2遺跡 | 11 | 長瀬高沢遺跡 | 23 | 藤和墳丘墓 | 35 | 大御堂廃寺 | 47 | 川上生産遺跡 | 59 | 福永第3遺跡 | | |
| | 宇野3-9号墳 | 12 | 天神川下流遺跡 | 24 | 伊木古墳群 | 36 | 大原廃寺 | 48 | 久見古瓦山土地 | 60 | 藤津古墳群 | | |
| 1 | 岩古墳 | 13 | 田後遺跡 | 25 | 佐美古墳群 | 37 | 羽衣石城 | 49 | 久見古墳群 | 61 | 大宮遺跡 | | |
| 2 | 宇野第1遺跡 | 14 | 大平山古墳群 | 26 | 滝見中ノ谷古園跡 | 38 | 小倉谷古墳群 | 50 | 白石第1遺跡 | 62 | 船越遺跡 | | |
| 3 | 宇野第4遺跡 | 15 | 福原古墳 | 27 | 滝見古墳群 | 39 | 割所古墳群 | 51 | 中興寺古墳群 | 63 | 宮内飯塚古墳 | | |
| 4 | 宇野第5遺跡 | 16 | 福原遺跡 | 28 | 長和田古墳群 | 40 | 割所第2遺跡 | 52 | 野方第3遺跡 | 64 | 柏替一直経塚 | | |
| 5 | 橋津(馬ノ山)4号墳 | 17 | 溝ヶ坪遺跡 | 29 | 野花北山1号墳 | 41 | 割所第6遺跡 | 53 | 野方第1遺跡 | 65 | 宇野第1遺跡 | | |
| 6 | 乳母ヶ谷遺跡 | 18 | 門田遺跡 | 30 | 引地古墳群 | 42 | 別所第2生産遺跡 | 54 | 野方古墳群 | 66 | 原第2遺跡 | | |
| 7 | 南谷遺跡 | 19 | 津渡遺跡 | 31 | 野花第2遺跡 | 43 | 高辻第1遺跡 | 55 | 北福第1遺跡 | | | | |

挿図3 周辺遺跡分布図

ている。かわりに、中期の土器の散布が確認された羽合町宇野第5遺跡⁽⁴⁾（4）のように丘陵上で遺跡の密度が増すようになる。

後期 後期においても同様の現象が見られ、焼失住居跡が見つかった倉吉市福庭遺跡⁽¹⁵⁾（15）、炭化米・貝殻などを包蔵する4基の貯蔵穴が見つかった東郷町大鼻遺跡⁽⁶¹⁾（61）、堅穴住居跡が調査された羽合町南谷ヒジリ遺跡（A）・南谷夫婦塚遺跡（B）・乳母ヶ谷遺跡⁽⁶⁾（6）・乳母ヶ谷第2遺跡（C）・泊村宇谷第1遺跡⁽⁶⁵⁾（65）など、丘陵上の遺跡の密度が増加する。低地においては、羽合町助北遺跡⁽⁹⁾（9）において祭祀関係の土器と思われる、赤色塗彩された脚付注口土器が見られるのみである。東伯耆は銅鐸の出土例が多く、倉吉市小田で2口⁽⁴³⁾（外縁付鈕Ⅱ式・扁平鈕式）、北福第1遺跡⁽⁵⁵⁾（55）・長瀬高浜遺跡⁽⁷²⁾で小銅鐸がそれぞれ1口、泊村小浜⁽³¹⁾で2本の舌とともに1口（外縁付鈕Ⅰ式）、北条町米里⁽³²⁾で1口（外縁付鈕式）、やや離れて東伯町八橋で1口⁽²³⁾（扁平鈕式）が見つっている。そのほかにも、伝伯耆国とされるもの1口⁽⁴⁴⁾（外縁付鈕Ⅰ式）がある。また、弥生時代における集団墓から卓越した阿弥大寺1〜3号墓⁽³⁴⁾、藤和墳丘墓⁽²³⁾などの四隅突出型弥生墳丘墓が倉吉市で4基調査されている。

古墳時代前期 主な前期古墳には、三角縁神獸鏡を含む多数の副葬品をもつ、復元全長100mを測る前方後円墳である羽合町橋津（馬ノ山）4号墳⁽⁵⁾（5）がある。橋津4号墳を含む24基からなる橋津（馬ノ山）古墳群のうち22基は、国の史跡に指定されている。さらにこの古墳群には橋津（馬ノ山）2号墳などの大型前方後円墳が築造され、東郷池周辺だけでなく広く東伯耆一帯を支配した集団の存在が想定できる。周辺には北条町土下古墳群⁽³⁰⁾・曲古墳群⁽²⁷⁾などが前期から後期にかけて群集して存在する。橋津古墳群を仰ぎ見る砂丘に立地する長瀬高浜遺跡において、160数棟の堅穴住居跡、40棟の獨立建物跡をもつ大集落が再び現れる。この集落は前期から中期にかけて営造されているが、中期の中頃にはその規模も縮小している。集落が廃絶されると古墳が築造されるようになる。また、おびただしい数の器財型埴輪群が見つっている⁽³⁰⁾。他に田下駄・刀状木製品・火きり臼・彩色礫・手づくね土器など祭祀に伴う遺物が出土している東郷町津浪遺跡⁽¹⁹⁾（19）が知られている。この時期の住居跡は、東郷町佐美古墳群において4号墳に切られるかたちで検出された⁽⁴⁵⁾ものなど丘陵上でも確認されている。橋津4号墳以後もこの地域では、東郷池の東岸には全長90mを測る前方後円墳である東郷町宮内孤塚古墳⁽⁶³⁾（63）、南岸には山陰最大級の規模を誇る全長110mを測る前方後円墳である東郷町野花北山1号墳⁽²⁹⁾（29）などの大型前方後円墳が累々と築造される。このように、墳丘規模及び内容で他の古墳をはるかに凌駕する古墳が存在する東郷池周辺は、古墳時代前期から中期にかけて東伯耆の中心的な地域であると考えられる。

後期 後期になると大型の前方後円墳は見られなくなるが、中小規模の前方後円墳が南谷古墳群（B）など、各古墳群においても見られるようになる。また、従来の堅穴系の埋葬施設に代わって、横穴式石室が採用される。東郷町片平4号墳⁽⁴⁰⁾（20）は基底部を箱式石椁状に組み、板石を持ち送りながら小口積みにするもので、東伯耆では倉吉市大宮古墳⁽⁴¹⁾とならび導入期の横穴式石室である。その後、この地域で比較的用意に手に入れることができる板状椀形の安山岩を使用する横穴式石室が後期群集墳に取り入れられ、爆発的に増加する⁽⁴²⁾。東郷町片平1・5⁽¹⁵⁾⁽⁴³⁾号墳、長和田20号墳⁽⁴⁴⁾（28）、中興寺1号墳⁽⁴⁰⁾（51）、久見17号墳⁽⁴⁴⁾（49）、北福23号墳⁽⁴⁰⁾（57）、宮内31号墳⁽⁴⁰⁾、羽合町橋津（馬ノ山）9号墳⁽⁴⁰⁾、倉吉市福庭古墳⁽¹⁵⁾（15）などが知られている。これらのうち中興寺1号墳などのように各壁が一枚石で構成されている石室や、福庭古墳に見られるような切石石室は終末の様相を示す。また、6世紀前葉の窯跡である東郷町植見中ノ谷古窯跡⁽⁴⁷⁾（26）があり、当地域の須恵器を生産した数少ない遺跡の一つである。また、各所で土師器・須恵器が表採されており、各古墳群を造った集団の集落跡

の存在が確かめられる日も近いであろう。

歴史時代
白鳳期
奈良時代

この地域は古代寺院跡がたくさん見つかった。白鳳期には、倉吉市大御堂廃寺⁽⁴⁸⁾(35)、東郷町野方・弥陀ヶ平廃寺⁽⁴⁹⁾(53)、倉吉市大原廃寺⁽⁵⁰⁾(36)が造営される。大御堂廃寺は法起寺式の伽藍配置であったと考えられている。礎石の中央には柱を捉えた穴が穿たれており、炭化した柱の一部が残っていたという。この寺院は発掘された墨書土器より8世紀後半頃には久米寺と呼ばれていたようである。野方・弥陀ヶ平廃寺からは川原寺式の瓦の他に、塔心中央に柱穴をもつ塔心礎・礎石が見つかった。大原廃寺からは、柱穴をもつ塔心礎、川原式の瓦が見つかった。また、発掘調査により塔の基壇の一部が明らかになった。東郷町久見(48)でも7世紀後半頃と8世紀後半頃の瓦が見つかっており⁽⁴⁸⁾、寺院跡か官衙跡の存在が考えられる。奈良時代には現在の倉吉市国府に伯耆国衙⁽⁵¹⁾、伯耆国分寺⁽⁵²⁾、国分尼寺⁽⁵³⁾も建立されるなど、東伯耆は奈良・平安時代の政治の中心地であった。この地域は律令体制下においては伯耆国河村郡にあたり、河村郡は笏賀、舎人、多駄、埴見、日下、河村、竹田、三朝の八郷から成る。郡衙の所在地は不明であるが、河村郷、舎人郷、多駄郷の三か所が候補地として考えられている。⁽⁷⁾⁽⁵⁴⁾⁽⁵⁵⁾

平安時代

また、この地域には古代律令体制の名残としての条里遺構が残っている。⁽⁵⁴⁾ 天保地図⁽⁵⁶⁾などには整然と並んだ方格地割りがあり、当時の名残りを留めていると考えられている。

平安時代に入り自墾地系荘園が現われ律令体制が崩壊し、次第に封建制社会が形成されるようになる。このようななか、力を得てきたのが国司・郡司・寺社であった。東郷池周辺では、伯耆一宮、東郷氏であった。東郷氏は、中央の貴族や寺社に所領を寄進して、地方豪族としての地位を高めていった。伯耆一宮である倭文神社は「伯耆六社」の一つで、承和4(837)年に従五位下の神階が与えられていたが、広大な社領を経済基盤として在地領主層の信仰を集めながら伯耆一宮の地位を獲得したものと考えられている。⁽⁵⁶⁾

平安時代末期になると、末法思想が広まる。伯耆一宮の境内に隣接した山林で経塚(64)が発見された⁽⁵⁷⁾。経塚のなかには石室があり、そのなかに金銅製経筒、金銅製観音菩薩立像、銅製千手観音立像、銅板線刻弥勒立像などが安置されていた。経筒には「(中略) 康和五年癸未(中略)」銘が刻まれている。これら出土品は国宝に指定されている。

鎌倉時代

地頭の勢力は鎌倉幕府権力の伸長を背景に、次第に強大になった。歴史の教科書にもよく掲載されている大阪府御沢真次郎氏所蔵の正嘉2(1258)年銘の「伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図」によって地頭の荘園侵略の様子が窺われる。長瀬高浜遺跡では、約80基の火葬墓や土壌墓が調査され、この時期の葬制が明らかとなった。

室町時代

中世城郭も数多く知られており、南条貞宗によって築城された羽衣石城(37)、その近辺に出城や砦が築かれた。応仁の乱後は各地で騷擾戦乱が絶えず、この地においても大永4(1524)年尼子経久によって羽衣石城が落城し、また馬ノ山で尼子氏と山名氏が合戦をするなど争いの跡をとどめている。天正9(1581)年には羽柴秀吉と吉川元春が対陣した。秀吉は御冠山に、元春は馬ノ山に陣を設けたが、馬ノ山にはこの時に築かれた土塁が残っている。また、乳母ヶ谷第2遺跡で調査された土塁も馬ノ山のものと同様しており、この対陣の際に築かれたと思われる。この前後の情勢は『陰徳太平記』に詳しく述べてある。山間地にはこの時期と思われるタクラ跡が数カ所確認されている。また、橋津川改修にともない、中世の貝塚が検出された。この南谷貝塚遺跡⁽⁵⁸⁾(8)は、ヤマトシジミなどの貝類のほか、漆器などの木製品が出土している。

近近代

文久3(1863)年には外国に対する海岸防備のために砲台が設置された。鳥取県には由良、橋津、赤浜、淀江、境などに台場が建設され、海岸防備に当たった。橋津の台場(10)の建設に当たって橋津4号墳の前方部が削られたことがわかっている。⁽⁷⁾

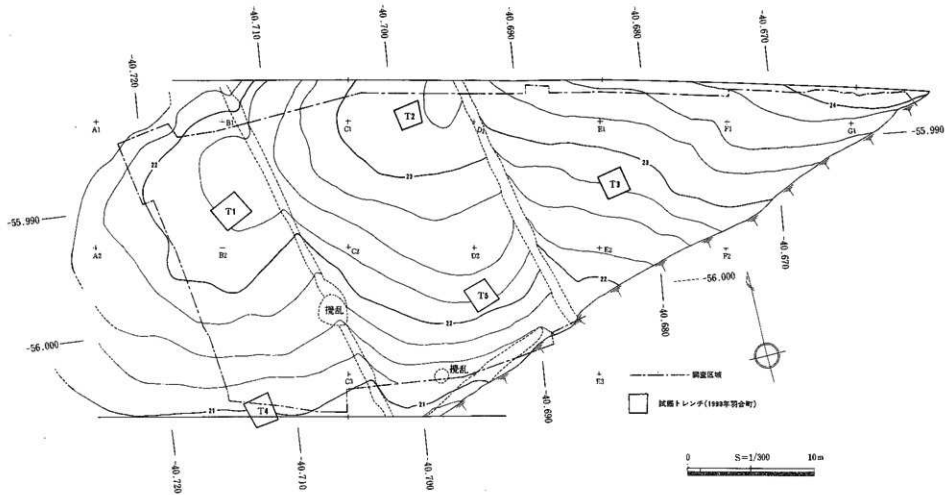
第3章 南谷ヒジリ遺跡の調査

第1節 南谷ヒジリ遺跡の概要

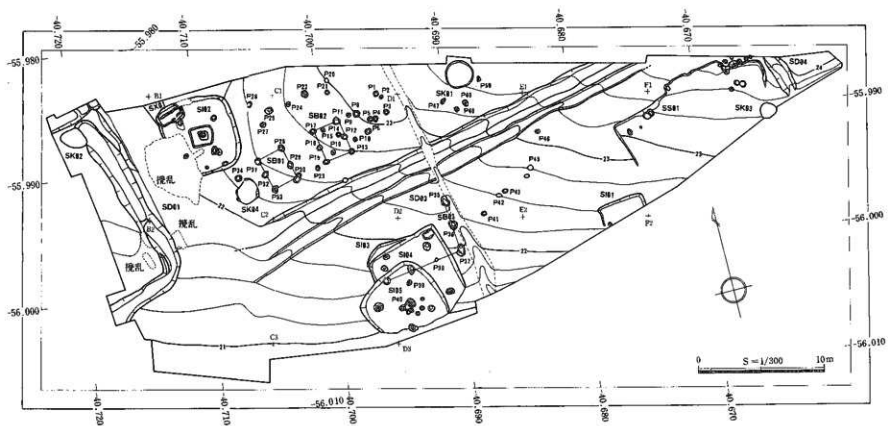
- 位 置** 南谷ヒジリ遺跡は東郷池の北西、橋津川中流右岸の羽合平野に向かって東西に延びる舌状の低丘陵（標高21～24m）上に存在する。本遺跡は南谷1号墳と2号墳との間にあり、周知の南谷遺跡の北側に位置する。また、南西側を見下ろすと、天神川右岸の砂丘地に古墳時代前期を中心とした大集落跡を持つ長瀬高浜遺跡（弥生時代から中世に至る大遺跡）がある。
- 遺 構** 本遺跡で検出された遺構数は、竪穴住居跡5、土坑4、掘立柱建物跡3、溝状遺構4、埋葬施設1、段状遺構1、ピット群であった。竪穴住居跡において斜面部分にあるものは流出し、尾根の中心にあるものは耕作により削平を受けており、残存状態が非常に悪いものであった。形態は方形2（S I 01・04）、隅丸方形2（S I 02・05）、多角形の様相を呈するもの（S I 03）の3種類があった。S I 02は中央ピットの縁が粘質土で盛り上げられ、貼床もみられた。S I 03～05は弥生時代末から古墳時代前期までに建て替えられていた。最後に建てられたS I 05は焼失した住居跡で、大量の焼土や構造材の炭化物をはじめ甌や壺、甕等の土器が出土している。構造材の炭化物は¹⁴C測定を行なった。周知の長瀬高浜遺跡の集落史の空白部分をうめる良い資料になるであろう。土坑について述べると、標高の高い位置にあるSK01はかなりの削平を受けていたが、それぞれに遺物が一括して残っており、良い資料を提供してくれた。特徴的な遺物として、SK01では器台が、SK02では高坏が、SK04からは焼土や炭化物が出土した。また、全土坑から甕が出土した。本遺跡では、すべて弥生時代後期の袋状土坑であったことから、今回の調査で確認できなかったこの時期の住居跡が近くに存在する可能性が考えられる。次に、掘立柱建物跡について述べると、SB01・02は丘陵頂部に存在し、SB03はS I 04・05の黒褐色埋土上で検出した。SB03のピット埋土中に須恵器と土師器が混入するものがあつた。また、本文で述べるSDは、墓域を区画するであろう周溝状の溝が「コ」の字形を呈し西側に延びていくSD01、近世の畑地の境界を表すものと思われる尾根を段状に整形し、尾根に沿って東西に延びていくSD02・03、尾根に直交して調査区域外に延びていくSD04があり、用途、時代共に違いはあるが、溝状遺構として同一の表現を用いた。SD01は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器を含んでいたが、崩壊危険区域に延びこむため完全には検出できておらず、来年度以降の調査が期待される。その他、埋葬施設（SX01）と段状遺構（SS01）があり、前者は単独で存在し、住居跡を切る状態で検出された。石棺材と思われる石も検出したことから石棺と考えられる。後者は地山を整形し段をつけ、平面形が凸状に掘り込んだ遺構であった。近世以降の磁器を多く含む埋土も柔らかかったが、用途は不明である。遺構は出土物から考えて弥生時代後期後半～古墳時代前期と近世以降に亘っている。表採ではあるが13世紀ごろの青磁片も出土しておりこの磁器の遺構が近くに存在していることも考えられる。



写真5 南谷ヒジリ遺跡現地説明会



挿図4 南谷ヒジリ遺跡調査前地形測量図



挿図5 南谷ヒジリ遺跡遺構全体図

第2節 南谷ヒジリ遺跡の調査

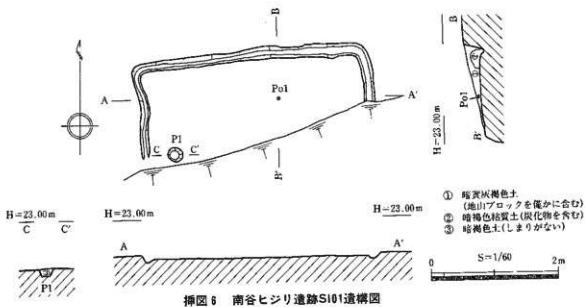
1 竪穴住居跡

S101 (挿図6・91、図版2・36)

- 位置** 調査区の南東隅、標高22.25m～22.5m、E2グリッドに位置する。
- 形態** 住居の南側が後世の攪乱によって失われているが、平面は方形を呈していたものと思われる。その規模は、長軸3.5m×短軸1.4m以上である。残存している床面積は、4.9㎡である。残存壁高は、北壁で最大0.33mである。壁溝は、現存しない南側を除き、3辺の壁際を巡る。その幅は24cm前後、深さは7cm前後で、断面はU字状を呈する。柱穴は1個のみ検出することができた。柱穴の位置より2本柱の住居が考えられるが、詳細は不明である。柱穴の規模は、(24×21-17)cmである。中央ピットは検出することができなかった。焼土も検出することはできなかった。
- 埋土物** 埋土②層に炭化物を含んでいたが、床面の状況などから、焼した住居とは考えにくい。床面で、高環の坏部(Po1)が出土した。口縁部を下に向け、潰れたような状態で出土した。遺構埋土中에서도土器片が出土したが、図化できるものはなかった。
- 時期** 出土土器より、古墳時代前期であると考えられる。

S102 (挿図7・8・91・92・112・115、図版2・3・36・37・52・54・55)

- 位置** 調査区の北西隅、B2グリッドに位置する。尾根の頂部に位置し、標高は22.0m～22.5m辺りである。南東約15mにS103～05がある。
- 形態** 住居の西部の一部が農耕による攪乱とSX01によって破壊されているが、平面は隅丸方形であると思われる。規模は、長軸5.7m×短軸5.4mで、床面積は、30.8㎡である。残存壁高は、東壁で最大0.48mである。壁溝は、床面が現存している場所に限って言えば、すべての壁際を巡る。その幅は20cm前後、深さは10cm前後である。断面は、U字状ないしは逆台形状を呈する。壁溝際、壁溝内に径3cm～10cmの浅いピットを4個(P8～P11)検出すること

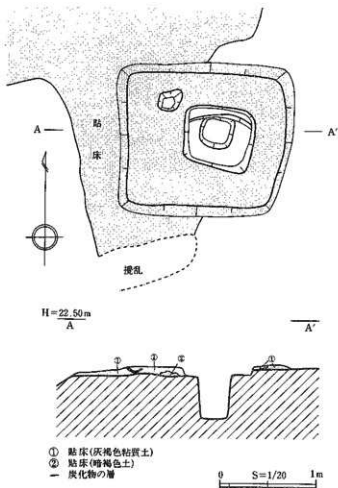


ができた。その他、床面上に7個ピットを検出した。P1～P3、P5が主柱穴と考えられ、4本柱の住居である。P4は、製作の際の攪乱によって掘り方の上部を失っていた。それぞれの規模は、P1(40×36-25)cm、P2(40×39-84)cm、P3(51×47-72)cm、P5(34×36-31)cmである。柱穴間距離はP1よりP3までそれぞれ、2.75m、2.60m、P3、P5間は2.73m、P5、P1間は2.75mである。P4はP3を切る(68×52-13)cmの浅いピットである。P6は中央ピットで、平面は方形二段掘り、北側に幅10cmのテラスを持つ。その規模は上縁部で(73×67-55)cmである。ピット内埋土は6層に分層できた。中央ピット内で火を日常的に用いた痕跡は認められなかった。住居床面に堆積していた埋土は流入しておらず住居が廃棄された時点では、中央ピットは埋められていたものと思われる。中央ピットの周囲30cmから60cmの範囲は、床面より3cmほど土手状に高い。断面観察の結果、貼床の土を使って硬く叩き締められながら盛り上げられている事、盛り上げられた土の中に炭化物がサンドイッチ状に挟まれていることが分かった。P7は中央ピットに寄り添うようにあり、(30×20-10)cmの規模を持つ小さなピットであるが、性格は不明である。

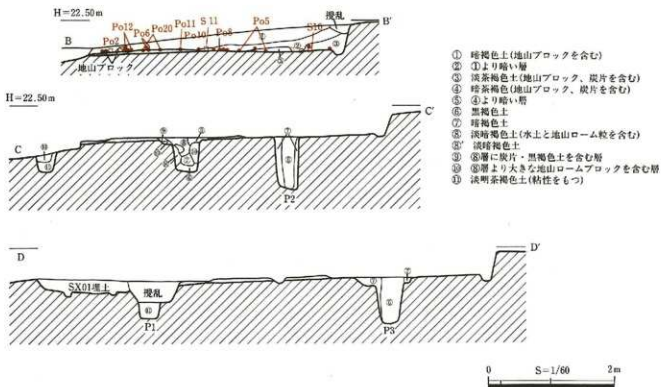
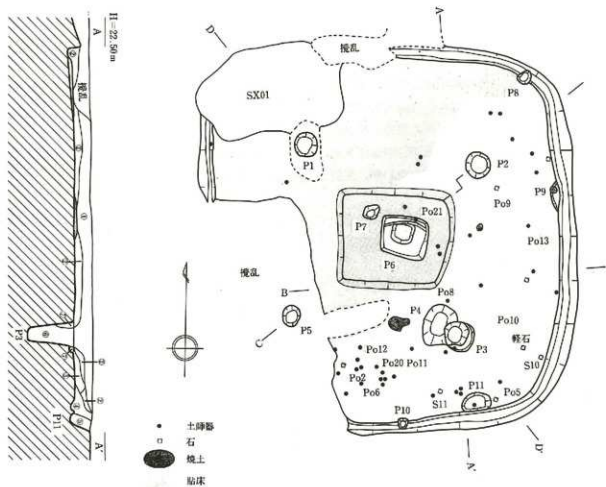
焼土 P4の西約20cmの床面上に(34×24)cmの不整形な焼土の広がりを検出した。遺構の埋土は5層で、住居の壁から中央に向かって流れ込んだ様な状態であった。③④層は、炭片を含んでいたが、その密度は薄く、焼失した住居とは考えにくい。床面においても、焼失を裏付けるものは得られなかった。

遺物 出土遺物は、壺Po2～Po4、甕Po5～Po17、小形丸底甕Po18、高坏Po20・Po21、脚Po19、土玉Po245、石錘S12～S14、敲石S10・S11、軽石である。この内床面出土の土器は、壺Po2・Po3、甕Po5～Po13、高坏Po20、Po21、石錘S12である。脚Po19は、P2内出土である。図化はできなかったが、中央ピット埋土中で土器及び軽石が出土した。また、壁溝内からも土器片が出土した。

時期 床面出土の甕より、S102は、古墳時代前期であると考える。

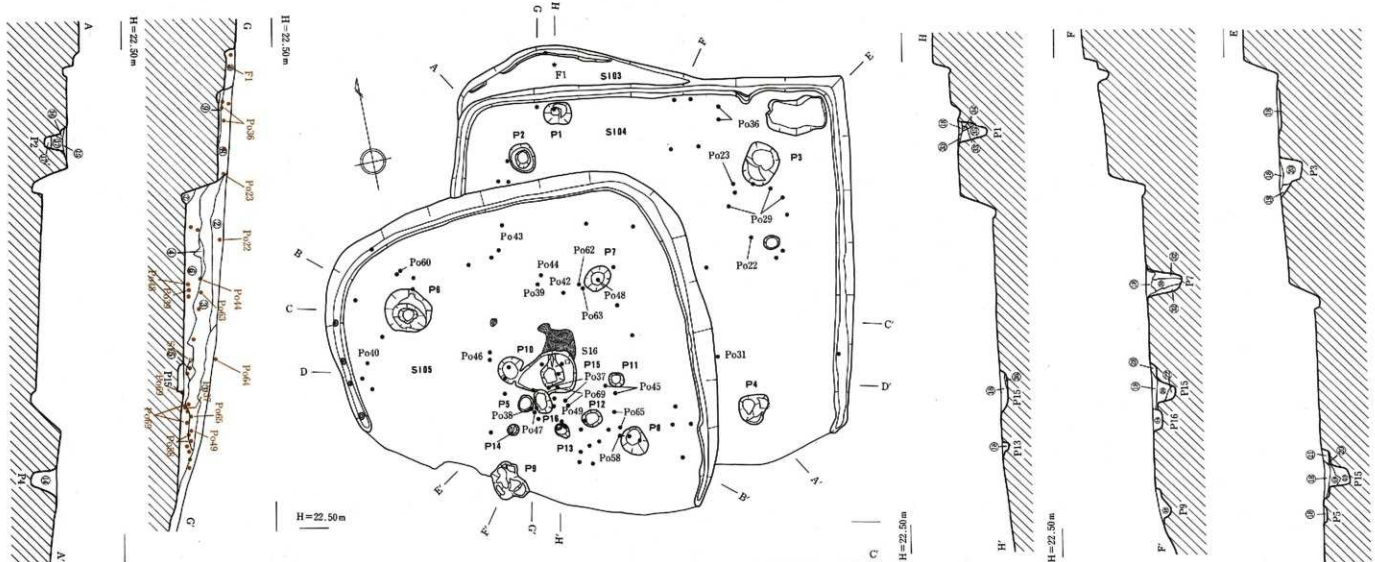


挿図7 南谷ヒジリ遺跡S102中央ピット

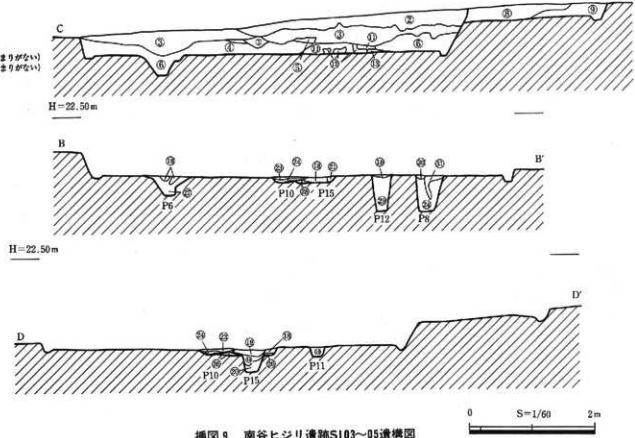


挿図8 南谷ヒジリ遺跡S102遺構図

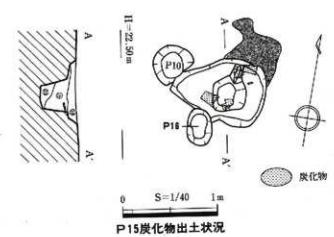
- 位 置 調査区の中央部、最も南側のC3グリッド・D3グリッドに位置し、3棟の住居跡が切り合って検出された。これらの住居跡は北から順次構築されており、順にS I 03・04・05とした。これらの立地場所は、南側に緩やかに下る斜面であるために、後世の削平等が及びやすいと思われ、いずれの住居跡も南周壁は検出されなかった。
- 形 態 S I 03は遺存状態が最も悪く、検出面をみるとS I 04に付随する溝構であるように思えるが、わずかにではあるが壁溝が確認され、単独の住居跡であると判断した。正確な形態及び規模は窺い知ることはできないが、周壁の屈曲部からすると、平面多角形を呈していたと考えられる。
- S I 03 残存壁高は、最も遺存状態のよい北壁で、最大0.24mである。
壁溝も北壁際にわずかに認められるだけであったが、幅7～10cm、深さ3cmを測り、断面逆台形状を呈すものである。
柱穴は、床面上では確認できないが、S I 04の北壁際で、この住居の柱穴と考えられるP1がある。P1の規模は(45×35-46)cmである。他の柱穴は確認できなかった。
- S I 04 S I 04は、南西側がS I 05によって大きく切り取られていたが、他の周壁は比較的遺存状態もよく、平面は方形を呈す。
規模は、南西側を復元して考えると、長軸5.9m×短軸5.5m、床面積約32.5㎡と推定される。
残存壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.52mである。
壁溝は、南側を除いて全周しており、幅10～23cm、深さ2～6cm、断面逆台形状を呈す。
柱穴は、床面上で5個検出することができたが、P1はS I 03に伴うものと考えられ、この住居に伴うものは計3個で、それぞれの規模は、P2(48×40×-36)cm、P3(65×50-38)cm、P4(50×48-45)cmである。基本的には主柱穴は4本と思われ、残りの1個は、S I 05に残るP5(25×25-7)cmと考えられる。主柱穴間距離はP2-P3間から順に、3.9m、4.0m、3.6m、3.9mである。
床面には、柱穴のほかには北東隅に長径95cm、短径60cm、深さ7cmを測る不整形な方形を呈す土坑状のものがあるが、性格は不明である。
P3-P4間にあるピットはSB03に伴うものである。
- S I 05 S I 05は、南側が流出しており全形を留めていなかったが、平面は隅丸方形を呈す。
規模は、南側を復元して考えると、東西5.5m、南北5.5mを測り、床面積約28.1㎡と推定される。残存壁高は、最も遺存状態のよい北壁で最大0.52mである。
壁溝は、南西隅及び南側を除いて全周しており、幅10～32cm、深さ4～10cmを測り、断面逆台形状を呈す。西側壁溝内には径5～10cm、深さ3cm程度の小ピットが4個あり、これらは、壁溝内に立てた側板を支えるための杭穴であると思われる。
柱穴は、床面上で11個検出することができたが、P5はS I 04に伴うものであり、また、P16は後述するが後に掘り込まれたものと思われ、この住居に伴う柱穴は計9個である。それぞれの規模はP6(75×72-33)cm、P7(45×35-53)cm、P8(47×40-60)cm、P9(55×46-25)cm、P10(43×35-9)cm、P11(25×23-16)cm、P12(30×25-59)cm、P13(26×22-10)cm、P14(17×17-15)cmである。主柱穴はP6、P7、P8、P9の4個で、主柱穴間距離はP6-P7間から順に、3.1m、2.6m、2.2m、3.1mである。他の柱穴については、中央ピット(P15)の周辺にあり、これを囲んだ施設の柱穴の可能性はある。



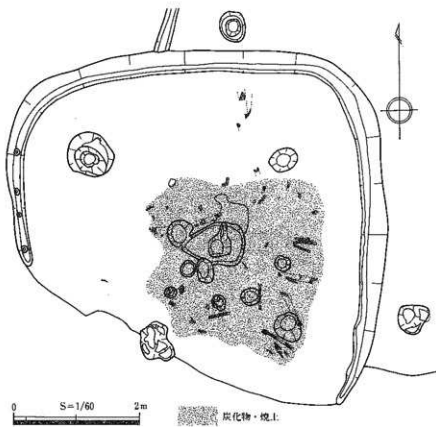
- 黄褐色土層(砂層、埴土)
- 磁器土(S105埋土)
- 黄褐色土(1~3m次の砂層を含むやや粘質)
- 黄褐色砂層
- 黄褐色土(炭化物を多量に含む、火山純土ブロックを多量に含みしりがない)
- 黄褐色土(炭化物を多量に含む、火山純土ブロックを多量に含みしりがない)
- 黄褐色土(火山純土ブロック)
- 黄褐色土(S104埋土)
- 黄褐色土(1~3m次の埋土層をわずかに含む)
- 黄褐色粘質土(砂よりわずかに粘質)
- 黄褐色土(炭化物を多量に含む)
- 黄褐色土(粘土純土が多量に含まれる)
- 粘土がやや多い
- 黄褐色土
- 黄褐色土(炭化物を多量に含む)
- 黄褐色土(火山純土ブロック炭化物を含む)
- 黄褐色粘質土
- 黄褐色砂質土
- 黄褐色粘質土
- 黄褐色土(炭化物を含む)
- 黄褐色土(炭化物を含む)
- 黄褐色粘質土(炭化物を含む)
- 黄褐色粘質土(炭化物を含む)
- 黄褐色土(砂より多い)
- 黄褐色粘質土
- 黄褐色土(炭化物を多量に含む)
- 黄褐色土



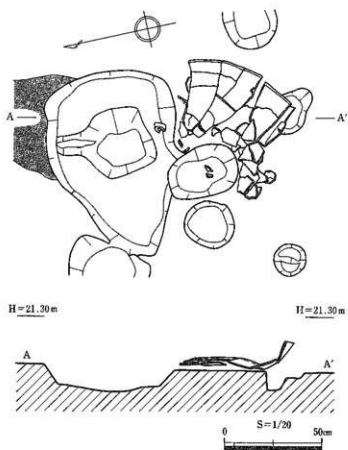
- 竈
- ● 土師器・髹土器
- 石
- 炭化物
- 焼土



挿図9 南谷ヒジリ遺跡S103-05遺構図



挿図10 南谷ヒジリ遺跡S105炭化物・焼土出土状況図



挿図11 南谷ヒジリ遺跡S105甕形土器出土状況図

- 中央ピット** 中央ピットは、S I 05にのみ遺存していた。このピットは、床面の中央よりやや東側に位置し、二段に掘り込むタイプである。まず、床面を長軸100cm、短軸60cm、深さ7～10cmに不整形な長方形に掘り、さらに二段目をほぼ方形に35×35cm、深さ26cmに掘り込んでいる。一段目のテラス部分には薄い炭化物が張り付くように残っており、中央の穴を木蓋のようなもので覆った可能性がある。ピット内には、炭化物・焼土を含む地山ブロックが入っていた。
- 焼土面** S I 05では、床面上に40×50cmの不整形に広がる焼土面が中央ピット北側に接した位置で一か所、ここから西にやや離れて15×10cmの楕円形の焼土面が一か所、計二か所で認められた。
- また、S I 03の北側で、住居跡外に40×25cmの不整形に広がる焼土面が検出されたが、この住居跡に伴うものかどうか不明である。
- 炭化物・焼土** S I 05では、床面に達するまでに2.8×3.0mの不整形に広がる炭化物を多量に含む焼土が検出された。焼土の範囲は、住居の中央部よりやや東に偏っている。焼土の厚さは、最も厚いところで16cmを測る。炭化物のなかには、家屋の構造材と思われるものが放射状に残っていた。これらのことよりS I 05は焼失したものと判断された。
- 土層** S I 03・04の埋土を観察すると、自然堆積の状況を示す。S I 05については炭化物を含む層がかなり上から検出でき、また、その下には砂礫が入り込んでおり、住居の屋根には茅などの屋根材とともに、土・砂礫などが一緒に葺かれていたものと推定される。また、壁溝付近には粘質土があり、壁溝内のピットと考え合わせると、壁溝には板状のものが立てられたと推定される。
- 遺物出土状況** S I 03では、埋土及び床面で土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。床面直上で鉄鍬F 1が出土している。
- S I 04では、床面上で壺Po22・Po23、甕Po24、高坏Po29・Po31、甕形土器Po36など土器片が散在した状況で、また、砥石S 17が北東隅で出土している。柱穴P 3中で壺底部Po35が出土している。埋土中では、甕Po25～Po28、高坏Po30、甕形器台Po32、蓋Po33、甕底部Po34などが出土している。
- S I 05では、床面の焼土の上で多数の土器片、石器が検出されたが、図化できたものは壺Po37～Po40、甕Po42～Po44・Po46～Po49、甕形器台Po65、甕形土器Po69、石錘S 15・S 16がある。これらは、住居の焼失による崩壊の際に押しつぶされたと思われる。また、Po69の出土状況を見ると、破損している部分がちょうどP 16と重なり、P 16によって切られていると判断された。Po40は住居の西壁際で口縁を下にして、また、東側壁溝内より甕Po57が、P 8より甕Po45が出土している。埋土中からも多数の土器、鉄器が出土しているが、図化できたものには、壺Po41、甕Po50～Po56・Po58・Po59・Po61、鉢Po60、高坏Po62～Po64、甕形器台Po66・Po67、低脚坏Po68、土玉Po246・Po259、甕F 2、鉄鍬F 3がある。
- S I 05の南側下方の調査区際で土玉Po253・Po254が出土しているが、これらはS I 05に伴うものと考えられる。
- 時期** 出土遺物によって、S I 04は弥生時代終末期、S I 05は古墳時代前期に構築されたものと考えられる。S I 03については時期の決め手となる土器が出土していないため、正確な時期は言えないが、弥生時代後期頃のものと考えられ、S I 04よりは古い。

2 土坑

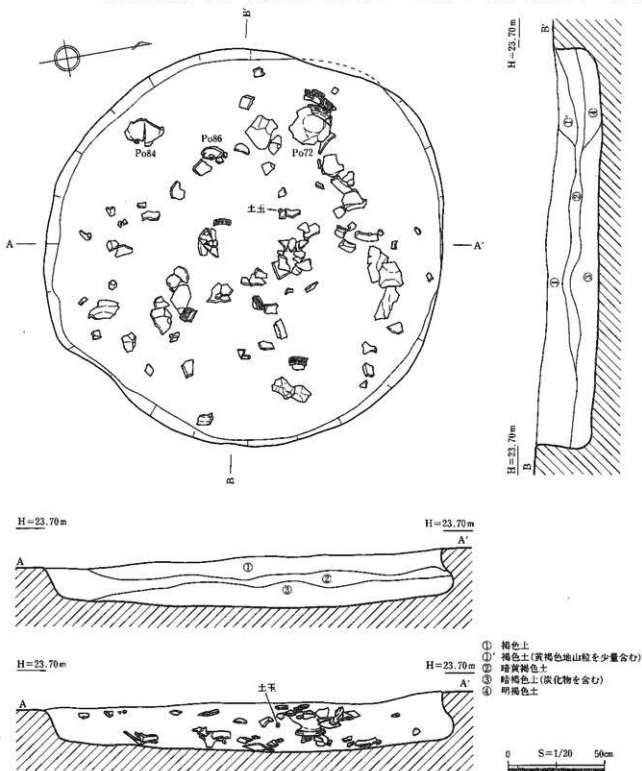
SK01 (挿図12・97・98・112、図版6・41・42・52)

- 位置** 調査区の北側、D1グリッド、標高23.75m付近で尾根の頂部辺りに位置する。畑地の耕作土を30cm程除去した後に、風化した礫を含む赤褐色ローム層上面で暗褐色土の円形の落ち込みを検出すると共に、土器が出土したため、ベルトを設定して4分割して北東区と南西区から掘り始めた。
- 形態** 耕作のためかなりの削平を受けており残存状態が非常に悪いが、平面は円形であり、断面は微かに掘り込みが内湾する部分が残っていることから袋状であると考えられる。
- 規模** 規模は上縁部で直径2.08m、底面で長径2.02m×短径2.00mである。深さは最も残りの良いところで上縁部から0.27mである。
- 土層** 遺構埋土は、大きく褐色土、暗黄褐色土、暗褐色土の3層に分かれている。①層には土器を多く含む。②層は無遺物層である。③層は多くの土器と炭化物を含んでいた。
- 遺物** 出土土器は①層と③層中でそれぞれに土器群を形成し、2つの土器群はおよそ10cm内外のレベル差を持ちながら、土坑全体に投げ込まれた様相を呈していた。①層の土器群では底面から15cm浮いたところに潰れた状態で甕(Po72)が出土し、その破片が①層中で土坑全体に広がっていた。③層の土器群では底面直上の南西区に器台(Po84)、高坏と思われる脚部(Po86)が潰れた状態で出土した。出土土器全体でみると、甕の口縁が多く、特に波状文を施されたもの(Po72・79)はほぼ①層に集中していた。また、完形に近く櫛目を施されたもの(Po70)はすべて③層に散乱して出土した。これらの出土土器を整理、復元してみると、Po71・72・82・87~89が①層の土器群中から出土し、Po73・74・76~78・81・84~86が③層の土器群中から出土したほか、Po75・79・83・90が①層と②層の土器群から出土した。その他、①層から土玉(Po327)、把手が出土しているが、①層と③層の土器群に同一個体の土器が含まれていたことは興味深い事実であり、土坑外で土器を壊し、短期間に二度にわけて土器が放棄されたと考えられる。甕(Po80)は①層に混入していた。
- 時期** 時期は底面の出土遺物から弥生時代後期後半と思われる。

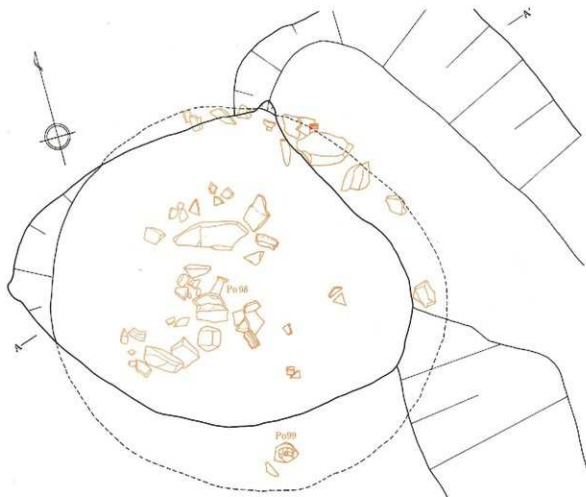
SK02 (挿図13・99、図版6・42・55)

- 位置** 調査区の北東隅、A2グリッド、標高21.70m付近で尾根の頂部に位置する。梨畑の耕作土を25cm程除去した後に、赤褐色ローム層上面で暗褐色土の円形の落ち込みを検出した。掘り下げはベルトを設定し、半載して南側から始めた。
- 形態** 耕作による削平をほとんど受けておらず残存状態が比較的よい。平面は楕円形であり、断面は上縁部より最大で40cm、最小で10cm掘り込みの壁面が内湾する顕著な袋状である。
- 規模** 規模は上縁部で長径2.10m×短径1.73m、底面で長径2.10m×短径1.98mであった。深さは最も残りの良いところで上縁部から1.41mであった。
- 土層** 遺構はSD01によって上縁部東側の肩部が切られている。遺構埋土を大別すると暗褐色土(自然堆積)、暗黄褐色土(地山の崩れ)、暗褐色土(炭化物を含む)の3つに分かれる。⑤⑤'層は地山ロームと同質の土質であり、壁面の崩れと考えられる。底面中央から25cmの位置にある⑤層は非常に良く締り、南側にいくほど層の厚さを増している。この層の上面の検出状況は中央ではほぼ水平に堆積しており、崩れを平坦に均しながら、この深さまで再利用された可能性がある。⑤層より下の⑧層及びそれに類する土層は暗褐色土で炭化物を含み、土器・石を包含していた。

遺物 土器の出土状況は、北東部に集中していた。2個体分の高環が底面直上から出土した。Po98は環部を南西方向に向け横臥した状態で出土し、Po99は環部を底面に付け倒立した状態で出土した。前者は土坑の北東部全体に散乱しているものの、後者は脚部1点しか出土しなかった。甕の口縁は、浮いた状態で出土したもの（Po95～97）、底面直上で土坑全体に散乱した状態で出土したもの（Po91～94）があった。角のある自然石も底面直上から多数出土し、土坑の東側壁に沿うように9個、土坑中央付近に9個で合計18個であった。大きさは最大で29cm×17cm、最小で4cm×2cmであった。この石も土坑中央から北東部にかけて出土しており、上述の土器の出土位置と一致する。このことは、この袋状の貯蔵穴の中でも、石



挿図12 南谷ヒジリ遺跡SK01遺構図

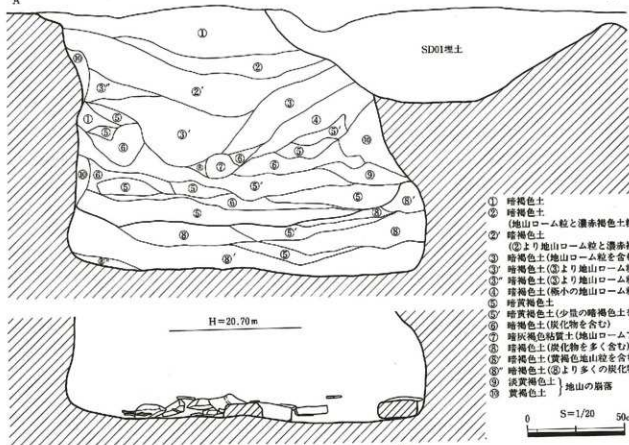


H=21.70m

H=21.70m

A

A'



- ① 暗褐色土
- ② 暗褐色土
(地山ローム粒と濃赤褐色土粒を少量含む)
- ②' 暗褐色土
(②より地山ローム粒と濃赤褐色土粒を少量含む)
- ③ 暗褐色土(地山ローム粒を含む)
- ③' 暗褐色土(③より地山ローム粒を含む)
- ④ 暗褐色土(③より地山ローム粒の粒が大きい)
- ④' 暗褐色土(極小の地山ローム粒を含む)
- ⑤ 暗黄褐色土
- ⑤' 暗黄褐色土(少量の暗褐色土を含む)
- ⑥ 暗褐色土(炭化物を含む)
- ⑦ 暗灰褐色粘質土(地山ロームブロック)
- ⑧ 暗褐色土(炭化物を多く含む)
- ⑨ 暗褐色土(黄褐色地山粒を含む)
- ⑨' 暗褐色土(⑨より多くの炭化物を含む)
- ⑩ 淡黄褐色土 } 地山の崩落
- ⑪ 黄褐色土 }

挿図13 南谷ヒジリ遺跡SK02遺構図

を配置した特別な施設を設け、特別な保存方法を行っていたのではないと思われる。遺構埋土上層で里山Ⅱ型式で壁面に縄文が施された縄文時代中期の土器（Po143・148・149）も出土している。

時期 時期は底面直上出土土器から弥生時代後期後半と思われる。

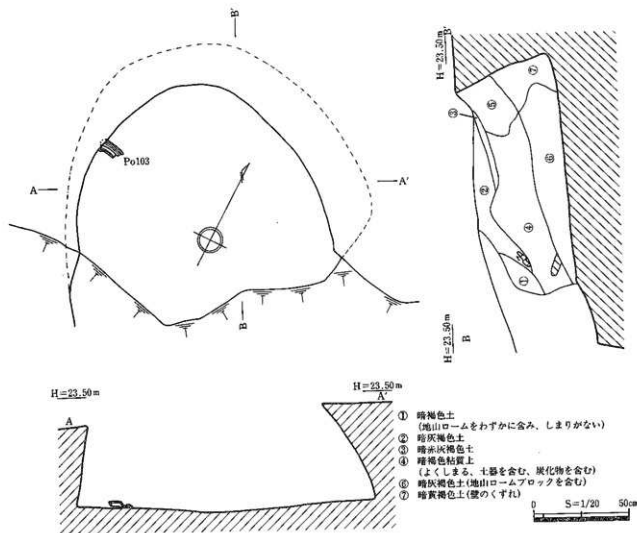
SK03（挿図14・100・112、図版7・43・52）

位置 調査区の東端、G2グリッドのG1坑付近、標高23.50m辺りで尾根がなだらかに下った斜面上に位置する。竹林の表土を40cm程除去した後に、土器の出土が見られ、赤褐色ローム層上面でローム粒を含む暗褐色土の円形の落ち込みを検出した。掘り下げは半載して西側から始めた。

形態 土坑西側が削平を受けているため残存状態が悪い。平面は円形であり、断面は掘り込みの壁面が上縁部より最大で20cm、最小で5cm内湾する顕著な袋状であった。

規模 規模は上縁部で長径1.37m×短径1.15m、底面で長径1.55m×短径1.41mであった。深さは残りの良いところで上縁部より0.54mであった。

土層 遺構埋土は⑤⑦層が壁面の崩れた堆積である。②④層には土器が含まれ、特に④層黒褐色土中に多量の土器と炭化物が含まれる。⑥層は無遺物層ではあるが、よくしまった埋土であった。



挿図14 南谷ヒジリ遺跡SK03遺構図

遺物 土器の出土状況は、底面直上から甕の口縁（Po103）が出土したほかは、すべて床面から浮いた状態で甕（Po104～110）、底部（Po111～113）が出土した。その他、浮いた状態で土玉（Po248～252）が出土した。

時期 時期は底面直上出土土器から弥生時代後期後半と思われる。

SK04（挿図15・101、図版7・44）

位置 調査区西側で、D2グリッド南東隅、標高22.50m付近で尾根の頂部に位置する。梨畑の耕土を25cm程除去した後に、赤褐色ローム層上面で黒褐色土の円形の落ち込みを検出した。掘り下げは半截して南側から始めた。

形態 若干上部に削平を受けていると思われるが、その他は残存状態はよい。平面は楕円形であり、断面は上縁部から最大で20cm壁面が内湾する顕著な袋状である。

規模 規模は上縁部で長径2.10m×短径1.85m、底面で長径2.10m×短径2.00mであった。深さは最も残りの良いところで上縁部より0.97mであった。

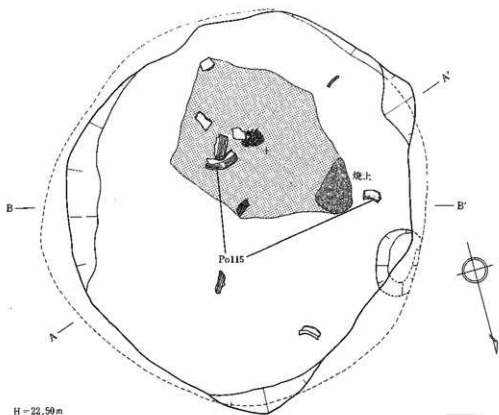
土層 遺構埋土は⑥～⑩の層で非常に興味深い堆積をしている。その断面をよく観察すると、土質は⑦⑧⑩層が暗黄灰褐色土、⑨層が黄色土（水土）、⑥層が暗桃色土であり、付近の地山ロームを多く含み、さらに、⑥⑧層は粘質がありビット状に落ち込んでいた。また、⑤層は、土坑全体に堆積し、土質も均一であることから自然堆積であると考えられる。その後、壁面の崩れによって④層が溜まり、自然堆積によって①～③層が溜まったと考えられる。底面直上には焼土と炭化物層が見られた。以上のことから、焼失した際、消火のために投げ込まれたと考えられる⑦⑧⑩層が、⑤層の下面でほぼ平坦になっていることと、⑥⑧層が⑦⑩層中でビット状に落ち込むことから、焼失した後、この土坑を⑤層の下面で、もう一度使用しようとした可能性が考えられる。

炭化物層 土坑の底面直上で検出した炭化物層の位置は底面の南側部分にあたり、規模は南北幅1m、東西幅0.8mを測り、検出面積は0.54㎡で底面の面積の6分の1に当たる。厚さは最大で15cm、最小で5cmであった。この層の上面では、植物性の繊維が残る炭化物の固まり2ヶ所を検出した。その広がり、長径12cm×短径9cmの楕円形を呈するものと長辺7cm×短辺4cmの四角形を呈するものであった。よく観察すると植物繊維が直交している部分もみられる（図版7参照）ことから、貯蔵穴の屋根材が焼け落ちたことも考えられる。炭化物層と繋がって北西部分に焼土も検出された。大きさは、長径30cm×短径20cm、厚さは9cmで卵形を呈していた。

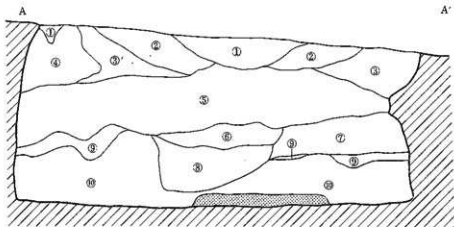
焼土

遺物 土器は⑤層の黒褐色土中と⑩層の底面付近の2層で出土しており、この2層それぞれに含まれる土器のレベル差は36cm程度であった。土器はすべて甕であった。このうち、Po117・118は⑤層の黒褐色土中から出土して、Po114・120・122は⑩層の底面付近から出土している。また、Po115・116は両方の層から出土しており、土器片をそれぞれ接合することができたが、その内、⑩層中にあった土器片は土坑北西部分に点在した。さらに、炭化物層から出土したもの（Po119・121）があった。

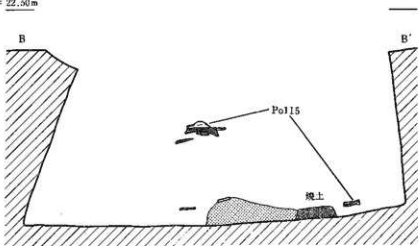
時期 時期は底面付近の出土土器から弥生時代後期後半と思われる。



H=22.50m



H=22.50m



- ① 黒褐色土
- ② 暗灰褐色土
- ③ 暗黄灰褐色土
- ④ ③よりやや赤っぽい土
- ⑤ 黄色土(壁面の水土の崩落)
- ⑥ 黒褐色土
- ⑦ 暗褐色粘質土
- ⑧ 暗黄灰褐色粘質土
- ⑨ 黄色土(水7)
- ⑩ 暗黄灰褐色土
- 黒褐色土
(炭化物を含む)

0 S=1/20 50cm

挿図15 南谷ヒジリ遺跡SK04遺構図

3 掘立柱建物跡

S B01 (押図16・101)

位置 B2、C2グリッドにまたがり、北西にS102、西にSK01がある。2m離れて東にあるSB02とは、ほぼ並行する関係にある。2m南には、ほぼ主軸を直行させて調査区の南西に延びるSD02・03がある。C2グリッド付近は、耕作により削平が著しく、柱穴の残存状況はよくない。

形態 桁行2間・2.8m、梁行1間・2.2mの掘立柱建物跡である。

主軸はN-15°-Wである。

柱穴は6個で、各柱穴の規模は、P1(58×50-18)cm、P2(46×41-15)cm、P3(58×45-12)cm、P4(56×40-29)cm、P5(50×47-15)cm、P6(50×47-15)cmを測り、P4がやや深くなっている。

柱穴間距離はP1-P2から順に、1.5m、1.3m、2.0m、1.6m、1.2m、2.2mを測る。

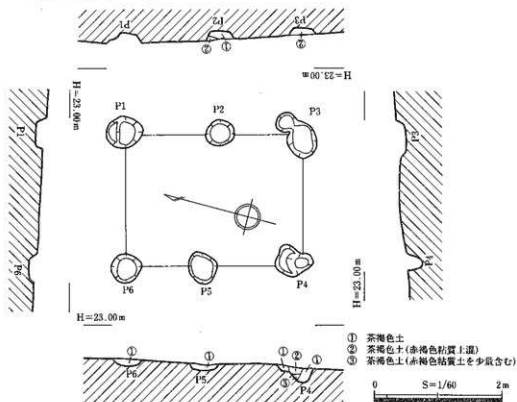
土層 埋土は地山ロームの混入量によって3層に分層でき、しまりが良くない。

遺物 遺物はP5の埋土から土師器の高台付杯(Pol26)と須恵器の脚(Pol27)が出土している。

時期 Pol26よりSB01は、平安時代以降の掘立柱建物跡であると思われる。

S B02 (押図17)

位置 C2グリッドのほぼ中央にある。西にはSB01がほぼ主軸を同じくして並立する。2m南には、SB02の主軸にほぼ直行して東西に延びるSD02・SD03がある。C2グリッドでは多数のピットが検出されている(ピット群)が、耕作による削平が著しく、SB02の柱穴の残存状況も良くない。

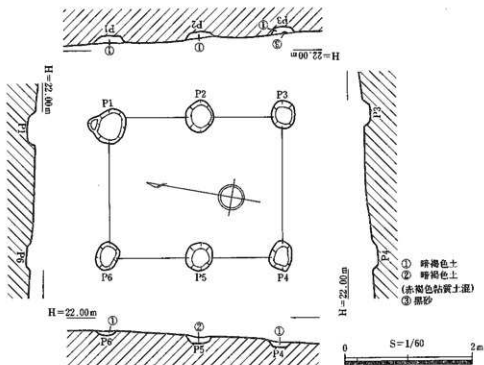


押図16 南谷ヒジリ遺跡SB01遺構図

- 形態** 桁行2間・2.7m、梁行1間・2.2mの掘立柱建物跡である。
 主軸はN-10°-Wである。
 柱穴は6個で、各柱穴の規模は、P1(60×55-16)cm、P2(49×44-14)cm、P3(43×36-13)cm、P4(49×46-12)cm、P5(45×41-15)cm、P6(45×35-8)cmを測る。6個の柱穴は良く揃っており、SB01の柱穴ともほぼ同規模である。
 柱穴間距離はP1-P2間から順に、1.4m、1.3m、2.2m、1.3m、1.4m、2.1mを測る。
- 土層** 埋土は基本的には、いずれもしまりの良くない茶褐色土で、P3の埋土上層の一部に黒砂が入っている。P3のように黒砂のはいる柱穴は、C3グリッドで検出された他のいくつかのピットにも見られた。
- 遺物** 遺物はまったく出土していない。
- 時期** 不明であるが、SB01とほぼ主軸を同じくすることから、同時期の掘立柱建物跡であると思われる。

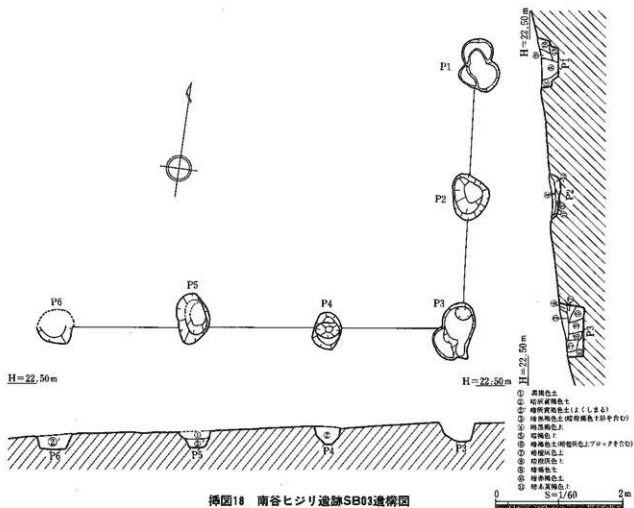
SB03(挿図18・19・101、図版8・44)

- 位置** 調査区のほぼ中央、C2、D2、D3グリッドに位置し、S103・04・05より上面で検出された。
- 形態** SB03は柱穴が6個しか検出できなかったが、これらの柱穴が鉤状に並ぶことより、桁行3間・6.5m、梁行2間・4.2mの掘立柱建物跡と判断した。なお、P5は1989年の試掘調査で検出され、P6はS105の調査中、掘り下げベルトにかかって検出された。主軸方向はN-82°-Eである。各柱穴の規模はそれぞれP1(85×43-34)cm、P2(73×58-21)cm、P3(93×48-40)cm、P4(59×42-30)cm、P5(80×50-28)cm、P6(59×?-26)cmを測る。残りの柱穴は検出できなかった。P4の掘り方は、S104の床面にまで達している。柱穴間距離は、P1-P2間から順に、2.0m、2.2m、2.1m、2.1m、2.3mである。
- 土層** P4~P6についてはS104・05の埋土(黒褐色土)に掘り込まれていた。

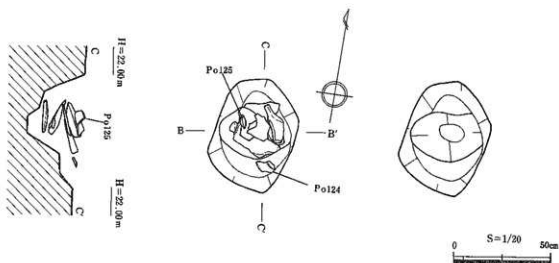


挿図17 南谷ヒジリ遺跡SB02遺構図

遺物 P3内で土師器裏Po123、P4内で土師器坏Po124、須恵器坏身Po125が出土している。
 時期 SB03はこれらの土器から奈良時代～平安時代ものと考えられる。



挿図18 南谷ヒジリ遺跡SB03遺構図



挿図19 南谷ヒジリ遺跡SB03P4内遺物出土状況図

4 溝状遺構

SD01 (挿図21・102、図版9・45)

位置 調査区の西端、標高22m付近、A2グリッドからA3グリッドにかけて位置する。表土は耕作による攪乱をうけており、攪乱は表土下の赤褐色ローム、水士にまで及んでいた。表土を30cm程掘り下げたところ、「コ」の字状を呈する溝を検出した。南側部分では攪乱がひどく、検出に難行した。この溝は、西側の未調査区へ延びてゆく。

形態 遺構の残存状態が悪い上に、溝の伸びが未調査区に向かっているため、全体を調査することはできなかったが、墓域を区画する方形の周溝になる可能性がある。南北方向の溝は、北東隅で浅くなり途切れてしまう。これに直角に交差する東西方向の溝は再び深くなるが、東端は階段状に途切れてしまう。この溝の性格については、未調査区の調査結果を待って決定したい。

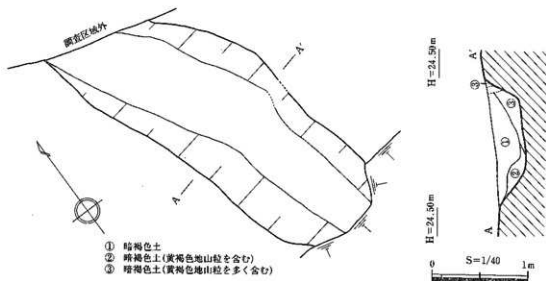
規模は南北の溝が長さ14.5m、幅が最大で1.8m、最小で1.5mあり、深さは最大で0.6mであった。南北方向の溝はN-20°-Wの方向に走る。東西方向の溝の内、北側のものは、長さ3.8m以上、深さは0.22mあり、南側のものは、長さ4.1m以上で、幅が1.3m、深さは0.3mあった。

遺物 土器の出土は南側の東西溝底面から弥生土器甕(Po130)が出土している。周溝埋土中から掘り込まれたピット中で出土した土師器甕(Po133)や黒褐色土中で里木Ⅱ型式で縄文時代中期の土器(Po145・147)も出土している。

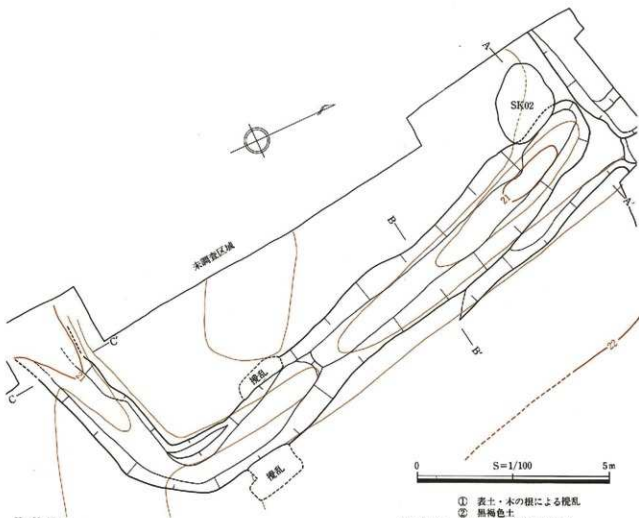
時期 SD01はSK02を切って掘り込まれていることが確認されていることから、時期は弥生時代後期後半以降のものであると思われる。

SD04 (挿図20)

調査区の東端、G1坑付近、標高24m付近に位置する。溝は尾根に直交する方向に延びている。検出時は土坑として掘り始めたが、地山と考えていた土層から土器片が出土したため、精査した結果、溝状遺構であることが判った。規模は長さ3.3m以上、幅は1.3m、深さは0.3mであった。用途、時期は不明であるが調査区外に延び出している。

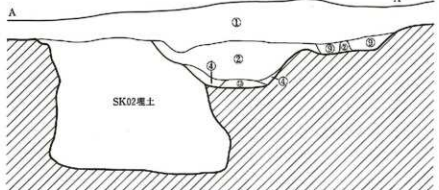


挿図20 南谷ヒジリ遺跡SD04遺構図



H=22.10m

H=22.10m



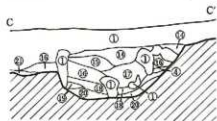
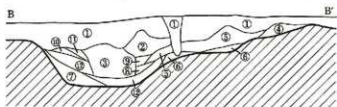
- ① 表土・木の根による機丸
 - ② 無褐色土
 - ③ 無褐色土(水土を含む)
 - ④ 暗褐色土
 - ⑤ 暗褐色土(暗褐色土混)
 - ⑥ 暗褐色土(暗褐色土を少量含む)
 - ⑦ 暗褐色土(砂を含む)
 - ⑧ 暗褐色土(暗褐色土混)
 - ⑨ 暗褐色土
 - ⑩ 暗褐色土
 - ⑪ 暗褐色土(水土を多く含む)
 - ⑫ 暗褐色土(砂を多く含む)
 - ⑬ 明褐色土
 - ⑭ 黒茶褐色土(水土を含む)
 - ⑮ 淡黒茶褐色土(水土を含む)
 - ⑯ 淡褐色土
 - ⑰ 暗茶褐色土(水土を含む)
 - ⑱ 淡暗茶褐色土(灰褐色粘土を含む)
 - ⑲ 淡明茶褐色土(灰褐色粘土を含む)
 - ⑳ 暗茶褐色土(灰褐色粘土、水土を含む)
 - ㉑ 暗茶褐色土
- (粘質性をもち、固くひきしまる。水土少混)

H=22.10m

H=22.10m

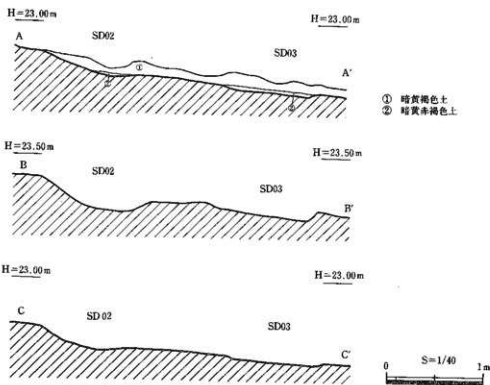
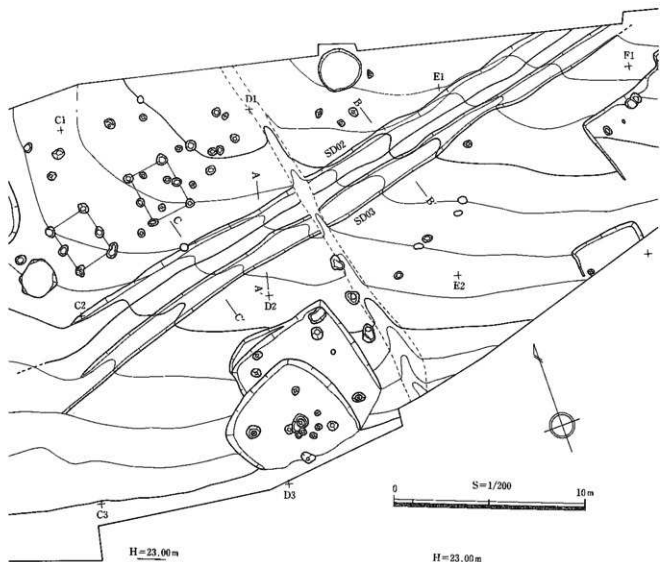
H=22.10m

H=22.10m



0 S=1/40 1m

挿図21 南谷ヒジリ遺跡SD01遺構図



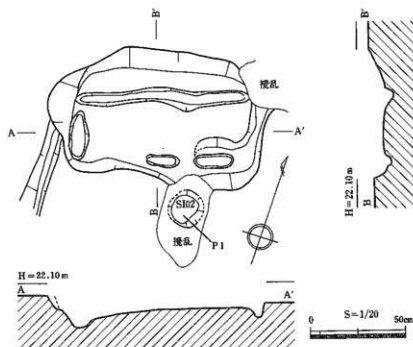
挿図22 南谷ヒジリ遺跡SD02・SD03遺構図

- 位置** 調査区中央、C3グリッド(C2杭付近)からE2グリッド(E1杭付近)に向かって東西に直線的に延びる溝である。標高21.25mから23.50m付近で尾根の肩辺りに位置する。畑地の耕作土を20cmから30cm程除去した後に、風化した礫をふくむ赤褐色ローム層上面で砂を含む暗黄赤褐色土の落ち込みを検出した。
- 形態** 尾根を段状に削り込み(最大で30cm)赤褐色ローム層をほぼフラットに整形し、その面に2条の溝の痕跡が残っていた。2条共に平行して走り、東端の方で浅くなっている。「天保14年河村郡南谷村田畑地続全図」を参照すると⁽⁴⁾、当時の畑地の境界線が本遺構の検出状況と非常によく似ていることから、耕作に関係するものであった可能性が考えられる。なお、最近の地籍図にはこの方向の境界線はない。SD02は幅0.8m、長さ30m以上、SD03は幅1m、長さ34m以上の規模があった。
- 遺物** 遺物は近世以降の磁器が出土している。
- 時期** 時期は江戸時代頃であると思われる。

5 その他の遺構

SX01 (挿図23、図版8)

- 位置** 調査区の北西隅、標高22.0m辺り、SI02の北壁を切って掘り込まれる。SI02検出時に、
- 形態** 住居の掘り方の北西部に、板状の石片が灰色の粘土ブロックとともにバラバラと不規則に出土した。埋土に、水上がブロック状に入り、梨の耕作に伴う肥料穴にその埋土が近似していたため、当初は、SI02を切り込む攪乱坑と考えて調査を行い、一気に底面まで掘り下げた。掘り下げ中にも、板状の石片が不規則にバラバラと出土した。底面を精査したところ、四至に深さ約10cmの溝状の窪みを検出した。この溝を石棺の側板及び小口を立てるためのものと考え、石棺を用いた埋葬施設と考えた。平面は、南側の一部が攪乱を受けてはいるものの、やや胴張りの長方形であると思われる。断面は、逆台形状を呈する。その規模は上縁部で長軸1.15m×短軸0.68m、底面で長軸0.99m×短軸0.54mである。深さは最も残りの良い

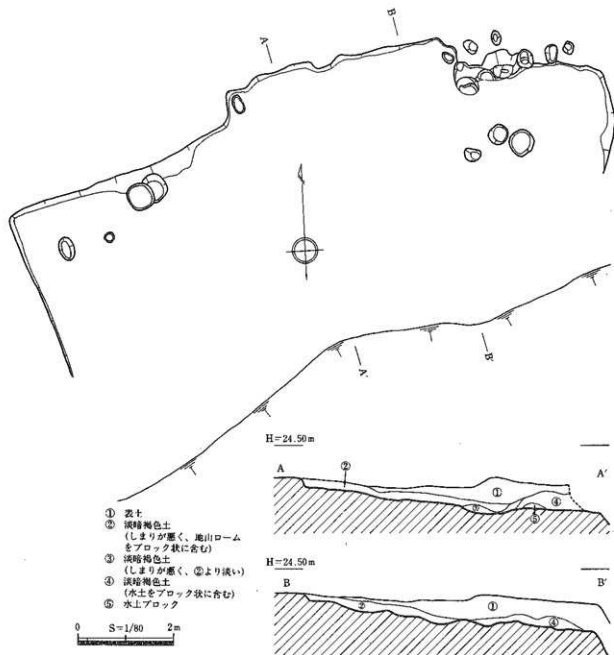


挿図23 南谷ヒジリ遺跡SX01遺構図

遺物 ところで、0.15mである。遺物は石片以外全く出土しなかった。時期は、切り合い関係から、
 時期 SⅠ02（古墳時代前期）より新しいものであるが、詳細は不明である。

SS01（挿図24）

位置 調査区の北東隅、E2・F1・F2グリッド、標高23m～24mに位置する。検出時には、
 その平面形より切り合う3棟の方形竪穴住居を考え、縦横ベルトを設定して掘り下げた。その結果、切り合い関係はなかった。床面は起伏が激しく、柱穴になりうるピットも確認でき
 形態 なかったことから、竪穴住居とする根拠に乏しく、段状遺構としてあつた。平面は凸形
 を呈する。床面は地形に従って、南側に傾斜する。その規模は、東西12.5mである。段の高
 さは、最も残りの良いところで、0.2mである。床面上及び段の外側に18個のピットを検出
 したが、いずれのピットも浅く、深さ10cm内外のものである。ピットの底面は平坦ではない。
 埋土 遺構の埋土は、4層に分層できた。埋土のしまりは大変悪く、水土がブロック状に混入し



挿図24 南谷ヒジリ遺跡SS01遺構図

時 期 していた。埋土中より近代の陶磁器片が出土したが、性格時期ともに不明である。

ビット群 (押図22)

調査区の北東側、標高22m~23m辺り、尾根頂部の平坦部と南側緩斜面に50個のビットを検出した。C2グリッドにはほぼ収まる範囲にビットが集中している。その広がりは南北約15m、東西約12mである。P28~P33はS B01の柱穴、P11~P13・P17~P18はS B02の柱穴、P35~P40はS B03の柱穴である。他のビットに規則性は見られなかった。各ビットの詳細に付いては、下のビット群一覧表の通りである。

ビット番号	規模 (m) (長径×短径-深さ)	備考	ビット番号	規模 (m) (長径×短径-深さ)	備考	ビット番号	規模 (m) (長径×短径-深さ)	備考
1	43×10-10		19	49×48-12	S B02 P 4	36	73×54-21	S B01 P 2
2	30×25-20		20	33×28-28		37	93×48-40	S B03 P 3
3	44×38-9		21	33×30-9				
4	48×42-7	土器片	22	55×50-11		38	59×42-30	S B01 P 4 須磨器・土師器
5	45×35-4	土器片	23	38×28-10		39	80×50-28	S B03 P 5
6	54×40-14		24	41×38-13		40	58×40-26	S B01 P 4
7	40×29-11	土器片	25	53×47-13		41	33×27-9	
8	47×42-11		26	40×34-14		42	40×22-8	
9	34×31-17		27	41×39-28		43	40×32-8	
10	35×23-22		28	58×50-16	S B01 P 1	44	39×28-11	
11	60×23-6	S B02 P 1	29	46×41-15	S B01 P 2	45	42×42-11	
12	49×44-14	S B02 P 2			S B01 P 3	46	41×40-8	
13	43×36-13	S B02 P 3	30	38×45-12	土器片	47	47×32-15	
14	37×32-6		31	50×47-15	S B01 P 6	48	42×30-11	
15	34×25-20		32	50×43-15	S B01 P 3	49	54×42-20	
16	36×23-22		33	56×40-29	S B01 P 4	50	42×30-11	
17	45×35-8	S B02 P 6	34	50×48-20				
18	45×41-18	S B02 P 5	35	85×43-34	S B03 P 1			

挿表1 南谷ヒジリ遺跡ビット群一覧表

遺跡名	形 態	規模 (m)	平面積 (㎡)	残存高さ (m)	主柱穴 (本)	遺 物	時 期	備 考
S101	方形 (推定)	3.5×1.4 以上	4.9 (推定)	0.33	2 (推定)	高埴	古墳時代前期	
S102	隅丸方形	3.7×5.4	30.8 (推定)	0.18	4	罌・壺・高埴・小野丸須磨・土玉・石鏡・煎石	古墳時代前期	中央ビット、方形は残残り 横土・葺、焼瓦片
S103	多角形 (推定)	?	?	0.24	?	鉄錐	弥生時代後期	
S104	方形	5.9×5.5 (推定)	32.5 (推定)	0.52	4	罌・壺・煎・高埴器台・陶石	弥生時代後期末	
S105	隅丸方形	5.5×5.5 (推定)	28.1 (推定)	0.52	4	罌・壺・高埴・煎器台・井・煎器石・土玉・高埴器	古墳時代前期	中央ビット、方形は残残り 横土・葺、焼瓦片

挿表2 南谷ヒジリ遺跡竪穴住居一覧表

遺跡名	平面形	断面形	規 模 (m)		深さ	遺 物	時 期	備 考
			①上縁部 ②底 部	長径×短径 (長径×短径)				
S K01	円 形	竇 状 (推定)	① 2.08 × 2.08 ② 2.02 × 2.00	0.27	罌・壺・器台・土玉・把手	弥生時代後期後半		
S K02	楕円形	竇 状	① 2.10 × 1.73 ② 2.10 × 1.98	1.41	罌・高埴	弥生時代後期前半	自然石	
S K03	楕円形	竇 状	① 1.37 × 1.15 ② 1.55 × 1.41	0.54	罌・土玉	弥生時代後期後半		
S K04	楕円形	竇 状	① 2.10 × 1.85 ② 2.10 × 2.00	0.97	罌	弥生時代後期後半	横土・炭化物	

表3 南谷ヒジリ遺跡土坑一覧表

遺跡名	用×壁 (間)	規 模 (前) (m)	規 模 (後) (m)	長方形度	平面積 (㎡)	主 軸 方 向	遺 物	時 期		
S B01	2×1	2.8	2.8	2.7	2.6	1.27	6.16	N-15°-W 須磨器形煎器 土師器高台付埴	平安時代以降	
S B02	2×1	2.7	2.7	2.1	2.1	1.23	5.94	N-10°-W	なし	S B01と同時期か?
S B03	3×2(?)	6.5	—	4.2	—	1.05	—	N-82°-E 須磨器形埴、土師器	奈良-平安時代	

挿表4 南谷ヒジリ遺跡掘立柱建物跡一覧表

第4章 南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群の調査

第1節 南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群の概要

位置 南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群は東郷池の北、橋津川最上流右岸で羽合平野に向かって、南西から北東に舌状に延びる尾根上（標高75～87m）に位置する。南谷古墳群全体は23基から成り、地形で分類すると、斜面裾部に位置し、横穴式石室を持つ14～17号墳と丘陵上に位置する古墳群とに大別される。このうち、後者は3群に分かれ、西から南谷ヒジリ遺跡が位置する低い丘陵上にある1～3号墳、高い丘陵上にある4～6・18号墳と7～13・19～23号墳である。今年調査した古墳は19～23号墳である。また、南谷古墳群全体は、橋津（馬ノ山）4号墳（全長100m 前方後円墳）のある橋津古墳群に隣接している。

南谷夫婦塚 南谷夫婦塚遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡2棟、土坑9基、ピット群を検出した。竪穴住居跡には六角形（S I 01）と方形（S I 02）の2種類の形態があった。S I 01には貼床が施されているだけでなく、垂木をかけたであろうテラスとピットも検出されている。S I 02にも貼床を施そうとしていた。遺物は弥生時代後期後半の甕や低脚杯等の土器、石皿や磁石等の石器が出土している。土坑には平面が方形（SK04）と円形または楕円形（SK05・06・08・09・11）、不定形（SK07・10・12）の3種類の形態があった。SK04は上面で弥生時代の甕類が出土し、土壌蓋の可能性がある。他の土坑は弥生時代後期後半の甕が出土したものであることから、この時期に竪穴住居跡と土坑が一齊につくられた可能性があり、人々の生活が盛んに行なわれていたことが想像される。ピット群は22号墳墳丘下と19号墳墳丘下から南側周溝へと広がりをもって検出された。以上のことから住居跡、土坑群、ピット群が南斜面へと広がっていくと思われる。

南谷古墳群 南谷古墳群調査では、新たに5基の古墳が確認され、東から南谷19・20・21・22・23号墳と命名した。南谷19号墳は南谷古墳群全体の中で、唯一の前方後円墳であることが判明し、墳丘は一部削平を受けているものの盛土が比較的よく残っていた。墳形から19号墳の被葬者は南谷古墳群の他の古墳の被葬者より地位が高かったことが窺われる。また、19・22・23号墳で盛土の断ち割りを行なった。19号墳の盛土断ち割りでは、前方後円墳築造過程の手順を解明するために必要な土層等の資料を得ることができた。さらに、くびれ部で後円部の円形を整えるために掘られた区画用と考えられる溝とこの溝の伸びの途中で2段に掘り込まれた盛土下の土壌を検出した。盛土下の土壌の用途を明確にするために脂肪酸分析を行なった結果、埋葬施設であることが確定した。その他、南谷20～23号墳は円墳であり、墳丘はいずれも開墾による削平がひどく、22・23号墳のごく一部に盛土が残る以外は周溝のみで検出した。また、盛土の除去によって、22・23号墳では地山が傾斜していることが判り、この尾根での築造可能となる範囲の端に築造されていたと考えられる。出土遺物や土層、周溝の検出状況、地山地形から築造順位を類推すると〔②19号墳→①20号墳→③21号墳→④22号墳・23号墳〕と図化できると考える。時期は6世紀前葉から末葉にかけてのものだと考えられる。

SK03は時期不明であるが、形態が方形で石材が多数発見されたことから石棺の可能性がある。



写真6 南谷19号墳調査前

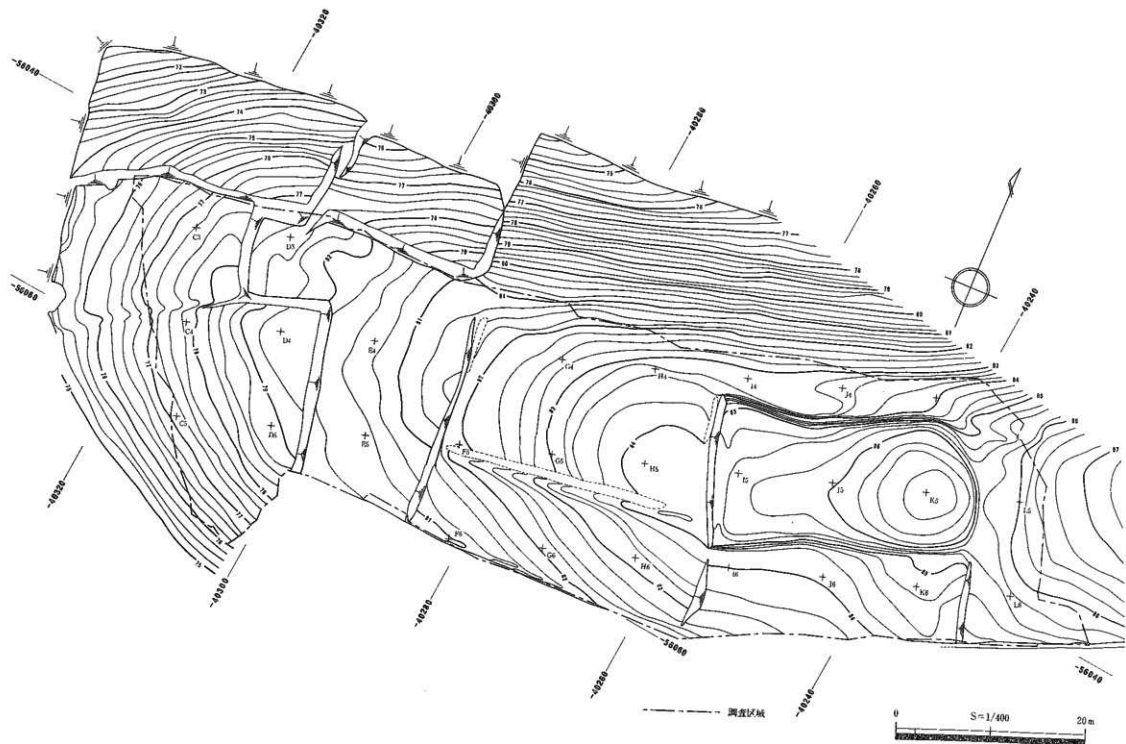


插图25 南谷夫塚塚遺跡・南谷古墳群調査前地形測量図

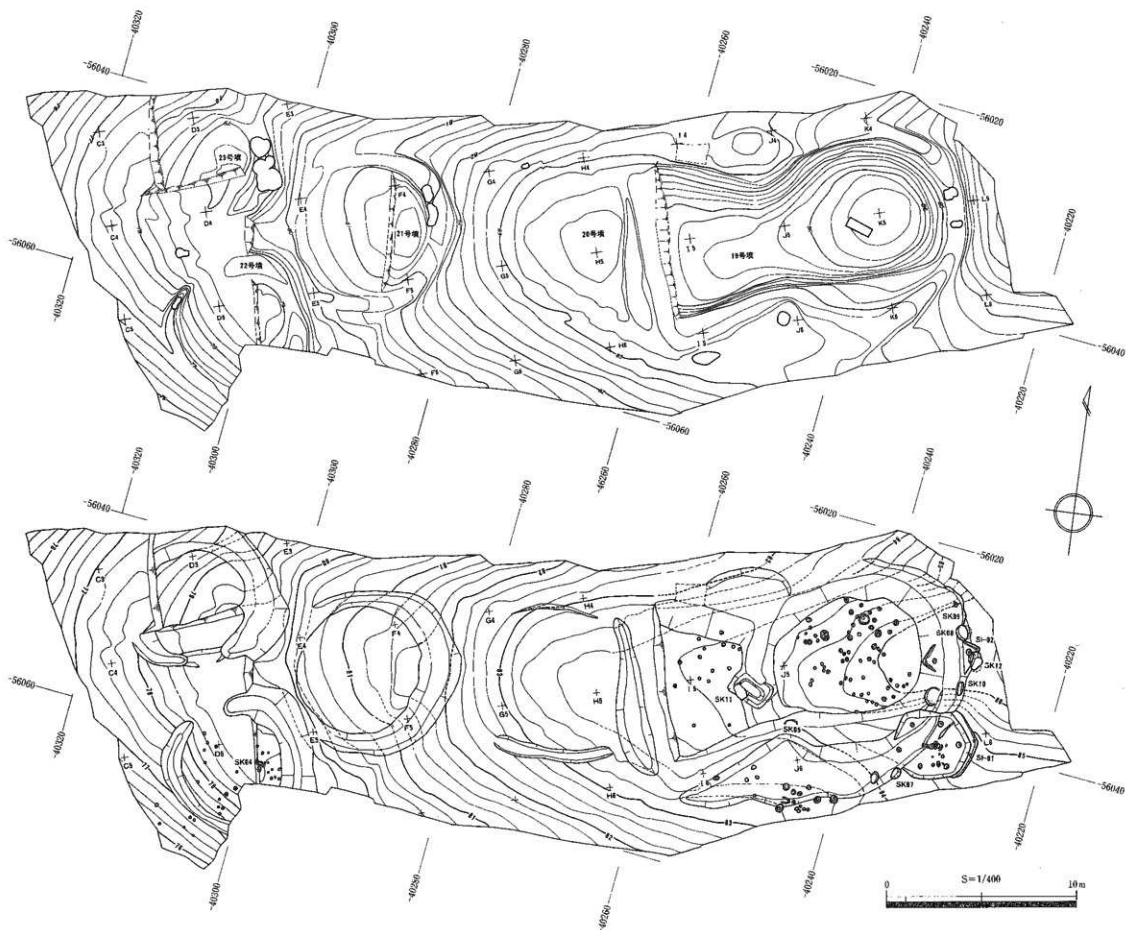


插图26 南山谷墩群(上图)·南山谷烽燧遗址(下图)遗址全图

第2節 南谷夫婦塚遺跡の調査

1. 竪穴住居跡

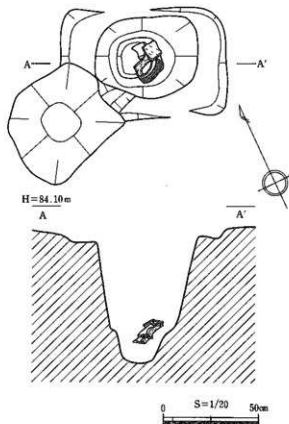
S101 (挿図27・28・103・112・113・116・117、図版11・12・46・53・55)

位置 調査区の南東端、K6・K7グリッドにあり、南側の緩やかな斜面に立地する。すぐ北にはSK06とSK10とがあり、5m北方にはS102がある。すぐ南西にはSK07がある。本住居跡の北側から南西側にかけて南谷19号墳の周溝が掘られており、住居跡が周溝に分断されている。また、西側の壁は後世の開墾によってかなり削られている。

形態 平面は東西方向に長い六角形である。北側から東側の側壁にはテラスを有し、テラスは平面プランにそって掘られている。床面の規模は長軸は8.0mと推定され、短軸は6.3mを測る。床面積は、推定される部分も含めて38.5㎡位である。残存壁高はテラスも含めて北壁で最大1.11m(上縁～テラス0.47m、テラス～床面0.56m)である。また削平されている北西壁についても、19号墳墳丘下の旧表土面から推測すると、壁高は1.5m位あったと思われる。南側の床面には貼床がなされており、北側の床面は赤褐色ローム層に含まれる礫を除いて床面を整形している。

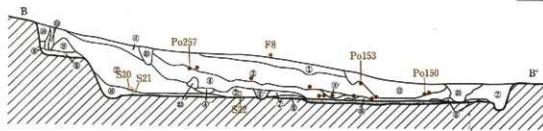
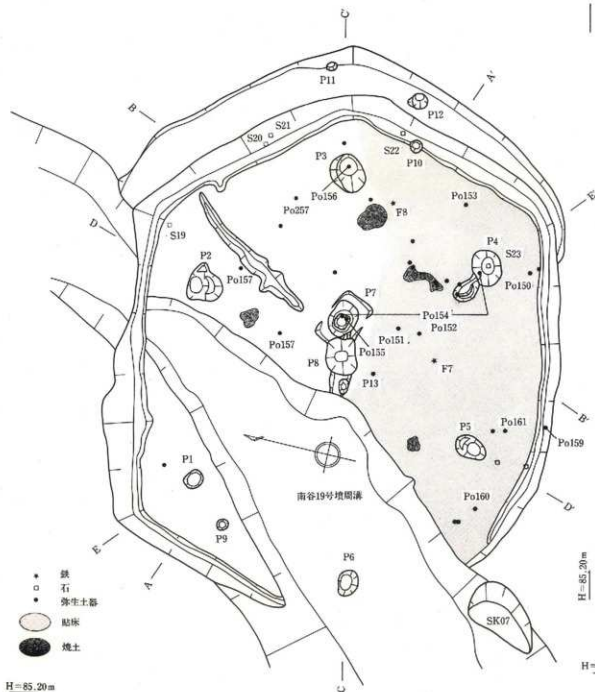
壁溝は幅6～20cm、深さ3～7cmで、断面はU字状である。検出した床面にはすべて壁溝があるが、全周するか否かは19号墳周溝に切られているため不明である。また床面北東隅からP7に向かって延びる、長さ2.5m、幅10～30cm、深さ3cm程の溝がある。またP8から西方向に延びると思われる深さ5cm程の溝があるが、19号墳周溝に切られているため規模は不明である。

主柱穴は6個で、柱穴の規模はP1より順にP1(32×25-60)cm、P2(55×46-64)cm、P3(62×51-55)cm、P4(56×44-73)cm、P5(52×35-57)cm、P6(41×32-43)cmで、各柱穴間距離はP1-P2間から順に3.0m、3.0m、2.7m、2.8m、2.9m、2.9mを測る。P6では19号墳周溝底で検出した落ち込みだが、位置からして本住居跡の柱穴と判断した。また床面中央にP8(56×48-70)cmがあるが、埋土も他の柱穴と同じであり柱穴として機能していた可能性がある。このP8から西に延びる溝中にP13(24×16-21)cmがある。この他床面にはP9(18×18-10)cm、P10(20×20-14)cmがある。また、テラス部分にも斜めに掘り込まれたP11(19×14-20)cm、P12(31×24-37)cmを検出した。



挿図27 南谷夫婦塚遺跡S101中央ビット内遺物出土状況図

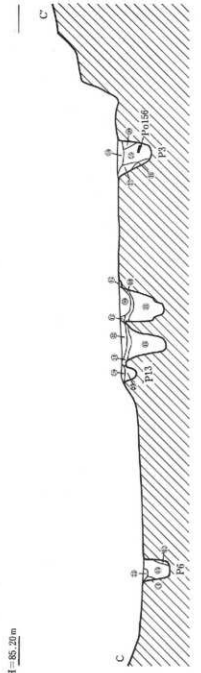
- 中央ビット** P7が中央ビットである。二段掘りのビットで、まず床面には隅丸長形状の深さ3cm程度の掘り方不明瞭な落ち込みがあり、その面から(58×42-70)cmの落ち込みが検出された。埋土は他の柱穴等とほぼ同じであるが、下層には比較的多くの炭片が含まれていた。
- 焼土** 焼土は4箇所検出され、それぞれ柱穴より20cm~40cm内側の位置にある。
- 土層** 埋土は大別すると2層で、上層から下層は黒褐色土系の層、最下層の暗黄褐色土(水土の濁ったような土)層である。⑦層まで掘り下げたところで6個の落ち込みを検出したが、いずれも本住居に伴わないビットであるため遺構図からは除外した(挿図26参照)。テラス部分の埋土は地山と区別のつきにくいもので、ところどころに赤褐色ロームが入っている。柱穴の埋土は粘性をもった土でしまりも良い。P4の埋土内で石皿(S23)が出土している。その出土状況からして、柱が引き抜かれた後に埋められたと思われる。
- 遺物** 床面で甕(Po150~153)、蓋(Po160)、手づくね土器(Po161)が出土しており、また側壁付近の床面では、砥石(S19~21)と石皿(S22)が出土している。砥石はいずれも良く使い込まれており、石皿は自然面を利用したものである。刀子と思われるF7も床面直上で出土している。この他、P3中で甕(Po156)、P7中で甕(Po154、155)が出土している。Po155は口縁のみが完形で残っており、故意に埋められたものと思われる。Po154はその下で出土しており、P4の北西隅埋土上層で出土した土器と接合している。P4中で出土した石皿(S23)は両面に敲打痕がある。この他、埋土内の⑦層で甕(Po157~159)が出土しており、S18、F8は埋土最上層で出土している。また埋土には多数の小石(図版55)が含まれていた。
- 時期** 床面出土の甕などから弥生時代後期後半の竪穴住居跡と考えられる。
S102(挿図29・103、図版12・46)
- 位置** 調査区の東端、K5・K6グリッドにあり、標高86m付近の根柢の稜線上に立地する。南谷19号墳完掘後、周溝壁面で検出された遺構である。すぐ北にはSK08が、南にはSK06とSK10があり、5m離れた南にはS101がある。また、東側でSK12と複合しており、本住居跡の方が新しい。本来はSK08・SK10とも複合していたと思われるが、南谷19号墳の周溝によって遺構の半分以上を掘削されているため不明である。
- 形態** 平面は方形である。推定される規模は床面で長軸4.2m×短軸3.8mで、床面積は16㎡位と思われる。床面全面に貼床がなされていたようである。東側の貼床がしっかりとしているのに比べて、西側の貼床はしまりが悪く、遺存状態も良くない。残存壁高は東壁で最大0.78mを測る。壁溝は幅8~14cm、深さ8~10cmで、断面はU字状を呈す。床面が一部しか残っていないため、全周するか否かは不明である。支柱穴は2個検出したが、本来は4個あったものと思われる。各柱穴の規模はP1(72×47-79)cm、P2(52×35-54)cmである。
- 土層** 埋土のほとんどが19号墳築造時に掘削されているため、壁面付近にしか残っていない。いずれも水土と区別のつきにくい土であった。柱穴内の埋土⑧層は貼床と酷似した土であり、柱穴に柱を立てた後の埋土にも粘質土を詰めたものと思われる。
- 遺物** 埋土内の遺物は極めて少なく、土器片と小石が少量出土した程度である。西側床面と壁溝内から甕の胴部片が、P1から甕(Po162)が出土している。しかしながら、この付近の19号墳の周溝斜面壁を精査中に弥生土器片が出土しており、これらの遺物はS102のものであった可能性が高い。
- 時期** P1出土の甕から判断して、弥生時代後期後半の竪穴住居跡と考えられる。



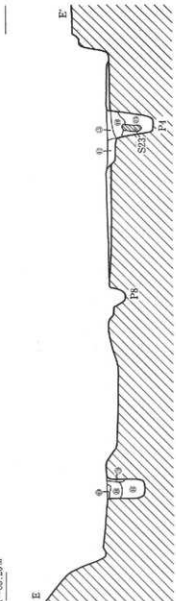
- | | | | |
|-------------|-------------|----------------|-------------|
| ① 焼成赤土 | ⑪ 焼成褐色粘質土 | ⑲ 清洲灰赤土上 | ⑳ 清谷19号埴輪堆土 |
| ② 焼成赤褐色土 | ⑫ 赤土 | ⑳ 焼成赤土(赤化跡を含む) | ㉑ 埴土(赤土) |
| ③ 赤褐色土 | ⑬ 赤褐色土(赤土混) | ㉒ 赤褐色土(粘土層) | ㉒ 赤褐色土(赤土混) |
| ④ 赤褐色土(赤土混) | ⑭ 赤褐色土(赤土混) | ㉓ 赤褐色土(赤土混) | ㉓ 赤褐色土(赤土混) |
| ⑤ 赤褐色土(赤土混) | ⑮ 赤褐色土(赤土混) | ㉔ 赤褐色土(赤土混) | ㉔ 赤褐色土(赤土混) |
| ⑥ 赤褐色土(赤土混) | ⑯ 赤褐色土(赤土混) | ㉕ 赤褐色土(赤土混) | ㉕ 赤褐色土(赤土混) |
| ⑦ 赤褐色土(赤土混) | ⑰ 赤褐色土(赤土混) | ㉖ 赤褐色土(赤土混) | ㉖ 赤褐色土(赤土混) |
| ⑧ 赤褐色土(赤土混) | ⑱ 赤褐色土(赤土混) | ㉗ 赤褐色土(赤土混) | ㉗ 赤褐色土(赤土混) |
| ⑨ 赤褐色土(赤土混) | ⑳ 赤褐色土(赤土混) | ㉘ 赤褐色土(赤土混) | ㉘ 赤褐色土(赤土混) |
| ⑩ 赤褐色土(赤土混) | ㉑ 赤褐色土(赤土混) | ㉙ 赤褐色土(赤土混) | ㉙ 赤褐色土(赤土混) |



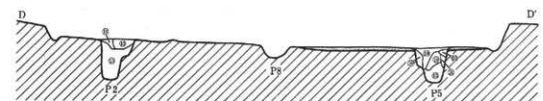
H=85.20m



H=85.20m

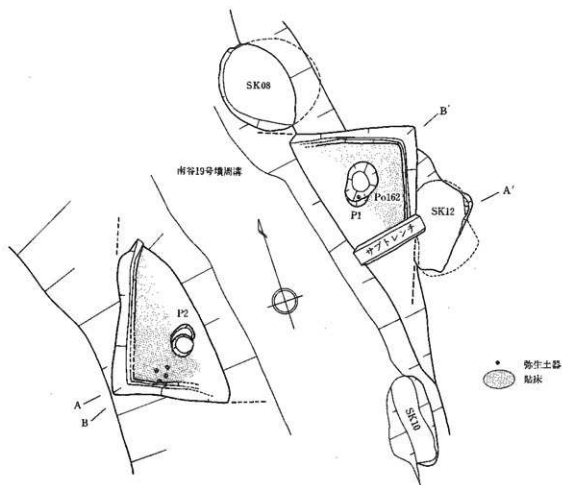


H=85.20m

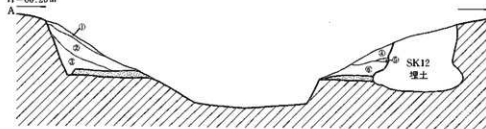


S=1/60, 2m

挿図28 南谷夫婦塚遺跡S101遺構図

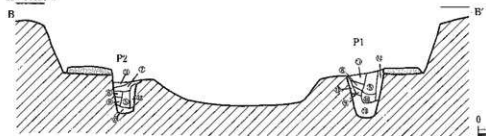


H=86.20m



- ① 淡黒褐色土
- ② 暗赤褐色土
(灰色粘質土を含む)
- ③ 暗赤褐色土
- ④ 淡褐色土
- ⑤ 暗褐色土
- ⑥ 淡褐色土(水土を含む)
- ⑦ 暗赤褐色土
- ⑧ 暗褐色土(水土混)
- ⑨ 暗褐色土(粗粒水土混)
- ⑩ 暗褐色土(炭を多く含む)
- ⑪ 暗褐色土(水土と炭を含む)
- ⑫ 暗赤褐色土(水と灰色粘質土と地山礫を含む)
- ⑬ 灰色粘質土(炭化物を含む)

H=86.20m



0 S=1/60 2m

挿図29 南谷夫婦塚遺跡S102遺構図

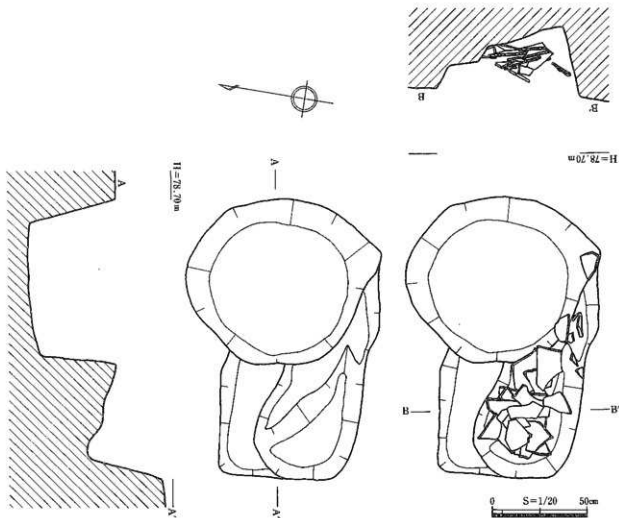
2. 土坑

SK03 (押図30、図版13)

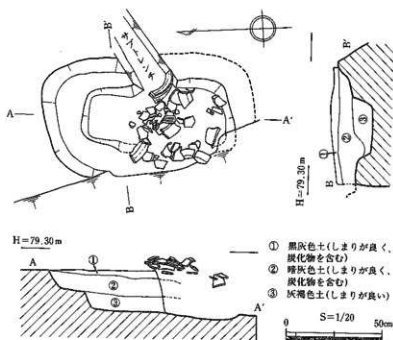
- 位置** 尾根の西斜面、C5グリッドに位置し、南3mに南谷22号墳、北3mに南谷23号墳がある。掘り方の西側と底面の南側が後世の掘り込みによって攪乱を受けているが、残存部分より平面は長方形を呈していたものと思われる。断面は逆台形を呈していたものと推定される。その規模は、上縁部で長軸0.73m以上×短軸0.61m、底面で長軸0.56m以上×短軸0.55mである。深さは最も残りのよいところで、0.38mである。主軸方向はN-79°-Eである。
- 遺物** 南側攪乱部分には、板状の石片が投げ込まれたような状態で出土した。
22号墳もしくは23号墳に伴う墳丘外の埋葬施設とも考えられるが、遺物も全く出土せず、
- 時期** 詳細は不明である。時期は不明である。

SK04 (押図31・104、図版13・47)

- 位置** 調査区の西側、D6グリッド、標高79.5m辺りで尾根の傾斜が変換する辺りに位置する。南谷22号墳の盛土除去後に小さな炭化物を含む灰褐色ローム上面で、炭化物を多く含む黒灰色土と共に土器がまとめて出土したことから遺構の検出に努めた。しかし、灰褐色ローム上面では、遺構の輪郭を明確にすることができず、灰褐色ロームを約10cmほど削ったところで遺構の輪郭を明瞭につかむことができたが、掘り方の南東部については、全貌を明らかにすることはできなかった。また、掘り方の西側は後世の削平によって削り取られているが、平面は隅丸長方形の2段掘りであると考えられる。断面は、1段目・2段目とも逆台形を呈するものと思われる。その規模は、上縁部で長軸推定1.10m×短軸推定0.56m、2段目で長軸0.79m×短軸推定0.36m、底面で長軸0.72m×短軸0.23mである。深さは、最も残りの良いところで、上縁部より0.18mである。主軸方向はN-5°-Wでほぼ南北方向である。
- 埋土** 埋土は、①層に多くの炭化物と土器を含み、②層にも少量ではあるが炭化物を含んでいた。埋土の堆積状況は、東西断面で②層が壁際でU字状に落ち込む他は、ほぼ水平に堆積していた事から、自然に土坑内に土砂が流入したのではなく、人為的に埋められたものであると思われる。
- 遺物** 出土遺物は甕のみでPo163~Po168である。土器は土坑の南側に向かってその出土レベルをわずかに下げる。Po163は肩部以下を欠き、口縁を下に向けて置かれたような状態で出土した。他の土器は、破片が横臥状態で出土した。復元の結果、完形品になったものはなかった。後の南谷22号墳の築造時に、土坑上面が削平されたことも考えられるので、土器の出土状況からは、当時の土器の置かれた状況ははっきりとしないのであるが、埋土の状況及び土器の出土状況から土坑が埋められた後に、土坑上に土器が置かれたものであると思われる。炭化物があったことについては、土坑上で火を用いたためか、他の場所で火を燃やした後に炭化物のみ運んで来たためか判断しかねるが、①②層に焼土等が検出されなかったことを考えると、後者の場合である可能性が高い。
- 時期** 出土した甕から弥生時代後期後半の土坑であると思われる。

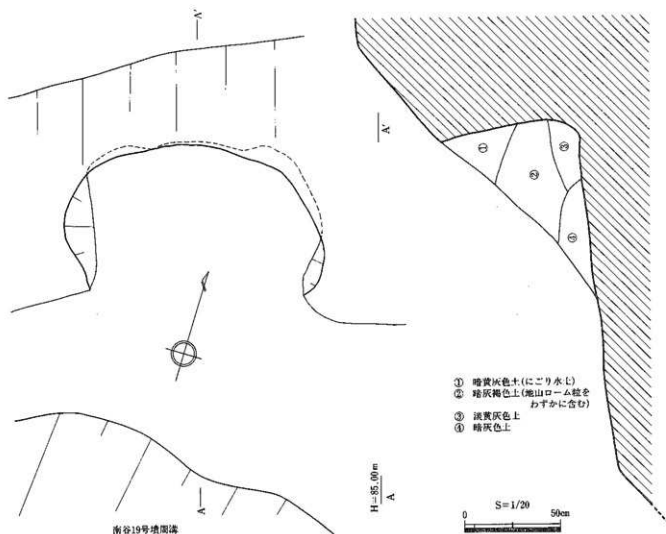


挿図30 南谷夫婦塚遺跡SK03遺構図



挿図31 南谷夫婦塚遺跡SK04遺構図

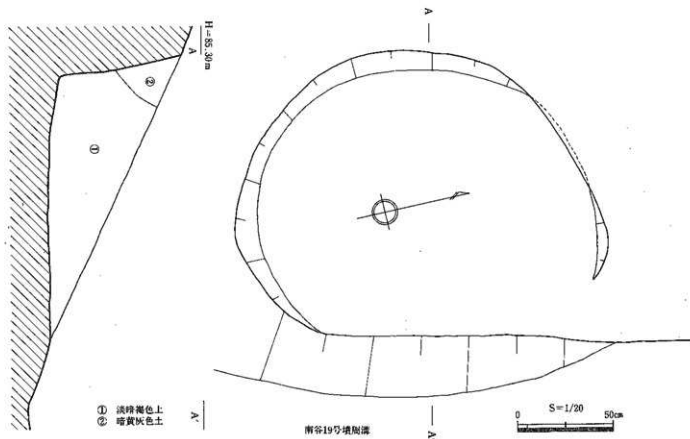
- 位置** 南谷19号墳の南側のくびれ部付近にあり、東10mにSI01、北西5mにSK11がある。南谷19号墳墳丘が後世の開墾によって掘削されると共に、SK05もその大半が掘削されている。また、動物による攪乱も受けており、遺存状態は良くない。
- 形態** 底面は楕円形と推定され、断面は残存する北側から判断すると袋状であったと考えられる。残存する範囲で指定される規模は上縁の長軸が1.4m、短軸が0.8m以上で、底面の長軸は1.2m、短軸は0.9m以上である。深さは北側の最も残りの良い所で0.78mを測るが、19号墳墳丘下の旧表土面から判断すると、1.2m程度の深さがあったものと思われる。
 主軸はN-78°-Eである。
- 埋土** 埋土は水が濁って灰褐色がかかったもので、地山との区別がつきにくく、全体的にしまりが良くない。
- 遺物** 埋土内から甕(Po169・170・171)と蓋(Po172)が、底面から浮いた状態で出土している。その他、長さ3cm、径1cm程の小石(図版55参照)が出土している。
- 時期** 埋土内で出土した甕から判断すると、弥生時代後期後半の貯蔵穴跡と考えられる。



挿図32 南谷夫婦塚遺跡SK05遺構図

SK06 (挿図33、図版14)

- 位置** K6グリッドの中央にあり、南谷19号墳南東区墳丘斜面で検出された貯蔵穴跡である。すぐ南にS I 01、すぐ北にS I 02があり、1m北東にはSK10がある。19号墳築造時に遺構の東側が破壊され、上縁部も墳丘斜面に沿って削りとられているため、遺構の遺存状態は良くない。
- 形態** 上縁部の平面、底面いずれもややいびつながらほぼ円形を呈す。断面は遺構の遺存状態が悪く、壁面が崩落した痕跡もあるので断定はできないが、本来は袋状であったと思われる。残存する規模は上縁で長軸1.93m、短軸1.60m以上、底面で長軸1.78m、短軸1.45m以上である。深さは最も残りの良い北西側で0.66mを測るが、19号墳墳丘下の旧表土面から推測すると本来は1.5m以上の深さがあったと思われる。
- 埋土** 埋土は水土が濁ったような土で、地山との区別が付きにくいものである。②層は壁面水土が崩落したものと思われる。
- 遺物** 埋土内より土器片が出土しているが図化できるものはなかった。他に様々な形の小石が多数出土している。
- 時期** 時期を特定できる遺物は出土していないが、埋土がSK08のそれと酷似していることから弥生時代の貯蔵穴跡と思われる。



挿図33 南谷夫婦塚遺跡SK06遺構図

S K 07 (挿図34、図版14)

- 位置 K 6 杭から南に2.5mのところであり、南西方向に緩やかに下る斜面に立地する。S I 01のすぐ南東に位置し、南谷19号墳の南側周溝の斜面で検出した土坑である。19号墳築造時にはほとんど破壊されており、残存するのは東側の底面付近だけである。
- 形態 平面、規模ともに不明である。深さは最も残りの良い南東隅で0.48mを測る。
- 埋土 埋土は水色が褐灰色に濁った土であり、他の土坑と同様に地山との区別が付きにくい土である。
- 遺物 全く出土していない。
- 時期 不明である。

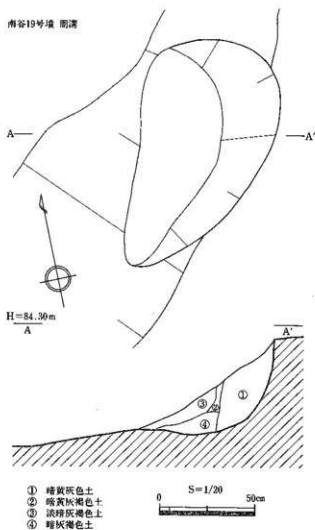
S K 08 (挿図35、図版15)

- 位置 調査区最東端、K 4 グリッドのL 5 杭西側、標高85m付近で尾根の中央に位置し、南側にS I 02がある。南谷19号墳後円部の北東区周溝検出中に、周溝東壁の赤褐色ローム層で茶褐色土の楕円形の落ち込みを検出した。南谷19号墳調査終了後に、南北方向に軸を設定し西側から半載して掘り下げ、土層実測後に南東区も掘り下げて東西方向の堆積状況を確認した。
- 形態 土坑の西側が南谷19号墳の周溝により削平を受けていたために上縁部の残存状態が悪いが完全に検出できた。底面の平面は円形であった。断面は上縁部から最大で45cm掘り込みの壁面が内湾することから袋状であったと考えられる。

- 規模は検出した上縁部の平面で長径1.53m×短径1.03m、底面で長径1.50m×短径1.30mであり、深さは0.95mであった。
- 土層 SK08とSK09が重複している状態が土層で観察できた。新旧関係はSK08遺構埋土の④～⑦層をSK09が掘り込んでいることからSK08の方が時代が遡ると考えられる。⑥層は壁面の崩れであり、①層は壁面が迫り出したものであり、他は自然堆積であろうが、全面に堆積している④層は中央が盛り上がる様相を呈している。全体に柔らかい埋土であった。

- 遺物 ほとんど遺物を包含しなかったが、弥生時代の腰胴部の土器片が出ている。また、埋土中に長径4cm程度の楕円形の小石が包含されていた。

- 時期 時期は出土土器から弥生時代後期後半頃と考える。

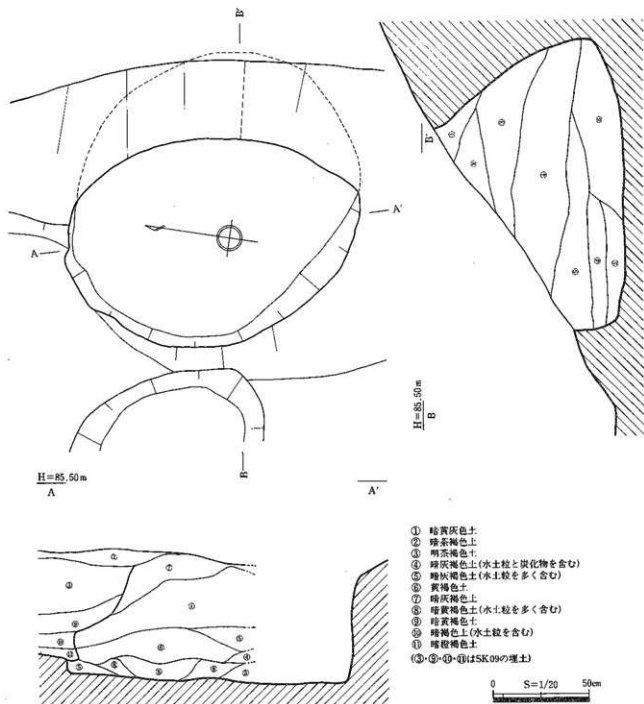


挿図34 南谷19号墳遺跡SK07遺構図

SK09 (挿図37、図版15)

位置 調査区最東端北東より、K4グリッド、標高85m付近で尾根の中央に位置する。南谷19号墳後円部の北東区検出中に周溝東壁の赤褐色ローム層で茶褐色土の規模の大きい楕円形の落ち込みを検出した。南谷19号墳調査終了後に、東西方向に軸を設定して北側から半截して掘り下げた。SK08の北側に隣接している。

形態 土坑の西側が周溝の壁面にかかり、削平を受けていたために、上縁部、底面ともに残存状態が悪かった。墳丘側の周溝の肩部への広がりを考え精査を行ったが、検出できなかった。従って、平面は長楕円形と考えられる。また、断面は上縁部から底面の間がわずかに内湾し、



H=85.50m
A

H=85.50m
B

- ① 暗黄灰色土
- ② 暗茶褐色土
- ③ 暗茶褐色土
- ④ 暗灰褐色土(水土粒と炭化物を含む)
- ⑤ 暗灰褐色土(水土粒を多く含む)
- ⑥ 黄褐色土
- ⑦ 暗灰褐色土
- ⑧ 暗黄褐色土(水土粒を多く含む)
- ⑨ 暗黄褐色土
- ⑩ 暗褐色土(水土粒を含む)
- ⑪ 暗橙褐色土
- (③・④・⑤)はSK09の埋土

0 S=1/20 50cm

挿図35 南谷六塚塚遺跡SK08遺構図

袋状であると考えられる。さらに、底面の中央部やや東側と思われるところでピットを検出した。

規模は残存部分で南北方向の径が上縁部で4.5m、深さが0.95mであった。ピットの規模は長径40cm×短径30cm、深さ10cmであった。

土層 SK08よりSK09の方が新しかった。①～⑦層までは締りが悪く、⑥⑦層には炭化物が含まれていた。よく締まった⑧層上面を底面と考え検出したところ、底面と思われていた検出面が平坦にならず、盛り上がる様相を呈したので、サブレンチを入れて⑧層以下の層位を確認した。その結果、土坑の立ち上がりにかかる①層が⑧層の下に潜り込んでいく状況が確認できたので、さらに、⑧～⑩層を地山の崩れと判断して掘り下げた。その下からピットを検出した。

遺物 ほとんど遺物を包含していなかったが、⑦層付近の埋土から弥生時代の波状紋の施された甕胴部の土器片が出土した。また、19号墳の周溝掘り下げ中に、土坑の検出面付近で弥生時代後期後半の甕の口縁(Po187)が出土した。

時期 時期はPo187から弥生時代後期後半と考える。

SK10 (挿図36、図版16)

位置 調査区最東端南東より、K5グリッド、標高85m付近、尾根の中央辺りに位置する。北側にS102がある。南谷19号墳後円部の北西区周溝検出中に、周溝東壁の赤褐色ローム層で、茶褐色土の楕円形の落ち込みを検出した。南谷19号墳調査終了後に軸を設定して南側から半截して掘り下げた。

形態 土坑の西側が周溝の壁面にかかり、かなりの削平を受けているため、上縁部、底面ともに残存状態が非常に悪い。平面、断面ともに形態は不明である。

規模は残存部分で南北方向の径が1.43m、深さが0.39mであった。

土層 遺構埋土は茶褐色土1層であった。

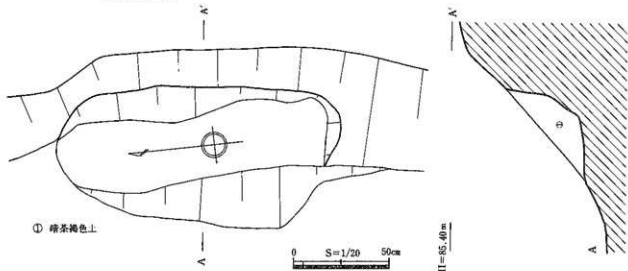
遺物 遺物は出土しなかった。

時期 時期は不明である。

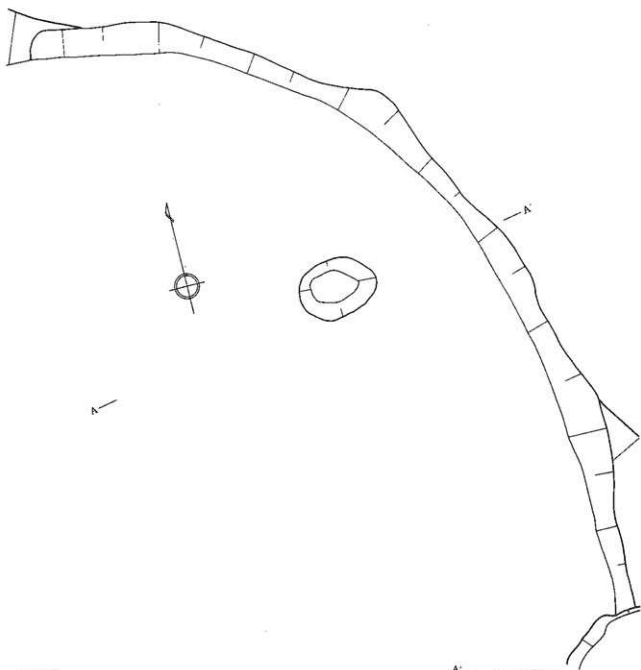
SK11 (挿図39、図版16)

位置 調査区の東側、I6グリッド、標高84m辺りに位置する。

形態 南谷19号墳盛土下埋葬施設完掘時に掘り方の南西側で暗灰茶褐色粘質土の長楕円形のプランを検出した。

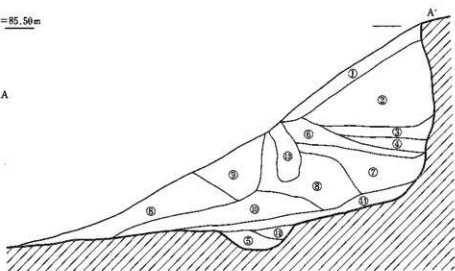


挿図36 南谷夫婦塚遺跡SK10遺構図



H=85.50m

A



- ① 暗茶褐色土
- ② 暗灰褐色土
- ③ 暗褐色土
- ④ 暗黄褐色土
- ⑤ 淡黄褐色土
- ⑥ 暗褐色土(炭化物を含む)
- ⑦ 暗灰褐色土(しまりが悪く、炭化物を含む)
- ⑧ 明灰褐色粘質土
- ⑨ 暗灰褐色粘質土
- ⑩ 暗灰褐色粘質土(水土を含む)
- ⑪ 暗黄灰色土(やや粘性をもつ)
- ⑫ 黄褐色土
- ⑬ 木の根

挿図37 南谷夫婦塚遺跡SK09遺構図

SK11は盛土下埋葬施設によって掘り方の北東側を切られる。底面は長楕円形である。断面は袋状を呈する。その規模は、上縁部で長軸1.85m×短軸1.00m以上、底面で長軸2.05m×短軸0.96mである。深さは最も残りの良い南東辺で0.95mである。

埋土 埋土は12層に分層できた。12層の内①②⑨層を除いた9層はよくしまり、粘性をもっていた。埋土の堆積状況も水平であったことから、自然に流入した土とは考えにくく、人為的に埋められたものであると考えられる。⑩層は炭化物を含み、叩きしめられたようによくしまり、堅穴住居跡の貼床を思わせた。

遺物 埋土中で径約3cmの自然石が出土したほかはまったく遺物は出土しなかった。

時期 時期は不明である。

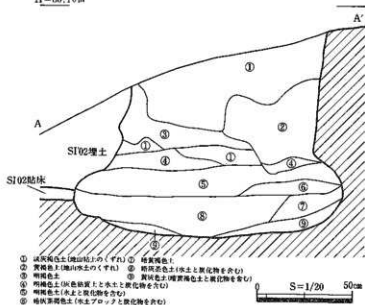
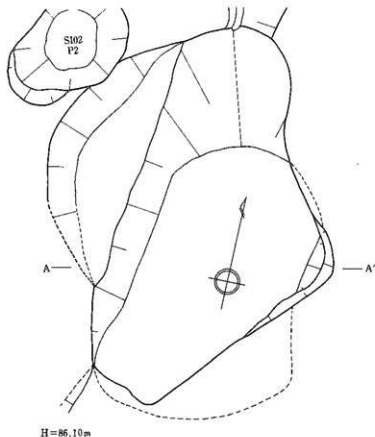
SK12 (挿図38、図版16)

位置 調査区東端にあって、L5杭から南に1.5mのところにある。調査区内で最も標高の高い尾根の稜線上に立地する貯蔵穴跡である。北西にはSK08、南西にはSK10がある。土坑の西側がS102(弥生時代後期後半)と重複しており、本土坑の方が古い。西側の掘り方はS102の貼床除去後に検出した。また南側の一部が動物による攪乱を受けている。

形態 平面形は不明であるが、底面は楕円形と思われる。断面は、壁面が崩れて乱れているものの、袋状であったと思われる。

規模は上縁については不明であるが、底面は長軸1.45m、短軸0.85mである。深さは最も残りの良い東側で1.05mを測る。底面の主軸はN-7°-Wを示す。

埋土 上層の埋土①層は粘性を失った赤褐色ロームで、地山との識別が困難であったため、上面での検出はできなかった。④層以下



- ① 赤褐色ローム(地山に似る)のすれ
- ② 暗褐色土
- ③ 暗褐色土(赤褐色土と炭化物を含む)
- ④ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)
- ⑤ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)
- ⑥ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)
- ⑦ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)
- ⑧ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)
- ⑨ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)
- ⑩ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)
- ⑪ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)
- ⑫ 暗褐色土(赤褐色土と赤褐色土と炭化物を含む)

挿図38 南谷夫婦塚遺跡SK12遺構図

は炭化物を含む層であり、壁面付近には壁の崩落と思われる層がある。

遺物 土器は全く出土していないが、他の土坑と同様に小石（図版55参照）が出土している。
 時期 S102より古い遺構なので、弥生時代後期後半か、もしくはそれ以前の貯蔵穴跡と考える。

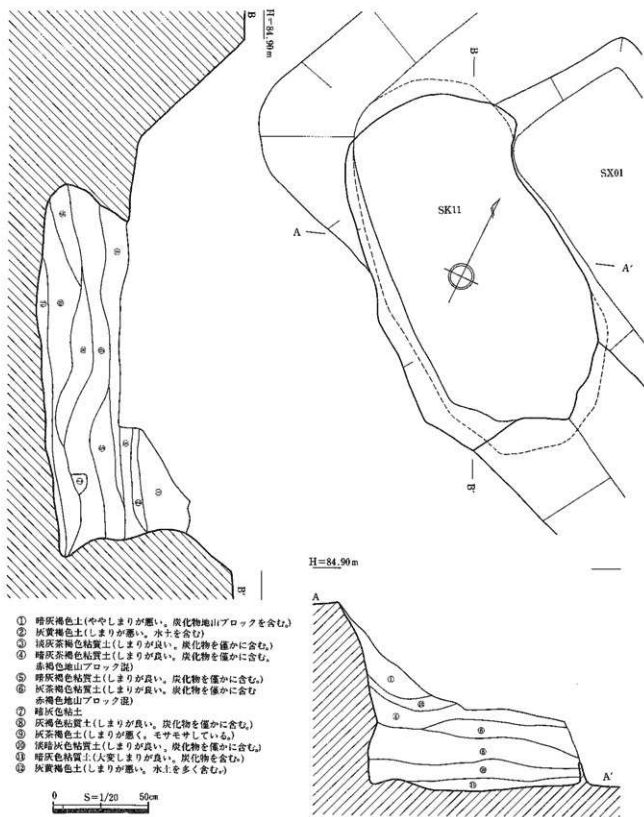


図39 南谷夫塚遺跡SK11遺構図

3. ビット群

ビット群1 (揮図40、図版17)

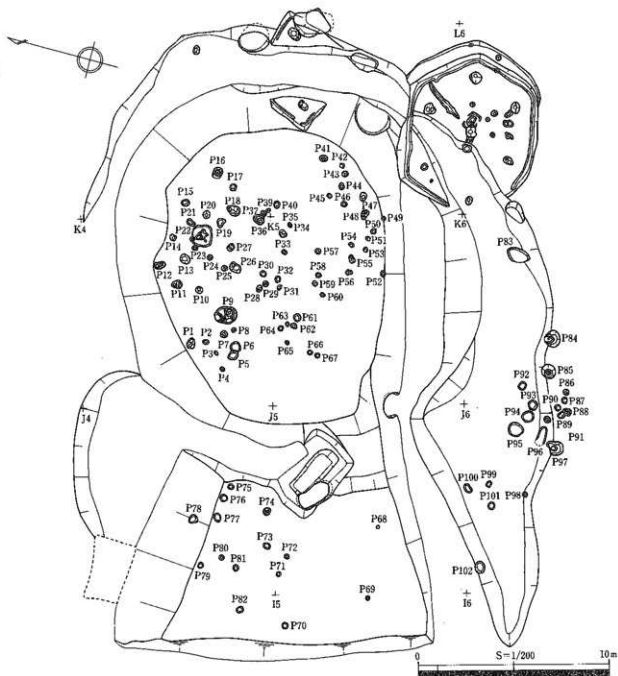
位置 19号墳盛土及び黒色土除去後、墳丘下及び墳丘の東側でビット群を検出した。検出されたビットの総数は101個である。埋土は黒褐色土ないしは暗褐色土であった。ビットの配列に**遺物** 規則性は見いだされなかった。後円部墳丘下P9、P12、P19、P22、P43、P45、P49、P55で弥生土器片が出土したが、図化できなかった。墳丘東側、P86で甕の口縁部が出土した(Po173)。Po173からこのビット群は弥生時代後期後半の時期であると思われる。各ビットの詳細については、下表を参照されたい。

ビット群2 (揮図41、図版17)

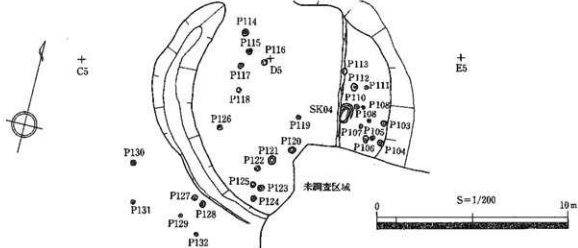
22号墳の墳丘下、及びその西側斜面C6グリッドで30個のビットを検出した。その配列に規則性は見られなかった。遺物は出土しなかった。22号墳の墳丘下で検出されたことから、ビット群1と同時期のものであると思われる。各ビットの詳細については下表を参照されたい。

ビット番号	規格 (cm) (長径×短径-深さ)	備考	ビット番号	規格 (cm) (長径×短径-深さ)	備考	ビット番号	規格 (cm) (長径×短径-深さ)	備考	ビット番号	規格 (cm) (長径×短径-深さ)	備考
1	60×42-26.1		34	44×33-38.5		67	25×24-23.4		100	48×27-10.4	
2	30×26-30.7		35	21×19-10.0		68	14×14-5.3		101	36×35-7.5	
3	20×18-10.2		36	58×44-38.2		69	22×20-45.8		102	58×44-24.1	
4	22×20-10.0		37	28×22-24.8		70	31×27-9.1		103	27×24-18.4	
5	55×45-1.6		38	—	木の梗	71	25×23-20.3		104	32×25-32.0	
6	56×48-4.6		39	24×20-11.4		72	24×22-17.4		105	23×19-12.4	
7	34×30-21.1		40	39×29-27.8		73	36×29-6.8		106	38×27-29.0	
8	38×23-19.7		41	42×30-40.5		74	39×35-16.5		107	21×16-24.7	
9	115×81-48.5		42	23×20-16.7		75	28×28-70.7		108	17×15-7.2	
10	35×30-23.4		43	39×25-29.1		76	41×37-5.6		109	13×13-8.3	
11	53×42-22.9		44	33×30-30.0		77	46×37-6.4		110	28×20-25.5	
12	56×32-41.7		45	26×18-23.3		78	48×42-29.9		111	16×15-5.9	
13	53×44-23.1		46	33×28-43.1		79	25×22-18.4		112	38×32-26.3	
14	34×30-34.0		47	43×32-39.0		80	24×22-21.7		113	29×21-20.0	
15	36×28-21.0		48	53×30-17.9		81	29×28-2.4		114	33×32-28.1	
16	55×50-35.1		49	23×17-26.3		82	34×30-13.2		115	29×24-29.4	
17	33×28-12.8		50	31×27-24.4		83	125×73-12.6		116	28×28-15.6	
18	70×53-38.5		51	25×20-14.3		84	77×77-42.3		117	27×24-22.0	
19	47×37-22.4		52	30×20-20.5		85	76×70-33.0		118	23×22-28.3	
20	40×35-38.3		53	27×25-13.7		86	29×25-23.5		119	19×17-13.3	
21	49×37-16.4		54	27×22-16.0		87	32×27-16.6		120	35×31-28.5	
22	124×100-27.8		55	44×24-27.2		88	46×32-46.8		121	52×49-16.5	
23	30×22-25.5		56	36×29-11.2		89	45×30-25.8		122	22×22-11.8	
24	25×23-5.8		57	27×21-20.4		90	34×30-10.9		123	31×27-35.0	
25	30×23-6.1		58	28×20-20.3		91	34×28-30.6		124	28×25-38.7	
26	64×43-31.9		59	24×22-24.5		92	46×36-3.8		125	26×24-25.6	
27	41×32-?		60	26×22-20.2		93	52×40-7.8		126	24×23-25.0	
28	33×30-23.3		61	38×33-12.1		94	59×56-13.0		127	28×27-38.3	
29	30×25-18.5		62	31×28-42.5		95	80×69-10.3		128	34×26-33.5	
30	32×31-13.9		63	25×19-11.7		96	40×? - 8.2		129	19×18-10.8	
31	30×24-18.7		64	27×25-18.3		97	95×75-30.9		130	25×25-15.1	
32	32×27-30.0		65	20×20-15.4		98	23×23-30.0		131	20×18-12.9	
33	23×21-25.8		66	25×24-8.7		99	35×25-5.1		132	17×15-18.5	

揮図表 5 南谷夫塚遺跡ビット群1・2一覧表



挿図40 南谷夫婦塚遺跡ピット群1



挿図41 南谷夫婦塚遺跡ピット群2

第3節 南谷古墳群の調査

1. 南谷19号墳(挿図42～52・105～107・113・114、図版18～24・47～49・53・54)

位 置 調査区の最も東側、標高85.5mから86.9mの地点に立地する。19号墳の東側約30mには調査区外に径18mを測る円墳と思われる南谷13号墳が、西には径14.5mを測る円墳である20号墳が接している。同丘陵平坦面の南北幅は約27mで、尾根幅一杯に築造されている。

墳 丘 調査前の墳丘の規模は、全長29m、後円部径14.7m、前方部端部幅16.5m、高さは墳丘北側からの比高で2～2.9mを測る。現況は、後円部頂部が耕作により大きく削平されており、前方部にむかってわずかに傾斜しているがほぼ平坦になっていた。また、墳丘南側裾部及び前方部前面も耕作により大きくカットされ、墳裾がほぼ一直線になっていた。墳丘北側は、墳丘頂部を削平したときの盛土の一部が、くびれ部を中心にかき出されており、墳裾ラインは緩やかに内湾する程度であったが、19号墳は南谷古墳群中唯一の前方後円墳であることが判明した。

表土・耕作土及び墳丘くびれ部北側のかき出し土を除去したところ、墳丘北側は比較的遺存状態がよく、墳裾ラインがきれいに残っていた。墳丘南側及び前方部前面は、カットされてはいたが墳裾の遺存状態はよい。墳丘規模は、全長32m、後円部南北径18.8m、東西径19.2m、前方部長13.2m、端部幅20.5mを測る。くびれ部は大きく入り込み、幅12.2mを測る。後円部の高さは最も高いところで、南側周溝底から2.9m、前方部が西側周溝底から2.5mを測る。後円部頂部は削平されてはいるものの墳裾はよく残り、ほぼ円形が呈すが、北側に比べて南側のラインがやや大きく外側に張り出しており、墳丘南側を大きく見せようとした意識が認められる。前方部は前面が後円部径より109%大きく開き、また、長さは後円部径より短くなる。墳丘斜面には設築はされず、また、墳輪・葺石等の外表施設も認められない。墳丘から見ると後期古墳の様相を呈す。

周 溝 周溝は、後円部東側の残りがよく、幅1.5～3.3m、深さは東側外縁部で1.3mを測り、断面逆台形状を呈す。南側は、耕作による削平が激しく、底部のみが遺存している。幅は最も広い所で6.6m、深さ0.4mを測り、断面じ字状を呈す。前方部西側は、幅1.5～3.4m、深さ0.7mを測り、断面逆台形状を呈す。この部分で20号墳の周溝と重なるように見られるが、北側の幅を見ると南側に比べて狭く、また、わずかに20号墳側に曲がる状況が見られることから、19号墳前方部西側の周溝は、20号墳に制約されたものと思われる。北側周溝は、梨耕作による攪乱が著しく、部分的にしか残っていない。幅は5.5m、深さは0.3mを測り、断面はじ字状を呈す。北側は地形制約のためか、南側に比べて幅が狭くなっている。周溝は遺存状態のよい東側・南側から判断すると、楕型の形態を呈すが、前方部両端でブリッジ状の掘り残しがあり、全周はしていない。墳丘同様南側の周溝が北側に比べて大きく、南を意識した様子が窺われる。

盛 土 墳丘は、地山の削り出しと盛土によって形成されている。地山は、東側から西側に向かって緩やかに傾斜しているがほぼ平坦で、墳丘基盤は、周溝底からの比高差が後円部で1.7～2.5m、前方部で1.7～1.8mを測る高さまで削り出している。盛土に先立っての地山整形はほとんどされておらず、旧表土(㊸層)が一面に残っている。しかし、後円部の中央部では、旧表土を長さ4.0m、幅3.2mの不整な長方形に剥ぎ取っているのが認められる。

盛土は、最も厚いところで後円部、前方部とも80cm残っている。後円部の盛土の状況を見ると、墳丘斜面側を粘性の強い土(㊸・㊹・㊺・㊻・㊼層)で高くなるように盛っているが、

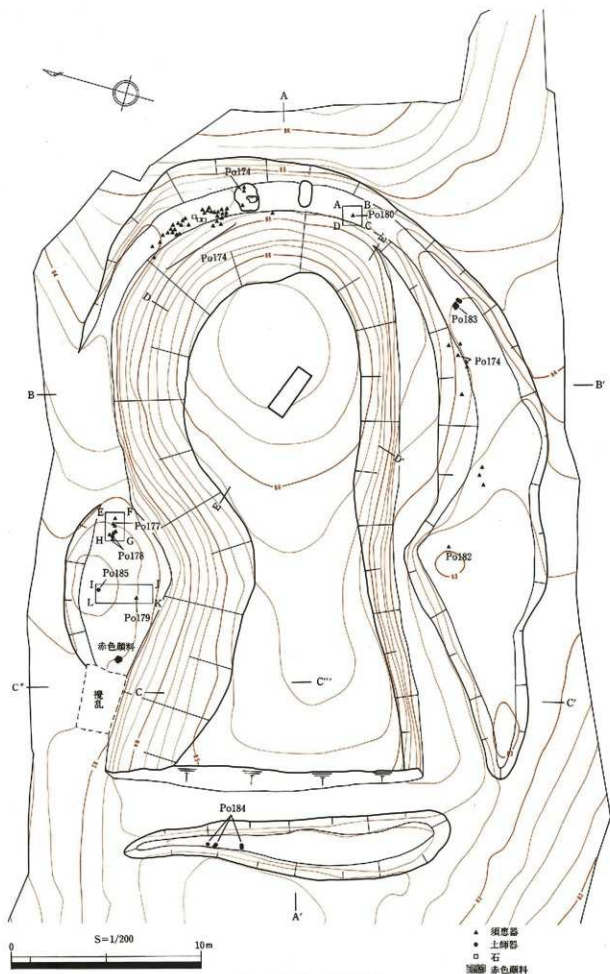
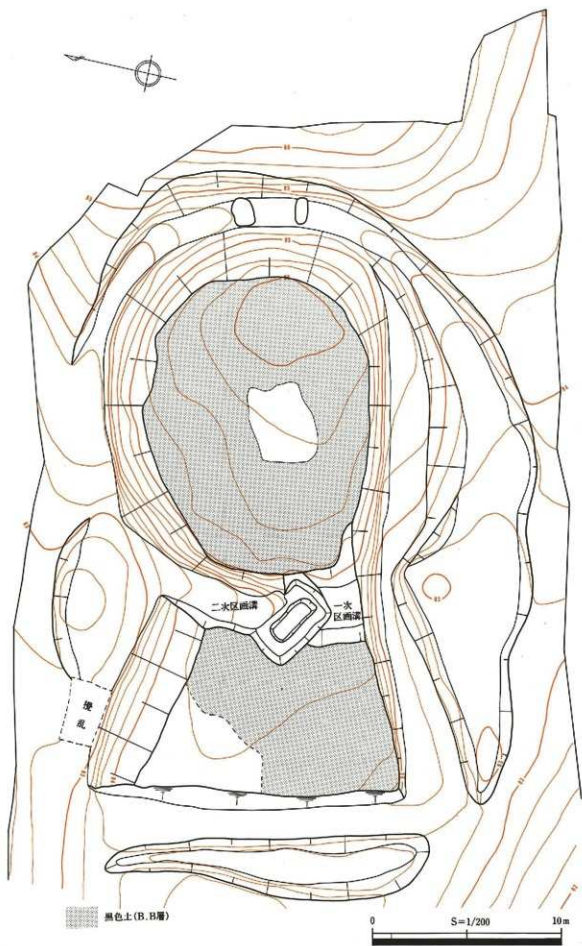
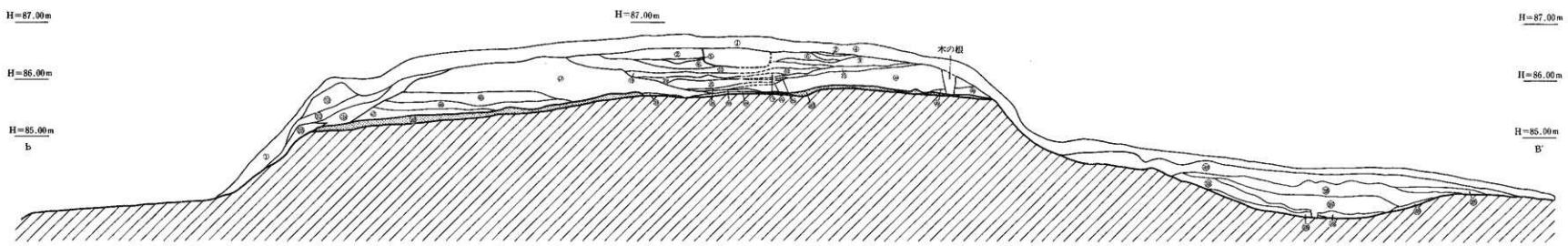
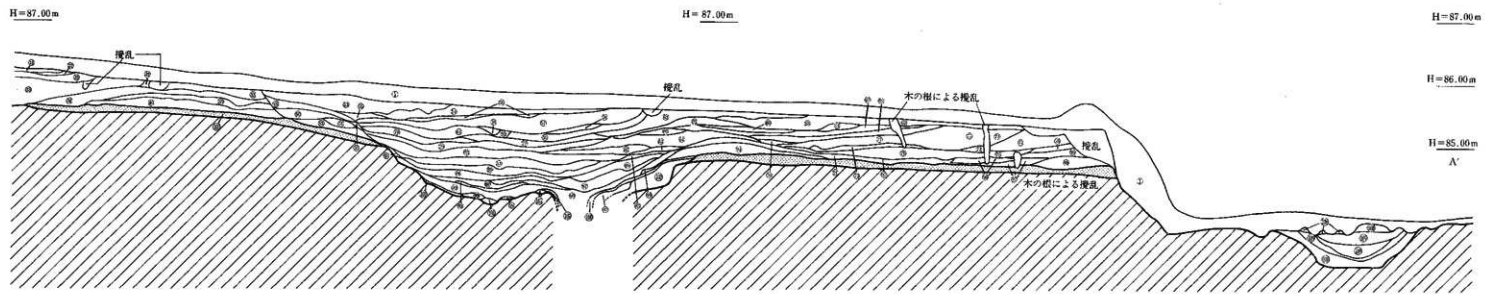
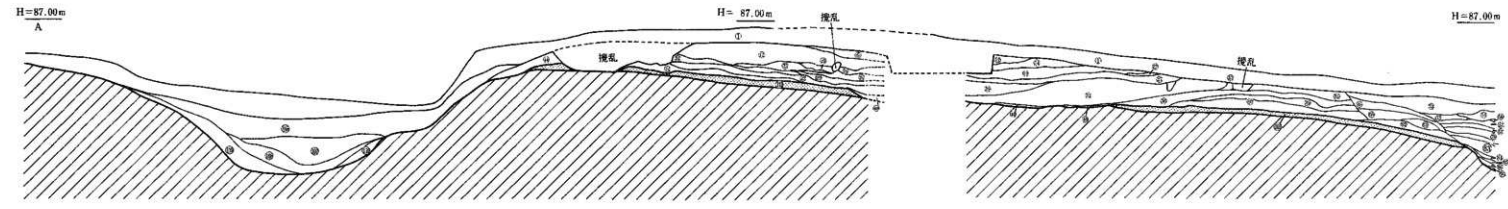


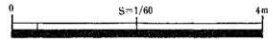
插图42 南谷19号墳丘图



挿図43 南谷19号墳盛土除去後平面図

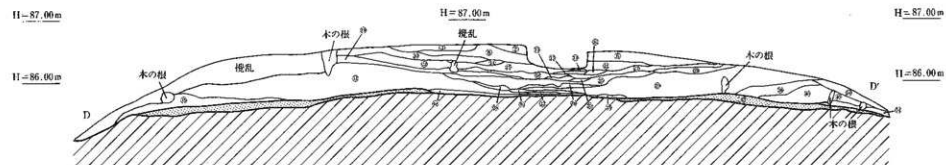
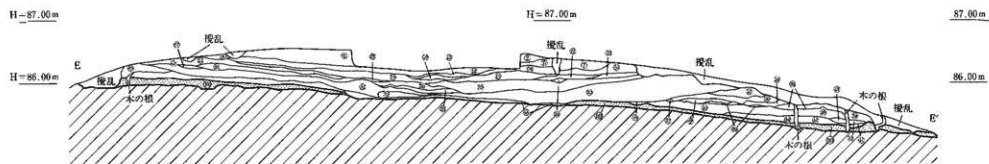
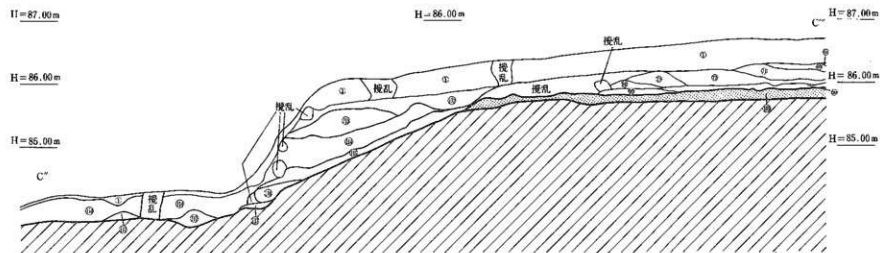
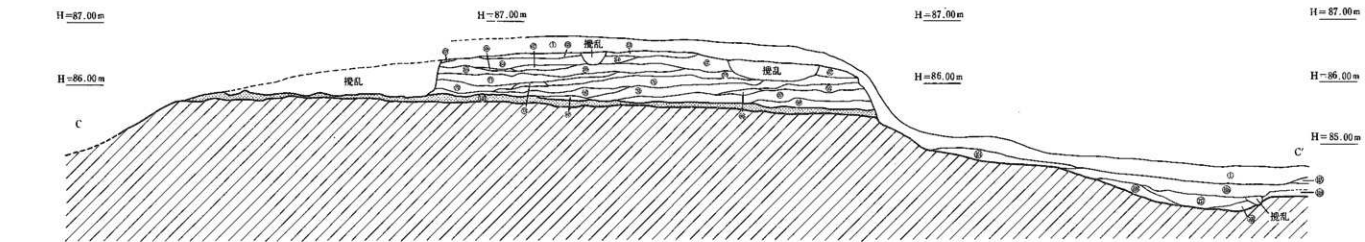


B: 埋孔 (褐色土層)

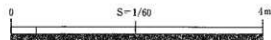


採図44 南谷19号墳土層断面図(1)

- ① 灰土・雑草土
- ② 暗赤褐色土
- ③ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ④ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑤ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑥ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑦ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑧ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑨ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑩ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑪ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑫ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑬ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑭ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑮ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑯ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑰ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑱ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑲ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ⑳ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉑ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉒ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉓ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉔ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉕ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉖ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉗ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉘ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉙ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉚ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉛ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉜ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉝ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉞ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㉟ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊱ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊲ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊳ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊴ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊵ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊶ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊷ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊸ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊹ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊺ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊻ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊼ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊽ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊾ 暗赤褐色土 (しまりが無い)
- ㊿ 暗赤褐色土 (しまりが無い)



B. B層 (褐色土層)

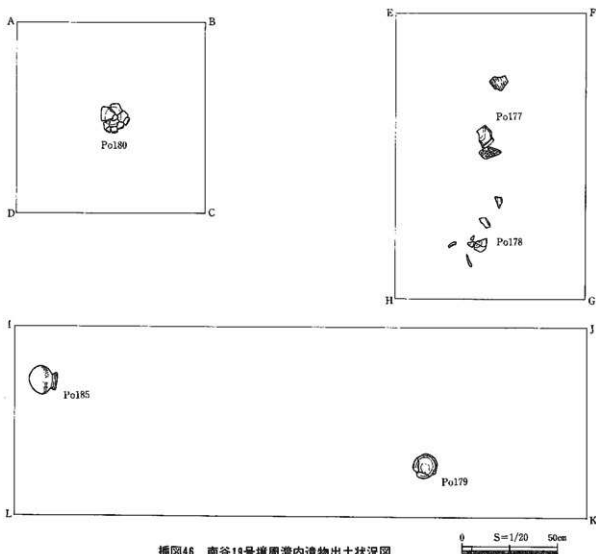


挿図45 南谷18号墳土層断面図(2)

地山は南側から北側に傾斜し、北側が南側と比べて若干低くなっており、まずそのレベル差をおぎなうために褐色土(㊸・㊹層)と粘質土(㊺層)を交互に盛っている。東側は地山が高く、粘性の強い土も他の箇所と比べて薄く盛られており、盛土は東側のレベルに合わせて行われていると推定される。墳丘斜面部は高く・厚く盛られるのに対し、墳丘中心部は盛土が薄く、中央にむかって皿状にへこんだ状態を示す。さらにこの部分を、赤褐色系の土と黒褐色系の土を使って交互に盛っている状況が見られる。主体部は後円部がある程度盛土された後に掘り込まれている。

前方部の盛土の状況を見ると、墳丘斜面側を粘性の強い土(㊻・㊼・㊽層)を使って高く盛り上げている。また、後述する区画溝の西側上縁部も、暗黄褐色土(㊾層)を土手状に高く盛り上げるなど、後円部とほぼ同様の状況が見られる。㊿層は、盛土下埋葬施設がある程度埋め戻された時点で盛られている状況が見られる。A-A'ラインを見ると、後円部は前方部に先立って盛土が行われている状況を示す。

区画溝 盛土を除去したところ、旧表土面が検出された。この旧表土は、くびれ部のところで後円部の円弧にそって幅3.5~4.5mの範囲で、途切れていることが確認された。この範囲で縦断するベルトを設定して掘り下げたところ、北側に長さ5.6m、上端幅3.5m、下端幅1.7~

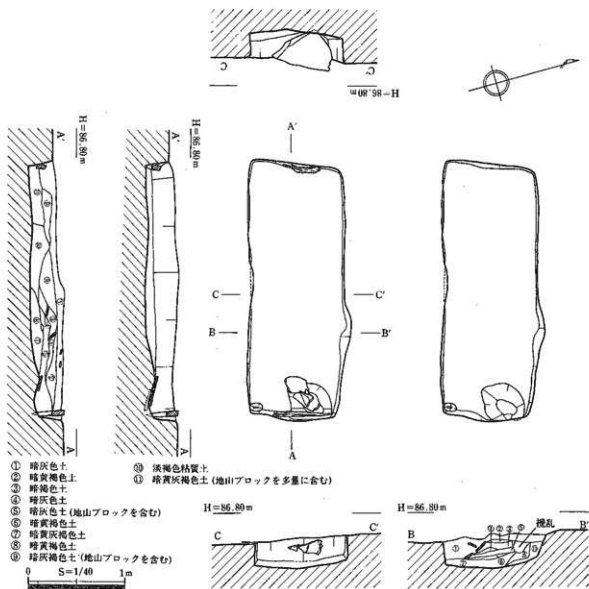


挿図46 南谷19号墳周溝内遺物出土状況図

2.0m、深さ0.9~1.4mの規模をもつ溝が現われた。この溝は、後円部の円弧にそって湾曲している。底面は平坦であるが、南に向かうにつれて約5°の傾斜をもって次第に高くなり、北側はくびれ部に続く。断面は逆台形状を呈すが、西側の壁は上端部よりやや掘り込まれオーバーハングしている。

この溝の南には後述するが一段高い地点に埋葬施設が掘り込まれており、それを挟んで南側は北側ほど深く掘られておらず、旧表土を深さ33cmに、北側同様後円部の円弧にそって湾曲させながら剥き取っている。

この溝の土層を見ると、北側くびれ部の底部には大型の黒褐色土ブロックを含む層(⑥層)と粘質土層(⑦層)が盛り上がるように積まれる。さらに、この層が盛られたために生じたレベル差を埋めるために、後述する盛土下埋葬施設の北側テラスの高さまでの皿状になった部分を、黒褐色系の土(⑤・⑥層)と黄褐色系の土(③・⑦層)を使って交互に積んで水平にしている。溝埋土(⑧・⑨層)が埋められた時点では、すでに前方部が⑨層まで盛土されていることから、溝の埋め戻しは、前方部盛土と平行して行われたものと考えられ、後円部・



挿図47 南谷19号墳主体部遺構図

前方部旧表土のレベルに合う地点まで、すなわち㉓～㉕層が埋め戻されている。なお、㉔(=㉕層) - ㉔層間で分層することができたが、両者には大きな違いを認めることができず、㉔・㉔層とも一連の区画溝の埋め土と考えられる。その後は、前方部側・くびれ部側と交互に盛土されている状況が見られる。

この溝は、墳丘計画・築造に伴う区画溝であると考えられ、南側は、北側ほど深くは掘られていないが、明らかに区画溝の意識はあると思われる。

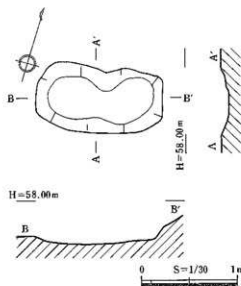
この溝の底面直上には、地山(DKP・大山倉吉軽石)が風化したと思われる層(㉖層)が一面にあり、短期間と思われるが一定期間放置されたものと考えられる。

区画溝埋め土(㉔=㉕層)中において、溝幅内にはほぼ同じレベルで人為的に破砕されたと思われる板状安山岩の破片が散乱していた。これらの石材がこの場所で破砕されて埋められたものか、別の場所で破砕されたものがこの場所に埋められたものかは判断できないが、一部に接合関係が認められた。

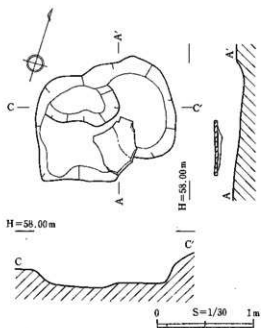
主体部

後円部のほぼ中央で、表土及び耕作土を除去した時点で、一枚の石材が立った状態で検出された。掘り下げたところ、攪乱土とともに板状安山岩の破片が散乱していた。墓壇の規模は長さ2.7m、幅1.0m、残存深さ0.4mを測り、この墓壇内に箱式石棺が納められたと考えられる。主軸方向はN-70° - Wとほぼ東西に振る。頭位方向は不明である。

石棺は、小口板の一部のみが残っており、遺存状況を見ると墓壇内に納められた後、暗褐色土によ



挿図48 南谷19号墳周溝内土壇1



挿図49 南谷19号墳周溝内土壇2

て裏込めされる。墓壇底面もかなり攪乱されているが、底面には板石が敷かれていたと思われる。墓壇東側の底面には小口板を建てた掘り方がわずかに認められた。側板を建てた掘り方は確認できなかった。攪乱されて破砕された石棺材のなかには、赤色塗彩されたものが一部見られた。

墓壇は盛土が行われた後に削り込まれたものと考えられ、底面の掘り方は⑫層まで達している。

盛土下 埋葬施設

くびれ部のほぼ中央部、区画溝の南側に、N-74° -Wと後円部主体部とはほぼ同じ主軸方向になる埋葬施設が地山を掘り込んでつくられている。この埋葬施設は平面が隅丸方形を呈し、墓壇を二段に掘り込んでいる。墓壇上面は、長さ4.5m、幅2.2m、深さ0.5~0.6mに掘り、幅0.2~0.5mのテラスを設けた後に、さらに長さ2.8m、幅1.2m、深さ0.4mの二段目の墓壇を掘り込んでいる。墓壇底面中央には、主軸に平行して長さ2.2m、幅0.3m、深さ13cmの溝を掘り込んでいる。

土層の状況を見るとd-d'ラインで、一段目テラスから墓壇内にむかってV字状の幅5~8cmの黒色土(⑩層)の落ち込みが見られる。これは木蓋状のものが腐朽して落ち込んだものと思われる。二段目墓壇内には、木蓋が腐朽するに従い流入していったと思われる砂質層(⑪層)が血状に堆積している。また、溝内には朱と思われる赤色顔料の塊がわずかに残っていた。墓壇底部には、木棺等が埋置された痕跡は認められないが、墓壇底面の溝内には、黒褐色土がみられたことより、墓壇底部には板状のものが置かれていた可能性がある。側板は無かったものと思われ、木蓋を一段目墓壇テラスに置いた木蓋土塊と考えられる。木蓋を置いた後は⑫・⑬層でテラス部を埋めているが、区画溝埋め土(⑭層)以前には⑬層が入り込んでいることから、盛土下埋葬施設の埋め戻しは区画溝埋め戻しに先立って行われたと考えられる。その後は、区画溝埋め戻し・墳丘盛土工程に続くものと考えられる。

周溝内 土塊

後円部東側周溝底部で、2基の土塊を検出した。いずれも底部のみ遺存していた。南側のものは、長径0.65m、短径0.4m、深さ6cmを測るもので、平面は楕円形を呈す。北側のものは、長径0.75m、短径0.6m、深さ10cmを測り、不整形な平面プランを呈す。

いずれの土塊内からも遺物は検出されなかったが、東伯耆で多数発見されている周溝内土塊と考えられる。

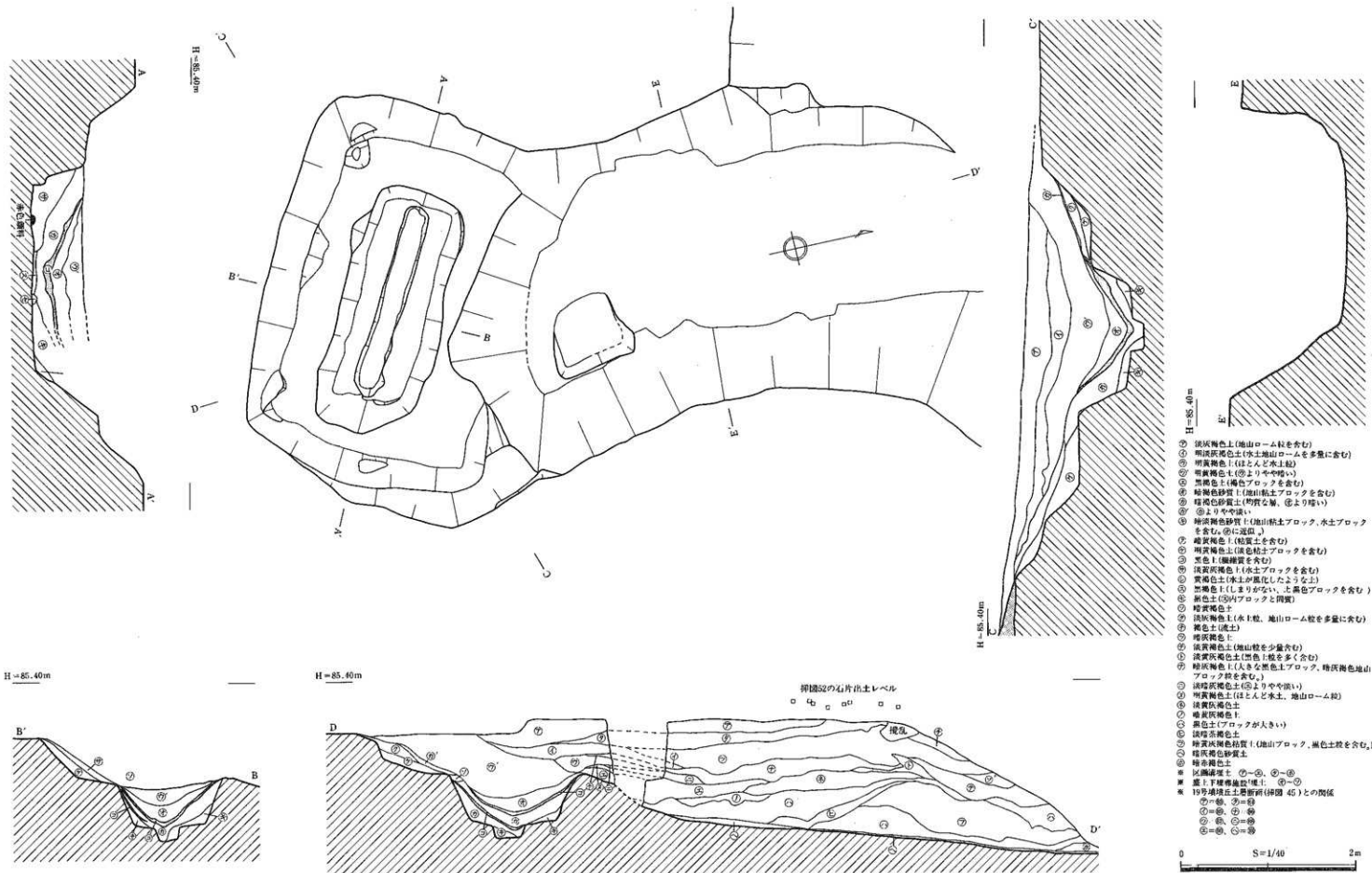
また、前方部北側の墳裾付近では、0.8×0.9mの不整形に広がる範囲で朱と思われる赤色顔料塊が検出された。厚さは15cm程度であった。この周囲は耕作が著しく及んでおり、遺構は検出されなかったが、周溝内土塊状のものが北側周溝内にもあった可能性がある。

遺物出土 状況

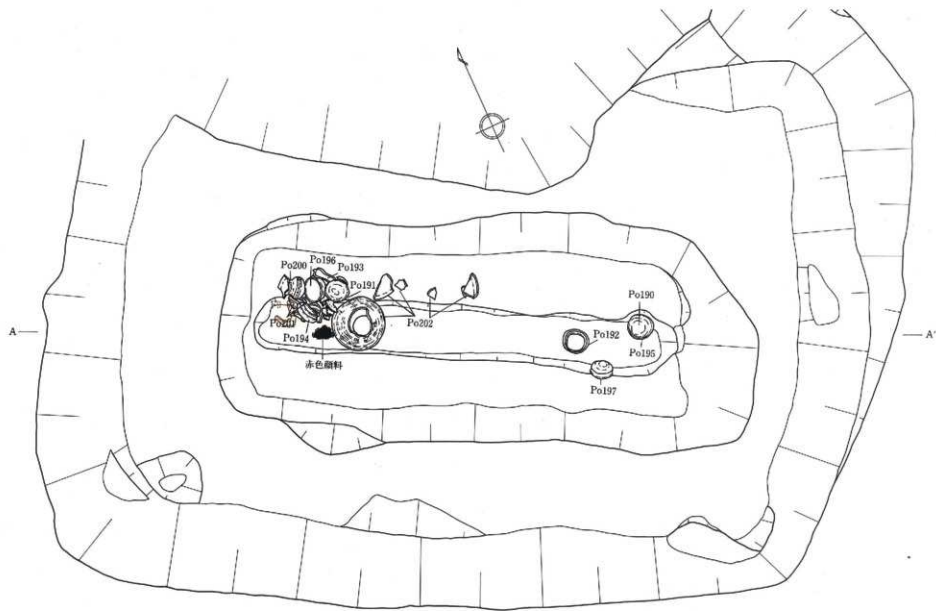
主体部は、すでに攪乱・削平されており、まとまった遺物は出土していないが、須恵器環蓋Po188・189が攪乱土中から出土している。また、凶化できなかったが、同じく攪乱土中で鉄器片が出土している。

盛土下埋葬施設は盗掘を受けた様子ではなく、良好な一括遺物が出土している。墓壇内埋土中で、鉄製U字状鋤(銀)先F190が刃先を南にむけて出土している。墓壇内東側では須恵器環身Po190・192、須恵器環蓋Po195・197が出土している。Po190とPo195はPo190が上になり重なった状態で検出された。Po197は中央部溝の肩で、Po192は溝底部で出土しているが、もともとはPo190・195同様重なっていたと思われる、こちらが須恵器枕になっていた可能性がある。西側からは須恵器環身Po191・193・194、環蓋Po196・198・199、臑Po200、脚付椀Po201、壺Po202がまとめて出土している。Po191・194・196は完形で、そのほかは壊れていたが、Po200を除いてほぼ完形に復元できた。なおPo200の口縁部がPo202中にあり、接合している。また、溝西側底部より刀子F10は、切先を西にむけて出土している。

周溝内では、後円部東側で埋土中より須恵器大甕Po174が破砕されて散在したような状態



挿図30 南谷19号墳盛土下埋葬施設及び区画溝遺構図



85.20 m

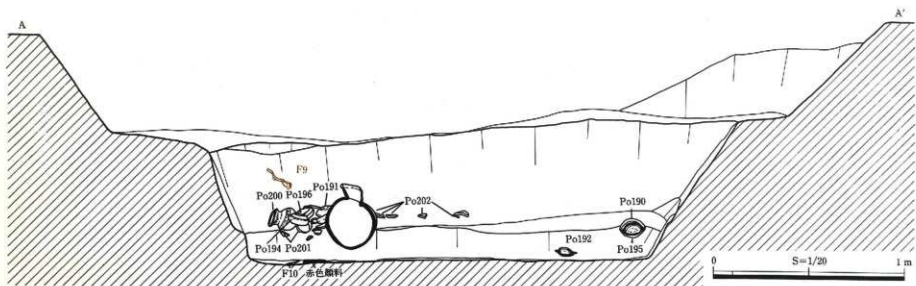


插图51 南谷19号墳盛土下埋葬施設遺物出土状況

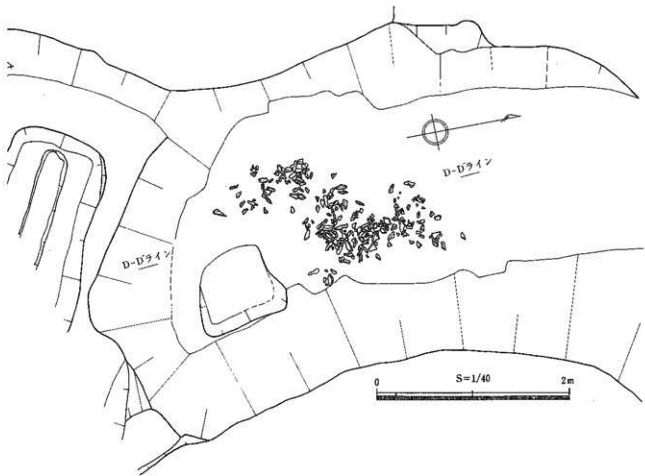
で出土している。壘片は墳丘斜面の中央部からも出土している。また、南東側では須恵器环蓋Po180が押し潰された形で、土師器壺Po183が二箇所でかたまって出土し、また北東側周溝斜面ではPo187が出土している。くびれ部南側では黒褐色土層で土師器遡Po181・182が、くびれ部北側では須恵器环身Po177・178が黒褐色土層中より、また、須恵器环身Po179、土師器壺Po185が北側周溝底よりやや浮いたような状況で出土している。前方形西側周溝底では、土師器高环Po184が西側斜面に接して出土している。

盛土中で、磨製石斧S8が出土している。南谷19号墳は古墳築造以前の遺構を壊して築造されており、S8は築造時に混入したものと思われる。

盛土のかき出し土で、須恵器环身Po176、円筒埴輪片Po186が出土しているが、Po186は混入したものと考えられる。

時 期 Po187は弥生時代後期のもと思われる、SK09に伴うものが混入したものと思われる。

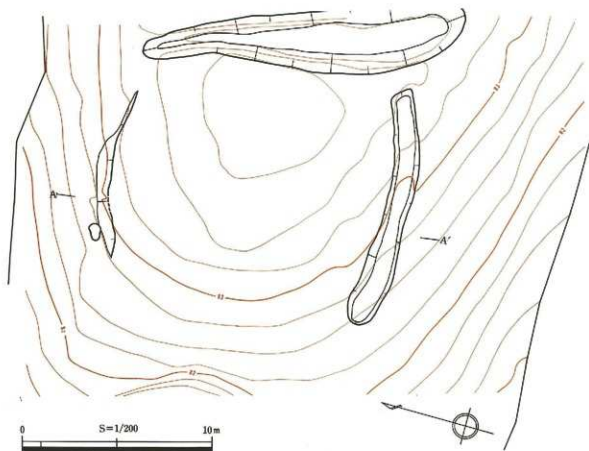
周溝で出土している須恵器は、おおむね山本編年Ⅲ期(56)新相(6世紀後半)の時期を示すと思われるが、盛土下埋葬施設の須恵器は山本編年Ⅱ期(6世紀前葉)の時期を示す。墳丘下埋葬施設は19号墳に伴うものか異論があると思われるが、これが19号墳の墳丘築造計画に組み入れられたものであると考えると、南谷19号墳の築造計画は6世紀前葉と考えられる。周溝で出土している須恵器は、黒褐色土中かまたは暗灰褐色土中での出土であり、6世紀後半までの古墳の祭祀が続いたものと考えられる。



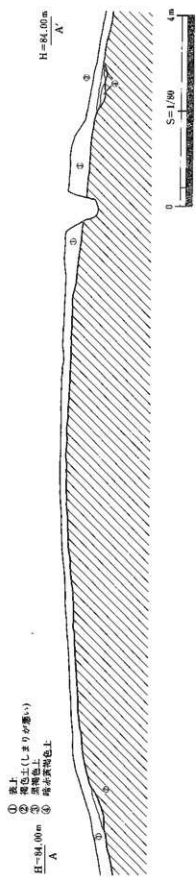
挿図52 南谷19号墳盛土内石片出土状況図

2. 南谷20号墳 (挿図53~55、図版25)

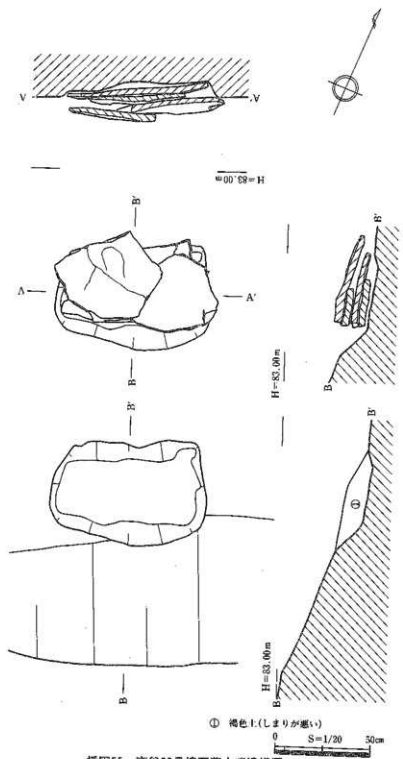
- 位置** 調査区のほぼ中央部、標高83.75mの地点に立地する。20号墳は21号墳の東側3mの地点にあり、墳丘東側は19号墳と接している。
- 墳丘・周溝** 墳丘は、すでに耕作によって削平されており、わずかに80cmの丘状の高まりが見られる程度である。周溝もわずかに残る程度であるが、南側のものは緩やかに湾曲することにより、径14.5mを測る円墳と考えられる。
- 比較的残りのよい南側周溝は、幅1.0~1.5m、深さ0.2mを測る。北側は、犁耕作のための攪乱が著しく、墳丘側に傾斜変換点がわずかに認められる程度であった。
- 東側は19号墳の周溝と重なり、北端はわずかに西側に湾曲しており、20号墳の周溝が一部残っていると思われる。
- 周溝内土壌** 北側周溝のやや西側寄り、周溝斜面において4枚の板石を重ねた石蓋土壌が検出された。この土壌は、1988年に羽合町教育委員会の試掘調査ですでに確認されていたが、その調査では単独の石蓋土壌と考えられていた。今回の調査の結果、この石蓋土壌は古墳に伴うものであり、規模は長さ0.82m、幅0.5m、深さ0.3mを測るものと判明した。立地場所が周溝斜面であるために、墓壇底は北に傾斜している。
- 遺物・時期** 遺物が全く出土していないために、正確な時期は不明であるが、東側周溝が19号墳に切られていることから、19号墳より若干古く築造されたものと考えられる。



挿図53 南谷20号墳墳丘図



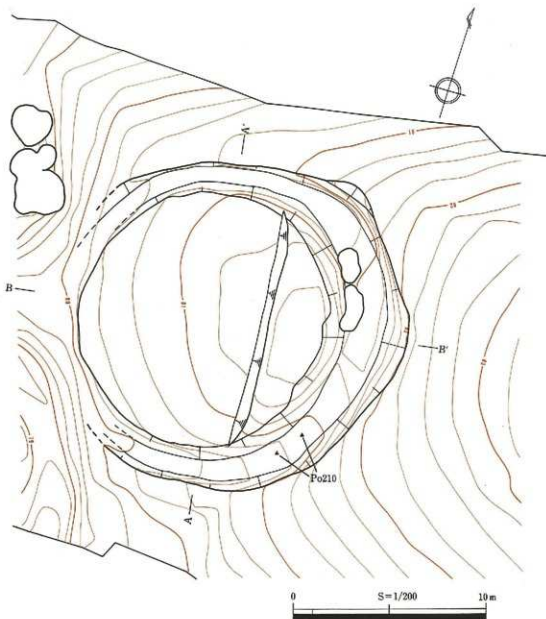
挿図54 南谷20号墳土層断面図



挿図55 南谷20号墳石置土層透視構図

3. 南谷21号墳 (挿図56～58・108、図版25・26・50)

- 位置** 調査区の中央のやや西寄り、尾根の頂部、標高80m～82mの間に位置し、E5・F5グリッドにはほぼおさまる。20号墳をはさんで東16.5mに19号墳、西約1mに23号墳があり、22号墳とは南西側で周溝が重なる。
- 墳丘** 調査前においては、墳丘を確認できるような地形はなく、耕作による高さ約50cmの崖が、墳丘の中央に当たる部分を南北に縦断していた。墳丘は円形で、その規模は、南北径14.6m、東西径14.0m、残存していた高さは、東側周溝底より0.7mであった。
- 周溝** 周溝は標高の高い東側で一番深く、標高の低い西側で浅くなり不明瞭になる。南西側で22号墳の周溝と重なり、断面観察の結果、21号墳の方が、22号墳より古いことが分かった (挿図61)。周溝の規模は、幅1.8m～4.5m、深さは0.3m～1.3mである。断面は、U字状を呈する。



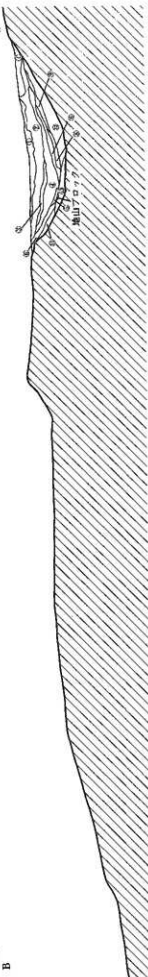
挿図56 南谷21号墳墳丘図

H=82.50m
A



H=82.50m
A

H=82.50m
B



- ① 暗灰褐色土(腐色アロックを含む)
- ② 暗灰褐色土(腐化物を少量含む)
- ③ 暗灰褐色土(②より暗く、腐化物を含まない)
- ④ 黄褐色土
- ⑤ 暗灰褐色土
- ⑥ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑦ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑧ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑨ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑩ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑪ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑫ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑬ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑭ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑮ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑯ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑰ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑱ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑲ 暗灰褐色土(腐色土)
- ⑳ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉑ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉒ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉓ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉔ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉕ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉖ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉗ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉘ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉙ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉚ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉛ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉜ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉝ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉞ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㉟ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊱ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊲ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊳ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊴ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊵ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊶ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊷ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊸ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊹ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊺ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊻ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊼ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊽ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊾ 暗灰褐色土(腐色土)
- ㊿ 暗灰褐色土(腐色土)



神図57 南谷21号墳土層断面図

盛土 墳丘は耕作による削平のため盛土を全く残していない。付近の土の堆積状況を観察した結果、斜面に耕作のための平坦面を造り出すために、21号墳の墳丘を削平した土を用いて、22号墳側に土盛りがされていることが分かった。この土の中から碧玉製の管玉1個(S1)が出土した。

この管玉は21号墳の墳丘が削平された際に埋葬施設からかき出されてきたものと思われるが、墳丘上の埋葬施設は残っていなかった。

周溝内土壌 東側周溝底、墳裾寄りで2基の土壌を検出した。周溝埋土中から掘り込まれたものか、周溝底面で掘り込まれたものかは不明であるが、いずれの土壌も墳裾部分をわずかに削り込んでいた。いずれも平面は不整形で、断面は皿状を呈する。その規模はそれぞれ、南の土壌から、底面で長軸1.80m×短軸0.60m、長軸0.80m×短軸0.60mである。深さは最も残りのよいところで、それぞれ0.25m、0.30mである。埋土はしまりがなく、水土が風化したような土であった。

遺物 南東側周溝で、須恵器坏身Po203、Po205、須恵器坏蓋Po206～Po207、土師器甕Po211が埋土中で、須恵器坏身Po204が底面近く、須恵器甕Po210が底面で破砕された状態で出土した。須恵器蓋Po208のみ南西側周溝埋土中で完形の状態出土した。

時期 出土した須恵器坏の内、Po203、Po206は山本編年Ⅲ期の古相を示し、他は新相を示すことから、21号墳は6世紀後半の築造であると思われる。

4. 南谷22号墳 (挿図59・61・62・109、図版26・27・51)

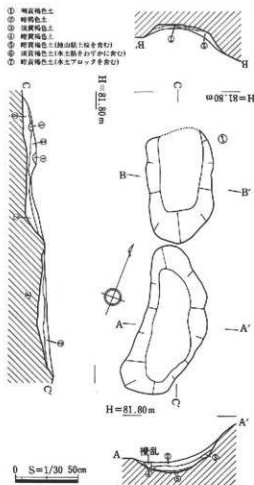
位置 調査区の西側、C6・D6・C5・D5グリッド、標高78m、東約32mに19号墳が位置する。北約5mには23号墳が、22号墳と尾根の頂部を二分するようにならぶ。

調査前の地形では、墳丘の存在は確認できず、墳丘の西側に当たるところが大きく削り取られ約1mの崖となっていた。崖の断面を観察したところ、周溝の落ち込みを確認したことから古墳と判断した。

墳丘 墳丘の西側が地山まで大きく削り取られ、また、墳丘の南側が調査区域外に延びるが、周溝の形状から、墳丘は円形であると思われる。その規模は東西径12.4m、南北径12.5m、残存する墳丘の高さは、



写真7 南谷22号墳周溝内遺物出土状況(Po212)



挿図58 南谷21号墳周溝内土壌遺構図

北側周溝底から1.2mである。周溝は全周せず、北西側で約3.5mをブリッジ状に掘り残す。西側の周溝端には、不明瞭ではあるが、階段状のものが3段設けられていた。また、周溝は東側で21号墳の周溝埋土を掘り込んでいた。周溝の幅は北側で最大4.5m、南側で最小1.0mである。残存する深さは標高の高い東側で最も深く1.0mである。標高の低い西側では、周溝は浅く、最も浅いところでわずか0.3mを残す。墳丘の西側部分の削平とともに西側の周溝も一部削平されていると考えられるが、削平以前においても、西側の周溝は、東側の周溝に比べて、浅かったものと思われる。断面は、逆台形状ないしはU字状を呈する。

盛土 墳丘の盛土は、東側部分でわずかに残っていた。④層は黒色土層で、ロームの上に帯状に堆積していた。ロームは、ほぼ地形に沿うように南側に向かって傾斜していた。②③層は盛土である。②層は、赤褐色ロームを用いた盛土で、灰褐色ロームを含みよくしまる。③層は、灰褐色ロームを用いた盛土で、④層の黒色土粒を含みよくしまる。地形の低い南側ほど厚く盛土し、盛土によって、墳頂部を水平にしようとする意図が見られる。

墳丘上の埋葬施設は既に失われていた。

石蓋 北西側周溝を約30cm程掘り下げたところで、約20cm～30cm大の自然石が出土した。その下

木棺墓 60cm程の周溝埋土中で、石蓋木棺墓を検出した。石蓋は、長さ1.05m、幅0.55m、厚さ5cm～9cmの板状の石で南側にわずかに傾斜した状態で出土した。墓壇は石蓋の輪郭にほぼ沿うような長方形の墓壇で、その規模は、上縁部で長軸1.38m×短軸0.55m、底面で長軸1.23m×短軸0.45m、深さは0.15m内外であった。墓壇の埋土の観察で、長軸方向断面の南北端で小口板の痕跡(⑧層)を確認した。短軸方向断面においては、⑧層は存在しなかった。墓壇底面で掘り方の短辺に沿うように幅20cm～25cm、深さが5cm～10cmの楕円形状の落ち込みを検出した。側板を用いない石蓋木棺墓であると考えられる。墓壇内及びその周辺で遺物は全く出土しなかった。

遺物 遺物は、墳丘上では出土しなかったが、北東側周溝と西側周溝で出土した。北東側周溝では、土師器類Po213、Po214の破片が、それぞれまとまって、底面から約30cmほど浮いた状態(⑨層下層)で出土した。破片の磨滅が著しく全体を復元することはできなかった。口縁部のみを図化することができた。また、多量の板状の石片が、周溝埋土中⑨層以下及び周溝の底面に沿って、21号墳側から流れ込むように出土した。その出土状況から、22号墳の築造後早い段階で21号墳側から投げ込まれた石片と考えられる。21号墳は、墓石を施した痕跡が全くないことから、21号墳の墓石が周溝内に流れ込んだとは考えられない。21号墳の埋葬施設が破壊され、その石材が投げ込まれた可能性があるが、21号墳の埋葬施設は残っていないことから断言はできない。22号墳の西側周溝底面で、3方に把手を持つ須恵器短頸壺Po212が、潰れたような状態で出土した。地形の低い南側にその破片がわずかに流れてはいるものの、元位置を保っていると思われる。復元の結果ほぼ完形にまでなった。環頸は出土しなかった。

時期 出土した土器からは古墳の築造時期を断言できないのであるが、周溝の切り合い関係より、22号墳は21号墳より新しく築造されたものと考えられ、21号墳、23号墳とほぼ変わらない築造時期であると考えられる。

5. 南谷23号墳 (挿図60・61・63・109、図版27・51)

- 位置** 調査区の最も西側、標高79.3mの地点に立地し、23号墳の4m南側には22号墳が、東側には21号墳が隣接している。
- 墳丘** 調査前は平坦な畑地であったが、南側・西側は地山まで大きくカットされ、その断面に黒色土が帯状に入っていたために、古墳の存在が想定された。他の古墳と同様、後世の耕作による削平が著しく、盛土はほとんど削り取られ、また、墳丘北側・東側には頂部を削平したときの盛土の一部がかき出されていた。
- 表土及び耕作土を除去したところ、北側墳裾及び東側周溝は比較的良好に残っていた。墳丘規模は、長径11.6m、短径11.3m、高さは北側墳裾から1.4m、東側周溝底から0.9mを測り、東西軸がやや長くはなっているもののほぼ円形を留める円墳であることが判明した。
- 周溝** 周溝は、東側の残りがよく、幅2.7~3.7m、深さ0.9mを測り、断面U字状を呈す。南東部分は他の箇所比べて広くはなっているが、底部に後述する周溝内土壌が造られたための処置と考えられる。その他の箇所の遺存状態は悪く、原状を残しているとは思えないが、周溝は墳丘南側でブリッジ状の掘り残しがあり、全周するものではない。
- 盛土** 墳丘は地山削り出しと盛土によって形成されている。旧表土は、墳丘北側と西側に遺存しているが東・南側には見られず、もともと東・南側の地山が高かったためにこの部分を地山整形したことが窺われる。地山削り出しは、北側周溝底より1.0m、東側周溝底では0.8m以上行われている。盛土は北側・西側にわずかに残る程度(⑨層)であったが、南側はブリッジ状の掘り残しがあり、他の箇所とは異なり地山削り出しは行われず、ほとんどが盛土によって形成されたものと推定される。
- 主体部** 墳丘頂部がすでに削平されており、主体部は不明であるが、かき出し土中より赤色塗彩された石材が出土しており、箱式石棺が埋納されたと考えられる。
- 周溝内土壌** 東側周溝の中央から南東部にかけて、計4基の周溝内土壌が検出された。北側から1号土壌、2号土壌、3号土壌、4号土壌とした。1号土壌はサブレンチで切られているが、長径1.1m、短径1.0m、深さ10cmを測り、不整形な平面を呈す。2号土壌は、長径0.6m、短径0.45m、深さ10cmを測り、平面楕円形を呈す。3号土壌は2号土壌に切られており、長径0.8m、短径0.7m、深さ10cmを測り、不整形な平面を呈す。4号土壌は3号土壌に切られており、長径1.3m、短径1.2m、深さ5cmを測り、平面は隅丸方形を呈す。2~4号土壌の切り合い関係を見ると、4号土壌→3号土壌→2号土壌の順に掘り込まれていることが分かる。
- いずれの土壌からも遺物は出土していないため性格は不明であるが、埋葬に関係した土壌であると思われる。
- 遺物** かき出し土中で、須恵器环身Po215、坏蓋Po217、提瓶Po219、管玉S2・3が出土している。
- 周溝内埋土中で、須恵器环身Po216、有蓋高环Po218、甕Po220が出土している。
- 時期** かき出し土中で出土した須恵器は23号墳のものか、21号墳のものかは判断できないが、21号墳の西側周溝は23号墳に切られたために遺存状態が悪いと考えられ、23号墳のほうが新しく築造されたものと考えられる。Po215、Po217、Po219は山本編年Ⅲ期(6世紀後半)の特徴をよく残している。出土地は23号墳側の出土ではあるが21号墳のものと考えられる。Po216、Po218は山本編年Ⅳ期古相(6世紀末葉)の特徴を残しており、これが23号墳に伴うものと考え、23号墳は6世紀末葉頃に築造されたと考えられる。

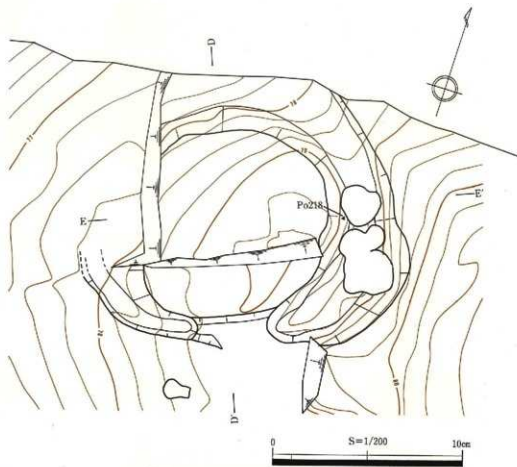


插图60 南谷23号墳横丘图

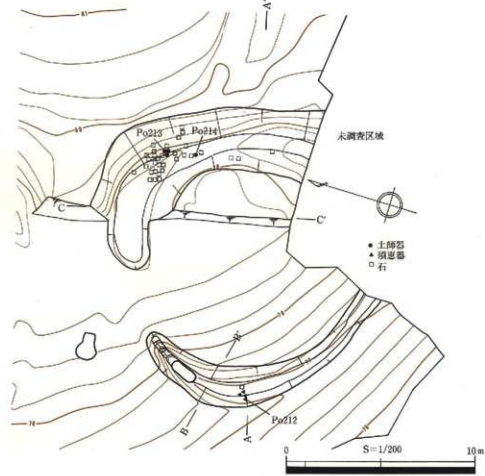


插图59 南谷22号墳横丘图

H=81.00m

H=80.00m

H=79.00m

H=78.00m

H=81.00m

H=80.00m

H=79.00m

H=78.00m

H=80.00m

H=78.00m

H=80.00m

H=80.00m

H=79.00m

H=80.00m

H=81.00m

H=78.00m

H=80.00m

H=81.00m

H=81.00m

H=80.00m

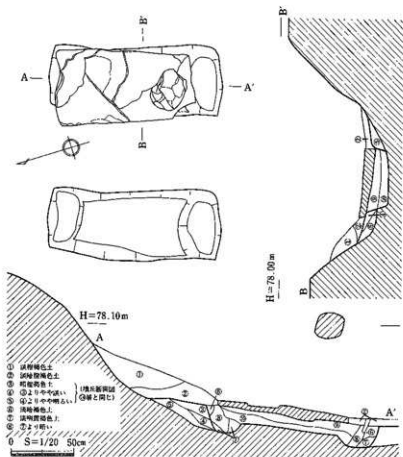
H=80.00m

H=79.00m

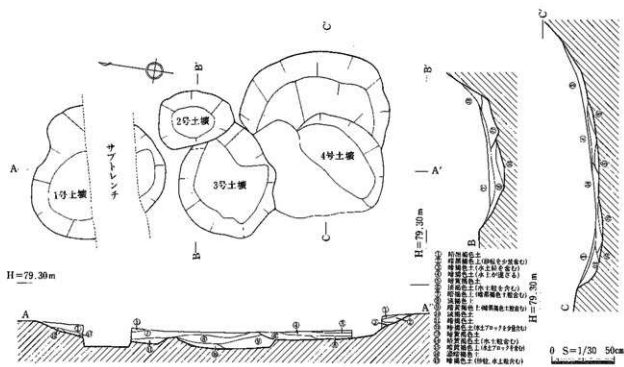
H=81.00m

1. 凡例
- ① 凡例
 - ② 凡例
 - ③ 凡例
 - ④ 凡例
 - ⑤ 凡例
 - ⑥ 凡例
 - ⑦ 凡例
 - ⑧ 凡例
 - ⑨ 凡例
 - ⑩ 凡例
 - ⑪ 凡例
 - ⑫ 凡例
 - ⑬ 凡例
 - ⑭ 凡例
 - ⑮ 凡例
 - ⑯ 凡例
 - ⑰ 凡例
 - ⑱ 凡例
 - ⑲ 凡例
 - ⑳ 凡例
 - ㉑ 凡例
 - ㉒ 凡例
 - ㉓ 凡例
 - ㉔ 凡例
 - ㉕ 凡例
 - ㉖ 凡例
 - ㉗ 凡例
 - ㉘ 凡例
 - ㉙ 凡例
 - ㉚ 凡例
 - ㉛ 凡例
 - ㉜ 凡例
 - ㉝ 凡例
 - ㉞ 凡例
 - ㉟ 凡例
 - ㊱ 凡例
 - ㊲ 凡例
 - ㊳ 凡例
 - ㊴ 凡例
 - ㊵ 凡例
 - ㊶ 凡例
 - ㊷ 凡例
 - ㊸ 凡例
 - ㊹ 凡例
 - ㊺ 凡例

插图61 南谷22号墳・23号墳土層断面图



挿図62 南谷22号墳石蓋土壇遺構図



挿図63 南谷23号墳周溝内土壇遺構図

遺構名	平面形	断面形	規 模 (m)		遺 物	時 期	備 考	
			①上縁部 (長径×短径)	②底 面				深 さ
SK03	長方形 (推定)	逆台形	①0.73以上×0.61	②0.56以上×0.55	0.38	なし	不明	主軸方向 N-79° E
SK04	隅丸長方形	逆台形	① 1.10 × 0.56	② 0.72 × 0.23	0.18	弥生底	弥生時代後期後半	主軸方向 N-5° -W
SK05	楕円形 (推定)	袋 状	①1.40×0.80 以上	②1.20×0.90 以上	0.78	弥生土・壺、小石	弥生時代後期後半	主軸方向 N-78° -E
SK06	円 形	袋 状	①1.93×1.60 以上	②1.78×1.45 以上	0.66	土器片、小石	弥生時代	
SK07	不明	不明	不明		0.48	なし	不明	
SK08	円 形	袋 状	① 1.53 × 1.03	② 1.50 × 1.30	0.95	弥生土器片・小石	弥生時代後期後半	
SK09	長楕円形 (推定)	袋 状	①4.50 × —	②4.30 × —	0.95	弥生土器片	弥生時代後期後半	底面にピット有
SK10	不明	不明	①1.43 × —	② 不 明	0.39	なし	不明	
SK11	長楕円形	袋 状	①1.85×1.00 以上	② 2.05 × 0.85	0.95	自然石	不明	
SK12	楕円形	袋 状	① 不 明	② 1.45 × 0.85	1.05	小石	弥生時代	主軸方向 N-7° -W

挿表6 南谷夫婦塚遺跡土坑一覧表

名 称	墳 形	所 在 地	直 径 (m)	高 さ (m)	埋葬施設	出 土 遺 物	備 考
南谷1号墳	円墳	羽合町南谷	-	-	箱式石棺?	-	
南谷2号墳	円墳	羽合町南谷	-	-	箱式石棺?	-	
南谷3号墳	円墳	羽合町南谷	9	0.9	箱式石棺?	-	
南谷4号墳	円墳	羽合町南谷	6	0.8	-	-	
南谷5号墳	円墳	羽合町南谷	22	2	-	-	
南谷6号墳	円墳	羽合町南谷	-	-	箱式石棺	-	
南谷7号墳	円墳	羽合町南谷	-	-	-	-	
南谷8号墳	円墳	羽合町南谷	13	0.5	箱式石棺	土師器	
南谷9号墳	円墳	羽合町南谷	16	1.5	箱式石棺?	-	
南谷10号墳	円墳	羽合町南谷	9	0.5	-	-	
南谷11号墳	円墳	羽合町南谷	-	-	-	-	
南谷12号墳	円墳	羽合町南谷	15	0.5	-	-	
南谷13号墳	円墳	羽合町南谷	18.4	1.5	-	-	
南谷14号墳	円墳	羽合町上橋津	-	-	横穴式石室	-	石室露出
南谷15号墳	円墳	羽合町上橋津	-	-	横穴式石室	-	
南谷16号墳	円墳	羽合町上橋津	-	-	横穴式石室	-	
南谷17号墳	円墳	羽合町上橋津	-	-	横穴式石室	-	
* 南谷18号墳	不明	羽合町南谷	-	-	箱式石棺	土師器壺	1985年度調査後消滅
* 南谷19号墳	前方後円墳	羽合町南谷	全 長32.0 後円部径18.8	後円部 2.9	箱式石棺 木蓋土壇墓 (盛土下)	須恵器蓋環・飯・穴・御付碗、 刀子、土師器壺、朱、 U字型鏝(鉄)先	1990年度調査
* 南谷20号墳	円墳	羽合町南谷	14.5	0.8	石蓋土壇 (周溝内)	なし	1990年度調査
* 南谷21号墳	円墳	羽合町南谷	14.6	0.7	-	須恵器蓋環・壺、土師器壺	1990年度調査
* 南谷22号墳	円墳	羽合町南谷	12.5	1.2	石蓋土壇 (周溝内)	須恵器短頸壺、土師器壺	1990年度調査
* 南谷23号墳	円墳	羽合町南谷	11.6	1.4	-	須恵器蓋環・高杯・壺・提瓶	1990年度調査

古墳名の前に*印が付してあるものは発掘調査済みの古墳である。南谷1～17号墳については、鳥取県教育委員会「改訂 鳥取県遺跡地図」第2冊分 1974年をもとにした。南谷18号墳については、羽合町教育委員会「南谷18号墳発掘調査報告書」1986年を参照。南谷19～23号墳は、本報告書を参照。

挿表7 南谷古墳群一覧表



挿図64 南谷古墳群位置図

第5章 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群の調査

第1節 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群の概要

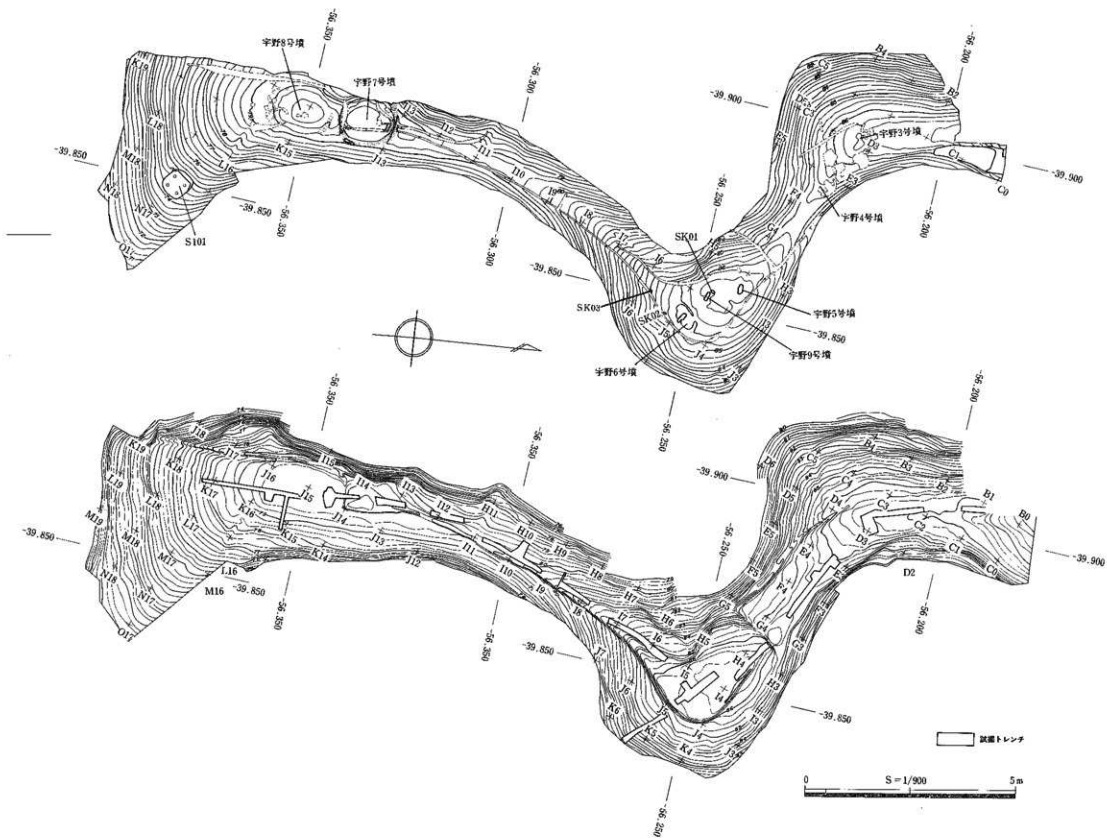
位置 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群は、東郷池の北端に向かって北から南に延びだす舌状の丘陵（標高89m～71m）のほぼ全体に位置する。調査区の西側に隣接する尾根の先端部に、弥生時代後期に位置づけられた周知の乳母ヶ谷遺跡がある。

遺構 乳母ヶ谷第2遺跡では古墳時代の竪穴住居跡、中世の土塁、近世以降の段状遺構を検出した。竪穴住居跡は形態が隅丸方形であった。床面は貼床がなされ、中央ピットは縁が粘質土で盛り上げられ土手状になっていた。中央ピットの盛り上がりと壁溝が南側で切れており、遺物は古墳時代前期初頭の甕や高環が出土している。また、住居跡は調査区の南端の緩やかな斜面に位置していた。住居跡は1棟しか検出されなかったが、同じ地形が続くことから、南に向かって集落が広がる可能性がある。次に、土塁は11本のサブトレンチを入れ、断面を観察しながら調査を進めた。その結果、土塁は台形状に盛土され、西側を平坦にし、東側を立ち上げるように盛られていた。段状遺構は試掘調査では確認されておらず、調査区の北側の端で検出され、調査区を拡張することによって遺構の全体が確認できた。遺物は近世以降の磁器が出土している。

宇野古墳群 宇野古墳群の調査では古墳7、土壌3を調査した。宇野古墳群は今まで2基の古墳の存在が知られていた。今回調査した古墳は新たに確認されたもので、古墳名は宇野9号墳を除き、調査区の北から順に宇野3号墳から宇野8号墳まで命名した。宇野9号墳は主体部でしか確認できなかった。また、古墳のある丘陵の尾根は非常に狭いものであり、古墳の在り方はかなりこの地形に制約を受けていると考えられる。古墳はいずれも尾根が屈曲し、やや広がる場所に位置しており、7基の古墳が3・4号墳、5・6・9号墳、7・8号墳の3群に分布している。それぞれの群で見ると、3・4号墳は小規模な円墳であり、4号墳周溝から出土した須恵器の直口壺から5世紀代のものと考えられる。5・6・9号墳は小規模な円墳と方墳からなり、時期は不明であるが、地山を深く掘り込んだ主体部を持つ共通点がある。7・8号墳は前者が方墳で、後者が円墳であるが調査区の古墳の中では規模が大きなものである。7号墳から土師器の甕と高環が、8号墳では須恵器の甕がそれぞれ出土している。土器はどちらも5世紀後半頃で近い時期にあたり、古墳の築造も同じ頃だと思われる。次に、埋葬施設は5～7・9号墳で調査された。7号墳で調査した埋葬施設は、周溝内に存在した石蓋土壌である。土壌はSK01が9号墳に伴う以外はSK02・03とも用途、時期が不明である。



写真8 宇野古墳群・乳母ヶ谷第2遺跡発掘



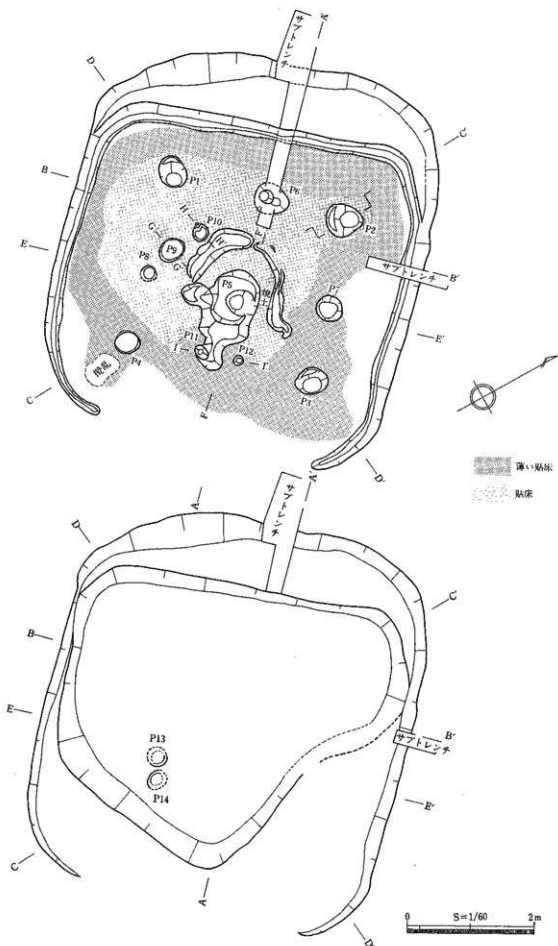
挿図65 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群全体図

第2節 乳母ヶ谷第2遺跡の調査

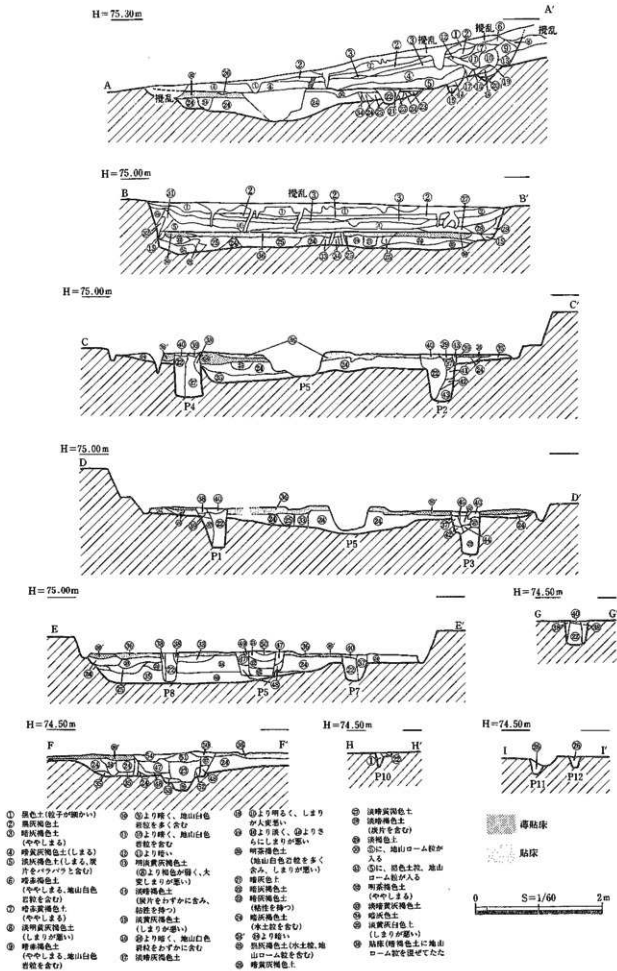
1. 竪穴住居跡

S101 (押図66・67・111、図版29・51・52・55)

- 位置** 調査区の南端の緩斜面、標高74m～75mに位置する。今回の乳母ヶ谷第2遺跡の調査で唯一の竪穴住居跡である。S101が検出された所は、調査前の地形測量図(押図65)を見ると、等高線の幅が広がっており、調査前の地形においても斜面の傾斜がその周りに比べて緩やかになっていることが分かる。
- 形態** 平面は、隅丸方形で、三ヶ月形のテラスを持つ。規模は、テラスで長さ5.2m、幅0.7m、床面で5.2m×5.2mである。床面積は、24.4㎡である。残存壁高は北西壁で、床面まで1.04mである。壁高は斜面下側になるほど低くなる。壁溝は、3辺の壁際を巡り、全周しない。壁溝の幅は10cm～20cm、深さは5cm～14cmである。断面は、U字状を呈する。床面上でピットを12個検出した。それぞれの規模はP1(53×42-65)cm、P2(60×53-76)cm、P3(53×45-67)cm、P4(40×38-72)cm、P5(後述)、P6(56×48-31)cm、P7(45×43-42)cm、P8(26×26-46)cm、P9(45×35-40)cm、P10(28×25-25)cm、P11(24×19-25)cm、P12(18×16-19)cmである。その内支柱穴と考えられるのはP1～P4の4個である。支柱穴間距離は、P1から2.9m、2.7m、3.1m、2.7m、P6～P8は支柱穴を結ぶ直線上に位置し、P11、P12は支柱穴を結ぶ直線のやや内側にその直線に平行するように、0.64mの距離をおいて並ぶ。
- 中央ピット** P5が中央ピットである。床面のほぼ中央で検出した。掘り方の南東側と南西側で溝状の飛び出しがあるが、平面は隅丸長方形を呈する。掘り方は飛び出し部分を含めると3段になり、底面に(40×46)cmのピットを有する。その規模は、飛び出し部分も含めて上縁部で長軸170cm×短軸122cmである。中央ピットの周りは、貼床の土を盛り上げることによって、16cm～36cmの幅で2cm程土手状に盛りを築き、土手の周りには幅10cm～30cm、深さ1cmほどの断面皿状の浅い溝があった。中央ピットの埋土は9層に分層できた。炭片を含む層(54層)もあったが、ピット内で火を日常的に用いた形跡はみられなかった。また中央ピット内には床面上に堆積していた埋土は流入しておらず、住居廃絶時には、中央ピットは埋められていたものと考えられる。
- 焼土** 焼土は1箇所床面上で検出された。中央ピットの北東20cmの所で、径3cm×5cm程度の不整形な広がりであった。貼床は床面のほぼ前面にほどこされておられ、暗褐色土に地山ロームを混ぜ、叩きしめられていた(⑥⑦層)。床の中央近くほど地山ロームの含有量が多く、しっかりとしまっていた。掘り下げ中及び床面で土器が出土したがその量は少なく、土器の遺存状態もあまり良いものではなかった。図化できたものは甕Po230・Po231・Po233・Po234、高坏Po232、不明口縁Po235である。このうちPo232はP9の埋土中で出土した。Po230・Po234が床面で出土した。Po231・Po233・Po235は埋土⑩層中で出土した。
- 時期** 出土土器より古墳時代前期の住居であると考えられる。
- 不整形落ち込み** 貼床除去後不整形な落ち込みを検出した。掘り下げた結果、断面は皿状で、その規模は、4.9m×3.9m、深さは0.4m～0.08mである。S101の床は、この落ち込みを埋め立てた後に貼られていた。住居の貼床直下から掘り込まれる黒灰褐色土の落ち込みをいくつか断面で確認したのであるが、平面的にそのプランを検出することができたものはP13、P14の2個のみであった。遺物は全く出土しなかった。この落ち込みの北西辺と南西辺がS101の掘り方



挿図66 乳母ヶ谷第2遺跡S101平面図



挿図87 乳母ヶ谷第2遺跡S101土層断面図

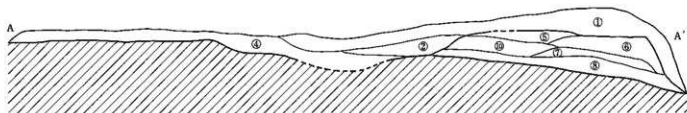
とほぼ平行していること、この落ち込みの範囲がS I 01の床面の範囲におさまっていることからS I 01に伴う落ち込みであると考えられるが、その性格は不明である。

2. その他の遺構

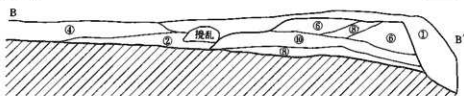
土壘 (挿図68～71・111、図版30・52)

- 位置** H 4 杭-J 4 杭-I 7 杭-I 11 杭-J 14 杭を繋ぐように狭い尾根上を走り、標高80m～86m付近、尾根の頂部に辺りに位置し、字野5～7号墳、SK02・03を切って延びている。検出は灰褐色土、或いは黒灰色土の盛り土を確認しながら行った。
- 規模** 規模は全長128m、標高差6.5m、最大幅5m、最小幅2m、盛土高0.5mであった。
- 土層** ①層から④層までは流土であり、⑤層から⑩層までが土壘に関わる層である。①層は土壘築造時の旧表土で、人為的に盛り上げられたのは⑤層から⑩層と考えた。流土は締まりがなく、盛土はよく締まっている点で見分けられた。土層は全体に黒色系の土が多いが、⑦⑨層のように地山の土も混じることから、近辺の旧表土や地山を削り盛り上げたものと考えられる。盛り方は西側で平坦面を意識し、東側で急な立ち上がりを意識しているように思えるが、東側は後世の開墾があり、西側はトレンチで削られた部分もあって断定はできない。
- 遺物** 土壘築造の時期に伴う遺物は出土しなかったが、盛土中から (Po240～242) が出土している。Po240はI 6 杭付近の土壘盛土の最下層で底を上にし潰れた状態で出土した。
- 時期** 時期を決定づける遺物は出土しなかったが、羽合町誌の中で『陰徳太平記』をもとに、吉川元春が天正9 (1581) 年に築いたと記されている馬ノ山に残る土壘の土層と本遺構のものが類似していた。

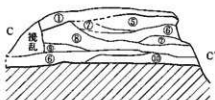
H=87.50m



H=86.50m



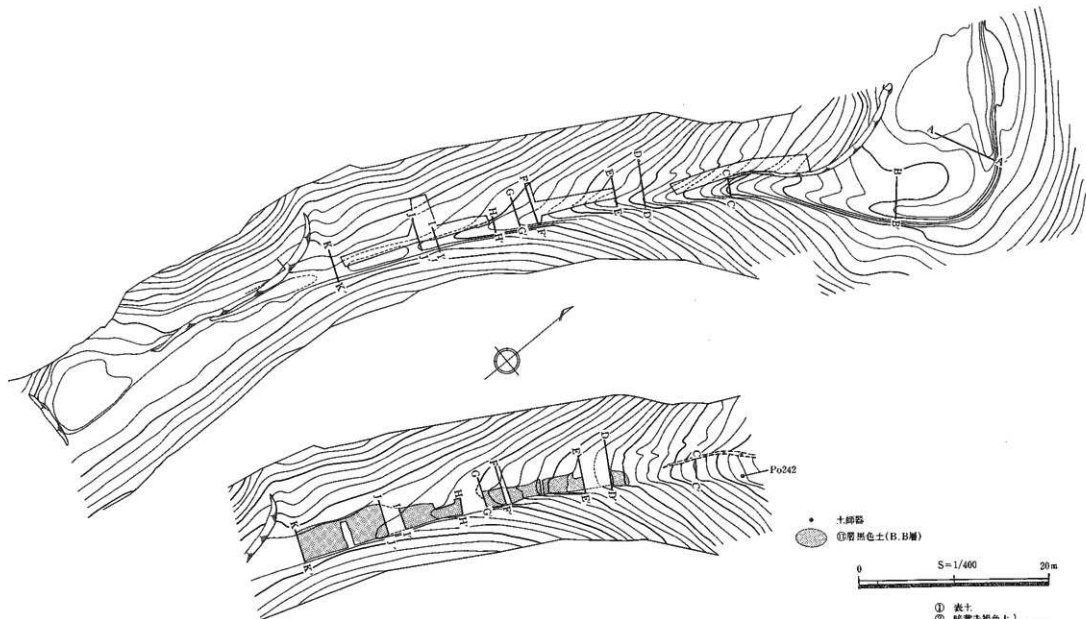
H=84.50m



- | | |
|---------------------|----------|
| ① 表土 | } (流土) |
| ② 暗赤褐色土 | |
| ③ 淡褐色土 | |
| ④ 暗灰褐色土 | |
| ⑤ 灰褐色土 | } (土壘盛土) |
| ⑥ 黒灰色土 | |
| ⑦ 暗赤褐色土 | |
| ⑧ 暗灰褐色土 | |
| ⑨ 暗赤褐色土 | |
| ⑩ 暗黒灰色土 | |
| ⑪ 黒色土 (B, B層) (旧表土) | |

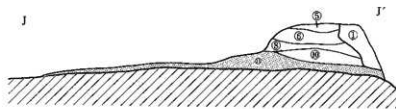
S=1/40
0 1 2 m

挿図68 乳母ヶ谷第2遺跡土壘断面図(1)

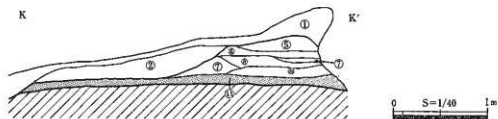


挿圖69 乳母ヶ谷第2遺跡土層平面図

H=80.50m



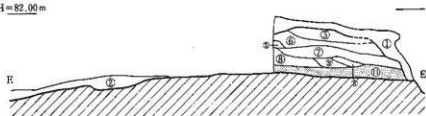
H=80.50m



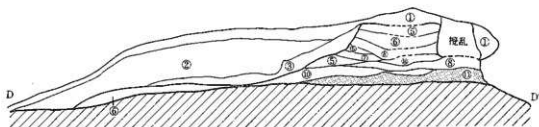
挿圖70 乳母ヶ谷第2遺跡土層断面図(2)

- | | | |
|---|------------|--------|
| ① | 表土 | |
| ② | 暗栗赤褐色土 | } (流上) |
| ③ | 淡黄褐色土 | |
| ④ | 暗黄灰褐色土 | |
| ⑤ | 灰褐色土 | |
| ⑥ | 黒灰色土 | } 土盤層土 |
| ⑦ | 暗栗赤褐色土 | |
| ⑧ | 暗灰褐色土 | |
| ⑨ | 暗赤褐色土 | |
| ⑩ | 暗黒灰色土 | |
| ● | 黒色土(B, B層) | (B表上) |

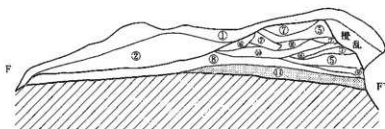
H=82.00m



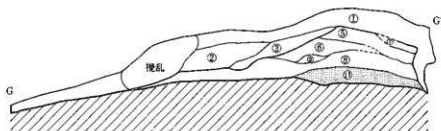
H=83.00m



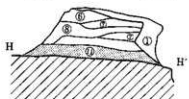
H=81.50m



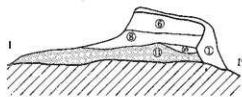
H=81.00m



H=80.50m



80.50m



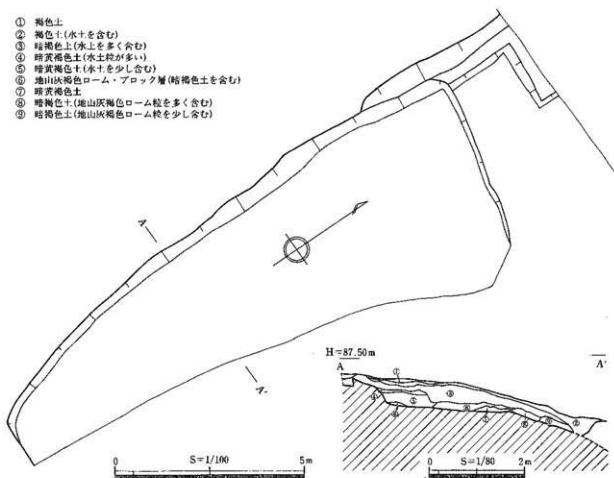
- | | | |
|----------|--------------|----------|
| ① 表土 | ⑤ 灰褐色土 | } (流土) |
| ② 暗黄赤褐色土 | ⑥ 黑灰色土 | |
| ③ 淡暗褐色土 | ⑦ 暗黄赤褐色土 | } (上段盛土) |
| ④ 暗黄灰褐色土 | ⑧ 暗灰褐色土 | |
| | ⑨ 暗赤褐色土 | } (旧表土) |
| | ⑩ 暗黑灰色土 | |
| | ⑪ 黑色土(B, B層) | |

0 S=1/40 1 m

挿図71 乳母ヶ谷第2遺跡土層断面図(3)

SS01 (挿図72、図版35)

- 位 置** 調査区最北端、B1・B2・C2グリッド付近、尾根の頂部から肩部にかけて位置する。耕作土を除去し、灰褐色ローム層で褐色土の落ち込みを検出したが、遺構が北に延びる様相を呈したため、10m程拡張して全体を確認した。
- 形 態** 灰褐色ローム層を切りこみ平坦面を作ると共に、北側に2段の階段上の施設を設けている。平坦面には10cm幅の溝がほぼ等間隔に尾根に直行して延びている様子が確認できたが、浅いもので図化できなかった。この溝は耕作の畝の可能性はある。
- 土 層** ①層から⑧層までは近年の耕作による攪乱である。
- 規 模** 規模は南北方向の幅が最大で5m、最小で1.5mであった。深さは70cm程で、段状の高さは2段とも30cm程であった。
- 遺 物** 近世以降の磁器が出土していることから、この時期の遺構と思われる。



挿図72 乳母ヶ谷第2遺跡SS01遺構図

第3節 宇野古墳群の調査

1. 宇野3号墳(挿図73・74、図版31)

位置 鉤状に北から南に伸びる丘陵の、最も北側の屈曲部上、標高86.5mに位置している。この部分には2基の古墳が隣接して築造されている。3号墳の南東側には4号墳が隣接している。

墳丘・周溝 墳丘は、すでに梨耕作によって大きく削平を受けており、わずかに70cmの高まりが残る程度であった。周溝も大変遺存状態が悪く、北側にわずかに残っている程度で、幅1.3m、深さ12cmを測る。黒褐色土がほぼ円形に見られたことより、径約10mを測る円墳であると思われる。南西側の周溝内縁がやや外側に張り出しており、造り出し状のものが付設していた可能性がある。

遺物・時期 遺物は、墳丘の南側に降りた斜面で、表土及び耕作土中より須恵器片が出土しているが、小片のため図化することができず、時期を判断することができなかった。また、出土位置からも3号墳に伴うものかどうか疑わしい。

隣接する4号墳においては、5世紀後半と思われる須恵器直口壺が出土しており、4号墳との切り合い関係は不明であるが、4号墳に近い築造年代が与えられると思われる。

2. 宇野4号墳(挿図74・111、図版31・52)

位置 調査区の北側、丘陵の最初の屈曲部の標高85.8mに位置し、4号墳の北西側には3号墳が隣接している。4号墳は、1990年の羽合町教育委員会の試掘調査で確認されたものである。

墳丘・周溝 墳丘は3号墳同様、梨耕作によって大きく削平され平坦になっていたが、わずかに弧状にのびる周溝埋土(黒褐色土)が検出されたために円墳であることが判明した。正確な規模は不明であるが小規模なものと思われる。周溝は東側にわずかに残る程度で、幅0.6m、深さ10cmを測る。周溝底には、朱と思われる赤色顔料塊がわずかに検出され、周溝内には周溝内埋葬等の施設があった可能性がある。

遺物 本調査で周溝を掘り下げたところ、黒褐色土中よりバラバラの状態ですべて須恵器直口壺Po238が出土している。接合はしないが、同一個体と思われる口縁部の破片が先の試掘調査で出土している。

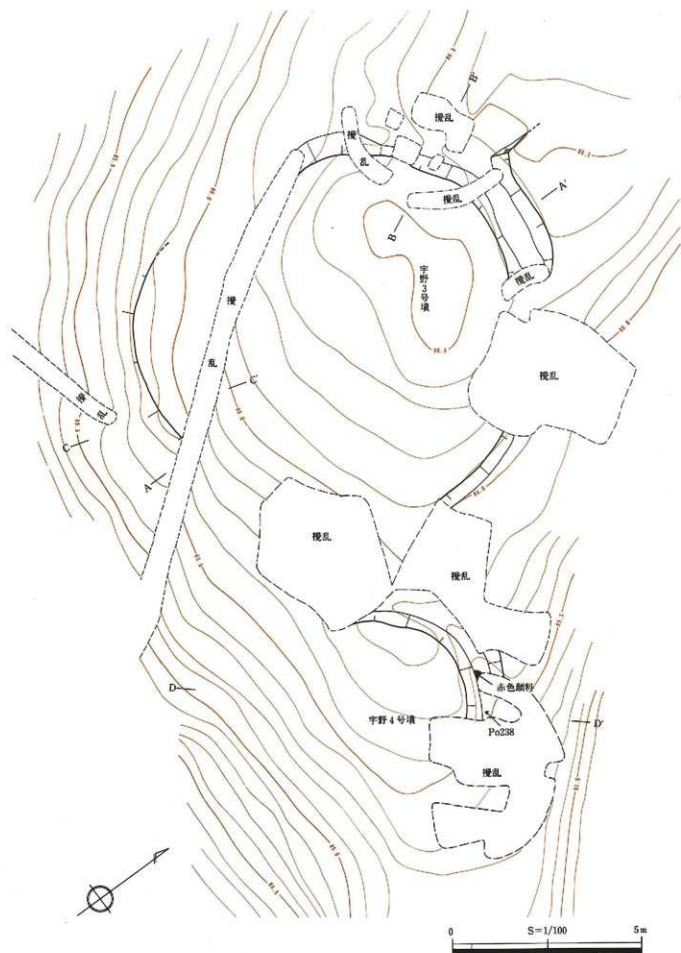
時期 須恵器直口壺Po238は、山本編年I期(5世紀後半)の時期が与えられると思われ、築造時期もこの時期に近いものが与えられると思われる。



写真9 宇野古墳群現地説明会



写真10 宇野古墳群・乳母ヶ谷第2遺跡発掘



挿図73 宇野3号墳・4号墳丘図

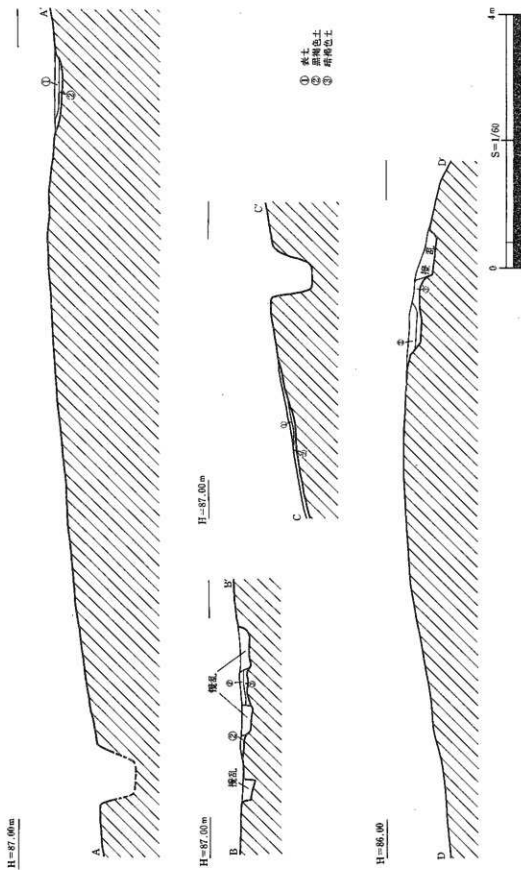


插图74 奇野3号墩·4号墩土层断面图

3. 宇野5号墳 (挿図75・77・79、図版31・32)

位置 鈎状に伸びる丘陵の、北から二番目の屈曲部のやや広くなった標高86.7mの尾根上に位置する。この部分には3基の古墳が隣接して築造されている。この一群の最も北側に5号墳がある。

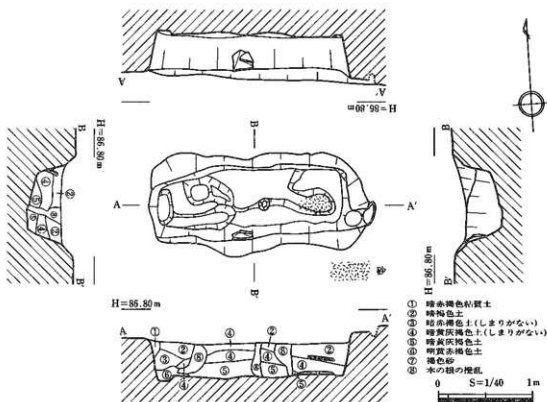
墳丘 5号墳上には土塁が構築されており、この時点で墳丘はすでに削平されたと思われる、ほぼ平坦になっていた。また、北東側が梨耕作によってカットされているが、遺存する周溝がほぼ円形に巡ることより、径7.2mを測る円墳と考えられる。

周溝 周溝は南東側の遺存状態が比較的良好で、幅0.7~1.3m、深さ10cmを測る。北西側は外縁部が削られており不明であるが、周溝は西側部分にブリッジ状の掘り残しがあり、全周するものではない。

主体部 墳丘のほぼ中央で、地山まで掘り込んだ主体部が検出された。掘り下げたところ、攪乱土とともに板状の安山岩の破片が散乱していた。石材の一部が墓壇壁に張り付いた状態で検出されており、主体部は箱式石棺であると考えられる。墓壇の規模は、長さ2.1m、幅1.0m、深さ0.5mを測り、主軸方向はN-84°-Eとほぼ東西に振る。石棺の規模は不明であるが、小口板・側板を支えるための幅15cm、深さ5cmの掘り方が検出された。その内法を測ると、長さが約1.7mあった。幅については不明である。石棺内には底石は用いておらず、砂が敷かれていたと思われる。この砂は東側底部に遺存していた。石棺と墓壇の間には粘土を裏込めしていたと思われる。

主体部が地山を掘り込んで造られていることより、本来は盛土がさほど行われない低墳丘の古墳であったと思われる。

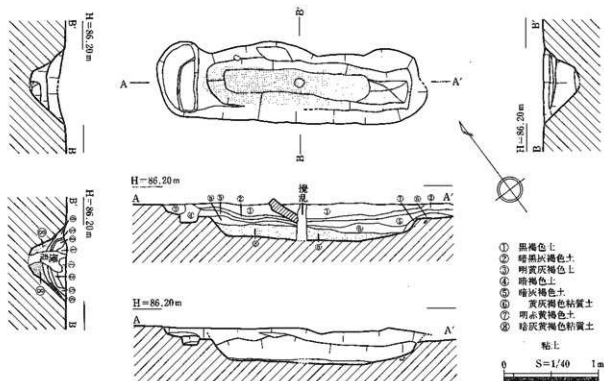
遺物・時期 遺物は全く出土していないために、5号墳の築造時期は不明である。



挿図75 宇野5号墳主体部遺構図

4. 宇野6号墳 (挿図76・78・79、図版31・32)

- 位置** 隣接する3基の古墳のうち、最も東側の標高86.1mの地点に位置する。
- 墳丘** 6号墳上には土塁が築かれており、墳丘はこの時点ですでに削平されたと思われ、平坦になっている。また、南東側は後世の耕作によって大きく掘削されている。1989年の羽合町教育委員会による試掘調査で、周溝と溝状の落ち込みが確認されていたものである。
- 周溝** 周溝は、幅0.5～1.0m、深さ10～15cmを測る。周溝がやや丸みを帯びてはいるものの北東側のコーナーが角度をもって折れ曲がる状況を示すことから、一辺5.5mを測る方墳であると考えられる。周溝は西側でブリッジ状の掘り残しがあり、全周するものではない。
- 溝状遺構** 先の試掘調査で墳丘の中央に当たる部分で、溝状の落ち込みが検出されている。この溝は場所的には6号墳の主体部に当たる位置にあるが、この溝の土層を見ると、他の溝状遺構と同じ自然堆積したと思われる黒褐色の埋土が入っている。また、幅54cm、厚さ10cm、高さ36cmの扁平な石材が斜めに落ち込んでいる。黒褐色土を除去すると、その下はよく締まった粘質土が入っており、この粘質土の断面は、U字状になっている。このことから、この溝状遺構は6号墳の主体部を再利用したもので、6号墳が削平された時点で主体部が溝状に現れ、石材を立てたものと思われる。その後溝内に腐食土が堆積したと考えられる。6号墳上には土塁があり、この溝状遺構は土塁に伴うものとも考えられる。
- 主体部** 6号墳の主体部は、粘質土の断面がU字状になることより割竹形木棺の可能性がある。墓壇の規模は、長さ2.2m、幅0.5m、深さ0.38mを測る。主軸方向は、N-51°-Wに振る。墓壇底面の東側には幅5cm、深さ4cmの溝が掘り込まれており、小口板状のものが立てられたものと思われる。
- 主体部の西には隣接して長径0.8m、短径0.4mを測り楕円形を呈し、二段に掘り込む土層があるが、土層の状態を見ると、後に2回にわたって掘り込まれたものである。
- 主体部が地山を掘り込んで造られていることにより、本来は盛土がさほど行われない低墳



挿図76 宇野6号墳主体部遺構図

丘の古墳であったと思われる。

土 壇 6号墳に隣接して土壇が2基検出されている。東側のものをSK02、やや離れて西側のものをSK03とした。SK02は隅丸の長方形を呈し、長軸0.48m、短軸0.45m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-48°-Eに振る。SK03は隅丸の長方形を呈し、長軸0.96m、残存短軸0.33m、深さ0.38mを測る。主軸方向はN-68°-Eに振る。いずれも南側は後世に削平されている。6号墳に伴うものかどうか不明である。

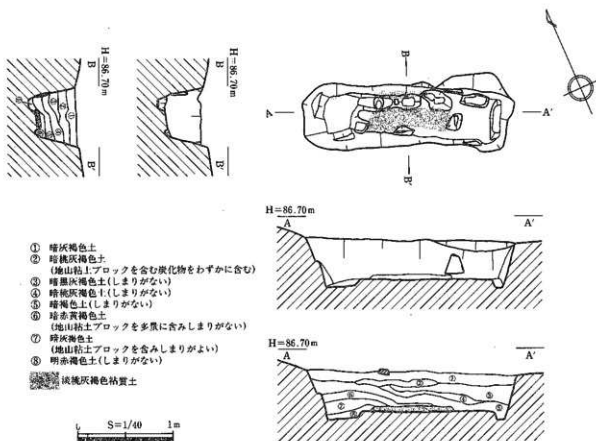
遺物・時期 遺物は全く検出されていないため、時期は不明である。

5. 宇野9号墳 (挿図78~80、図版31・33)

位 置 3基の古墳が隣接する場所の6号墳の西側、標高86.6mの地点に位置する。

墳 丘 墳丘、周溝も削平され、ほぼ平坦になっていたが、他の2基とはほぼ同じ主軸方向をもつ主体部と、ごくわずかに周溝の肩が東側に検出でき、単独の古墳であると判断した。墳形・規模とも不明であるが、他の古墳同様小規模なものと思われる。

主体部 墳丘の中央と思われるところに主体部が検出された。これは1989年の羽合町教育委員会の試掘調査のT13で検出されたものである。掘り下げたところ、攪乱土とともに、破碎された扁平な安山岩が入り込んでおり、主体部は箱式石棺と考えられる。主軸方向はN-65°-Wに振る。石棺の規模は不明であるが、墓底底には石棺の石材を立てたと思われる掘り方が検出され、その内法を測ると、長さ約1.4mある。幅については不明である。石棺の底には石は用いず、粘土を敷くものと考えられる。墓塚の規模は、長さ2.2m、幅0.65m、深さ0.4mを測る。



挿図77 宇野9号墳主体部遺構図

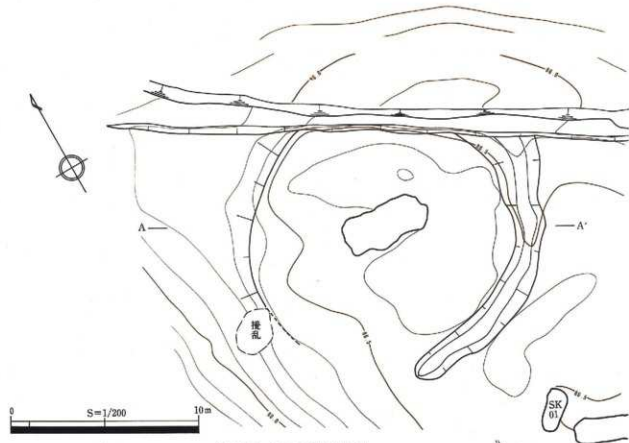


插图78 宇野5号墳丘图

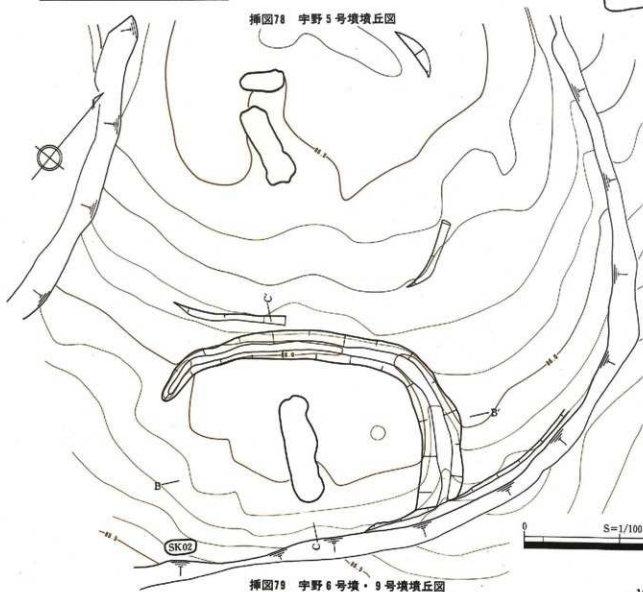


插图79 宇野6号墳・9号墳丘图

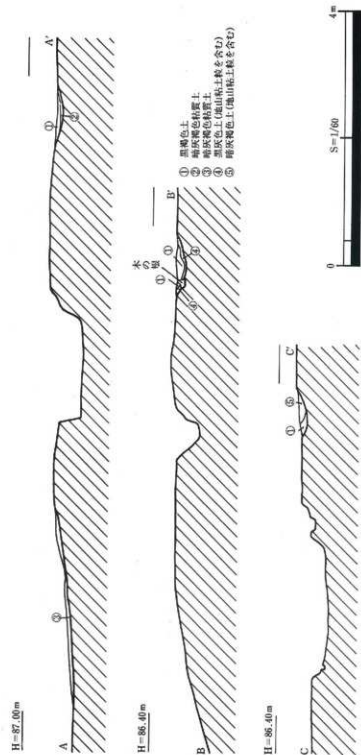


插图80 宇野5号墳・6号墳土層断面图

主体部が地山を掘り込んで造られることより、本来は盛土がさほど行われ
ない低墳丘の古墳であったと考えられる。

S K 01 主体部の西40cmのところには、長楕円形を呈す長径1.18m、短径0.46m、
深さ0.19mを測る土壌が検出された。主軸方向はN-36°-Eに振る。S K
01は9号墳に伴う埋葬施設と思われる。

遺物・時期 遺物は全く検出されていないため、時期は不明であるが、隣接して築造さ
れている3基の古墳のなかでは、最も周溝の遺存状態が悪く、一番初めに築
造されたものと思われる。

6. 宇野7号墳 (挿図81~83・111、図版33・34・52)

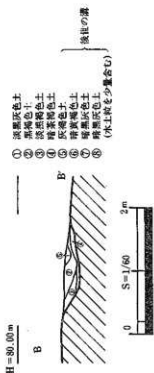
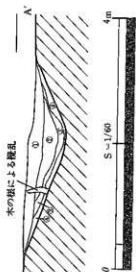
位置 調査区南側、I14グリッド及びJ14グリッドを中心に標高79m~80m付近
の、尾根の先端に位置し、南側には宇野8号墳が、墳丘の南端には土塁の終
点が存在する。

墳丘 開墾による削平がひどく、墳丘は西側斜面が完全に切り崩され、墳丘内南
側と東側は土地の境界用の溝によって地山が削り取られ、周溝の東側には畝
の痕跡が残っており、墳丘、周溝共に残存状態が悪かった。残存部から墳形
をみると方墳と考えられる。東側の周溝内縁部には円弧を呈する部分も見ら
れる。主体部は確認できなかった。規模は長辺12.5m、短辺10.6m以上で、
高さ0.9mであった。

周溝 周溝検出はT13(羽合町試掘)で周溝の北側が確認されている。灰褐色ローム
層に黒褐色土の落ち込みが確認された。北側で土塁の盛土下にあった周溝
部分は比較的残りがよかった。規模は幅3.0m、深さ0.6mであった。

石蓋土壌 埋葬施設に関して、墳丘内では検出できなかったが、周溝内南東区で石蓋
土壌の存在を確認した。検出時は赤褐色ローム層に①層暗灰褐色土が最大で
25cm、最小で15cm埋め込まれていた。その
下から、板状安山岩が10枚重なって出土し
た。最下位の石材は、大きさが最大幅38cm、
最小幅20cm、長さ64cmで片袖型をしたもの
で、最大幅の方を南西に向けて置かれてい
た。さらに、順々に板石が積み上げられ、
最上位の北東と南西に小さな板石が1枚ず
つ置かれ、特に南西側に対角線で22cm程の
大きさがある六角形をした石が置かれ、こ
の石に赤色塗彩された痕跡も観察できた。
この土壌の主軸方向はN-63°-Eである。
土壌は2段に掘り込まれていた。石蓋土壌
の規模は1段目が長軸0.9m×短軸0.6mで、
深さ0.25mであり、2段目が長軸0.63m×
短軸0.32mで、深さ0.22mである。全体の
深さは0.47mである。

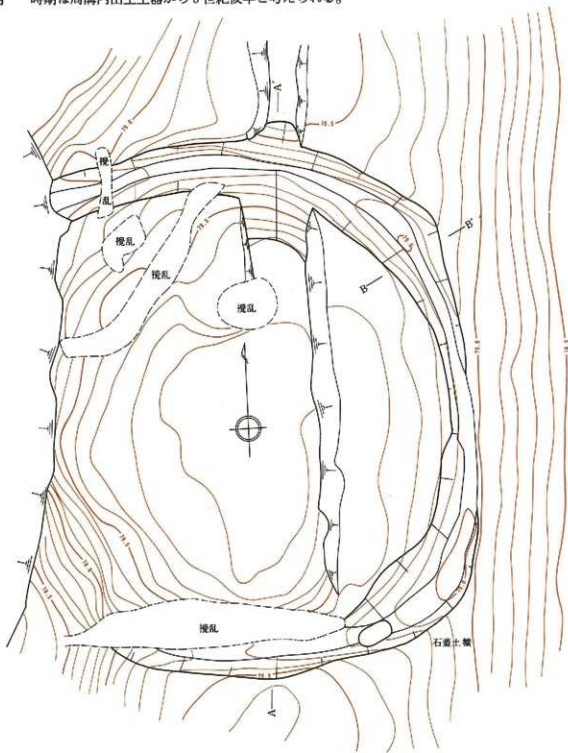
土層 ⑤~⑧層は後世の掘乱土である。①~④
層は周溝埋土である。



挿図81 宇野7号墳
土層断面図

遺物 出土遺物は土師器片と埴輪片で、周溝内北東区では高環の坏部（Po237）が石蓋土壌上から西2m以内に破砕して出土し、③層を掘り下げ中に埴輪（Po238）が出土した。北東区では接合できなかったが細かく砕け散乱した状態で赤色塗彩が施された甕も出土している。古墳から北に5m程離れ、土塁の東側に掘り込まれた開墾溝の付近から、甕口縁部（Po243）がかたまって出土した。

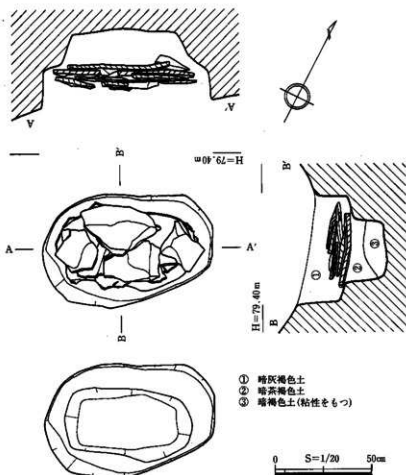
時期 時期は周溝内出土土器から5世紀後半と考えられる。



挿図82 宇野7号墳墳丘図

7. 宇野8号墳 (挿図84・85・111、図版34)

- 位置** 調査区南端 I 14・15グリッド周辺で標高79m～80m付近の尾根の先端に築造されている。宇野7号墳南側に位置する。
- 墳丘** 開墾による削平がひどく、北西側は切り崩され、墳頂部には梨穴が掘り込まれ残存状態が悪かった。残存部で墳形をみると円墳と考えられる。規模は残存部で測定し、墳丘規模は長径13.8m、短径11m以上で高さ0.8mであった。主体部は確認できなかった。
- 周溝** 周溝検出はT14(羽合町試掘)で周溝の北側を確認し、赤褐色ローム層で黒褐色土の落ち込みを追いかけながら行ない、周溝全体を確認したが、残存状態は非常に悪かった。周溝の規模は幅2.8m、深さ0.4mであった。
- 土層** ②③層が周溝埋土で、②層に土器が含まれていた。
- 遺物** 土器の出土は希薄であったが、周溝西側で黒褐色の中から同一個体と思われる須恵器壺(Po239)が2ヶ所にかたまって出土したが、接合はしなかった。
- 時期** 時期は周溝内出土土器から5世紀後半と考えられる。



挿図83 宇野7号墳石蓋土塚墳構造図

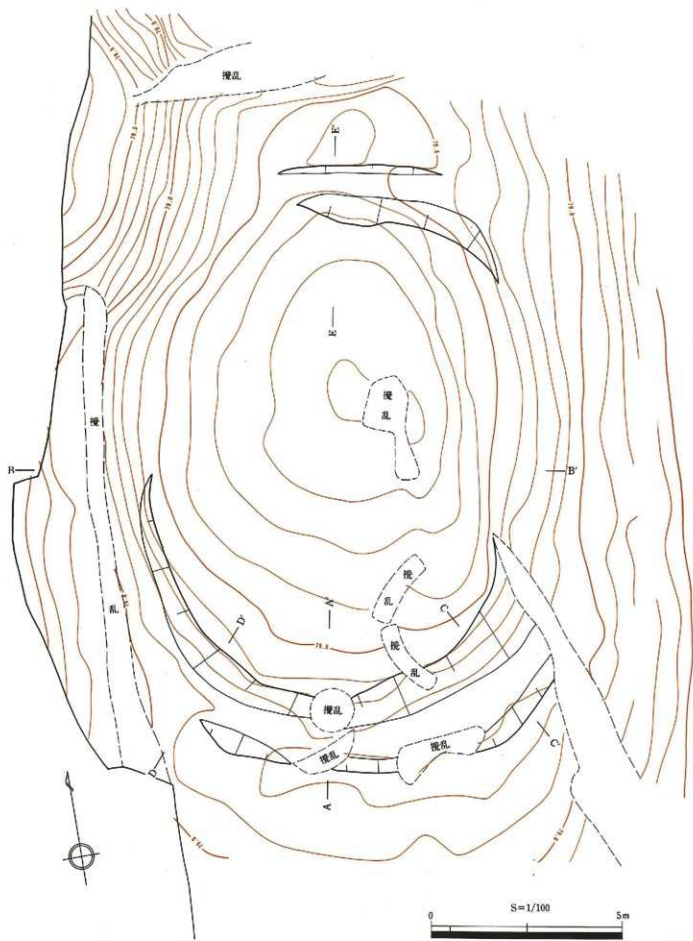
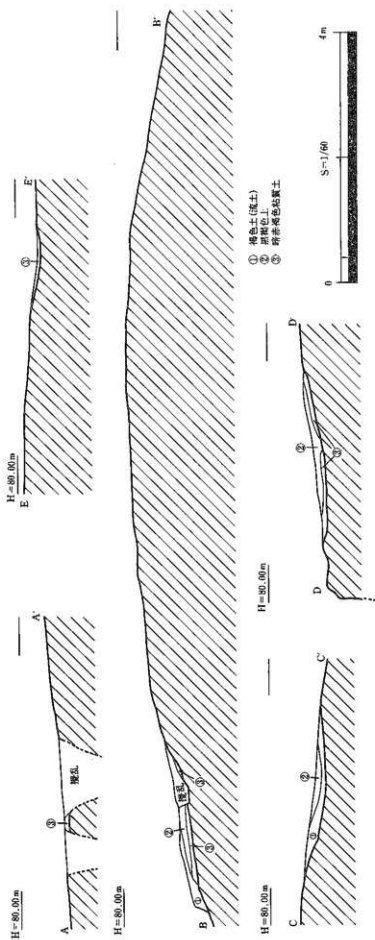
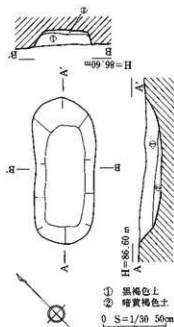


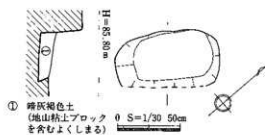
插图84 宇野 8 号墳丘图



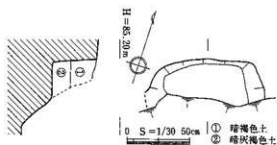
挿図85 宇野8号墳土層断面図



挿図86 宇野古墳群SK01遺構図



挿図87 宇野古墳群SK02遺構図



挿図88 宇野古墳群SK03遺構図

古墳名	墳形	直径(m)		埋葬施設	出土遺物	備考
		径(全長)	高さ			
宇野1号墳	円墳	14	1	—	—	—
宇野2号墳	—	—	—	—	—	再調査の結果古墳ではない
*宇野3号墳	円墳	10.3	0.48	—	—	1990年度調査
*宇野4号墳	円墳	—	—	—	須恵器直口壺	1990年度調査
*宇野5号墳	円墳	7.0	0.42	箱式石棺	—	1990年度調査
*宇野6号墳	方墳	5.5	0.25	割竹形木棺	—	1990年度調査
*宇野7号墳	方墳	12.5	0.9	石蓋土壇(円溝)	土師器高坏・埴輪	1990年度調査
*宇野8号墳	円墳	13.8	0.8	—	須恵器壺	1990年度調査
*宇野9号墳	—	—	—	箱式石棺	—	1990年度調査 土壇1

古墳名の前に*印が付してあるものは、発掘調査済みの古墳である。1・2号墳は鳥取県教育委員会「改訂 鳥取県遺跡地図」第4冊分 1976年による。3～9号は本報告書参照。

挿表1 宇野古墳群一覧表

埋葬施設	形態	規模(m)		主軸方向	遺物	備考
		(長軸×短軸-深さ)				
宇野5号墳主体部	箱式石棺	2.1×1.0	-0.52	N-84°-E	なし	底面に砂
宇野6号墳主体部	割竹形木棺	2.2×0.5	-0.38	N-51°-W	なし	
宇野7号墳周囲埋葬施設	石蓋土壇	(1段) 0.9×0.6 (2段) 0.63×0.32		N-63°-E	なし	
宇野9号墳主体部	箱式石棺	2.21×0.63	-0.47	N-65°-W	なし	底面に粘土
S K 01	土壇	1.18×0.46	-0.19	N-36°-E	なし	9号墳に伴う
S K 02	土壇	0.84×0.45	-0.34	N-48°-E	なし	
S K 03	土壇	0.96×0.33	-0.38	N-68°-E	なし	

挿表2 宇野古墳群埋葬施設他一覧表

第6章 遺構と遺物の検討

第1節 前方後円墳の築造について —南谷19号墳を例にして—

古墳の造営は、言うまでもなく綿密な企画と準備、そして構築に際して大量の労働力、高度な土木技術が必要である。とりわけ、前方後円墳の築造には、一般的に見られる円墳、方墳と比較しても、その整美な平面プランを見ても分かるようにより周到な企画・施工技術が必要と思われる。橋本誠一⁽⁹⁸⁾は、墳丘の築造には、

- ① 考古学的には明確にしがたいものの、計画の段階。
- ② 施工計画策定後、そのプランを実際の地表面に移す段階。
- ③ 実際に盛土、削平によって墳丘を形成する段階。
- ④ 外表施設を整える段階。

があったことを論じている。

①の段階については、綿密な地形測量をもとに上田宏範⁽⁹⁹⁾、石部正志、田中英夫、堀田啓一、宮川渉⁽¹⁰⁰⁾などの研究があり、墳丘の企画性および設計段階・施工段階で使用されたと思われる基準尺度の「畚」が推定されている。また、特に各地に存在するバチ形に開く前方部をもつ出現期の前方後円墳が奈良県・箸墓古墳の相似形となることが指摘されてきており⁽⁹¹⁾、各地の首長層と畿内との密接な関係があったと考えられている。

②段階以降は、発掘調査の成果として検討されている。南谷19号墳についても同様な築造段階があったものと思われるが、特に②・③の段階については調査の結果ある程度推定することができる。④の段階については葺石・埴輪等は確認されておらず、省略されたものと考えられる。

まず、この古墳の築造について注目される3つの点について考えてみたい。

区画溝

1点目は、19号墳には墳丘の周囲を巡る周溝とは別に、盛土される以前に南北のくびれ部を結ぶように、幅3.5mにわたって旧表土が後円部の円弧に沿うように削り取られていることである。盛土下埋葬施設をはさんで南側は深さ0.3mであるのに対し、北側は深さ0.9~1.4mと深くなる、断面逆台形状の溝が掘り込まれている。北側溝の埋め土を見ると、くびれ部北側墳端部は意図的に高く土手状に積み、さらに、盛土下埋葬施設の北側テラスと土手状の埋め土との間の部分を黄褐色系の土と黒褐色系の土で交互に積んで、ほぼ水平になるように埋めている状況が見られ、明らかに人為的な状況が見られる。

前方後円墳に見られる盛土以前の溝・段は、これまでに埋没溝、埋没周溝、区画溝と呼ばれてきたものである。

金子章は埼玉県児玉町・長沖8号墳の溝について検討し⁽¹⁰¹⁾、「(1)前方後円墳として構築する際の施工段階の作業のなかで採られた措置なのか、(2)当初円墳として設計、施工されたものが、ある段階で前方後円墳に設計変更された為なのか、(3)当初円墳として構築されたものが、後に前方後円墳に改築されたため」の3点の考えがあることを指摘し、(1)については後円部の周溝を一周させる必要はないとし、円墳が変更ないしは改築されたものと考えている。

これに対し、真田廣幸は鳥取県倉吉市・高鼻2号墳の溝について検討し⁽¹⁰²⁾、状況としては円墳を前方後円墳に改築したように見えるが、これは盛土作業に段階があるため、まず墳丘下の溝内縁に沿って盛土し、さらに仕上げの盛土が行われるものとし、前方後円墳を築造する過程のなかで採られた措置と考えている。

古墳名	所在地	墳形 墳丘規模	墳丘下溝規模		溝形態	内部主体	時期(7)
			幅(m)	深さ(m)			その他
南谷19号墳	鳥取県東伯郡羽合町南谷	前方後円墳 全長32m 後円部径19.2m	3.5	0.9~1.4	A類	箱式石棺	6世紀前 M T 15 盛土下埋葬施設
高鼻2号墳	鳥取県倉吉市錦	前方後円墳 全長26m 後円部径17.7m	2.2	0.6	A類	箱式石棺	6世紀前 MT15~TK10
西穂波16号墳	鳥取県東伯郡大栄町穂波	前方後円墳 全長32m 後円部径20m	4.0※	1.2※	A類	横穴式石室	6世紀後 T K 43
上種西14号墳	鳥取県東伯郡大栄町上種	前方後円墳 全長25m 後円部径20m	3.4※	0.32	A類	木棺	6世紀後 TK10~TK43
			2.0※	0.7	B類		
下種8号墳	鳥取県東伯郡人栄町下種	前方後円墳 全長28m※ 後円部径18m※	2.5	-	B類	箱式石棺	6世紀中 T K 10
別所1号墳	鳥取県米子市別所	前方後円墳 全長27m 後円部径18m	4.0	0.42	A類	横穴式石室 (2基)	6世紀後
陰州37号墳	鳥取県米子市陰田	前方後円墳 全長22.5m 後円部径15.5m	3.2	0.3	A類	横穴式石室	6世紀後 T K 10
長瀬高浜遺跡 10BSD03-05-06	鳥取県東伯郡羽合町長瀬	前方後円墳 全長30m 後円部径17m	2.5~4.0	-	A類	-	-

※は報告書図面で測定

図表10 区画溝を有する前方後円墳（鳥取県内）

また、植野浩三は鳥取県大栄町西穂波16号墳について検討し⁽⁶⁰⁾、自然堆積で埋まった状況が見られないことより墳丘を後円部と前方部に区画し、後円部の盛土を行うための目安となる地割りのために掘り込まれたものと考えている。

以上をまとめると円墳を変更・改築したものか、前方後円墳築造の段階の一工程とする2つの考え方になるが、南谷19号墳については、金子氏による(2)の可能性はあるものの、円墳を改築した状況は窺えず、前方後円墳築造の一段階で採られた措置と考えたほうがよいと思われる。さらにこの溝の性格を考えるならば、後円部の盛土の目安としての地割りのために掘り込まれたものと考えられ、他の古墳についても同様の性格があったものと思われる。

この種の溝の名称については、植野氏にならって以下区画溝と呼ぶことにする。なお、19号墳には後述するが性格を異にする2種類の溝があり、盛土下埋葬施設をはさんで南側に残る浅い溝を一次区画溝、北側の深い溝を二次区画溝と区別することとした。南谷19号墳と同様に区画溝をもつ前方後円墳は、管見に触れるかぎり17例あり、鳥取県内だけでも、南谷19号墳・高鼻2号墳・西穂波16号墳・上種西14号墳・下種8号墳・別所1号墳・陰田37号墳・長瀬高浜遺跡10BSD05・06の8例が知られている⁽⁶⁰⁾。これらの区画溝の形態を見ると、(A)後円部の円弧に沿ってくびれ部を連結するように弧状に入るもの、もしくは方形になるもの、(B)前方後円形に区画するものに大きく分けることができ、南谷19号墳は前者に含まれる形態になると思われる。

近年になり、前方後円墳のほかに円墳にも溝・段が見られることが分かってきた⁽⁶⁰⁾。前方後円墳のものと同様のものと機能的に違いがあるのかどうかは今後の課題としたいが、いずれも墳丘構築の段階の一つとして採られた工程と考えてよいだろう。

南谷19号墳の区画溝は同様の役割を持っていたと考えられるのであるが、単に区画のための溝であれば、一次区画溝のように浅いもので十分にその役目を果たすと思われ、二次区画溝のように1m以上も掘り込む必要はないと思われる。二次区画溝の底面は緩やかに南側に

むかって高くなっていることと、19号墳の墳丘基盤は旧表土面を2m以上も削り出していることに注目すると、二次区画溝は後円部墳丘築造に当たって、北側周溝底と後円部墳丘基盤上を結ぶ通路の役割を果たしたものと考えると解決すると思われる。つまり、一次区画溝は後円部を区画するための機能し、二次区画溝は後円部盛土作業のために使った通路（作業道）として、底面に傾斜を持たせながら掘り込んだものとするのである。二次区画溝の底部の平面形は円弧を残していることから、一次区画溝内縁（後円部旧表土面）を意識して掘り込まれ、区画溝の役目を残していると考えられる。

**後円部旧表
削り部分** 2点目は、後円部のほぼ中央部に4.0m×3.2mの不整な方形に旧表土が削ぎ取られた部分が見られることである。このような削ぎ取りをもつ古墳の類例を待ちたいが、この削ぎ取り部分が何のためにあるのかを検査してみたい。

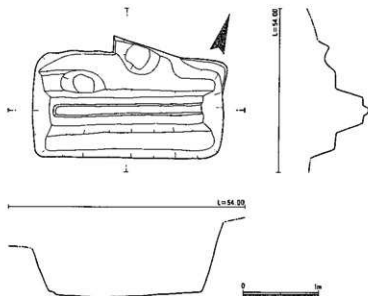
まず考えられることは、この部分の上方は、のちに主体部が作られる場所であり、主体部の中央が削ぎ取り部分にあることから、主体部を後円部の中央に作るための目印として削ぎ取ったものとするのである。

次に考えられることは、一次区画溝の基準点であるということである。区画溝を実際に地面に掘るためには、どこかを基準にして区画溝の輪郭を描いたと思われる。19号墳の場合、一次区画溝内縁の中心を求めると、ほぼ削ぎ取り部分に集中することから、この削ぎ取り部分を中心にして後円部を区画するための一次区画溝内縁を描き、墳丘基盤を円錐台形状に削り出していったものと考えられる。後円部中央の旧表土削ぎ取りは、榎根氏による②段階の最も初期の段階に当たるものと考えられる。なお、一次区画溝外縁で中心を求めると削ぎ取り部分には集中せず、内縁を削り出すことに重点が置かれていたと考えられる。

**盛土下
埋葬施設** 3点目は、墳丘盛土以前に埋葬施設が掘り込まれていることである。この埋葬施設については、①19号墳築造以前のもの、②19号墳築造以後のもの、③19号墳に伴うものの3つの考え方がありと思われる。①については、この埋葬施設に伴う墳丘の存在が19号墳以外には考えられないこと、つまり、この埋葬施設を中心にして築造される墳丘を想定すると、円墳であればその規模は19号墳の全長に匹敵する径30m以上なければならないが、尾根幅が27mしかないという状況を考えてと構造が困難になる。方墳・前方後円墳を想定しても同様に築造は困難と考えられる。また、30m以下の墳丘が造られた場合においては、19号墳の旧表土面には他の古墳が築かれた痕跡が見られないことでも①のように考えることは困難であろう。

②については、19号墳築造後に掘り込まれた土層状況が見られないことより、このようには考え難い。よって③

と考えるのが妥当であると思われる。また、後円部に造られた主体部とほぼ同じ主軸方向となることからこの埋葬施設は19号墳に伴うもので、墳丘築造計画に盛り込まれたものと考えたほうがよいであろう。この埋葬施設は、二次区画溝が通路として機能しな



挿図89 京都府大宮町小池古墳群2号土室遺構図(報告書より転載)

くなった後に掘り込まれたものと考えられ、二次区画溝底面が一次区画溝底面にむかって傾斜するために、北側墓壇壁を造ることができなかったものと思われる。

盛土下埋葬施設の墓壇底には、主軸方向に平行して幅30cm、深さ15cmを測る断面逆台形状を呈す溝が掘り込まれている。この溝の埋土を見ると、中央に黒褐色土層(㊸㊹層)が入り込んでいる。この層は自然に入り込んだものと思われ締まりがない。このことにより、この溝は本来は空洞で、墓壇底に敷かれたと思われる木板が腐朽していった可能性がある。同様な溝は京都府大宮町・小池古墳群?土土墳⁽⁶⁾にも見られ、朴美子氏によるⅡC₃類に分類され、排水・排湿のために掘られたものと考えられている⁽⁶⁾。19号墳盛土下埋葬施設の溝は、排水のために掘られたものと考えてよいだろう。

以上南谷19号墳の注目される点を整理したが、以上のことを踏まえ、この古墳の築造工程を推定すると、次の段階があると思われる。

I 段階 南谷19号墳を築造するに当たって、まず築造場所が選ばれる。このことについては南谷古墳群の一支脈7号墳から23号墳全体を見渡さなければならない。13号墳は調査されていないが、立地が19号墳より高い位置にあり、立地状況を見ると19号墳より古い様相を呈す。20号墳も周溝が19号墳に切られることから、19号墳より古い築造と考えられる。19号墳は13号墳と20号墳との間の空間に築造され、13号墳からは約30m離れるが、20号墳とはほぼ接するところに立地していることから、13号墳に制約された立地状況を示す。

II 段階 後円部の中央部に当たる部分を剥ぎ取り、区画のための中心点を設け、この点を中心にして一次区画溝が掘られ後円部を区画する。

III 段階 周溝を掘り、墳丘基盤を前方後円形に削り出すと同時に二次区画溝を掘って通路とし、後円部盛土が行われ主体部が掘り込まれる。後円部盛土がある程度終了した段階で盛土下埋葬施設が掘り込まれる。

盛土の状況を細かく見ると、後円部は基盤層自体から東から西へ、南から北へ緩やかに下って傾斜しており、まずこのレベル差を補うために盛土が行われ、墳丘基盤を水平に整える。北側では㊵～㊷層を、西側では㊸㊹層を用いているが、北側の層は締まりが悪く、西側の層はよく締まるという違いが見られ、西側(前方部接合部側)を丁寧に造る意識が見られる。また、㊸～㊹層で、この西側基盤土層を押さえたものと思われる。

基盤面が整えられると、粘質の土を使って墳丘斜面側を高くするように、北側では㊸㊹㊺層を、南側では㊻㊼㊽層を、西側では㊾㊿層を積む。これは、盛土が流失するのを未然に防ぐための処置と思われる。この段階でも東側はレベルが高く、ごく薄い盛土しかされない。墳丘斜面側が高く盛られるのに対し、中央部は薄く盛られるため、中央がへこんだ状況を示す。このへこんだ部分には黒褐色系の土と赤褐色系の土を互層状に積んでいる状況が見られる。

主体部はこの中央部のへこんだ部分が盛られた後に掘り込まれる。

IV 段階 盛土下埋葬施設・二次区画溝の埋め戻し、前方部の盛土が行われる。

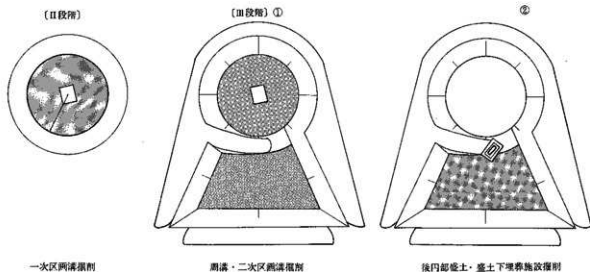
可能な限り細かい過程を復元すると、まず盛土下埋葬施設の埋め戻しが行われる。木蓋が置かれた後に一段目テラスを墓壇の中心にむかって傾斜するように埋め、㊻層で木蓋が隠れる程度に埋める。テラス埋め戻し土(㊼層)上には、地山が風化したような㊽層が薄く存在するが、この地山風化層は、二次区画溝底部においても見られ(㊾層)、この段階で一旦放置されたような状況が窺われる。盛土下埋葬施設、二次区画溝が掘り込まれている基盤層は大山倉吉軽石層で、短時間の雨水によっても風化しやすいものであるため、この放置の期間はごく短期間のものであったと思われる。

前方部墳丘の盛土は、二次区画溝が埋め戻されるのとはほぼ同時に行われている。後円部同

様西側墳丘斜面側を⑦⑧⑨⑩⑪層で、南側を⑫⑬⑭⑮層で高く積む。また、区画溝側も⑨層を土手状に高く盛る。

さらに二次区画溝を埋め戻すのであるが、くびれ部北側墳端は盛り上げることで土砂の流失を防いでいる。さらに、盛土下埋葬施設の北側テラスのレベルにあうようにほぼ水平に埋め戻す。この埋め戻しは、前方部墳丘盛土(⑨層)の後に行われる。さらに⑫層～⑮層が盛られるが、⑫⑬層のレベルはほぼ後円部・前方部の旧表土レベルになり、⑭層中には二次区画溝上にだけ破砕した石材が散在する。この層までを埋葬施設・区画溝の埋め戻し土と考えることができ、⑯～⑳層は前方部墳丘盛土とすることができる。

以上、南谷19号墳の築造過程を推定したのであるが、盛土下埋葬施設がなぜあのような位置に掘り込まれたのか、また、墳丘下の溝・段についても十分な検討ができないままになった。南谷古墳群における19号墳の相対的な位置については来年度以降の調査に期待するとともに、今後の課題としたい。



挿図90 南谷19号墳築造段階

第2節 弥生土器・土師器のまとめ

今回の調査で出土した土器の内、比較的まとまって出土した弥生土器、土師器の甕形土器、甕形土器、高環形土器、器台形土器について分類を行なう。括弧内は出土位置を表わす。遺構名の前に付してあるアルファベットは遺跡名を表わす。Hは南谷ヒジリ遺跡、Mは南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群、Uは乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群である。文章中で土器番号は、Poを省略して用いる。最も出土量の多かった甕形土器から分類を行なう。

1. 甕形土器

甕は口縁部の形態を中心に分類を行なった。甕Aは、直立・外傾・外反してたちあがる複合口縁をもつ甕、甕Bは、複合口縁を呈するのであるが、口縁部下端の稜が鈍く、非常に分厚い感じであり甕Aとは一見して異なるものである。甕Cは内傾する複合口縁をもつ甕、甕Dは「く」の字状の口縁をもつ甕、甕Eは内湾しながらたちあがる口縁をもつ甕である。

甕Aはさらに複合口縁の形態でA1～A4に、甕Dは口縁部の厚さでD1・D2に細分した。甕Aはさらに、口縁部内外面の施文・調整技法で細分した。その細分基準は、口縁部外面にa擬凹線を施すもの、b平行沈線(波状文)を施すもの、c平行沈線(波状文)を施した後にナデ消すもの、d平行沈線(波状文)を施した後にミガキ消すもの、eヨコナデのみ

で仕上げるもの。口縁部内面を①ヨコナデするもの、②ミガクものである。

(1) 壘A

A1 外傾して短く立ち上がる口縁をもつもの。口縁部は厚ぼったい感じである。口縁部外面c、dに該当する個体はない。

a①: 17 (HSI02埋土) である。頸部以下を欠く。

a②: 95 (HSK02床) である。95は頸部にもミガキが認められる。107 (HSK03埋土) は外面に擬凹線があることは確認でき、aに属するのであるが、内面は風化が激しく不明である。

b①: 169 (MSK05埋土) である。

b②: 96 (HSK02埋土)、106 (HSK03埋土)、109 (HSK03埋土)、118 (HSK04埋土) である。109は外面の風化が激しいのであるが、わずかに平行沈線の痕跡が残る。106、109は辛うじてミガキの単位がみられる。118は丁寧にミガク。

108 (HSK03埋土) は、風化が激しく、外面に平行沈線が微かに残り、bに属するが、内面は不明である。

e①: 131 (HSD01埋土) である。

その他、24 (HSI04床)・77 (HSK01床) はA1に属するが、風化のため調整不明。

A1は、口唇端は丸く、口縁部下端は下垂しても極わずかで、ほとんどそのまま屈曲する。96は丸みをもって屈曲し、A1の他の個体とは異なる。肩部の形状が分かるものは108・107・169で、いずれも張りがなく極なだらかにくだる。108は、肩部に刺突文を巡らす。169は貝殻腹縁による平行沈線を肩部に施す。内面のケズリは頸部直下から行われ、その方向の分かるものは頸部から肩部までは、左方向である。底部は不明である。

A2 ほぼ直立して立ち上がる口縁をもつもの。口縁部外面a、c～eに該当する個体はない。

b①: 105 (HSK03埋土中)、159 (MSI01埋土中) である。

b②: 150 (HSI01埋土) は、内面ヨコナデされるが、一部にミガキがみられる。155 (MSI01中央ピット内) は、口縁部内面全面をミガク。

口唇端は丸い。口縁部下端は、159がそのまま屈曲する他は、わずかに下垂する。肩部の形状が分かるものは、150のみである。肩部に張りはなく、極なだらかにくだる。150の肩部には平行沈線、155の肩部は風化しているのであるが、波状文の痕跡が認められた。内面のケズリは頸部直下から行われ、頸部から肩部までは左方向である。

A3 外傾して立ち上がる口縁をもつもの。口縁の幅は拡張される。外反気味のものもある。口縁部外面aに該当する個体はない。

b①: 73 (HSK01床)、117 (HSK04埋土)、153 (MSI01埋土)、158 (MSI01埋土)、170 (MSK05埋土)、222 (M19号墳黒色土層中) である。158の口唇端は、おさえたような面を持つが、その他は丸い。口縁部下端はそのまま屈曲するかわずかに垂れる。肩部の形状は分からない。内面のケズリは、頸部直下から始められる。頸部から肩部の間は、ケズリの方向は左方向である。

b②: 70～72・75・76 (HSK01床)、91・92・94 (HSK02床)、114～116 (HSK04床)、である。口縁部から頸部にかけてヨコ方向のミガキがされる。口唇部からミガかれるものはなく、ミガキの単位が確認できるのは、口縁部下位から頸部にかけてである。口唇部付近はミガキのあとナデられたのか、口唇部付近はもともとミガかれなかったのか全個体についてははっきりとはしないが、ミガキ後にミガキがナデ消されたと思われる個体もある。72、116は口縁部に波状文を施す。いずれも口唇端は、おさえたような面をもつ。口縁部下端ははず

れも下垂する。肩部はなだらかながらも、A1・A2に比べて張りをもち、平行沈線と波状文によって飾られる。内面のケズリは、頸部直下から行われ、胴部までは左方向である。口縁部に平行沈線が施されるものは、70、71、75、76、91、92、94、114、115である。口唇端は丸い。口縁部下端は、71以外の個体は下垂または斜め下方に垂れる。全体が把握できるのは70のみである。肩部の張りは小さく、平行沈線で飾る。胴部から底部にかけてミガキがみられる。底部は小さな平底である。内面のケズリは、頸部直下から始まり、胴部下位まで左方向、以下は下→上のケズリである。

cに属するものはbに比べて外反気味に立ち上がるものが多い。

c①：74 (HSK01床)、163 (MSK04埋土)、164 (MSK04埋土) である。163は、口縁部外面に平行沈線後波状文を施し、さらにその上をヨコナデする。口唇端は、163、164は、おさえたような面をもつ。74は丸い。口縁部下端は斜め下方か下に垂れる。

c②：79 (HSK01床)、93 (HSK02床)、104 (HSK03埋土)、156 (MSI01中央ビットおよび柱穴内) である。104は内面のミガキもナデ消す。79は波状文をナデけす。口唇端は丸い。口縁部下端部は、斜め下方または下方に垂れる。体部以下の形状は、不明である。内面のケズリは、頸部直下から始まる。方向は左方向である。

d①：該当する個体はない。

d②：103 (HSK03床)、151・152 (MSI01埋土) である。103の外面のミガキは部分的である。151、152は、口唇端をおさええる。口縁部下端は、151は外方に突出し、152はわずかに下垂する。内面のケズリは頸部直下から始まり、その方向は左方向と右方向のものがある。103は、ケズリの後、頸部直下をミガク。

e①：162 (MSI02埋土)、165・166 (MSK04)、171 (MSK05埋土)、173 (Mビット群1) である。171を除いて、口唇端は丸いが、やや引き出されたようになる。口縁部下端は、そのまま屈曲するか、外方にわずかに突出するものがほとんどである。179は大きく外傾する。171はやや特異で、立ち上がりが高く外傾度も小さく、口唇端におさえたような面をもち、内面にハケ状の工具痕を残すヨコナデがされる。

e②：該当する個体はない。

A4 薄く外反気味に立ち上がる口縁部をもつもので、全てe②である。

全体を復元できたものはない。口縁部下端は外方に鋭く突出する。内部のケズリは、頸部直下から始まり、丁寧に器壁が薄くなるまでケズる。ケズリは頸部直下から胴部下位まで右方向が主流である。口唇端の形状によりイ 口唇端が引き出したように先細り気味でおさえたような面をもたない。やや丸いものもある。ロ 口唇端をわずかにおさええるが、ハほどの面をもたない。ハ 口唇端をおさええるか外方へつまみ出すかするため、口唇端に面をもつに細分する。

イ 5・11 (HSI02床)、15 (HSI02埋土)、27・28 (HSI04埋土)、54・56 (HSI05埋土)、231 (USI01埋土) である。48は風化していて断言はできないが、aに属するものだと思う。

ロ 6・10 (HSI02床)、14 (HSI02埋土)、44 (HSI05床)、137 (H遺構外) である。

ハ 7・8・12・13 (HSI02床)、16 (HSI02埋土)、42・43・45・47・49 (HSI05床)、50～53・55 (HSI05埋土)、132 (H遺構外)、230 (USI01床) である。

(2) 甕B 口唇端は丸いものと、強いヨコナデによって外面に面をもつものがある。口縁部下端は、外方に鈍くわずかに突出する。外面をヨコナデで仕上げる。25 (HSI04埋土)、78 (HSK01埋土)、110 (HSK03埋土)、119 (HSI04床)、120 (HSK04床) がある。内面は、78、25を除き、ハケ状の工具痕を残す強いナデの後粗いミガキをほどこす。Po78は小型の甕で、

胎土も特異である。焼成も他の土器に比べて堅い焼き上がりである。口縁部外面は、平行沈線後ナデる。

(3) 甕C 口縁部内外面は、全てe②である。9 (HSI02床)、57 (HSI05床)、58 (HSI05埋土)である。58は風化が激しい。全体を把握できるのは、8のみである。口縁部下端は外方に突出する。胴部はよく張り、胴部最大径が器高をしのぐ。外面肩部ナデ、胴部中位ヨコナメハケ、胴部下位から底部はタテハケ後ナデ。内面は頸部直下から底部近くまで右方向のケズリ。底部に指頭圧痕が見られる。底部に焼成後穿孔する。

(4) 甕D D1は口縁部が薄手のもの、D2は口縁部が厚手のものである。

D1 口縁部内外面は、全てe②である。61 (HSI05埋土)、128 (HSD01埋土)、129 (HSD01埋土)、135 (H遺構外)、233 (USI01埋土)、234 (USI01床)がある。233は、口縁が外反して立ち上がり、外面頸部直下に、タタキの痕がみられる。

D2 口縁部内外面は全てe②である。213・214 (M22号墳周溝)である。肉厚の土器で、口縁部は外反しながら大きく開いて立ち上がる。全体を復元できたものはなかった。頸部以下をケズる。

(5) 甕E 口縁部内外面は、全てe②である。133 (HSD01)、211 (M21号墳周溝内)がある。133は、胴部はよく張る。底部は不明であるが、丸底を呈しているものと思われる。体部外面ナデ。体部内面は、頸部直下にはナデ、以下底部近くまで右方向のケズリである。211は、口唇端は、わずかに内側に肥厚する。体部は外面ナデ、球状によく張る様相を呈する。内面のケズリは頸部やや下から始まり、胴部中位までは左方向である。以下は不明である。

2. 壺形土器

壺の資料は少ない。口縁部の形態を中心にA～Cに分類した。壺Aは複合口縁をもつもの、壺Bは直立気味に立ち上がる頸部から屈曲して短く直立してたちあがる口縁部をもつもの、壺Cは小形丸底壺である。壺Aは複合口縁の形態でA1～A3に細分した。

(1) 壺A

A1 130 (SD01埋土)である。口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部から頸部まで内外面ともミガク。肩部外面はタテハケ後、ヨコ方向にミガク。

A2 102 (HSK03埋土中)である。A1に比べて口縁部は拡張される。口唇端は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部外面に平行沈線を施す。口縁部内面は、口唇部辺りを除き丁寧にミガク。内面のケズリは、頸部直下から始まり、頸部直下ではその方向は左である。

A3 2 (HSI02床)、37・38・39・40 (HSI05床)、41 (HSI05埋土)である。38、39は、他に比べて大きく開く。3・4 (HSI02床)、22 (HSI04床)、23 (HSI04埋土)、136 (HSD01埋土)は口縁部が完存していないが、A3に属するものと思われる。頸部に突帯を有するものとそうでないものがある。頸部に突帯を有するものは、40のみである。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げる。2、37、38、40の口唇端は、壺A4ハの形状と同じである。41は、壺A4口の口唇端と同じ形状である。136は、平坦面に凹線状の窪みをもつ。頸部外面は、タテハケのもの37、ナデのもの3、4、40、41である。頸部内面は、タテ方向のナデである。肩部以下の形状が分かるのは、37のみである。肩部は張り気味であり、ヨコハケを施す。胴部はタテヨコのハケメが確認できる。内面のケズリは頸部下から行われ、胴部中位までしか確認できないが、その方向は右方向である。

(2) 壺B 体部がよく張る185 (M19号墳周溝)と長胴気味の183 (M19号墳周溝)がある。

185は完形品である。口縁部はヨコナデで仕上げられ、その立ち上がりは短い。屈曲部は、鈍く外方に突出する。頸部から肩部にかけてナデられ、胴部タテハケ後にヨコハケを少々施した後に、軽くナデる。底部は丸い。内面は、頸部下から胴部中位まで右方向にケズられ、以下は下→上にケズられる。口縁部から頸部内外面、肩部から胴部外面に赤色塗彩痕が認められる。

183は、口縁部曲部は外方へ突出せず、鈍い稜をなす。頸部から体部はナデ。内面のケズリは頸部からやや下る辺りから右方向にケズる。底部は不明である。

口縁部から胴部内面に赤色塗彩痕が認められる。

(3) 壺C 18 (HSI02埋土) の1点である。

3. 高環形土器

高環は、坏部と脚部が接合できたものはほとんどなかった。坏部の形状を中心に分類する。高環Aは径の大きい浅い椀状の坏部をもつもので、口縁部は屈曲した後に内傾してたちあがるものである。高環Bは、浅い坏部で屈曲した後に外反して立ち上がるもの、高環Cは浅い坏部で屈曲せずに口唇部にいたるもの、高環Dは、深い椀状の坏部をもつもの、高環Eは、屈曲した後に外傾してたちあがる深い坏部をもつものである。

(1) 高環A

98 (SK02床) のみである。98はほぼ完形まで復元することができた唯一の個体である。口縁部は丸い。筒部は直線状にわずかに広がり、裾部は筒部から屈折して広がる。裾端は肥厚する。裾部には円形透かしが2個1対で3方に穿たれる。坏部は風化が激しく調整不明であるが、内面にわずかにミガキが残る。筒部は、外面にタテ方向のミガキ、内面はケズリ後ナデ。裾部は、外面ヨコナデで、内面左方向のケズリである。

(2) 高環B

29 (HSI04床面) 1点のみである。脚部を欠く。内外面ともミガかれる。

(3) 高環C

風化が進んでいるものが多い。1 (HSI01床)、20 (HSI02床)、30 (HSI04埋土)、232 (USI01ピット内) である。内湾しながらそのまま口縁部にいたる1、20、232と口縁付近で外反する30がある。坏部外面にはタテハケが確認できる。口唇部は、引き出したように先細る30と上端をおさえて面をもつ1、17がある。232は風化のため不明。

(4) 高環D

坏部の径が小さい184 (M19号墳周溝) の1点である。深い椀状の坏部をもつ。脚部は短く、外反して開く口縁端は、外傾する面をもつ。裾端は肥厚しない。坏部は内外面ともヨコナデで仕上げる。脚部は外面ヨコナデ、内面ケズリ後ナデ。

(5) 高環E

237 (U7号墳周溝内) の1点である。内外面ともヨコナデで仕上げる。ヨコナデの下にわずかではあるが、ハケメが認められる。

(6) 脚部

脚部は、スムーズに広がる円錐状の脚部で中空のもの：63 (HSI05床)、64 (HSI05埋土)、直線的に広がる中空の脚部で、屈曲して広がる裾部を持つもの：21 (HSI02床)、31 (HSI04床)、中実の脚部のもの99 (HSK02床) がある。

4. 器台形土器

今回の調査で出土した器台は全て鼓形器台といわれるものである。器台A受部・脚台部に平行沈線を施し筒部が細くて長いもの、器台B受部・脚台部が薄く外反し、筒部が短いものに分類した。

(1)器台A

83・84・85 (HSK01埋土)、100 (HSK02床)である。84は受部から筒部まで残存し、受部内面と筒部外面をミガク。また筒部外面に平行沈線を施す。83は、脚台部と筒部が残存する。84に比べて小さい。筒部外面に平行沈線を施す。85、100は、脚台部のみの破片である。85は、脚台部外面、平行沈線後ナデる。

(2)器台B

32 (HSI04埋土)、65 (HSI05床)、66 (HSI05焼け土)、67 (HSI05埋土)である。いずれも受部を欠く。受部下端・脚台部上端は外方に突出する。66～67の脚台端部は、甕A4ハの形態と同じである。32は脚台端部を欠く。

5. 土器の時期

以上、土器の分類を行なった。この分類に基づいて、遺構ごとに土器の構成をみてゆく。床面出土の土器が比較的多かったHSI02、HSI05、HSK01、HSK02、HSK04、MSK04、MSI01を対象とし、床面出土の土器のみをあつかう。HSI02は甕A3、甕A4ロ～ハ・C、高環C、直線的に広がった後に屈曲して広がる高環脚で構成される。底部は出土していない。HSI05は甕A3、甕A4ロハ・C、器台B、大型の甕形土器、HSK01は甕A3b①・A3b②・A3c①・A3c②・B、器台A、蓋、小さな平底の底部、HSK02は甕A3b②・A3c②、高環A・中突の脚、器台A、HSK04は甕A3b②・B、小さな平底の底部、MSK04は甕A3c①・A3e①、小さな平底の底部、MSI01は甕A2b②・A3b①・A3c②・A3d②、蓋、椀状の手づくね土器で構成される。

HSK01の土器は、完形で出土したものはないが、土坑の床面でかたまって出土した資料である。甕AはA3のみである。外面の平行沈線をナデ消す個体とナデ消しを行なわない個体がある。内面は2個体を除いてミガク。底部は小さな平底である。HSK02の甕はA3、器台はA1のみ、MSK04の甕はA3のみ、MSI01の甕はA3・A2であるが、A3が主流でありHSK01と同じ傾向である。HSK01、HSK02、MSK04、MSI01床面出土の土器は、鳥取県倉吉市阿弥陀大寺遺跡Ⅲ期²⁶～鳥取県倉吉市上種第5遺跡貯蔵穴7号・住居跡27号²⁷出土の土器、青木編年Ⅲ期の新段階²⁸の時期と併行すると考える。

HSI05出土の土器も、完形で出土したものはないが、床面出土の土器は床面上で一括出土した資料である。頸部に突帯をもつ40は壁近くで口縁を下に向け、潰れた状態で出土した(図版5)。甕は全てA4・CでありA4の口唇端の形状は端部をおさえるが、内外に肥厚しないロ・ハのみである。甕A3の口唇端も甕のそれと共通する。HSI02も甕はA3、甕はA4・CでHSI05とおなじであり、A4は口唇端が先細り気味のA4イが2個体出土するが、口唇端をおさえるb・cが中心であり、HSI02とHSI05出土の土器は、同じ時期のものであると考える。HSI02、HSI05床面出土の土器は、甕、甕、器台より島根県八束郡出雲町大木権現山1号墳出土の土器²⁹、青木編年のVVI期³⁰に併行するものであると考えられる。

第3節 まとめ

1. 集落

今回の調査では、南谷ヒジリ遺跡（以下「ヒジリ」と略称）で竪穴住居跡5棟（弥生時代終末1・古墳時代前期3＝青木VI期・不明1）、土坑4基（弥生時代後期後半＝青木III期新段階）、南谷夫婦塚遺跡（以下「夫婦塚」と略称）で竪穴住居跡2棟（弥生時代後期後半）、土坑10基（弥生時代後期後半7、不明3）、乳母ヶ谷第2遺跡（以下「乳母」と略称）で竪穴住居跡1棟（古墳時代前期＝青木VⅦ期）を確認することが出来た。

このうち土坑について見てゆくと、ヒジリで確認された土坑は断面形が袋状を呈する「貯蔵穴」といわれるものであった。夫婦塚の土坑は、弥生時代のもので、SK04を除き貯蔵穴であった。夫婦塚の貯蔵穴は、同遺跡の竪穴住居跡の時期と一致するのに対し、ヒジリでは異なる。ヒジリは、部分的な発掘調査でもあり、今回の調査区域の周辺で、弥生時代後期後半の竪穴住居跡が発見される可能性が高い。古墳時代前期のヒジリ竪穴住居跡・乳母ヶ谷竪穴住居跡と時期的に併行する貯蔵穴を確認することはできなかった。部分的な発掘調査という制約もあり、断言は出来ないものであるが、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間に貯蔵形態の変化があったと考えられなくもない。県内出土の貯蔵穴群を全て検討する時間的余裕はないのであるが、東伯郡大栄町上植第5遺跡においても、報告書に基づく、貯蔵穴といわれる土坑は弥生時代後期後半でその姿を消すことがいえる。貯蔵穴が食糧保存のための土坑であるとする、その消滅は食糧保存方法もしくは食糧管理方法の大きな変化と言える。それは、食糧とする作物の変化であるか、集団の中での食糧占有関係の変化であるかははっきりとしないのであるが、いずれにしても、古墳時代になると、食糧をいくつかの小規模な貯蔵穴群で保存管理することがなくなったと考えられる。

竪穴住居跡についてみると、羽合町管内では砂丘地（当時は草原地か？）で弥生時代前期・古墳時代前期（青木Ⅶ～Ⅷ期）の竪穴住居跡が発見されている。今回の調査は、長瀬高浜遺跡で欠落した時期の一部ではあるが、埋めることが出来た。また、集落の立地については、東郷池周辺の平野部分についての調査が皆無に近いので、一概には言うことはできないが、丘陵の奥まった所に立地する宇野第5遺跡で弥生時代中期の土器の散布が確認されていることから、弥生時代前期～中期にかけて丘陵の奥まった場所に集落が移動し、弥生時代後期、古墳時代前期（青木VⅦ期）にかけて丘陵上に位置しながらも、だんだんと丘陵の先端方向に集落の位置を移してきたことがいえる。古墳時代前期の青木Ⅶ期になると突然と集落は長瀬高浜＝海岸部に移し、大集落が営まれるようになる。この時期は、山麓の土器に替って畿内の布留式土器が出土する事が多くなる時期であり注目される場所である。海岸部→丘陵上→海岸部という集落の移動の要因は気候・政治・生産形態等考えられるのであるが、現在のところいずれとも断定できない。また、今回の調査も含めて、羽合町管内で集落全体を捉えた調査が行われていないことも考えると、集落の立地が海岸部→丘陵上→海岸部となるという仮説が今後の調査によって検証される必要がある。

2. 古墳群

今年度調査のうち、古墳については南谷古墳群中の5基（19～23号墳）、宇野古墳群中の7基（3～9号墳）の調査をした。南谷19号墳は、この古墳群中の唯一の前方後円墳で、前方後円墳築造計画に基づく一次区画画、盛土作業に使用されたと考えられる二次区画溝やその中央に埋り込まれた6世紀前半（山本編年Ⅱ期）の盛土下埋溝施設等、大冢興味深い施設を確認することができた。また、この時期の竪穴である東郷町埋見中ノ谷竪穴のものと同時期で、土器の胎土分析等の今後の調査結果によっては、その流通関係を知る上で貴重な資料になるであろう。南谷21～23号墳は径11～15mを測る円墳で6世紀後半（山本編年Ⅲ期）である。その他、19号墳と20号墳の関係は、20号墳の時期決定する遺物がないため明確ではないが、19号墳の南方部西側の周溝が20号墳の墳丘に制約されて開いていることから、20号墳は6世紀前半より遅ると考えられる。

宇野古墳群中の7期の古墳は、径10m前後の円墳5期、一辺10m前後の方墳2期を確認することができた。これらの古墳は尾根を有効に使い、2～3期の古墳を小単位とする群構成を示した。4号墳から5世紀後半（山本編年Ⅰ期）の須恵器、7号墳から5世紀後半と考えられる土師器、8号墳からも5世紀後半（山本編年Ⅰ期）の須恵器が出土しており、時期的に遡る長瀬高浜遺跡の古墳群との関係を探る上で良い資料を提供することになった。

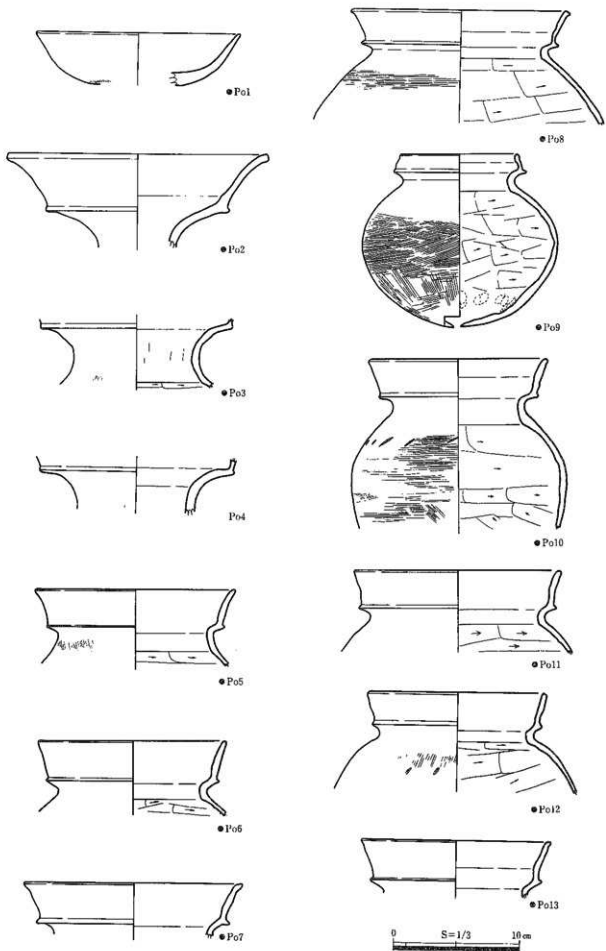
3. 遺構外遺物

ここでは、今年度調査の全遺跡における遺構外遺物として検出したものについて述べることにする。まず、南谷ヒジリ遺跡（S102、SK02・04、SD01）の埋土中で縄文時代中期の土器（Po149～Po149）、南谷夫婦塚遺跡の南谷19号墳後円部盛土下旧表土中で縄文時代晩期の土器（Po221）が出土し、さらに、同旧表土中で弥生時代後期の土器（Po222、Po223）が出土した。次に、南谷古墳群の南谷19号墳耕作土中で時期不明の土師質土器（Po224、Po225）が、南谷21～23号墳付近の表土及び盛り土掻き出し土中で、山本編年Ⅲ期のものと考えられる須恵器坏蓋（Po226、Po227）、須恵器坏身（Po228）、須恵器甕（Po229）が出土した。また、南谷ヒジリ遺跡の耕作土中で須恵器片（Po140、Po141）、青瓷片（Po139）が出土した。

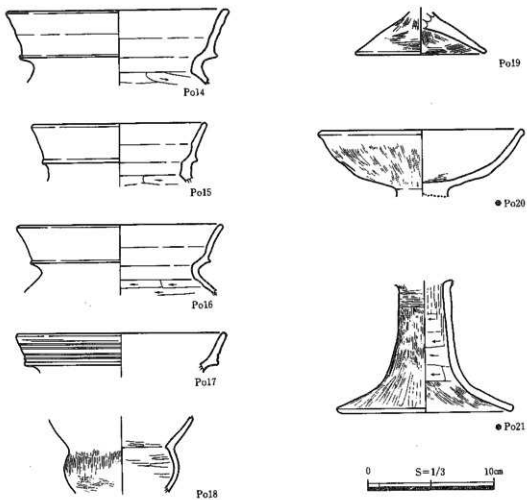
最後に、ここに報告書を上梓する運びになったが、調査の実施、報告書の作成に当たり、指導・協力あるいは助言いただいた各位に深甚の謝意を表します。

註・参考文献

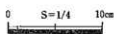
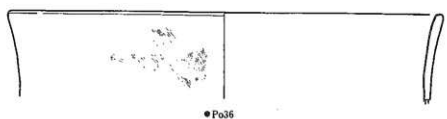
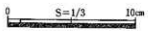
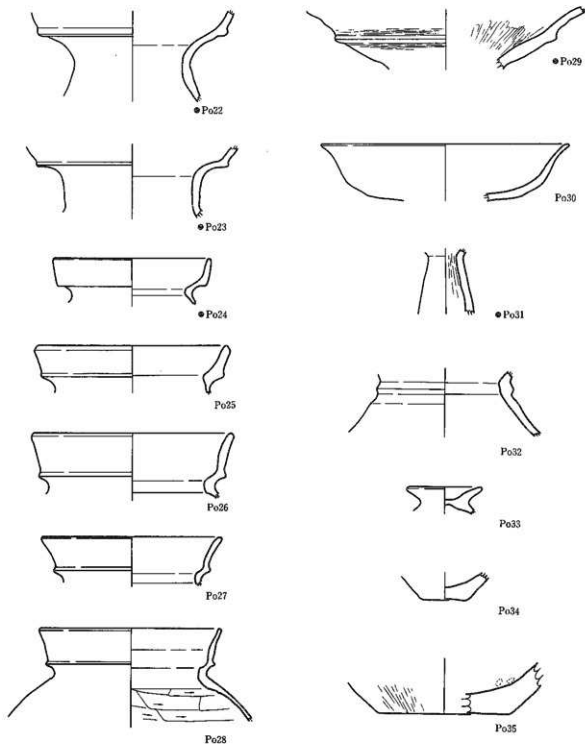
- 註 1. 羽合町教育委員会『南谷18号墳発掘調査報告書』1988
2. 羽合町教育委員会『羽合町内遺跡発掘調査報告書』1989
3. 羽合町教育委員会『南谷所在遺跡群（六ナル地区・ヒジリ地区）』1990
4. 羽合町教育委員会の御好意により、「天保14年伯耆国河村郡南谷村田畑地統全図」を拝見させていただいた。
5. 『鳥取県大百科事典』新日本海新聞社 1984
6. 『鳥川日本地名大辞典31鳥取県』角川書店 1982
7. 羽合町『羽合町史』前編 1967
8. 稲田孝司『旧石器集団の行動軌跡』『古代史復元1 旧石器人の生活と集団』講談社 1988
9. 鳥取県埋蔵文化財センター『旧石器・縄文時代の鳥取県』1988
10. 倉吉市教育委員会『高鼻2号墳（兼手2号墳）発掘調査報告書』1982
11. 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報（第3次）』1975
12. 鳥取県埋蔵文化財センター『鳥取県文・ニュース』№28 1990
13. 倉吉市教育委員会『立碓遺跡群 取木遺跡・一反半田遺跡発掘調査報告書』1984
14. 北条町教育委員会『鳥取遺跡発掘調査報告書第1集』1983
15. 名越勉『原始・古代』『倉吉市史』1973
16. 倉吉市教育委員会『津田峰遺跡発掘調査報告書』1986
17. 東伯町教育委員会『森羅第1・森羅第2遺跡発掘調査報告書』1987
18. 関金町教育委員会『横釜遺跡発掘調査報告書』1986
19. 三朝町教育委員会『三朝高原穴谷遺跡発掘調査報告書』1976
20. 山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究1』1978
21. 『さんいん古代史の周辺—上—』山陰中央新報社 1978
22. 鳥取県教育文化財団『久吉第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書』1984
23. 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅱ—Ⅵ 1981—1983
24. 北条町教育委員会『北尾遺跡発掘調査報告書』第1集 1987
25. 米子市教育委員会『日久美遺跡』1986
26. 佐々木謙也『倉吉嶺遺跡』1970
27. 鳥取県教育委員会『東郷町大鼻遺跡』『埋蔵文化財発掘調査概報』1973
28. 泊村教育委員会『泊村内遺跡発掘調査報告書』1989
29. 鳥取県埋蔵文化財センター『弥生時代の鳥取県』1985
30. 名越勉・甲斐忠彦『鳥取県東郷町出土の小銅鐸』『考古学雑誌』第59巻2号 1973
31. 泊村『泊村誌』1989
32. 鳥取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書第1集』1960
33. 倉光清六『伯耆八幡町御舞出土遺跡』『考古学雑誌』第23巻4号 1933
34. 倉吉市教育委員会『上米積遺跡発掘調査報告Ⅱ—阿弥大寺地区—』1980
35. 東倉市良『四隅突出型墳丘墓』ニューサイエンス社 1989
36. 北条町教育委員会『土下古墳群発掘調査報告書』第1集 1983
37. 北条町教育委員会『由古墳群発掘調査報告書』1981
38. 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅳ 増補編 1982
39. 東郷町教育委員会『津波遺跡発掘調査報告書』1974
40. 東郷町教育委員会『佐美4・13号墳発掘調査報告書』1979
41. 倉吉市教育委員会『大宮古墳発掘調査概報』1979
42. 近藤哲雄『東伯害における横穴式石室の採相』『鳥根考古学会誌』第4集 鳥根考古学会 1987
43. 東郷町教育委員会『片平5号墳発掘調査報告書』1977
44. 鳥取県教育委員会『鳥取県裝飾古墳分布調査概報』1981
45. 梅原末治『因伯二国に於ける古墳の調査』『鳥取県史蹟勝地調査報告』第二冊 1924
46. 羽合町教育委員会『馬ノ山古墳群』1961
47. 鳥取県教育委員会『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』1984
48. 真田廣幸『伯耆国大御堂庵寺考』『山陰考古学の諸問題』1986
49. 真田廣幸『奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の採相』『考古学雑誌』66-2 1980
50. 倉吉市教育委員会『史蹟大原高寺跡第2次発掘調査概報』1988
51. 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報』第3次・第5次・第6次 1975—1978
52. 倉吉博物館『伯耆国分寺』1983
53. 倉吉市教育委員会『鳥取県分祀寺発掘調査概報』1973
54. 佐々木謙・亀井照人『原始古代編』『鳥取県史』1鳥取県 1972
55. 東郷町『東郷町史』1987
56. 羽合町教育委員会『南谷貝塚遺跡発掘調査報告書』1990
57. 山本清『山陰の須恵器』『鳥根大大学院10周年記念論文集』人文科学編 1980
58. 榎本誠一『前方後円墳の企画とその実態』『考古学ジャーナル』№150—ニューサイエンス社 1968
59. 上田宏範『前方後円墳』学生社 1979
60. 石部正志・田中英夫・宮川沙・堀田晋一『畿内大形前方後円墳の築造企画について』『古代学研究』89 古代学研究会 1979
61. 北条芳隆『墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価』『考古学研究』第32巻4号 1986
62. 宇田匠雅『吉備の前期古墳Ⅰ—浦間茶臼山古墳の測量調査—』『古代古墳』第9集 1987 『吉備の前期古墳Ⅱ—穴甘山山古墳の測量調査—』『古代古墳』第10集 1988 『吉備の前期古墳Ⅲ—網浜茶臼山古墳・黒山109号墳の測量調査—』『古代古墳』第12集 1990
63. 金子章『長沖古墳群』埼玉県児玉郡児玉町教育委員会 1980
64. 穂野浩三『前方後円墳の築造方法（1）—鳥取県西徳波16号墳を例にして—』『文化財学報』第3集 1984
65. 真田廣幸氏の御教示による。このほかにも沢べり1号墳にその可能性がある。
66. 大宮町教育委員会『小池古墳群』1984
67. 朴美子『埋葬施設底部における土坑・溝に関する若干の考察』奈良県立歴史考古学研究所『宇陀北原古墳』1986
68. 大宮町教育委員会『上層第5遺跡発掘調査報告書』1985
69. 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書ⅢA・B・E・H地区』1978
70. 東出雲町教育委員会『大木権現山古墳群』1979
71. 花谷めぐむ『山陰古式土器の型式学的研究—鳥根県内の資料を中心にして—』『鳥根考古学会誌』第4集 鳥根考古学会 1987
72. 田辺昭三『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966



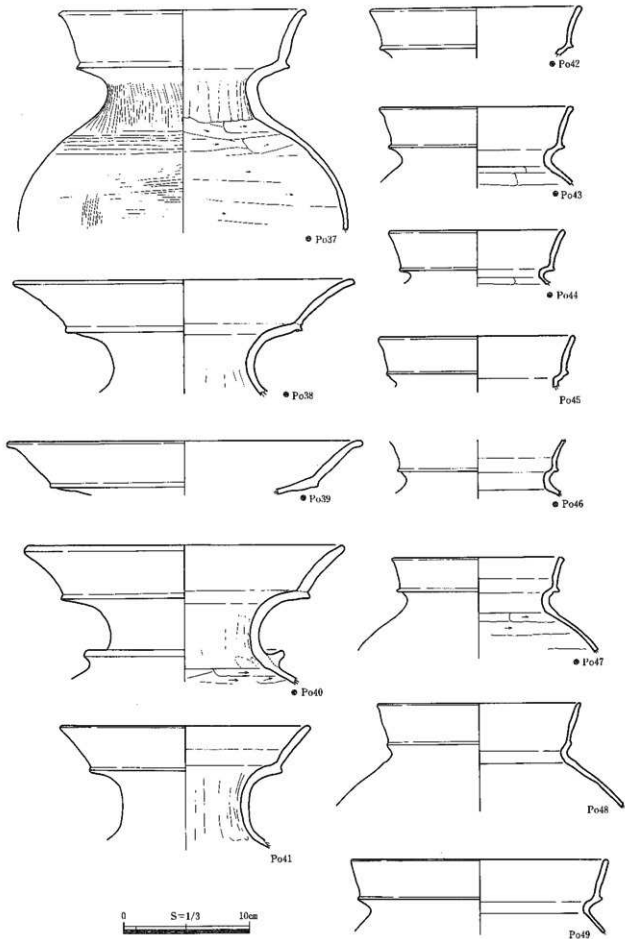
挿図91 南谷ヒジリ遺跡SI01(Po1)
SI02(Po2~Po13)土器実測図



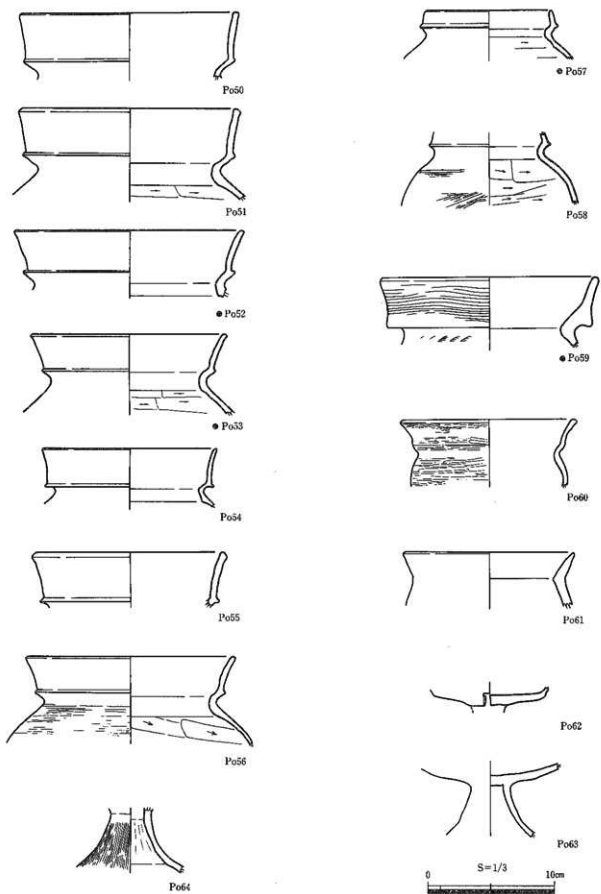
挿図92 南谷ヒジリ遺跡SI02(2)土器実測図



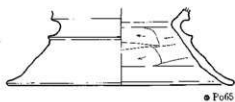
挿図93 南谷ヒジリ遺跡S104土器実測図



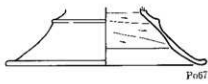
挿図94 南谷ヒジリ遺跡S105(1)土器実測図



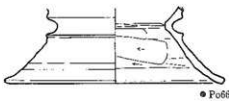
挿図95 南谷ヒジリ遺跡SI05(2)土器実測図



● Po65



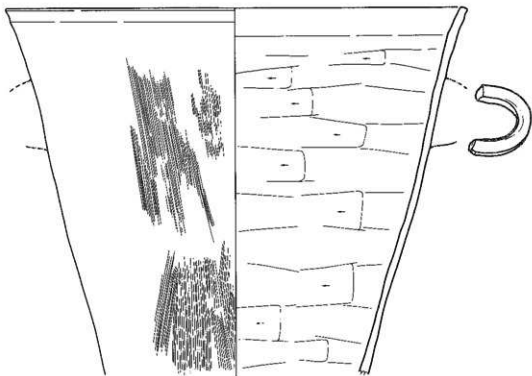
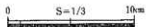
Po67



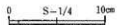
● Po66



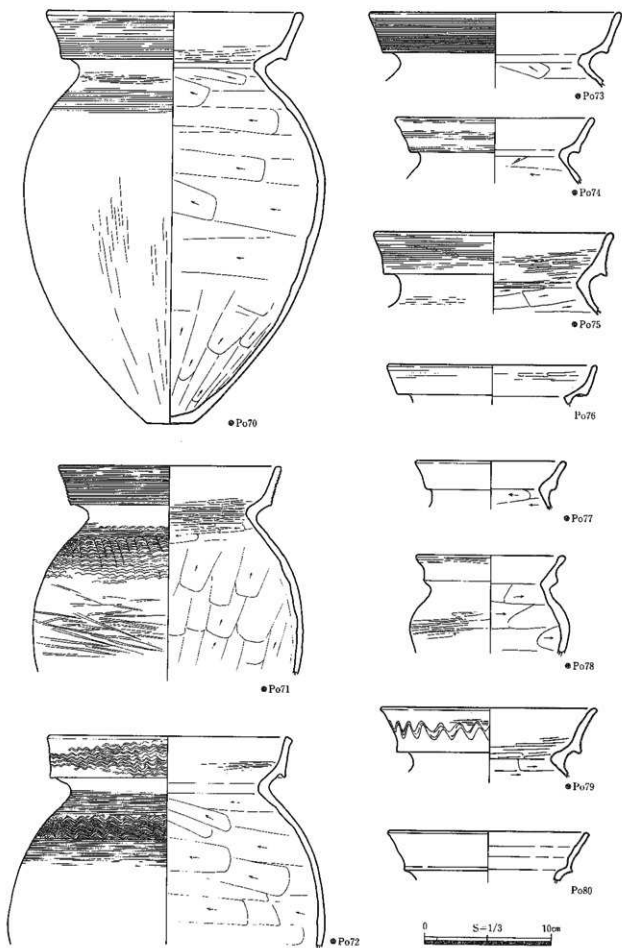
Po68



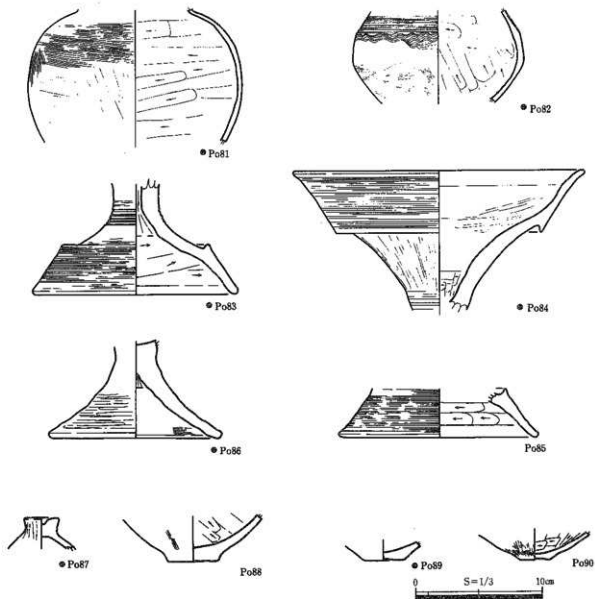
● Po69



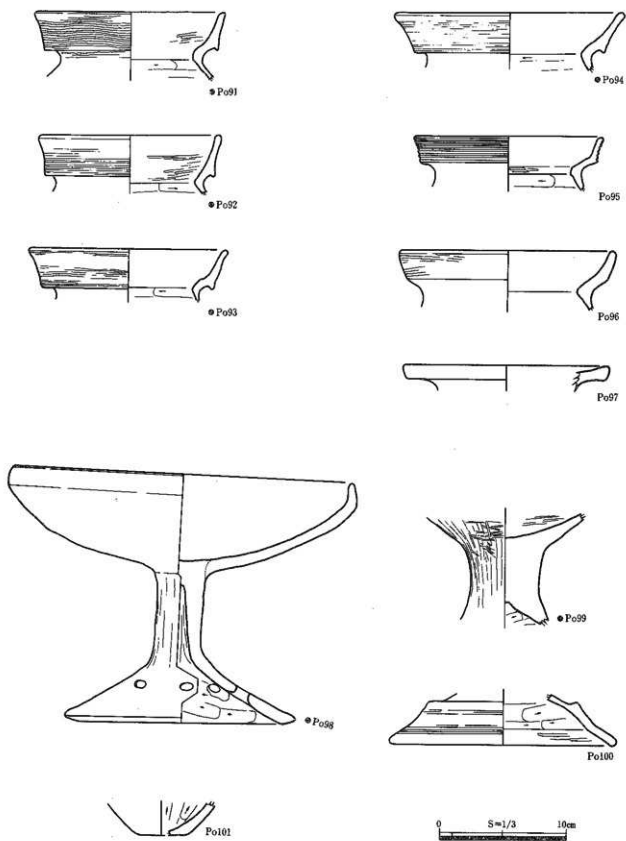
挿図96 南谷ヒジリ遺跡S105(3)土器実測図



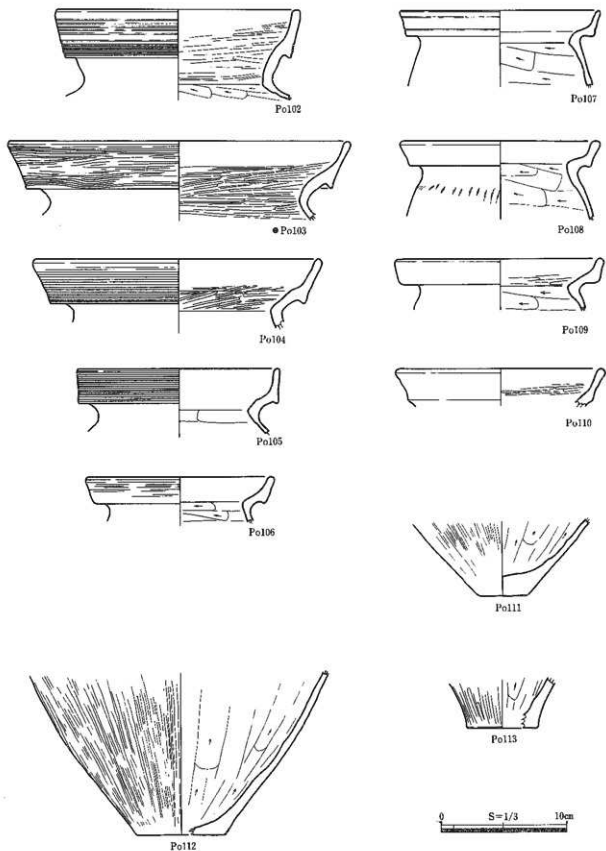
挿図97 南谷ヒジリ遺跡SK01(1)土器実測図



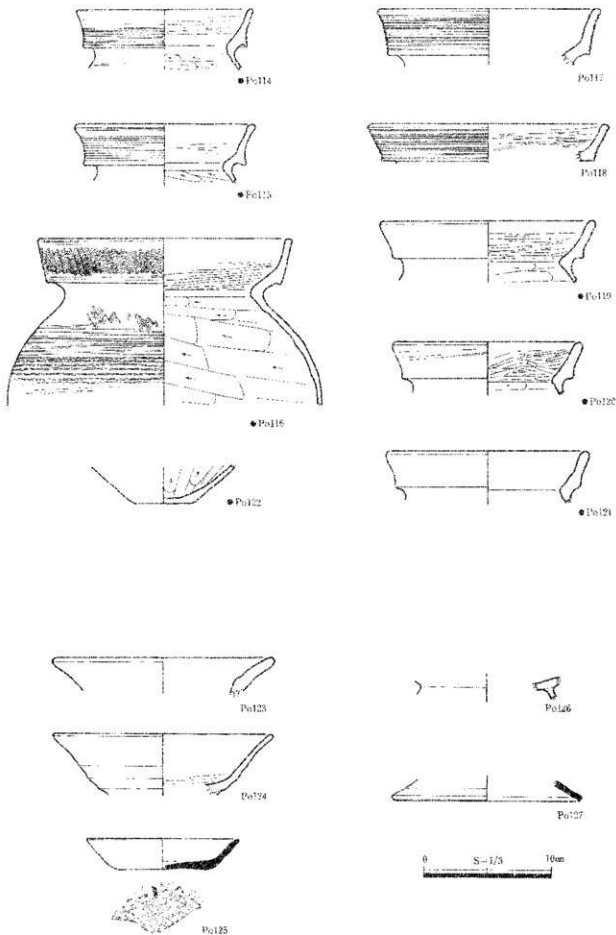
挿図98 南谷ヒジリ遺跡SK01(2)土器実測図



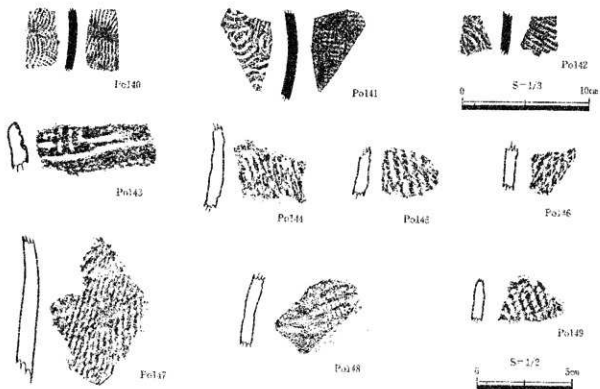
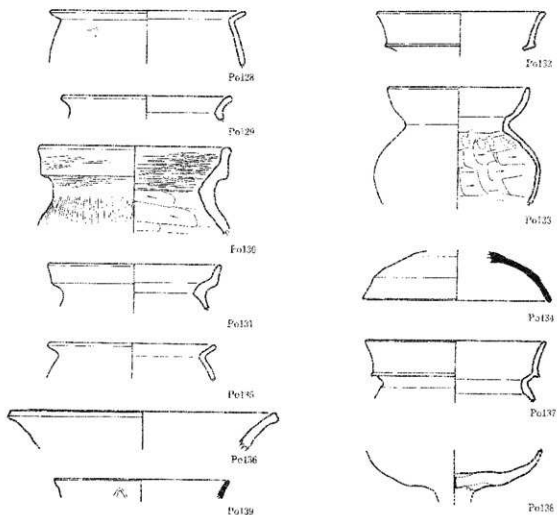
挿図99 南谷ヒジリ遺跡SK02土器実測図



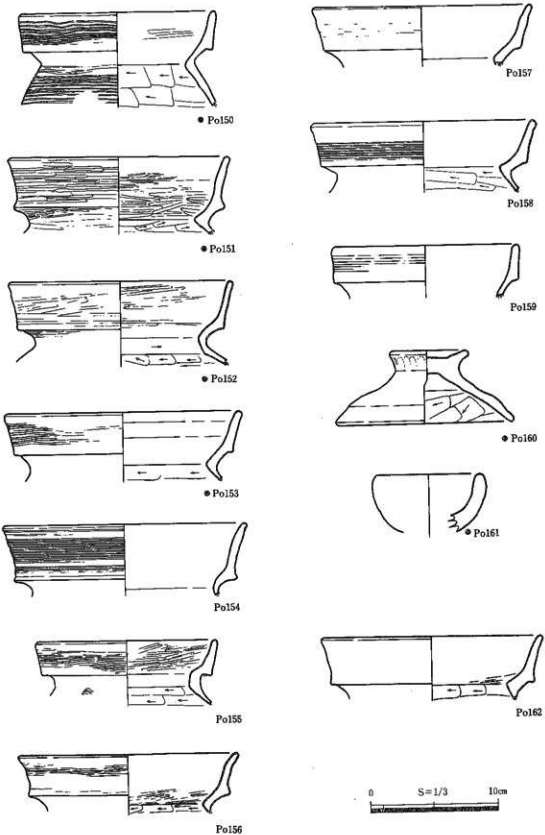
挿圖100 南谷ヒジリ遺跡SK03土器実測図



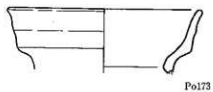
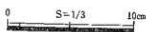
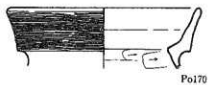
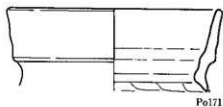
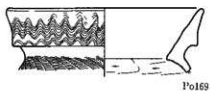
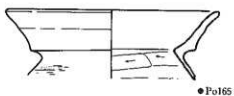
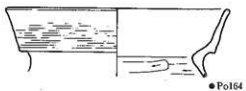
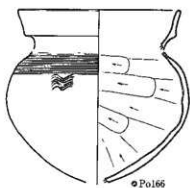
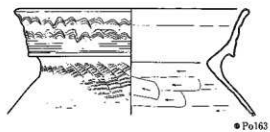
挿図101 南谷ヒジリ遺跡SK04(Po114~Po122)
SB01(Po126・Po127)
SB03(Po123~Po125)土器実測図



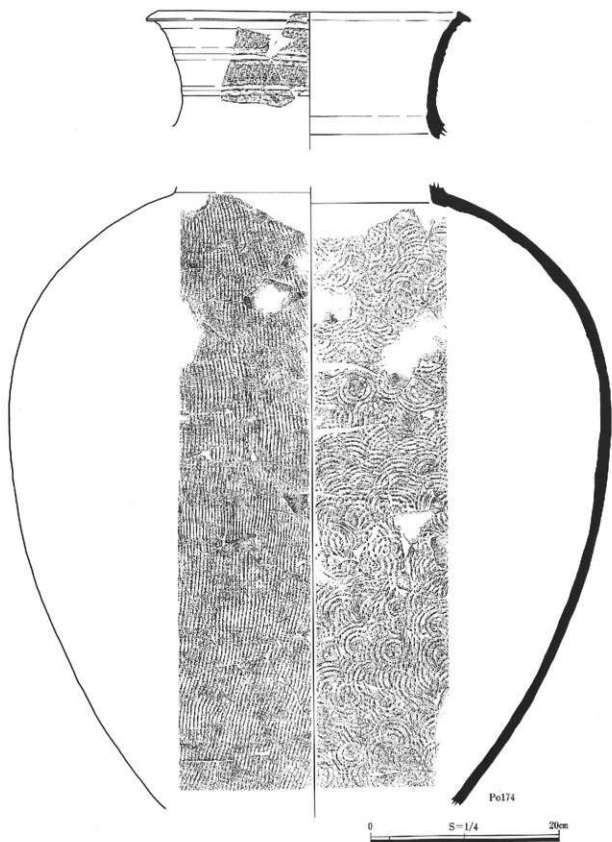
挿図102 南谷ヒジリ遺跡 SD01(Po128~Po136)
SD03(Po142)
遺構外(Po137~Po141)
縄文土器(Po143~149)



標圖103 南谷夫婦塚遺跡 S101(Po150~Po161)
S102(Po162)土器突測図



挿圖104 南谷夫婦塚遺跡SK04(Po163~Po168)
SK05(Po169~Po173)土器実測図



挿図105 南谷19号墳(1)土器実測図

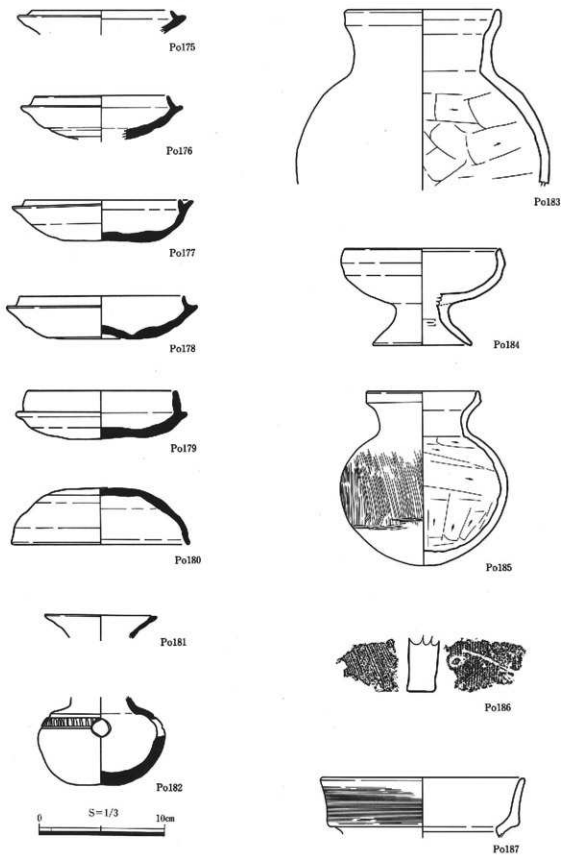
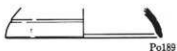


插图106 南谷19号墳(2)土器実測図



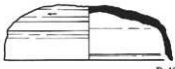
Po188



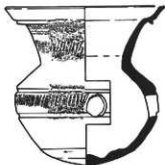
Po189



Po190



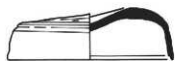
Po195



Po200



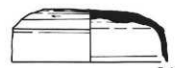
Po191



Po196



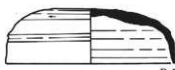
Po192



Po197



Po193



Po198



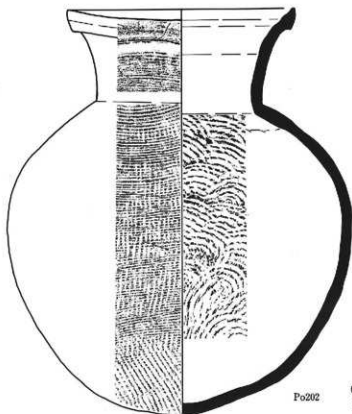
Po194



Po199



Po201



Po202

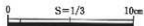


插图107 南谷19号墳(3)土器実測図



Po203

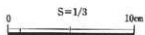
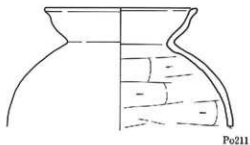
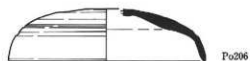
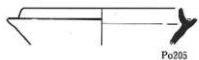


插图108 南谷21号墳土器実測図

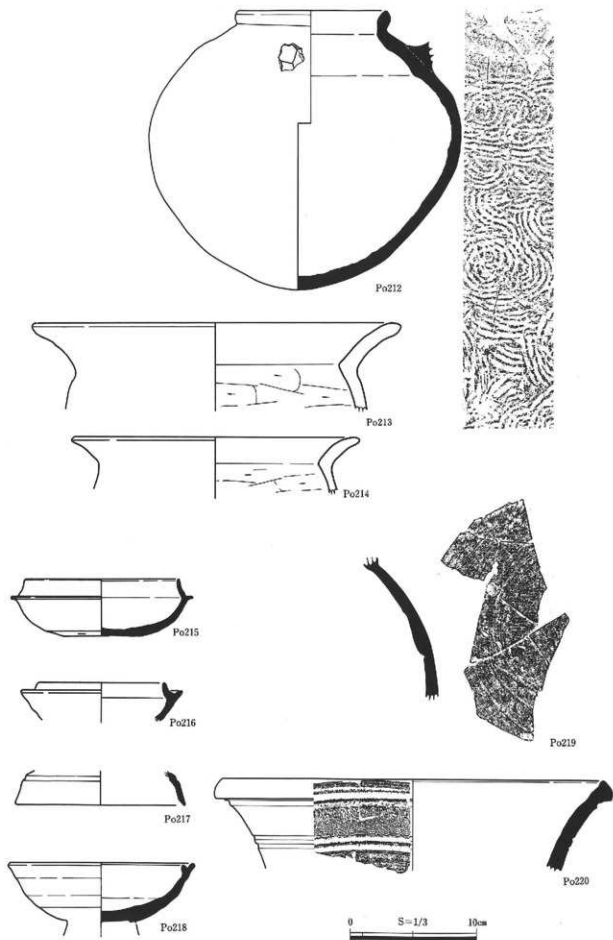
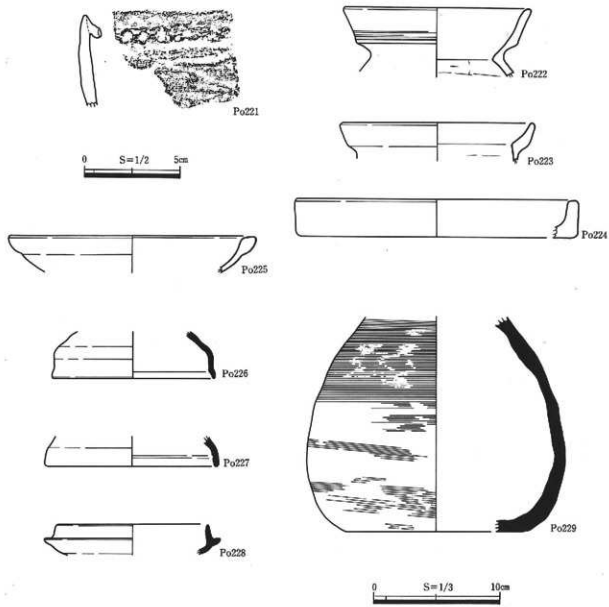
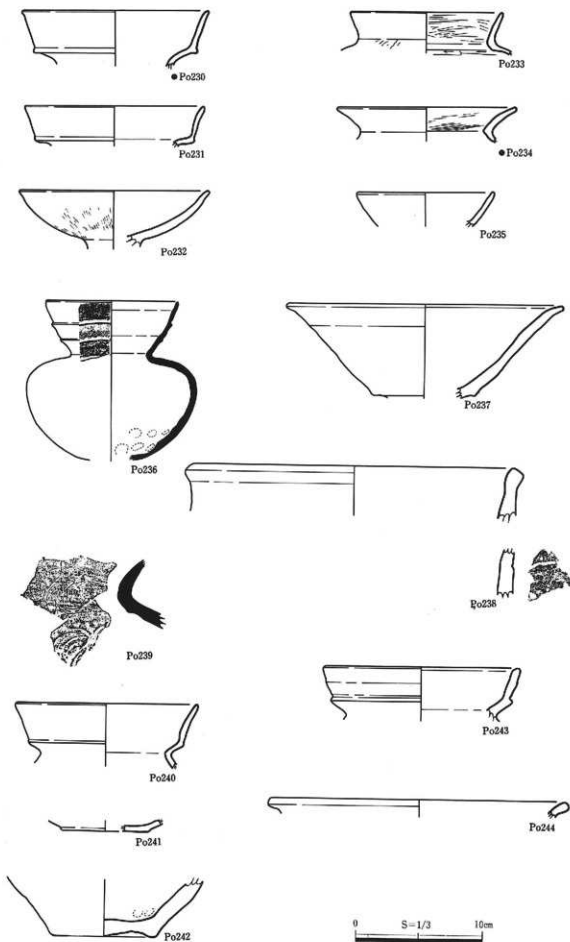


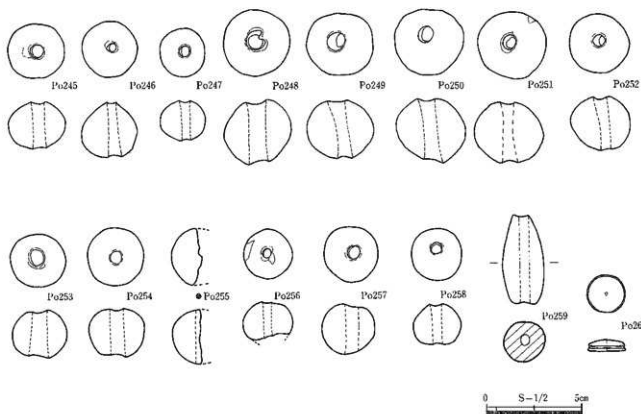
插图 109 南谷 22号 墳(Po212~Po214)
23号 墳(Po215~Po220) 土器実測図



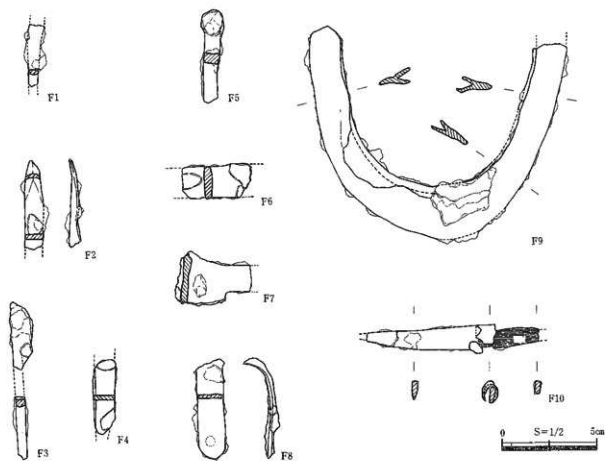
挿図110 南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群遺構外出土土器実測図



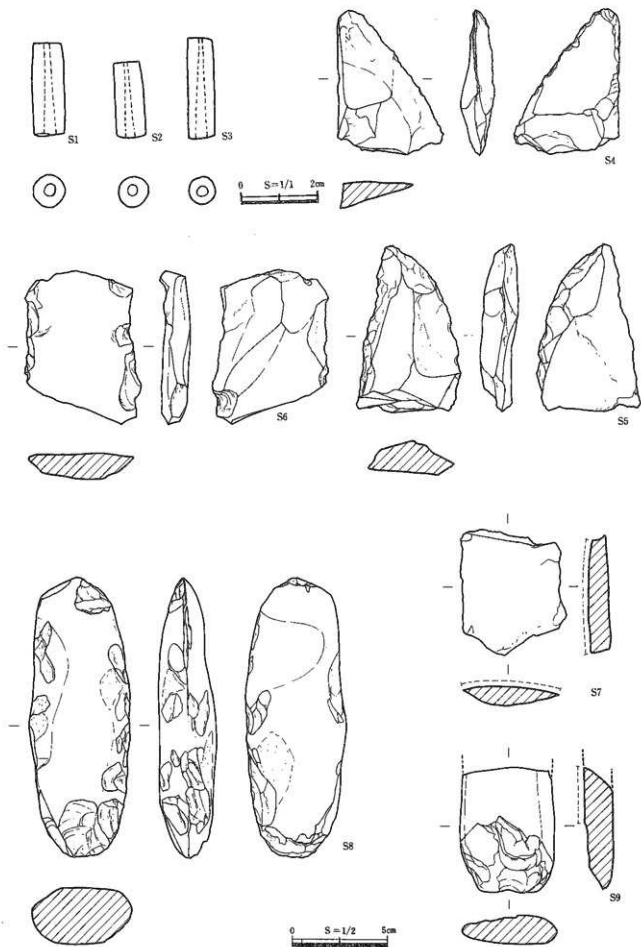
挿図111 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群土器実測図



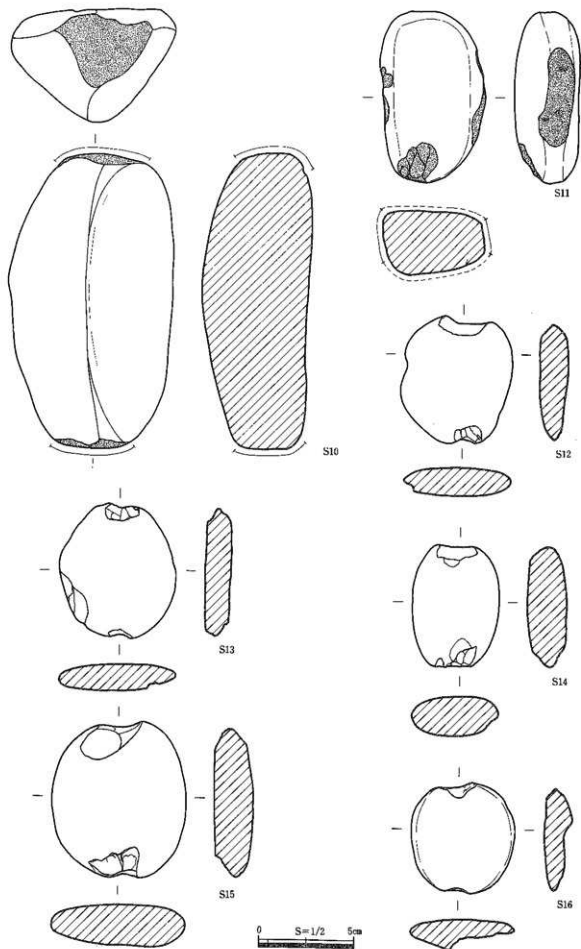
挿図112 土製品実測図



挿図113 鉄器実測図



挿圖114 管玉・石器実測図



挿図115 石器実測図(敲石・石鏟)

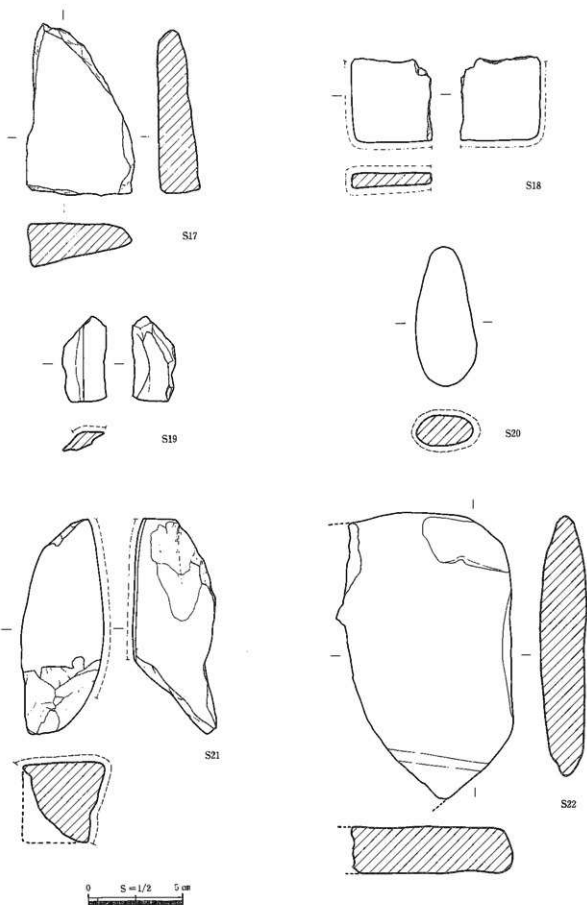


插图116 石器类测图(砾石·石皿)

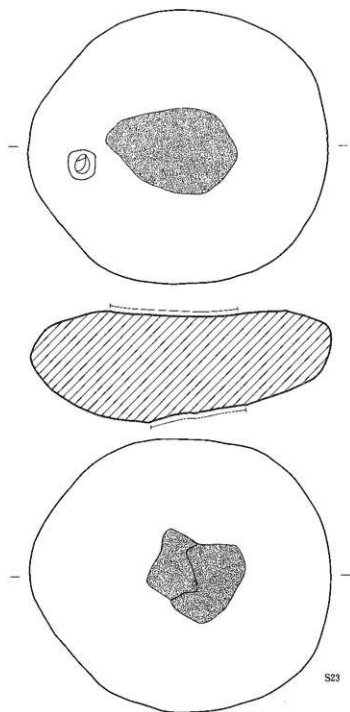


插图117 石碇实测图 (石皿)

出土遺跡	土器 番号	種類	図版	取上 番号	出量 (cm)	彫 飾 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	底 底 保 存	色 調	備 考
HS 101	●1	91	36	56	①16.2W ② 4.2H	横長の片板、口唇縁に於きたような面をもつ。 口唇部は、外反しなから大きくひらく複合口縁である。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、ほとんど外方へ突出する。	本作的に風化が強い。内外面にタテハナがわずかに残る。	灰(1-2mの石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-204
HS 102	●2	91	36	51	①29.7W ② 5.5Δ ③ 5.1	口唇部は、外反しなから大きくひらく複合口縁である。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、ほとんど外方へ突出する。	内外面一ヨコナテ。	磁質(1m程度の石灰を含む)	良好	外面淡灰色一淡褐色。内面淡褐色一黒褐色。	F-98
HS 102	●3	91		92		ゆるやかに巻起してたちあがる複合口縁。	外面一ヨコナテ。 内面一腹部に位までヨコナテ。下平ナテ。以下右方向ナテ。	磁質(1m程度の石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-237
HS 102	●4	91		67		大きく外反しなから口唇部へつづく口縁。	外面一ヨコナテ。 内面一腹部上平ヨコナテ。下平ナテ。	磁質(1-2mの石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-238
HS 102	●5	91		83	①15.8W ② 6.0Δ ③ 3.1	口唇部は、外反しなから外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって屈曲する。	外面一口唇部一腹部までヨコナテ。内面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	良質(砂を含む)	良好	外面褐色一黒褐色。内面淡褐色一淡灰褐色。	腹部外面にスズ付。F-93
HS 102	●6	91	36	76	①14.8W ② 5.7Δ ③ 3.1	口唇部は、外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって屈曲する。	外面一口唇部一腹部までヨコナテ。内面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	良質(砂を含む)	良好	外面淡褐色一黒褐色。内面淡褐色。	口唇部外面にスズ付。F-33
HS 102	●7	91		62	①17.2W ② 4.1Δ ③ 3.1	外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。	内外面一ヨコナテ。	胎土(0.5m程度の石灰を含む)	良好	外面淡褐色一黒褐色。内面淡褐色。	口唇部外面にスズ付。F-32
HS 102	●8	91	36	85	①16.8W ② 8.9Δ ③ 2.8	口唇部は、外反しなから外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって屈曲する。	外面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	灰(1-2mの石灰を含む)	良好	外面淡灰色褐色。内面淡褐色。	口唇部外面に黒漆。腰部にスズ付。F-26
HS 102	●9	91	36	52	① 9.4 ② 13.8 ③ 15.5 ④(胸中) ⑤ 1.6	口唇部は、内傾して立ちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は丸味をもって同じ向きに丸味の前部からよく屈曲部へとつづく。腹部は、丸味で緩やかに湾曲する。	本作的に風化が強い。外面一口唇部一腹部までヨコナテ。内面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	灰(1-2m程度の石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-28
HS 102	●10	91	36	81	①13.8W ② 4.6Δ ③ 3.2	口唇部は、外反しなから外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって同じ向きに丸味の前部からよく屈曲部へとつづく。	外面一口唇部一腹部までヨコナテ。内面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	灰(1-2mの石灰を含む)	良好	内外面淡褐色一淡褐色。	口唇部外面にスズ付。F-1
HS 102	●11	91	36	80	①16.1W ② 6.5Δ ③ 3.0	口唇部は、外反しなから外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面一口唇部一腹部までヨコナテ。内面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	灰(1-2mの石灰を含む)	良好	内外面淡褐色一淡褐色。	F-16
HS 102	●12	91		75	①12.7W ② 7.9Δ ③ 2.9	口唇部は、外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面一口唇部一腹部までヨコナテ。内面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	灰(1-2mの石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-39
HS 102	●13	91		87	①14.8W ② 4.2Δ ③ 3.3	外反しなから外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。	外面一ヨコナテ。	磁質(1m程度の石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-94
HS 102	●14	92	36	148	①17.4W ② 4.5Δ ③ 3.8	口唇部は、外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面一口唇部一腹部までヨコナテ。内面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	灰(砂を含む)	良好	内外面淡褐色一黒褐色。	口唇部外面に黒漆。F-10
HS 102	●15	92		51	①14.0W ② 4.5Δ	外傾しなから外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面一ヨコナテ。	磁質(1m程度の石灰を含む)	良好	外面淡褐色一黒褐色。	F-1
HS 102	●16	92		52	①16.0W ② 5.4Δ ③ 3.9	口唇部は、外傾して外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面一口唇部一腹部までヨコナテ。内面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	磁質(1m程度の石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-92
HS 102	●17	92		63	①16.1W ② 3.1Δ ③ 2.5	外傾して立ちあがる複合口縁。口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は不明瞭。	外面一口唇部に(先以上の)腹面。腹部ヨコナテ。	灰(1-2mの石灰を含む)	良好	外面淡褐色一黒褐色。内面淡褐色。	F-95
HS 102	●18	92	37	44	①5.9Δ	縦長の片板。口唇部は、片板の最大径を越える。	外傾して立ちあがる複合口縁。外面一口唇部一腹部までヨコナテ。腹部以下右方向ナテ。	磁質(0.3-1m程度の石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-96
HS 102	●19	92	37	149	①2.4Δ ② 4.0Δ	大きく「ハ」の字の内側へ湾曲し、口唇部は丸くおさきと、面をもつ。口唇部下縁は、外方へ突出する。口唇部内面の段は不明瞭。	内外面一ナテ。ヨコナテ後ナテ。	灰(1-4mの石灰を含む)	良好	外面淡褐色一黒褐色。	F-97

挿表11 兩谷ヒジリ遺跡出土土器観察表①

出土遺跡	土層番号	探検	図取	取上層号	法量(m)	形態上の特徴	手法上の特徴	出土	焼成	色調	備考
HS 1 02 高塚	● 20	92	37	76	① 15.9m ② 5.3m	筒状の塚。白粉土は濃赤さをもつ。	外壁—口縁部ココナテ、以下タテハ横合ひナテ。 内面—口縁部ココナテ、以下ナテ。	壁(1-2mの石夾含む。雲母含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-13
HS 1 02 高塚	● 21	92	37	47 46 90 91	① 10.2m ② 14.9	中定—定量的にひらがる器土に附して大きくひらぐ。断面がつつく。断面は、カットしたような平面をもつ。	外壁—筒状。タテハ横に4配との場合断面がココナテ。横部、タテハ方向のミダテ。 内面—筒状ナテナテ。横部はハテ後、断面はナテココナテ。	壁(0.5-1m程度の石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-57
HS 1 04 墓	● 22	93	37	252	① 6.7m	口縁部の上を欠く。口縁部下縁は、風化しているが、外方への突出は認められる。口縁部内面の段は不明。断面は、2段に分割してのびる。	風化著しく不明。	壁(1-2mの石夾含む。雲母含む)。	良好	内外面淡褐色 1-後淡褐色。	F-235
HS 1 04 墓	● 23	93	37	248	① 5.1m	口縁部は、下縁以上を欠く。口縁部下縁は風化しているが外方への突出は認められる。口縁部内面の段は不明。断面は、2段に分割してのびる。	風化著しく不明。	壁(1-3mの石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-231
HS 1 04 墓	● 24	93	37	301	① 12.4m ② 3.6m ③ 2.2	口縁部は、風化部分にたちあがる場合以外、口縁部下縁は風化不明。口縁部下縁はそのまま断面する。口縁部内面の段はなだらかな。断面内面は、短く2段に分割する。	風化のため不明。	壁(0.5-1m程度の石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-106
HS 1 04 墓	● 25	93	37	147	① 13.0m ② 3.8m ③ 2.1	口縁部は、外縁にて短くたちあがる場合口縁部は強いココナテによる外縁をもち、口縁部下縁は風化して外方へ突出する。口縁部内面の段は不明。断面内面は「く」の字状に断面する。	外壁—口縁部—断面、ココナテ。 内面—口縁部—タテハ横合ひナテココナテ。風化は不明。	壁(1m程度の石夾含む。雲母含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-107
HS 1 04 墓	● 26	93	37	147	① 13.0m ② 4.9m ③ 3.5	口縁部は、外縁以外に外縁してたちあがる場合以外、口縁部下縁は風化不明。口縁部下縁はそのまま断面する。口縁部内面の段は不明。断面内面は、2段に分割する。	風化著しく不明。	壁(0.5m程度の石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-106
HS 1 04 墓	● 28	93	37	111	① 14.2m ② 7.2m ③ 2.9	口縁部は、外縁以外に外縁してたちあがる場合以外、口縁部下縁は風化不明。口縁部下縁はそのまま断面する。口縁部内面の段は不明。断面内面は、2段に分割する。張り口の断面へつづ。	外壁—口縁部—断面ココナテ。 内面—口縁部—断面ココナテ。断面はナテ方向のミダテ。	壁(1-2mの石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。 1-後淡褐色。	F-29
HS 1 04 高塚	● 29	93	37	244	① 21.9m ② 4.9m	筒い塚。口縁部は外方に欠ける。内面には段もたない。口縁部は外方に欠けるものと認められる。	外壁—口縁部—断面ココナテ。 内面—口縁部、ココナテ、以下、タテハ方向のミダテ。	壁(1-2mの石夾含む。雲母含む)。	良好	外面暗灰色。内面淡褐色。	F-109
HS 1 04 高塚	● 30	93	37	115	① 11.0m ② 4.9m	筒状の塚。口縁部は外方に欠ける。口縁部はひきだしたように欠陥となる。	風化著しく不明。	壁(1-3mの石夾含む。雲母含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-116
HS 1 04 高塚	● 31	93	37	254	① 4.9m	遺跡的にひらがる高塚の遺跡。	全体的に風化著しく不明。	壁(0.5-4m程度の石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-110
HS 1 04 高塚	● 32	93	37	147	① 4.6m	器土の断面。断面は外方に欠ける。	風化のため不明。	壁(1-2m程度の石夾含む。雲母含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-232
HS 1 04 墓	● 33	93	37	120	① 1.8m ② 5.7 ③ 2.8m	大きくひらぐつみ。	内外面—ナテ。	壁(1-2mの石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-102
HS 1 04 (高塚)	● 34	93	37	147	① 2.4m ② 3.9m	平野の遺跡。おぼろげに断面をへこみます。	外壁—ナテ。 内面—ナテナテ。	壁(1-2mの石夾含む。雲母含む)。	良好	外壁淡褐色。内面淡褐色。	F-100
HS 1 04 (高塚)	● 35	93	37	343	① 2.4m ② 10.2m	大きな平野の遺跡。	外壁—風化のため不明。 内面—風化しているが断面は認められる。	今年断面は0.5-1m程度の石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-120
HS 1 04 墓	● 36	93	37	242	① 45.6m ② 9.8m	筒の口縁部。口縁部は、市い面をもつ。	風化著しい。 外壁—ハテが見られる。 内面—不明。	壁(1-3mの石夾含む。雲母含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-123
HS 1 05 墓	● 37	94	38	312 315	① 19.4m ② 17.8m ③ 4.7	口縁部は、外方に欠ける場合以外、口縁部は、外方へ欠ける。上縁をおさるをもつ。口縁部下縁は、外方へ欠ける。口縁部内面の段は不明。断面は、ゆるやかに傾斜してのび、張り口の断面へつづ。	外壁—口縁部、ココナテ。横部—横部、タテハ横合ひココナテ。横部にタテハ横合ひココナテの断面が認められる。 内面—口縁部、ココナテ。横部ナテ。横部以下方向ナテナテ。	壁(1-2m程度の石夾含む)。	良好	外面淡褐色—薄褐色。内面淡褐色。	断面に赤色塗布。 F-2
HS 1 05 墓	● 38	94	38	314	① 27.3m ② 8.3m ③ 5.6	口縁部は、外方に欠ける場合以外、口縁部は外方へ欠ける。口縁部下縁は、外方へ欠ける。口縁部内面の段は不明。断面は、ゆるやかに傾斜してのび、張り口の断面へつづ。	全体的に風化。 外壁—口縁部—断面ココナテ。 内面—口縁部ココナテ。横部ナテ。	壁(1-5mの石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-129
HS 1 05 墓	● 39	94	38	270 286	① 28.2m ② 4.3m ③ 5.9	外縁以外に大きくひらぐ場合以外、口縁部は外方へ欠ける。口縁部下縁は風化しているが、外方へ突出する。	風化著しく不明。	壁(1-3mの石夾含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-50

採集12 南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表②

出土遺物 土器 番号	種別	形状	取上 番号	位置(m)	形 態 上 の 特 徴	手 法 と の 特 徴	胎 土	焼成 保存	色 調	備 考	
H S 1 0 6 壺	● 40	94	38	302	① 15.3 ② 10.6△ ③ 4.8	口縁部は、外張して大きくひらき合せ口縁。口唇部は上端をおさえ、覆をもつ。口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。頸部内面はゆるやかに膨出して、張りあみ状の段へと続く。頸部下段に扉面台形状の突起をもつ。	外面→口縁部→肩部、ヨコナテ。突帯は起すつげ。内面→口縁部ヨコナテ。頸部ナテ。頸部以下右方向ケズリ。	宙口→2mm石炭を含む。	良好	内外面淡褐色。	F-153
H S 1 0 5 壺	● 41	94	38	190 191	① 19.4△ ② 9.2△ ③ 4.2	口縁部は、外張型に外張してたちあがる複合口縁。口唇部は上端をおさえ、わずかな面をもつ。口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。頸部は其の段で、截止してのびる。	全体的に扁平化が濃。外面→口縁部→腹面ヨコナテ。内面→口縁部ヨコナテ。頸部、ナテ。	宙(砂粒含む)→2mmの石炭含む。	良好	内外面淡褐色。	F-132
H S 1 0 5 壺	● 42	94	38	272	① 16.4△ ② 9.5△ ③ 3.2	内外反折に外張してたちあがる複合口縁。口唇部は上端をおさえ、口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。	内外面→ヨコナテ。	宙(1→2mmの石炭含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-37
H S 1 0 5 壺	● 43	94	38	266	① 15.1△ ② 6.0△ ③ 3.3	口縁部は、外反折型に外張してたちあがる複合口縁。口唇部は外方へつまみ合せ上端におきたような内傾する面をもつ。外方へ膨張する口縁部下縁は外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。内面内面は丸味をもって2段に膨出し、張りあみ状の外縁へつづく。	外面→口縁部→肩部ヨコナテ。内面→口縁部→腹面ヨコナテ。頸部以下ケズリ。	宙(1→3mmの石炭含む)。	良好	外面淡褐色。内面褐色。	F-35
H S 1 0 5 壺	● 44	94	269	① 13.7△ ② 4.2△ ③ 3.3	口縁部は、外反折型に外張してたちあがる複合口縁。口唇部は扁平化形状である。口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。頸部内面は丸く2段に膨出する。	内外面→不明。	宙口→3mmの石炭を含む。	良好	内外面淡褐色。	F-39	
H S 1 0 5 壺	● 45	94	289 353	① 13.3△ ② 4.0△ ③ 3.6	内外反折に外張してたちあがる複合口縁。口唇部は上端をおさえ、口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。	内外面→ヨコナテ。	宙(1→4mmの石炭含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-38	
H S 1 0 5 壺	● 46	94	38	196	① 4.2△	口縁部は、外張してたちあがる複合口縁。口唇部は厚くない。口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。頸部内面は、丸く2段に膨出し張りあみ状の肩部へつづく。	全体的に扁平化が著しく不明。内面→口縁部→腹面ヨコナテ。頸部以下右方向ケズリ。	宙(1mm程度の石炭含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-234
H S 1 0 5 壺	● 47	94	314	① 13.6△ ② 7.4△ ③ 2.6	口縁部は、外反折型に外張してたちあがる複合口縁。口唇部は上端におきたような面をもち外方へ膨張する。口縁部下縁は外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。頸部内面は、丸く2段に膨出し張りあみ状の肩部へつづく。	外面→口縁部→肩部ヨコナテ。内面→口縁部→腹面ヨコナテ。頸部以下右方向ケズリ。	宙(1→2mmの石炭含む)。	良好	内外面淡褐色。内面淡褐色。	F-44	
H S 1 0 5 壺	● 48	94	275	① 16.0△ ② 9.5△ ③ 3.4	口縁部は、外折してたちあがる複合口縁。口唇部は上端をおさえ、口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。頸部内面は、丸く2段に膨出し張りあみ状の肩部へつづく。	内外面→不明。	宙口→3mmの石炭を含む。	良好	内外面淡褐色。	F-52	
H S 1 0 5 壺	● 49	94	38	301	① 20.2△ ② 5.7△ ③ 3.1	口縁部は、外折してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におきたような面をもつ。口縁部内面の段は明確。頸部内面は、丸味をもって2段に膨出する。	全体的に扁平化が著しく不明。外面→口縁部→腹面ヨコナテ。頸部以下右方向ケズリ。	宙(1mm程度の石炭含む)。	良好	外面淡褐色。口縁部内面は黒灰色。内面淡褐色。	口縁部内面の膨出部。F-121
H S 1 0 5 壺	● 50	95	39	235	① 17.1△ ② 5.3△ ③ 3.8	内外反折にかきかへ外折してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におきたような面をもちわずかに内外に膨張する。口縁部下縁は下方へ突出する。口縁部内面の段は明確。	内外面→ヨコナテ。	宙口→3mmの石炭含む。	良好	内外面淡褐色。	F-34
H S 1 0 5 壺	● 51	95	39	205	① 17.3△ ② 7.0△ ③ 3.4	外折してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におきたような面をもつ。口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は明確。頸部内面は、丸味をもって2段に膨出し、張りあみ状の肩部へつづく。	外面→口縁部→肩部ヨコナテ。内面→口縁部→腹面ヨコナテ。頸部以下右方向ケズリ。	宙(1→2mmの石炭含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-43
H S 1 0 5 壺	● 52	95	39	196	① 16.2△ ② 8.5△ ③ 3.4	内外反折に外折してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におきたような面をもち、口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は、明確。頸部内面は、丸味をもって2段に膨出する。	内外面→ヨコナテ。	頸部(砂粒含む)。	良好	内外面淡褐色。一底淡褐色。	F-40
H S 1 0 5 壺	● 53	95	39	196	① 15.3△ ② 6.3△ ③ 2.9	内外反折に外折してたちあがる複合口縁。口唇部は、外方へ膨張し上端におきたような面をもち外方へ膨張する。口縁部下縁は外方へ突出する。口縁部内面の段は明確。頸部内面は、丸味をもって2段に膨出し、張りあみ状の外縁へつづく。	全体的に扁平化している。外面→口縁部→腹面ヨコナテ。内面→口縁部→腹部ヨコナテ。頸部以下右方向ケズリ。	宙(1→3mmの石炭含む)。	良好	外面淡褐色→底淡褐色。内面淡褐色。	F-41
H S 1 0 5 壺	● 54	95	39	183	① 13.8△ ② 4.3△ ③ 3.1	内外反折にかきかへ外折してたちあがる複合口縁。口唇部は、ひき出されたように膨らみとなる。口縁部下縁は、丸く外方へ突出する。口縁部内面の段は明確。頸部内面は2段に膨出する。	外面→口縁部→腹面ヨコナテ。内面→口縁部→腹面ヨコナテ。頸部以下不明。	宙(1→2mmの石炭含む)。	良好	内外面淡褐色。	F-36
H S 1 0 5 壺	● 55	95	39	173	① 14.9△ ② 4.5△ ③ 3.7	内外反折に外折してたちあがる複合口縁。口唇部は、上端におきたような面をもち、わずかに内外に膨張。下縁は、丸く外方へ突出する。口縁部内面の段は明確。	内外面→ヨコナテ。	宙(1mm程度の石炭含む)。	良好	内面淡褐色。	F-47

挿表13 南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表③

出土遺物	土層番号	探検	探検	出土番号	法長(m)	形態上の特徴	手法上の特徴	粘土	焼成	色調	備考
HS105 壺	66	95	39	188	①16.4R ② 6.3A ③ 3.5A	口縁部は、外縁外側に外傾してたちあがる複合口縁。口縁部は、丸く口縁部下端は、外へへ突出する。腹部内面は、丸みをもつて2段に屈曲し、張り味様の筋部へとつづく。口縁部内面の段は明確。	外面—口縁部—腹部ヨコナテ。肩部コナテ。内面—口縁部—腹部ヨコナテ。腹部以下、右方向ケズリ。	灰(1-3mの石灰含む。砂粒含む。)	良好	外面淡褐色。内面淡褐色～褐色。	口縁部、肩部内面にスズメケ。F-15
HS103 壺	67	95	39	339	① 9.8R ② 4.1A ③ 1.4	口縁部は、内傾してたちあがる複合口縁。口縁部は、丸く口縁部下端は、外へへ突出する。口縁部内面の段は、明確。短く屈曲する筋部から張り味様の筋部へとつづく。腹部内面は、2段に屈曲する。	風化程度不明。	灰(1-3mの石灰含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-46
HS105 壺	58	95	39	291	① 6.0A ②11.0 (R中)	小形で丸い。口縁部はほとんど欠落する。腹部内面は、丸みをもつて2段に屈曲する。体部はよく磨る。	外面—腹部—肩部ヨコナテ。肩部にハケ。内面—腹部ヨコナテ。以下、右方向ケズリ。	灰(1-2mの石灰含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-48
HS105 壺	59	95		196	①16.9R ② 5.3A ③ 4.0	口縁部は、外縁外側に外傾してたちあがる複合口縁。口縁部は、丸く口縁部下端は、下をすする。腹部内面は、丸みをもつて「く」の字状に屈曲する。	風化が進んでいる。外面—口縁部—腹部に8cm以上の平行洗滌。腹部ヨコナテ。内面—不明。	今や磨(1-3mの石灰、石灰含む。黒粒含む。)	良好	外面淡茶褐色～淡灰褐色。内面淡灰褐色。	F-233
HS106 鉢	60	95	39	308	①12.4R ② 5.2A ③12.5R	口縁部は、複合口縁部を有する。口縁部は、上へへ突きまわすように突出し、口縁部内面は外へへ突出する。口縁部内面の段は、ゆるやか。体部はよく磨る。口縁部状を有する。	ていまいなつくり。外側へへつゝつゝ。口縁部内面は外側へへつゝつゝ。	黒粒を含む。灰(1-2mの石灰含む。)	良好程度	外面黄褐色～黒褐色。内面暗褐色。	F-49
HS105 壺	61	95	204	204	①13.4R ② 4.2A	外傾してたちあがる複合口縁部。口縁部は、丸く口縁部下端は、外へへ突出する。口縁部内面の段は、明確。「く」の字状に屈曲しそのまんなかに筋部へとつづく。	外面—口縁部—腹部ヨコナテ。内面—口縁部—腹部ヨコナテ。以下不明。	今や磨(1-4mの石灰含む。黒粒含む。)	良好	外面黄褐色。内面淡褐色～淡褐色。	F-45
HS105 高杯	62	93	40	316		高杯の厚縁。筒状部分の上部が丸く、その中央に孔。孔は、内面まで貫通する。	全体に風化が進行し不明。	灰(0.5-2mの石灰含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-215
HS105 高杯	63	95	39	274	⑤ 5.1A	厚縁の口縁。筒状をなく、スズメにひらがる筒状の筒部は中空である。	全体的に風化が進行し不明。	黒粒を含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-31
HS103 高杯	64	95	39	187	④ 4.8A	スズメにひらがる筒状の中空の筒部。	外面—タテハケ。内面—ケズリ後ナテ	灰(1-2mの石灰含む。黒粒含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-236
HS105 壺台	65	96	40	290	① 5.9 ②17.3 ③ 5.0	受皿部、下縁以上を欠く。筒部は、短く、筒内面は、丸く口縁部下端は、外へへ突出する。上縁は丸く外へへ突出し、下縁は丸く。	外面—ヨコナテ。内面—筒部中央半方向ケズリ。後はヨコナテ。	灰(1-3mの石灰含む。)	良好	外面淡褐色～褐色内面淡褐色。	筒部が若干外側に風化。F-53
HS105 壺台	66	96	40	196	① 5.8A ②17.3 ③ 5.0	受皿部、下縁以上を欠く。筒部は丸い。筒内面は、外傾して丸く口縁部下端は、外へへ突出する。上縁は丸く外へへ突出し、下縁は丸く。	外面—ヨコナテ。内面—筒部中央半、左方向ケズリ。下縁はケズリ後ヨコナテ。その他はヨコナテ。	灰(1-2mの石灰含む。)	良好	淡褐色。	F-52
HS105 壺台	67	96	40	188	④ 4.5A ⑤15.7R ⑥ 5.0	外傾して丸く口縁部を有する筒部。筒部は丸く、上縁は外へへ突出する。	外面—ヨコナテ。内面—筒部上半、右方向ケズリ。下下、ヨコナテ。	灰(0.5m級の石灰含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-213
HS105 煎餅環	68	96	40	203	④ 6.2	大き(ひろく)筒状と大きな厚縁。	全体的に風化が進行し不明。外面—不明。内面—筒部不明。厚縁ナテ。	灰(1-2mの石灰含む。)	良好	内外面淡褐色。	F 6
HS105 壺	69	96	40	363 360 314	①48.7 ②39.0A ③18.5R	口縁部は、カットしたような要素をもつ。把手は、一対のみあるが筒部にはあつた。上部は丸く、は、縦方向につらものと思われ。体部は丸く筒部に挿入。腹部の要素はしっかりと磨り出す。	全体的に風化が進行し不明。外面—口縁部ヨコナテ。体部にタテハケ。基部ヨコナテ。筒部は丸くつける。内面—口縁部ヨコナテ。以下体部は右方向ケズリ。基部、左方向ケズリ後ヨコナテ。	灰(1-2mの石灰を含む。黒粒を含む。)	良好	内外面淡褐色。	Y-23
HSK01 壺	70	97	41	217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227	①20.2 ②30.2 ③24.0 ④21.6 ⑤ 4.0	口縁部は、わずかに外傾してたちあがる複合口縁。口縁部は、丸く口縁部下端は、外へへ突出する。腹部内面は、2段に屈曲する。なだらかな筋部から、最大径を上半腹にもつ筋部に至る。腹部は小さく平な。	外面—口縁部、17cm以上の平行洗滌。腹部ヨコナテ。肩部、右方向の平行洗滌。筒部、風化しているが、左側する縦方向のミガキが認められる。内面—口縁部—筒部までヨコ方向ミガキ。口縁部下半をヨコナテ。腹部—筒部下半まで左上方ケズリ。以下は、右側するタテ方向のケズリ。	灰(1-3mの石灰含む。黒粒含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	体部にスズメケ。F-133
HSK01 壺	71	97	41	207 219 214 324	①17.6 ②16.5A ③21.6 (R中) ④ 3.2	口縁部は、外傾してたちあがる複合口縁。口縁部は、丸く口縁部下端は、そのまんなかに筋部へとつづく。口縁部内面の段は、明確。短く屈曲する。口縁部内面の段は、丸みをもつて屈曲し、なだらかな筋部から筒部に至る。	外面—口縁部、平行洗滌後ヨコナテ。腹部、ヨコナテ。肩部、具線跡による段状文(骨つゞき)。筒部、筒部に平行洗滌。筒部、ヨコ左上方の細かい(幅約1mm)のミガキ。このミガキによって筒部の底状の段状文。内面—口縁部—筒部までヨコ方向のミガキ。上半ヨコナテ。腹部—筒部まで左上方ケズリ。筒部以下は右側するタテ方向のケズリ。	灰(1-3mの石灰含む。)	良好	内外面淡灰褐色。	口縁部内面、筒部外側にスズメケあり。筒部外側、口縁部外側にスズメケあり。口縁部内面に淡褐色。F-3
HSK01 壺	72	97	41	207 208 215 217 219 220 222 225 226 227 228	①19.9 ②16.5A ③25.4 ④25.1 ⑤ 3.3	口縁部は、ほぼ直立してたちあがる複合口縁。口縁部は、外方へ傾斜する平口縁をもつ。口縁部下端は、外へへ突出する。口縁部内面の段は、丸みをもつて「く」の字状に屈曲し、なだらかな筋部を経て筒部に至る。	外面—口縁部、段状文。腹部ヨコナテ。肩部—筒部まで16cm以上の平行洗滌を有す。その下に段状文を有す。筒部にミガキが認められる。内面—口縁部—筒部ヨコナテ。口縁部に一帯ミガキが認められる。筒部以下左方向ケズリ。	灰(1-3mの石灰含む。)	良好	外面淡灰褐色。内面淡灰褐色。	内面の口縁部—筒部にスズメケあり。F-154

採集14 南谷ヒジリ遺跡出土土器観覧表④

出土遺構	上層番号	棟間	取上番号	法量(m)	形態上の特徴	手法上の特徴	出土	地味	色調	備考
H/S K01 壁	● 73	97	41	260 ①19.7m ②5.5A 318 319 322 331 332	外側にたががある複合口縁。口縁端は丸くおさめ、下縁はわずかに下巻する。内面の段は不明瞭。腹部内面は2段に区画する。	外面—口縁部、2段の平行沈線(右—左)。腹部、ヨコナテ。肩部にわずかに平行沈線が認められる。 内面—口縁部—腕部までヨコナテ。腹部以下右方向ケズリ。	やや重(1—4mmの石灰含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	外面、口縁部から腹部にかけてヒケ付着。 F—27
H/S K01 壁	● 74	97	41	321 ①05.6m ②3.0	外側にたががある複合口縁。口縁端は丸くおさめ、下縁はわずかに下巻する。内面の段は不明瞭。腹部内面は丸みをもって2段に区画する。	外面—口縁部、8条以上の平行沈線後ヨコナテ。腕部ヨコナテ。 内面—口縁部—腕部までヨコナテ。腹部以下右方向ケズリ。	重(1—3mmの石灰含む。)	良好	外面淡茶褐色—灰褐色。 内面淡茶褐色。	F—18
H/S K01 壁	● 75	97	41	214 ①18.6m 216 319 329	むらやかな外縁。腹部は丸みをもって「く」の字状に区画する。わずかに外側にたががある。口縁部は丸く、口縁部下縁は、口縁部内面の段は不明瞭。	外面—口縁部、10条以上の平行沈線。腕部—腕部ヨコナテ。腹部ヨコナテ。 内面—口縁部—腕部までヨコナテのミガキ後、上半部ヨコナテ。腹部以下右方向ケズリ。	やや重(1—4mmの石灰含む。灰味含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部内外面にヒケ付着。 F—122
H/S K01 壁	76	97	42	338 ①16.3m ②3.6A ③2.6	外側にたががある複合口縁。口縁端は丸くおさめ、下縁はそのまま直垂する。内面の段は不明瞭。腹部内面は「く」の字状に区画する。	内面—口縁部と区画される。 外面—口縁部、平行沈線を確認できる。腕部ヨコナテ。 内面—口縁部、ヨコナテのミガキを確認できる。腕部以下は区画不明。	やや重(1—4mmの石灰、灰を含む。)	良好	内外面淡灰褐色。	F—191
H/S K01 壁	● 77	97	223	208 ①13.6m 218 224 318 320	外側にたががある複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下縁は、そのまま直垂する。口縁部内面の段は不明瞭。腹部内面は丸味をもって「く」の字状に区画する。	外面—腕部—腕部不明。 内面—口縁部、腕部以下、区画不明。腕部以下、左方向ケズリ。	やや重(1—3mmの石灰含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F—21
H/S K01 壁	● 78	97	41	208 ①11.6m 215 ②7.5A ③2.7 ④(腕上中) ⑤2.3	口縁部は、外側にたががある複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、丸く外へ曲がる。腹部内面は「く」の字状に区画する。肩部ならぬ。最大径は、腕部上層にある。	外面—口縁部、平行沈線後ヨコナテ。腕部—腕部ヨコナテ。腹部ヨコナテ。 内面—口縁部—腕部までヨコナテのミガキ後、下半部以下平行沈線が確認できる。腕部以下右方向ケズリ。	重(1—2mmの石灰含む。灰味含む。)	良好	内外面淡茶褐色—灰褐色。	F—56
H/S K01 壁	● 79	97	42	221 ①16.8m ②5.2A ③3.8	外側にたががある複合口縁。口縁部は、丸くやや外へ曲がる。下縁は、むらやかに下巻する。内面は、ゆるやかな段をもつ。腹部内面は「く」の字状に区画する。	外面—口縁部、4条以上の平行沈線後ヨコナテ。腕部以下は右方向ケズリ。 内面—口縁部—腕部までヨコナテのミガキ後、上半部ヨコナテ。腕部以下、右方向ケズリ。	重(1—3mmの石灰含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F—25
H/S K01 壁	80	97	42	201 ①16.0m ②5.9A ③3.4	外縁むらやかに外側にたががある複合口縁。口縁端は、おさめたような段をもつ。腕部は、丸く突出する。内面の段は不明瞭。	内面—ヨコナテ。	重(1mm程度の石灰含む。)	良好	内外面淡褐色。	F—2
H/S K01 壁	● 81	98	334	329 ①10.8A ②17.2 (腕)	外側にたががある複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、丸く外へ曲がる。腹部内面は「く」の字状に区画する。肩部ならぬ。最大径は、腕部上層にある。	外面—口縁部、ヨコナテ。腕部に区画される。タテ方向のミガキが認められる。 内面—腕部—腕部以下左方向ケズリ。	重(1—4mmの石灰、お灰含む。)	良好	内外面淡褐色—灰褐色。	F—125
H/S K01 壁	● 82	98	215	222 ①7.3A ②13.5 (腕中)	丸く区画する。	外面—口縁部、8条の平行沈線後、その下に成文(左—右)斜線ナテ。 内面—口縁部—腕部—腕部まで右方向ケズリ。以下区画するタテ方向ケズリ。	重(1—4mmの石灰含む。)	良好	内外面淡茶褐色—灰褐色。内面淡灰褐色。	外縁部部にヒケ付着。 F—128
H/S K01 壁	● 83	98	42	216 ①8.8A ②19.0m	外方に真鍮的にむらや、複合口縁部の腕部。腕部上層は上方へひさした。下縁は丸い。腹部は不明。	外面—口縁部に10条以上の平行沈線。腕部上層—腕部までヨコナテのミガキがわずかに認められる。腕部以下は右方向ケズリ。 内面—腕部右方向ケズリ。腕部以下右方向ケズリ。	やや重(1—4mmのお灰含む。)	良好	内外面淡褐色。	F—20
H/S K01 壁	● 84	98	42	218 ①12.7 ②11.1A	変部は、わずかに外側にたががある複合口縁を呈する。口縁部は丸く、わずかに外へ曲がる。変部下縁は下巻する。腹部は不明。	外面—変部に10条以上の平行沈線。変部下縁—腕部までタテ方向のミガキがわずかに認められる。腕部以下は右方向ケズリ。 内面—変部右方向ケズリ。腕部以下右方向ケズリ。	重(1—3mmの石灰、お灰含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F—124
H/S K01 壁	85	98	42	223 ①3.9A ②15.3m	外へ真鍮的にむらや、複合口縁部の腕部。腕部上層は上方へひさした。下縁は丸い。	外面—口縁部、12条の平行沈線。腕部—腕部以下左方向ケズリ。	重(1mm程度の石灰含む。)	良好	内外面淡褐色。	F—55
H/S K01 壁	● 86	98	42	217 ①7.7A ②13.3A	外へ真鍮的にむらや、複合口縁部の腕部。腕部上層は上方へひさした。下縁は丸い。	外面—口縁部、ヨコナテ。腕部に区画される。タテ方向のミガキが認められる。 内面—口縁部—腕部—腕部まで右方向ケズリ。以下区画するタテ方向ケズリ。	重(1—3mmの石灰含む。)	良好	内外面淡茶褐色—灰褐色。	F—9
H/S K01 壁	● 87	98	42	207 ①2.5A ②2.5m ③(中)	わずかに外側にたががある複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、丸く外へ曲がる。腹部内面は「く」の字状に区画する。肩部ならぬ。最大径は、腕部上層にある。	外面—口縁部、ヨコナテ。腕部に区画される。タテ方向のミガキが認められる。 内面—口縁部—腕部—腕部まで右方向ケズリ。以下区画するタテ方向ケズリ。	重(0.3—3mm程度の石灰含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F—103
H/S K01 (壁部)	88	219	329 ①3.4A ②2.9	平直の変部した腹部。	外面—ナテ。 内面—左方向する下—上方向ケズリ。	重(1—2mmの石灰含む。灰味含む。)	良好	外縁部淡褐色。 内面淡灰褐色。	F—212	
H/S K01 (壁部)	● 89	98	326 ①1.1A ②3.0m	小さな平直の腹部。	外面—ナテ。 内面—ナテ。	重(1mm程度の石灰含む。)	良好	外縁部淡茶褐色—淡灰褐色。内面淡灰褐色。	F—211	
H/S K01 (壁部)	90	98	324 ①2.6A ②2.4m	小さな平直。	外面—ナテ方向のハケの段。タテ方向のミガキ。 内面—ナテケズリ。	重(1—3mmの石灰含む。灰味含む。)	良好	内外面淡褐色。	F—82の壁部。 F—126	
H/S K02 壁	● 91	99	42	364 367 371 373	口縁部は、外側にたががある複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、下巻する。口縁部内面の段はゆるやか。腹部内面は、2段に区画する。	外面—口縁部、12条の平行沈線。腕部ヨコナテ。 内面—口縁部—腕部にかけて腕部が若干し、口縁部にミガキがわずかに認められる。腕部以下左方向ケズリ。	重(1—3mmの石灰含む。灰味含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F—131

挿表15 南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表⑤

出土遺構	土層番号	発掘	図版	取土番号	法量(m)	断面上の特徴	平法上の特徴	出土	電気体	色	備考
H5 K02 遺	● 92	99	42	373	①1.4 2.0 ② 4.0 ③ 3.2	口縁部は、外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は「く」の字状に類似する。	外面→口縁部、10cmの平行沈積。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部一部までヨコ方向のミダキ。腹部以下右方向ケズリ。	底(1-2m)の石灰含む。雲母含む。	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部外面にスチ付。F-127
H5 K02 遺	● 93	99	42	365 367 371 376	①1.5 ② 4.1 ③ 3.4	外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は「く」の字状に類似する。	外面→口縁部、平行沈積。腹部ヨコナテ。 内面→底化しているが、口縁部一部にのみミダキの残存が認められる。腹部以下右方向ケズリ。	やや底(1-2m)石灰石、石灰含む。	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部外面にスチ付。F-12
H5 K02 遺	● 94	99		329 364 370 372 373	①1.7 7.0 ② 3.6 ③ 3.6	口縁部は、外傾または大きく外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は丸味をもって「く」の字状に類似する。	外面→口縁部、平行沈積。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部一部ヨコナテ。口縁部下下にわずかにミダキの残存が認められる。腹部以下、右方向ケズリ。	底(1-2m)の石灰、石灰含む。雲母含む。	良好	外面淡茶褐色。内面淡茶褐色一様色。	口縁部一部外面にスチ付。F-8
H5 K02 遺	● 95	99	42	329 314	①1.0 ② 4.0 ③ 2.2	口縁部は、外傾して短くたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端はそのまま直垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は2段に類似する。	外面→口縁部5cmの縦沈積。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部ヨコナテ。腹部ヨコ方向ミダキ。以下左方向ケズリ。	底面(1cm程度)の石灰含む。	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部外面にスチ付。F-79
H5 K02 遺	● 96	99	42	292	①1.6 7.0 ② 4.0 ③ 2.0	口縁部は、外傾して短くたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は丸味をもって腹部へつながる。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は丸味をもって「く」の字状に類似する。	内面直上も風化が著しい。外面→口縁部、平行沈積。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部ヨコ方向のミダキが認められる。腹部以下不明。	底(1-2m)の石灰含む。	やや不良	内外面淡茶褐色。内面淡茶褐色。	口縁部一部外面に赤色塗彩。F-23
H5 K02 遺	● 97	99		293	①1.2 2.0 ② 2.0	口唇部は、肥厚する。	内外面とも不明	底(1.5-2m)の石灰含む。雲母含む。	良好	内外面明褐色。	F-88
H5 K02 高塚	● 98	99	42	332 333 339 ①1.6 ② 1.6 (脚版)	①0.7 2.2 ② 2.0 ③ 2.0	浅い板状の厚部をもつ。口唇部は内傾し、口唇部は丸く、口唇部下端はひらがる腹面に投影して大きくひらがる腹面がつく。腹部に凹形蓋と2個づつ3ヶ所につく。	外面→口唇部、風化のため不明。腹部、タテ方向ミダキ。腹部、ヨコ方向ミダキ。腹部はヨコナテ。 内面→厚部、底化しているがわずかにミダキが認められる。腹部ケズリ。腹部と厚部の接合部に斜交線。腹部、左方向ケズリ。	底(1-2m)の石灰石、石灰含む。	良好	内外面明褐色。	F-4
H5 K02 高塚	● 99	99	42	375	① 8.1 2.0	高塚の厚部の一部と脚部。脚部は中実で太い。	外面→厚部一部までタテ方向のミダキ。厚部と脚部の接合部にミダキを覆ったタテ方向の一部が認められる。 内面→丸味ミダキ。腹部下部に窪んでいたような跡あり。脚部左方向ケズリ。	底(1-2m)の石灰含む。雲母含む。	良好	内外面淡茶褐色。	F-91
H5 K02 高塚	● 100	99	42	359	① 4.1 2.0 ② 3.4	複合口縁状を呈する脚部。脚部は丸い。	外面→平行沈積。ヨコナテ。 内面→右方向ケズリ。脚部内面直垂。ヨコナテ。	底(1-2m)の石灰含む。雲母含む。	良好	内外面淡茶褐色。	F-90
H5 K02 (部)	● 101	99		292	① 2.5 2.0 ② 2.6	平底の腹部	外面→タテ方向のミダキ。蓋部ナテ。 内面→右側すたテ方向ケズリ。	底(1-2m)の石灰含む。雲母含む。	良好	外面淡茶褐色。内面淡茶褐色。	F-76
H5 K03 遺	● 102	100	43	350	①1.9 2.0 ② 6.0 ③ 3.9	口縁部は、わずかに外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は丸味をもって「く」の字状に類似する。	外面→口縁部に2cm以上の平行沈積。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部にヨコ方向のミダキ。腹部ケズリ。右方向のミダキ。腹部以下左方向ケズリ。	底面(1-2m)の石灰含む。雲母含む。	良好	外面茶褐色。内面淡茶褐色一様色。	口縁部一部外面に赤色塗彩。F-210
H5 K03 遺	● 103	100		379	①0.7 3.0 ② 5.0 ③ 4.0	口縁部は、わずかに外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は丸味をもって類似する。	外面→口縁部、平行沈積(右一尺)後一部にミダキが認められる。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部一部まで、ヨコ方向のていまいミダキ。	底(1.5-3m)程度の石灰含む。雲母含む。	良好	内外面淡茶褐色。	F-87
H5 K03 遺	● 104	100	43	360	①2.2 5.0 ② 5.1 ③ 3.7	口縁部は、大きく外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は丸味をもって類似する。	外面→口縁部に10cm以上の平行沈積。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部一部までていまいなヨコ方向のミダキ。口唇部直垂ヨコナテ。	底(1-2m)の石灰含む。	良好	外面淡茶褐色。内面淡茶褐色。	F-28
H5 K03 遺	● 105	100	43	359 369	①1.9 5.0 ② 5.0 ③ 2.8	口縁部は、直立してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は、そのまま直垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は丸味をもって「く」の字状に類似する。	外面→口縁部、12cm以上の平行沈積。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部一部までヨコナテ。腹部以下直垂。	底(1-2m)の石灰含む。	良好	内外面茶褐色。	F-24
H5 K03 遺	● 106	100	43	360	①1.4 7.0 ② 3.5 ③ 2.2	口縁部は、外傾してたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は、わずかに下垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は「く」の字状に類似する。	全体的に底化している。外面→口縁部に平行沈積。腹部ヨコナテ。 内面→口縁部一部にミダキが認められる。腹部以下左方向ケズリ。	底(1-2m)の石灰含む。雲母含む。	良好	外面淡茶褐色。内面淡茶褐色一様色以下色。	F-81
H5 K03 遺	● 107	100	43	350	①1.8 6.0 ② 6.0 ③ 2.1	口縁部は、外傾して短くたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は、そのまま直垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は丸味をもって2段に類似し、なだらかな腹面へつながる。	全体的に底化が著しい。外面→口縁部に2cmの沈積を認められる。腹部一部までヨコナテ。 内面→口縁部一部まで不明。腹部以下左方向ケズリ。	底(1-3m)の石灰含む。	良好	内外面淡茶褐色。	F-80
H5 K03 遺	● 108	100	43	350	①1.5 5.0 ② 6.0 ③ 2.1	口縁部は、外傾して短くたちあがる複合口縁。口唇部は丸く、口縁部下端は、そのまま直垂する。口縁部内面の段は不明瞭。縦断面は丸味をもって「く」の字状に類似し、なだらかな腹面へつながる。	全体的に底化が著しい。外面→口縁部、平行沈積がわずかに認められる。腹部、不明。斜交線。内面→口縁部一部まで不明。腹部以下、左方向ケズリ。	やや底(1-2m)の石灰含む。	良好	外面淡茶褐色。内面淡茶褐色一様色。	F-11

挿表16 南谷ヒジリ遺跡出土土器調査表⑥

出土品種	土器番号	採掘	埋深	取上 番号	位置(cm)	形 態 上 の 特 徴	工 正 上 の 特 徴	胎 土	焼成保存	色 彩	備 考
H S K 03 甕	109	100	43	350	①16.1W ② 4.1L ③ 1.9	口縁部は、ほぼ直立して短くたちあがる複合口縁。口縁部は丸く口縁下部は、そのまま直線する。口縁部内面の段は明確。腹部内面は、丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	全体的に風化が浅い。外面一平行政線有る。内面一口縁部から下方にヨコ方向のミガキが認められる。腹部以下、左方向ケズリ。	密(1-2mmの石英含む)	良好	外面灰褐色。内面淡褐色。	F-19
H S K 03 甕	110	100	43	350	①16.2W ② 3.8L ③ 2.9	外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁下部は、外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。	外面一口縁部一線以上の平行政線。内面一口縁部から下方にヨコ方向のミガキが認められる。	密(3-5mmの石英含む。雲母含む)	良好	外面淡褐色。内面淡灰褐色。	外面にスス付着。F-84
H S K 03 (底物)	111	100	43	359 360	② 5.8A ③ 3.6	平底の底盤。	全体的に風化が浅い。外面一タテハが認められる。内面一右傾する下+上方向のケズリ。	やや粗(1-3mmの石英含む)	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。一底灰褐色。	F-7
H S K 03 (底物)	112	100	43	360	②12.9A ③ 7.0W	平底の底盤。	外面一タテ方向のミガキ。内面一右傾する下+上方向のケズリ。	密(1-2mmの石英含む)	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。内面暗褐色。一底灰褐色。	F-5
H S K 03 (底物)	113	100	43	360	② 3.6L	しっかりとした平底。	外面一タテ方向のミガキ。内面一右傾する下+上方向のケズリ。	密(1-2mmの石英含む。雲母含む)	良好	外面暗褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。	F-77
H S K 04 甕	*114	101	44	363	①13.8W ② 4.6L ③ 2.1	口縁部は、外縁外側に外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁下部は、そのまま直線する。腹部内面は丸味をもって2段に屈曲する。	外面一口縁部10cm以上の平行政線。密ココナテ。内面一口縁部ヨコ方向のミガキ。腹部不明。以下方向ケズリ。	密(1-2mmの石英含む。雲母含む)	良好	内外面淡褐色。一底灰褐色。	口縁部外面にスス付着。F-86
H S K 04 甕	*115	100	44	369 384 387	①14.0W ② 4.5A ③ 2.2	口縁部は外縁外側に外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁下部は、外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。	外面一口縁部10cm以上の平行政線。密ココナテ。内面一口縁部ヨコ方向のミガキがわずかに認められる。	やや粗(1-2mmの石英含む。雲母含む)	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。一底灰褐色。	口縁部外面にスス付着。F-78
H S K 04 甕	*116	101	44	382 383	①19.7L ②13.3L ③2.5L (脚) ④ 3.7	口縁部は、おきか外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は、おきかたよりなまら直線する。口縁部内面の段はゆるやか。腹部内面は、2段に屈曲してたらかなる折曲へつづく。	全体的に風化が浅い。外面一平行政線有る。内面一口縁部から下方にヨコ方向のミガキが認められる。腹部以下、左方向ケズリ。	密(1-3mmの石英含む)。雲母含む。	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。	F-130
H S K 04 甕	117	101	44	381	①17.2W ② 4.5A ③ 2.2	外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁下部は、外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。	外面一12cmの平行政線。内面一口縁部ヨコ方向のミガキ。	密(1-2mmの石英含む。雲母含む)	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。	F-89
H S K 04 甕	118	101	44	381	①18.4W ② 3.1L ③ 2.2	外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁下部は、外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。	外面一口縁部10cm以上の平行政線。内面一口縁部ヨコ方向のミガキ。	密(1mm程度の石英含む)	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。	F-85
H S K 04 甕	*119	101	44	382	①16.5W ② 4.7L ③ 3.0	口縁部は、外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁下部は、二つ斜方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。腹部内面は、丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部一線部ココナテ。内面一口縁部は、ほぼ平坦なハタ状ハズレ状ココナテ。口縁部一線部以下、左方向ケズリ。	やや粗(1-3mmの石英含む)	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。	口縁部外面にスス及び黒炭。F-22
H S K 04 甕	*120	101	44	385	①14.6W ② 4.9L ③ 3.0	口縁部は、外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁下部は、外方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。腹部内面は、丸味をもって2段に屈曲する。	外面一口縁部、ハタ上ハズレを残す。密ココナテ。内面一口縁部一線部まで、強いヨコナテの段、無いが、	密(1-2mmの石英含む)	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。	口縁部外面にスス付着。F-83
H S K 04 甕	*121	101	44	382	①18.5W ② 3.9A ③ 3.0	外縁してたちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁下部は、二つ斜方へ突出する。口縁部内面の段は不明瞭。腹部内面は、丸味をもって「く」の字状に屈曲する。	外面一口縁部ココナテ。腹部ココナテ。内面不明。	密(1-2mmの石英含む)	良好	外面淡褐色。一底灰褐色。	F-82
H S K 05 (底物)	*122	101		383	② 2.9L ③ 4.4W	平底の底盤。	内面一右傾する下+上方向のケズリ。	密(1-3mmの石英含む)	良好	内外面淡褐色。一底灰褐色。	F-14
H S B 03 甕	123			352	①17.2W ② 2.7A	外縁外側に大きく口縁。口縁部は丸い。	内面一ヨコナテ。	密(砂粒含む。雲母含む)	良好	内外面暗褐色。	F-108
H S B 03 不明	124	101	44	126	①17.3W ② 4.7A	外縁外側にたちあがる。	内面一ヨコナテ。	密(砂粒含む)	良好	内外面暗褐色。	F-124
H S B 03 底物 塚	125	101	44	125	①12.0W ② 4.5L ③ 2.2	口縁部は、やや内傾しながら外縁し、腹部に至る。口縁部は丸くおきか。腹部は平ら。	外面一口縁部、短冊ナテと思われる。腹部には、何処も平坦な。内面一短冊ナテと思われる。	やや粗(3-5mmの砂粒含む)	やや不良	外面二色質灰褐色。内面淡褐色。	F-217
H S B 01 高台杯	126	101		390	①14.5L	外方へへんばり高台がつく。	内外面一風化のため不明。	密(砂粒含む)	良好	外面面暗褐色。	F-245
H S B 01 (底物)	127	101		390	①14.5W	大きく開く縁は、内面に肥厚する。	内外面一短冊ナテ。	密(砂粒含む)	良好	外面面暗褐色。	F-245
H S D 01 甕	128	102		293	①15.4W ② 4.2A	「く」の字に折れ曲がる腹部からそのまま直線に平ら。口縁部は肥厚しない。腹部はならぬ。	外面一口縁部ココナテ。腹部一側面まで平らに傾くココナテ。内面一口縁部ココナテ。腹部以下不明。	密(砂粒含む)	良好	内外面淡褐色。	F-115
H S D 01 甕	129	102		74	①13.3W ② 4.2L	内面から腹筋からそのまま口縁部に至る。口縁部は丸い。	内外面一ヨコナテ。	密(砂粒含む。雲母含む)	良好	内外面暗褐色。	F-113
H S D 01 甕	*130	102	45	264	①14.9W ② 3.5L ③ 2.4	口縁部は、ほぼ直立して短くたちあがる複合口縁。口縁部は丸く口縁下部は、そのまま直線する。口縁部内面の段は明確。腹部内面は「く」の字状に折れ曲る。なだらかな腹部へと続く。	外面一口縁部一線部ヨコ方向のミガキが認められる。内面一口縁部一線部ヨコ方向のミガキが認められる。腹部以下、左方向ケズリ。	密(1-3mmの石英含む)	良好	内外面淡褐色。一底灰褐色。内面淡褐色。	腹部外面にスス付着。F-31

挿表17 南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表(7)

出土遺物	土器番号	種別	図版	収上 番号	寸法(mm)	形態上の特徴	工法上の特徴	胎土	発色 保存	色調	備考
H S D01 甕	131	102		293	①13.6W ②3.5d ③1.6	口縁部は、わずかに外側に傾くたちあがる直ぐ口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、その2倍程度である。口縁部内面の数は明確。器底内面は「く」の字状に凹曲する。	外側→口縁部→器底までヨコナテ。 内側→口縁部→器底までヨコナテ。器底はトナズ。	泥(1-2mmの石灰を含む)。	良好	内外面黒褐色。	口縁部→器底の内面にニス付着。 F-112
H S D01 甕	132	102		74	①12.8W ②3.1d ③2.9	外反型時に傾斜してたちあがる場合口縁。口縁部は外方へ傾き、おさまったような面を有し、外方へ肥厚。口縁部下縁は、外方へ突出する。	内側面→ヨコナテ。	織物(砂粒を含む)。	良好	内外面黒褐色。	F-111
H S D01 甕	133	102	45	378	①11.1 ②9.4d ③3.2	口縁部は内湾しながら外方へ傾いてたちあがりそのまま口縁部になる。口縁部は丸い。器底内面は丸形をもつて段に凹曲し、ならぬかならぬ部を有して、よく目を観察する。	外側→口縁部→器底までヨコナテ。 内側→口縁部ヨコナテ。器底は下の方角ナズ。	泥(1-2mm程度の石灰を含む)。	良好	外面褐色→黒褐色。内面黒褐色。	Y-27
H S D01 流石 埴輪	134	102		54 127	①14.8W ②9.3d	口縁部は、ゆるやかに外湾しながら外傾し、器底に至る。器底は丸くおさまる。	外側→一帯部→ヘラズリ後、展転ナテ。 内側→口縁部ナテ。	泥(砂粒を含む)。	やや不具	内外面とも黒褐色。	F-218
H S D01 甕	135	102	45	33	①13.8W ②2.8d	「く」の字状に器内面から器底がそのまま口縁部につづく。口縁部は、わずかに肥厚する。	口縁部は、内外面ともヨコナテ。口縁部ナテ。	泥(0.5-1mmの石灰を含む)。	良好	内外面黒褐色。	F-54
H S D01 甕	136	102		446	①21.8W ②11.2d ③3.1d	外反しながら大きくひかかるときの口縁。口縁部は丸をなし、中央が凹曲状にぼく。	内側面→ヨコナテ。	織物(0.5-1mmの石灰を含む)。	良好	内外面黒褐色。	F-114
耳埴輪外 底付	137	102	45	26	①14.2W ②4.7d ③2.7	外反しながら外側にたちあがる場合口縁。口縁部は丸いが上縁をわずかにおさる。口縁部下縁は、緩く外方へ突出する。口縁部内面の数は明確。器底内面は、丸味をもつて2段に凹曲する。	内側面→ヨコナテ。	泥(1-2mmの石灰を含む)。	良好	内外面黒褐色。	F-209
耳埴輪外 底付	138	102	45	23	②3.3d	耳部。	不明	泥(1-2mmの石灰を含む)。	やや不具	内外面黒褐色。	F-216
耳埴輪外 底付	139	102		18	①13.8W ②1.5d	口縁部の下に溝運布が見られる。		織物(砂粒を含む)。	良好	内外面黒褐色。	F-229
耳埴輪外 底付	140	102	45	18		底付部の破片かと思われる。	外側→半打明きの後、カキ目調整。 内側→同心円文印。	織物(膠粒を含む)。	良好	外面黒褐色。内面黒褐色。	F-219
耳埴輪外 底付	141	102	45	21		器底部の破片。	外側→半打明き。 内側→同心円文印。	泥(1-2mmの石灰を含む)。	良好	内外面とも黒褐色。	F-220
H S D03 流石 埴輪	142	102	45			器底部の破片と思われる。	外側→半打明き。 内側→同心円文印。	泥(砂粒を含む)。	良好	外面黒褐色。内面黒褐色。	F-119
H S K02 縄文漆鉢	143			333		漆鉢の口縁部の破片である。	外側→口縁部外面。平行沈線と刻文が施される。その下に幾文の筋が、L Rの縄文地の土着である。 内側→ナテ調整している。	1-3mmの石灰を含む。器底を含む。	良好	内外面黒褐色。	F-58
H S K04 縄文	144			383		器底の破片である。	外側→地文は器底である。器底の筋りはL Rである。 内側→ナテ調整している。	0.5-1mmの石灰を含む。	良好	内外面黒褐色。	F-61
H S D01 縄文	145			127		器底の破片である。	外側→地文は、器底である。器底の筋りはL Rである。 内側→ナテ調整している。	0.5-1mmの石灰を含む。	良好	内外面黒褐色。	基本 II F-117
H S I02 縄文	146			43		器底の破片である。	外側→地文は、器底である。器底の筋りはL Rである。 内側→ナテ調整している。	1-2mmの石灰を含む。	良好	内外面黒褐色。	基本 II F-118
A 2 G 縄文漆鉢	147			34		器底の破片である。	外側→地文は、器底である。器底の筋りはL Rである。 内側→ナテ調整している。	1-3mmの石灰を含む。	良好	外面黒褐色。内面黒褐色。	F-221
H S K02 縄文	148			333		器底の破片である。	外側→地文は縄文である。器底の筋りはL Rである。 内側→ナテ調整している。	0.5-1mmの石灰を含む。器底を含む。	良好	内外面黒褐色。	F-59
H S K02 縄文	149			333		器底の破片である。	外側→地文は縄文である。器底の筋りはL Rである。 内側→ナテ調整している。	1-2mmの石灰を含む。	良好	内外面黒褐色。	基本 II F-60

掲表18 南谷ヒジリ遺跡出土土器観察表①

土上通観	土層番号	採掘	取上番号	法量 (cm)	形質上の特徴	手法上の特徴	出土	地味保存	色調	備考
MS101	変	①50	103	46	200 ①25.3 ② 7.2△ ③ 2.6	ほぼ直立してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端はわずかに下弯する。頸部内面はほぼ垂直で「く」の字状に屈曲する。肩部はなだらか。	外面—口縁部2cm以上の平行沈線。頸部ココナテ。内面—口縁部1cm以上が認められる。頸部以下左方向ケズリ。	底(1-3cmの灰石、石を含む)。良好	外面茶褐色 内面淡褐色。	F-172
MS101	変	①51	103	239	①17.3W ② 4.0 ③ 3.4	口縁部は外縁側に外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部下端は、外方へ突出する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—口縁部平行沈線ココナテ方向1cmを、以下、ココナテ方向ミナギ。内面—口縁部—頸部ココナテ方向ミナギ。頸部以下、右方向ケズリ。	やや底(0.5-2cm程度の石を含む)。良好	外面淡褐色 内面淡茶褐色 一帯褐色。	口縁部外側にスチ付帯 F-167
MS101	変	①52	103	46	①17.5W ② 6.3△ ③ 3.2	口縁部は外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部下端は、外方へ突出する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—口縁部平行沈線ココナテ方向1cmを、頸部ココナテ。内面—口縁部ココナテ方向ミナギ。頸部ココナテ。以下、右方向ケズリ。	底(0.5-2cmの石を含む)。良好	外面淡褐色 内面に黒帯あり。	F-165 F-166
MS101	変	①53	103	46	①18.0W ② 5.4△ ③ 3.0	口縁部は、外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は、わずかに下弯する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	ほぼ完全に風化している。外面—口縁部2cm以上の平行沈線。頸部不明。内面—口縁部—頸部ココナテ。以下左方向ケズリ。	底(1-2cmの石灰を含む)。良好	外面淡褐色。	F-171
MS101	変	①54	103	46	①17.2W ② 5.6△ ③ 4.0	わずかに外方側へ外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部下端は、外方へ突出する。	外面—口縁部2cm以上の平行沈線。頸部不明。内面—頸部のないが不明。	底(1-3cmの石灰を含む。雲母を含む)。良好	内外面淡褐色。	F-169
MS101	変	①54	103	46	①17.2W ② 5.6△ ③ 4.0	わずかに外方側へ外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部下端は、外方へ突出する。	外面—口縁部2cm以上の平行沈線。頸部不明。内面—頸部のないが不明。	底(1-3cmの石灰を含む。雲母を含む)。良好	内外面淡褐色。	F-169
MS101	変	①55	103	46	①17.2W ② 5.6△ ③ 4.0	口縁部はほぼ直立してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—口縁部平行沈線ココナテ。頸部ココナテ。内面—口縁部2cm以上が認められる。頸部以下左方向ケズリ。	やや底(0.5-2cm程度の石を含む)。良好	内外面淡褐色。	F-164
MS101	変	①56	103	46	①19.3W ② 4.4△ ③ 3.8	外方側へ外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は、外方へ突出する。口縁部下端は、外方へ突出する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—口縁部平行沈線後ココナテ。頸部ココナテ。内面—口縁部上段ココナテ。下段—頸部ココナテ方向ミナギ。以下左方向ケズリ。	底(0.5-3cmの石を含む。雲母を含む)。良好	外面淡褐色。	F-166
MS101	変	①57	103	235	①17.1W ② 4.8△ ③ 3.0	外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は風化している。口縁部内面は「く」の字状に屈曲する。	風化が著しいが、口縁部外側に平行沈線がわずかに残る。	やや底(1-2cmの石灰を含む)。良好	内外面淡褐色。	F-161
MS101	変	①58	103	242	①17.4W ② 5.5△ ③ 3.0	わずかに外方側へ外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部下端は、外方へ突出する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—口縁部2cm以上の平行沈線。以下ココナテ。内面—口縁部—頸部ココナテ。以下左方向ケズリ。	やや底(1-2cmの石灰を含む)。良好	外面淡褐色—淡褐色。 内面淡褐色。	F-183
MS101	変	①59	103	48	①14.3W ② 5.5△ ③ 2.5	直立してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端はそのまま屈曲する。口縁部内面は「く」の字状に屈曲する。	風化が著しい。外面—口縁部に平行沈線が認められる。以下ココナテ。内面—ココナテ。	底(1-2cm程度の石を含む)。良好	内外面淡褐色。	1-6
MS101	変	①60	103	46	①5.9 ②17.7W ③つよみ ④5.7	つまみは大きくひろく、体部は内湾してのびる。	外面—つまみ部ココナテ。体部下端部付帯ココナテ。体部以下、内面—一次平直ケズリ。以下左方向ケズリ。	底(1-4cmの石灰を含む。雲母を含む)。良好	外面黒色—淡茶褐色。 内面淡褐色。	つまみ外面に黒帯あり。 F-174
MS101	変	①61	103	199	① 8.3W ② 4.2W	浅く横状を帯る。	内外面—ナテ。	底(0.5-2cmの石灰を含む。雲母を含む)。良好	外面淡茶褐色 一帯褐色。 内面無彩色。	F-157
MS102	変	①62	103	46	①17.2W ② 4.9△ ③ 3.0	外傾してたちあがる複合口縁は、口縁部近くでわずかに外方へ突出する。口縁部下端は斜め下方に傾く。口縁部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—ココナテ。内面—口縁部—頸部ココナテ。以下左方向ケズリ。	底(砂状。少量の石灰を含む。雲母を含む)。良好	外面褐色—灰色。 内面淡茶褐色。	口縁部—頸部内面に黒帯付帯。 F-159
MSK04	変	①63	104	47	①18.3 ② 9.5△ ③ 3.3	口縁部は外縁側に外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部下端は、外方へ突出する。頸部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—口縁部上段沈線。下段平行沈線。口縁部全体を覆った平行沈線。頸部—頸部に異種横線を帯った平行沈線。内面—口縁部—頸部ココナテ。以下左方向ケズリ。	底(1-4cm灰石、石灰を含む。雲母を含む)。良好	外面淡褐色 一帯灰褐色。 内面淡褐色—褐色。	F-182
MSK04	変	①64	104	47	①17.4W ② 5.2△ ③ 3.1	口縁部は外傾してたちあがる複合口縁。口縁部は上端におきたような面をもつ。口縁部下端は、わずかに下弯する。口縁部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—口縁部平行沈線後ココナテ。頸部ココナテ。内面—口縁部—頸部ココナテ。以下左方向ケズリ。	やや底(1-2cmの灰石、石灰を含む)。良好	内外面淡褐色。	F-158
MSK04	変	①65	104	47	①6.9W ② 3.1△ ③ 3.1	口縁部は大きく外傾してたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部内面は「く」の字状に屈曲する。	外面—ココナテ。内面—口縁部—頸部ココナテ。以下、左方向ケズリ。	底(1-3cmの石灰を含む。雲母を含む)。良好	内外面淡褐色。 口縁部外側にスチ付帯。	F-179
MSK04	変	①66	104	47	①12.8W ②13.9 ③ 5.9	小さい。口縁部は、外傾して短くたちあがる複合口縁。口縁端は丸く、口縁部下端は外方へ突出する。口縁部内面は「く」の字状に屈曲する。肩部は上平に位置する。肩部は欠け。	外面—口縁部に平行沈線が認められるが風化している。頸部ココナテ。肩部—頸部に1段に、2cm以上の平行沈線が認められる。頸部中にチナテが認められるが、風化のため下不明。内面—口縁部ココナテ。頸部不明。頸部—頸部下段左方向ケズリ。以下下段を下—上方向ケズリ。	底(1-3cmの石灰を含む)。良好	外面淡茶褐色 一帯褐色。 内面淡茶褐色 一帯褐色。	口縁部—頸部外側にスチ付帯。 F-181
MSK04	(底部)	①67	104	47	①5.7△ ② 3.6	平直。	外面—縦線ナテ方向ミナギを、僅かなナテ。内面—右側を下—上方向ケズリ。	底(1-2cmの石灰を含む。雲母を含む)。良好	外面淡茶褐色 一帯淡褐色。 内面褐色。	F-166

挿表19 南谷古墳群遺跡・南谷古墳群出土土器観察表①

出土遺構	土器番号	探検	図例	取上層	法量(m)	形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	地産産存	色 調	備 考
MS K04 (北側)	●146	104	47	263	① 2.8m ② 3.0	小さな字罫。	外側一ナデ。 内側一左方向ケズりが認められる。意匠に際洋風混。	灰(1.5-3mmの石灰を含む。硬物を含む。)	良好	外側淡褐色・黄褐色。内面淡茶褐色。	F-135
MS K05 壁	169	104	47	165	① 16.0 ② 4.0m ③ 2.9	口縁部は外傾して立ちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、斜め下方へわずかに開く。口縁部内面の段は不明瞭。内面は「く」の字状に陥凹する。	外側一口縁部段状。頸部ココナテ。頸部一頸部段状頸部を用いた特引凸縁。 内側一口縁部一頸部ココナテ。以下左方向ケズリ。	灰(100程度の石灰を含む。)	良好	口縁部外側にヌク付。Y-18	
MS K05 罎	170	104	48	249	① 15.7m ② 4.7m ③ 3.2	口縁部は外傾して立ちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、そのまま陥凹する。口縁部内面の段はゆるやか。頸部内面は「く」の字状に陥凹する。	外側一口縁部円弧の平行凸縁。頸部ココナテ。 内側一口縁部一頸部ココナテ。以下ナデ。	灰(10-3mmの石灰を含む。硬物含む。)	良好	外側淡茶褐色一黒色。内面淡茶褐色。	口縁部外側にヌク。 F-168
MS K05 罎	171	104	48	249	① 15.7m ② 4.7m ③ 3.1	口縁部は、わずかに外傾して立ちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、そのまま陥凹する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部は長めで、内面は丸く二段に陥凹する。	外側一口コナテ。 内側一口縁部一頸部ココナテ。口縁部は「く」状に「く」によるココナテの痕跡あり。頸部以下ケズリ。	やや硬(0.5-2mmの石灰を含む。硬物含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F-163
MS K05 罎	172	104	48	255	① 2.4m ② つまみ ③ 1.7	外反傾時にひらくつまみ。	外側一つまみココナテ。作部ココナテ。 内側一上方向ケのケズリナデ。	灰(10-3mmの石灰を含む。硬物含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	F-173
Mビット 罎	173	104	48	289	① 15.3m ② 4.5m ③ 2.9	口縁部は外傾して立ちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁は、そのまま陥凹する。口縁部内面の段はゆるやか。	外側一口コナテ。 内側一口縁部一頸部ココナテ。口縁部は「く」状に「く」によるココナテの痕跡あり。頸部以下ケズリ。	やや硬(0.5-2mmの石灰を含む。硬物含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-160
M19号埴 壇墓蓋 埴	174	105	48	10,19 21,26 28,34 35,41 42,43 161 187 188	① 29.9 ② 6.9 ③ 6.9	口縁部は丸く、口縁部下縁は、そのまま陥凹する。口縁部内面の段は不明瞭。頸部は長めで、内面は丸く二段に陥凹する。	外側一頸部段状コナテ。作部平打ち。内側一頸部段状コナテ。体部圓内反凸状。	硬物をわずかに含む。	良好	内外面黄褐色。	Y 28
M19号埴 壇墓蓋 埴	175	106	48	10	① 11.2m ② 1.9m ③ 2.1 ④ 2.3	立ちあがりは内傾し狭い。頸部は薄く引き出している。突縁は水すりに屈びている。	内外面一傾斜ナテ調。	軟弱含む。	良好	内外面淡褐色。	F-159
M19号埴 壇墓蓋 埴	176	106	47	67	① 12.9 ② 3.5m ③ 3.0 ④ 3.9	立ちあがりは、やや外反しながら内傾し頸部に至る。頸部は丸い。突縁はやや上方に引き屈びている。	作部上平反凸コナテ。意匠との境に凹線が入る。底面はヘラケズリ後ナテ。	1-3mmの白砂を含む。	良好	内外面淡褐色。	外側面に1-2mmの白砂。F-148
M19号埴 壇墓蓋 埴	177	106	47	53	① 12.4 ② 3.4 ③ 3.0 ④ 2.4	立ちあがりは内傾し、狭い。頸部は丸い。突縁はやや上方へ屈びる。意匠は平ら。	外側一傾斜ナテ。自然軽やかな。内側一傾斜ナテ。	石灰、長石、砂礫を含む。	普通	外側黄褐色。内面暗灰色。	Y 6
M19号埴 壇墓蓋 埴	178	106	47	57	① 11.5 ② 3.1 ③ 2.5 ④ 0.8	立ちあがり外反しながら内傾する。頸部は丸い。突縁はやや上方に屈びる。底面は地産時に突縁している。	外側一底部ヘラケズリ後ナテ。作部平打ち。内側一底部傾斜ナテ。頸部平反凸コナテ。他は傾斜ナテ。	石灰、長石、砂礫を含む。	やや不良	外側黄褐色。内面淡褐色。	I-5
M19号埴 壇墓蓋 埴	179	106	47	94	① 12.9 ② 3.0 ③ 2.8 ④ 1.7	立ちあがりには直立し高い。頸部の形状は動揺が強い。ため不明。突縁は頸部正角形で狭い。底面は平ら。突縁は厚。	内外面とも風合いが強いが、意匠部1/2程度ヘラケズリが認められている。	大粒の砂礫を含む。	不良	内外面淡褐色。	Y 7
M19号埴 壇墓蓋 埴	180	10	47	34 38	① 14.4m ② 4.5	口縁部はやや内傾しながら下。頸部で外方へ開く。頸部は丸い。口縁部と大頸部の境は不明瞭。突縁は平ら。	外側一風化が早い。傾斜ナテ。内側一傾斜ナテ。	砂粒、長石、珪礫物を含む。	やや不良	内外面淡褐色。	Y-19
M19号埴 壇墓蓋 埴	181	106	48	63	① 8.8m ② 1.8m	口縁部はやや外反しながら傾き頸部に至る。底面は平直になる。	内外面一ナテ調。	砂粒、長石を含む。	やや不良	内外面淡褐色。	F-142(同じものか。F-145)
M19号埴 壇墓蓋 埴	182	106	48	291	① 7.1m ② 3.3	頸部部に2本の凹溝。凹溝間に負徴物による刺突。底面に円孔を穿孔。底面は平。	頸部下約2/3をヘラケズリ。意部へラケズリ。	石灰、長石粉を含む。	良好	外側淡黄褐色。	F-135
M19号埴 壇墓蓋 埴	183	106	48	49 51	① 12.8m ② 4.0 ③ 2.0m	口縁部はわずかに外傾して傾く立ちあがる。口縁部は丸い。口縁部下縁に傾く段をもつ。頸部は長めで、頸部は傾りながら立ちあがる。	外側一口縁部ココナテ。以下不明。内側一口縁部ココナテ。頸部一頸部ココナテ。頸部下平反凸コナテ。以下右方向ケズリ。底面は上りの右方向ケズリ。	やや硬(1-2mm程度の石灰、長石を含む。)	良好	外側黄褐色。内面淡褐色。	口縁部一傾斜。内面内面に白色砂礫。Y-12
M19号埴 壇墓蓋 埴	184	106	48	55	① 7.2 ② 1.4	強い頸部と短い頸部をもつ。口縁部は外傾する段をもつ。頸部は中反である。	外側一傾斜ココナテ。頸部との複合口縁はナテ。 内側一傾斜口縁ココナテ。以下ナテ。傾斜ナテ。	灰(100程度の石灰を含む。)	良好	外側淡褐色。内面黄褐色一淡褐色。	Y8, Y9 Y-18 Y-8
M19号埴 壇墓蓋 埴	185	106	48	54	① 8.9 ② 4.0 ③ 3.6	口縁部は直立して短く立ちあがる複合口縁状を呈する。口縁部は丸く、口縁部下縁はごくわずかに外方へ突出する。頸部は浅く傾いてのびる。頸部は傾りずれて、最大段を排部上手にもち、よく鋭る割面につく。底面は丸。	外側一口縁部一頸部ココナテ。頸部一頸部平反凸ココナテ。以下ナテ。内側一口縁部一頸部ココナテ。以下傾斜下平反凸コナテ。以下ナテ。以下上方向ケズリ。	灰(0.5-2mmの石灰を含む。硬物含む。)	良好	内外面淡茶褐色。	口縁部一頸部。内面内側。頸部一頸部。外側外側に赤色砂礫。F-134
M19号埴 壇墓蓋 埴	186	106	48	48		蓋面。	内外面タテタテ。直線調なし。	硬(砂を含む。硬物含む。)	良好	外側暗褐色。内面褐色。	F-146
M19号埴 壇墓蓋 埴	187	106	48	36	① 15.8m ② 4.5m ③ 3.9 ④ 2.9	わずかに外反して外傾しながら立ちあがる複合口縁。口縁部は丸く、口縁部下縁はそのまま陥凹する。口縁部内面の段はゆるやか。	外側一口縁部平行反凸後ココナテ。内側一口縁部一頸部ココナテ。 内側一口縁部一頸部ココナテ。	灰(1-3mm程度の石灰を含む。)	良好	内外面淡褐色。	I-7
M19号埴 壇墓蓋 埴	188	107	48	46	① 5.2m ② 2.0m	口縁部は丸く高い。	内外面一傾斜ナテ調。	軟弱含む。	良好	内外面淡褐色。	F-141
M19号埴 壇墓蓋 埴	189	107	48	45	① 15.8m ② 2.4m	口縁部はやや内傾しながら頸部に至る。頸部はわずかに二段状を呈す。口縁部と大頸部の境にわずかな凹線が入る。	外側一口縁部ココナテ。内側一自然軽やかな。	大粒の砂礫を含む。	良好	外側黄褐色。内面黄褐色。	F-142

挿表20 南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土時観察表②

出土品名	土器部	種類	数量	取上 番号	位置(m)	形態上の特徴	手法上の特徴	出土	残存	色調	備考
MS X01 須恵器 埴輪	196	107	49	205	①11.3 ②1.5 ③1.2 ④1.8	立ち上がりはほぼ直線的に内側するが、肩部付近で急激に平ら。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部はやや平ら。	外面-肩部約1/2幅にヘラケズリ、内面-一段削り出す。	やや楕(1-3mm大の白砂を含む)	良好	内外面淡青灰色	Pol95とセットで出土。K-7
MS X01 須恵器 埴輪	191	107	49	209	①11.2 ②4.9 ③1.9 ④1.8	立ち上がりは内側し、肩部は上段で急激に平ら。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部はやや平ら。	外面-底部下半約1/3幅にヘラケズリ、内面-一段削り出す。	直(1mm大の白砂を含む)	良好	内外面青灰色	K-9
MS X01 須恵器 埴輪	192	107	49	204	①10.7 ②4.5 ③1.6 ④1.6	立ち上がりはやや外反しながら内側し、肩部に平ら。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部は平ら。	外面-肩部約1/2を内側にヘラケズリ、内面-一段削り出す。	やや楕(1-5mm大の白砂を含む)	良好	内外面青灰色	ケズリ方向(左) K-5
MS X01 須恵器 埴輪	193	107	49	202	①12.0 ②4.4 ③1.6 ④1.6	立ち上がりはほぼ直線的に内側し肩部は鈍い段をなす。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部は平ら。	外面-底部約半のヘラケズリの範囲は狭い。肩部へ少し後ヘラケズリ。	やや楕(1-3mm大の白砂を含む)	良好	内外面淡青灰色	K-11
MS X01 須恵器 埴輪	194	107	49	218	①10.6 ②4.7 ③1.4 ④1.8	立ち上がりはやや外反しながら内側し、肩部は鈍い段をなす。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部は平ら。	外面-底部下半約1/2を内側にヘラケズリ、肩部へ少し後ヘラケズリ。	やや楕(1-8mm大の白砂を含む)	良好	内外面青灰色	K-10
MS X01 須恵器 埴輪	195	107	49	205	①12.6 ②4.3 ③1.5 ④2.4	口縁部はゆるやかに内側しながら下へ下へ、肩部は鈍い段をなす。天弁部との境には鈍い段がつく。天弁部は平ら。	外面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ、天弁部約1/2を内側にヘラケズリ。	やや楕(1-3mm大の白砂を含む)	良好	内外面淡青灰色	外面に天弁部も赤色を帯び、Pol96とセットで出土。K-6
MS X01 須恵器 埴輪	196	107	49	208	①11.4 ②4.2 ③1.6 ④2.6	口縁部は外側しながら下へ下へ、肩部は鈍い段をなす。天弁部との境には鈍い段がつく。天弁部は変形している。	外面-天弁部のほとんども内側にヘラケズリ、口縁部は平ら。	直(1-3mm大の白砂を多量に含む)	良好	内外面青灰色	K-8
MS X01 須恵器 埴輪	197	107	49	203	①12.7 ②4.2 ③1.8 ④2.5	口縁部はゆるやかに内側しながら下へ下へ、肩部は鈍い段をなす。天弁部は平ら。	外面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ、他は内側に削り出す。	やや楕(1mm大の白砂を含む)	良好	内外面青灰色	ケズリ方向(左) K-4
MS X01 須恵器 埴輪	198	107	49	202	①11.3 ②1.4 ③1.3 ④2.4 ⑤2.5	口縁部はほぼ直線的に下へ下へ、肩部は鈍い段をなす。天弁部との境には鈍い段がつく。天弁部は平ら。	外面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ、肩部へ少し後ヘラケズリ。	直(1-3mm大の白砂を多量に含む)	やや不良	内外面淡青灰色	K-13
MS X01 須恵器 埴輪	199	107	49	212	①11.1 ②4.1 ③1.3 ④2.7	口縁部はゆるやかに内側しながら下へ下へ、肩部は鈍い段をなす。天弁部との境には鈍い段がつく。天弁部は平ら。	外面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ、肩部へ少し後ヘラケズリ。	やや楕(1-5mm大の白砂を含む)	良好	内外面淡青灰色	K-12
MS X01 須恵器 埴輪	200	107	49	207	①12.9 ②4.2 ③1.5 ④1.8 ⑤1.6	口縁部は緩くラップ状に閉じ、口縁部でゆるやかに急激に平ら。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部は平ら。	外面-肩部下半約1/2幅にヘラケズリ、他は内面-一段削り出す。	直(石片、長石、黒鉄粒を含む)	良好	外表面青灰色	K-2
MS X01 須恵器 埴輪	201	107	49	218	①8.2 ②6.9 ③8.7 ④6.8	口縁部は緩くラップ状に閉じ、口縁部はゆるやかに急激に平ら。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部は平ら。	外面-肩部約1/2を内側にヘラケズリ、内面-一段削り出す。	直(微砂を含む)	良好	内外面淡青灰色	K-3
MS X01 須恵器 埴輪	202	107	49	202	①10.2 ②10.4 ③7.6	口縁部は緩くラップ状に閉じ、口縁部はゆるやかに急激に平ら。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部は平ら。	外面-肩部約1/2を内側にヘラケズリ、内面-一段削り出す。	直(微砂を含む)	良好	内外面淡青灰色	K-1
M217埴輪 埴輪	203	108	50	96	①13.9 ②4.2 ③1.5 ④9.9	立ち上がりは、やや外反ししながら内側し、肩部に平ら。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部はやや平ら。	外面-底部下半約1/3幅にヘラケズリ、内面-一段削り出す。	直(1-3mm大の白砂を含む)	普通	内外面青灰色	外面天弁部へラケズリ、Pol206とセットで出土。K-1
M218埴輪 埴輪	204	108	50	103	①13.7 ②3.5 ③1.0 ④1.0	立ち上がりはやや外反ししながら内側し、肩部に平ら。肩部は高い。二段、或ははやや上へ引き出される。肩部は平ら。	外面-肩部約1/2幅にヘラケズリ、内面-一段削り出す。	直(1-5mm大の白砂を含む)	やや不良	内外面青灰色	I-4
M219埴輪 埴輪	202	108		124	①14.4 ②2.9 ③1.4 ④1.0	立ち上がりはやや外反ししながら内側し肩部に平ら。肩部は高い。肩部はやや上へ引き出される。	内外面とも同削り出す。	直(微砂を含む)	良好	内外面淡青灰色	F-121
M219埴輪 埴輪	206	108	50	45	①13.7 ②4.2 ③1.4 ④1.4	口縁部はゆるやかに内側しながら下へ下へ、肩部に平ら。肩部は鈍い段をなす。天弁部との境には鈍い段がつく。	外面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ、内面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ。	直(1-3mm大の白砂を含む)	普通	内外面淡青灰色	外面天弁部へラケズリ、Pol203とセットで出土。K-2
M219埴輪 埴輪	207	108	50	127	①15.8 ②3.5	口縁部はゆるやかに内側しながら下へ下へ、肩部に平ら。肩部は鈍い段をなす。天弁部との境には鈍い段がつく。	外面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ、内面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ。	直(1-5mm大の白砂を多量に含む)	不良	外表面淡青灰色	Y-20
M219埴輪 埴輪	208	108	50	125	①8.9 ②3.9 ③1.7	口縁部はゆるやかに内側しながら下へ下へ、肩部に平ら。肩部は鈍い段をなす。天弁部との境には鈍い段がつく。	外面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ、内面-天弁部約1/2を内側にヘラケズリ。	直(1-5mm大の白砂を含む)	普通	内外面淡青灰色	Y-5

挿表21 南谷矢野原遺跡・南谷古墳群出土土器観察表③

出土遺物	土器番号	種類	取上番号	流量(m)	形 質 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼成保存	色 調	備 考	
M21号埴輪 土師器	209	108	134	① 10.2 ② 10.2	腹部近くで内傾し下方へ下る。肩部は無い。	内外面とも同転ナデ。	泥(微砂含む)	良好	内外面淡青色。		
M21号埴輪 土師器	210	108	147 148 149	① 15.8 ② 22.8 ③ 21.6	口縁部は肥厚し、1余の肉脰が入る。腹部はラッパ状に外下する。体部には線部。	外面→線部は外下する。体部は炭化が激しいが平打ちきか入る。下部は平打は平打ち後のカキ目調整。内面→同心円文調整。	泥(1-3mm大の砂粒を含む)	不良	外面面淡青色。内面淡褐色。	Y-22	
M21号埴輪 土師器	211	108	50	134	口縁部は内湾肉脰にひらく。口縁部はわずかに内側に肥厚する。肩部は「く」の字状に短く屈曲する。肩部はよく張る。	外面→口縁部→線部ヨコナデ。肩部以下ナデ。 内面→口縁部→線部ヨコナデ。線部以下左右方向ナデ。	泥(1-6mmの石灰を含む)	良好	外面面褐色。内面暗褐色。	Y-13	
M22号埴輪 土師器	212	109	51	97 122 123 125	腹部は肥厚し縦向きは無い。肩部は丸く広から内傾し下方へ下る。体部中央には1/3余の肉脰が入る。腹部は平打は平打ち後のカキ目調整。下部は平打ち後のカキ目調整。内面→同心円文調整。	外面→線部下平打ち後のカキ目調整。下部は平打ち後のカキ目調整。内面→同心円文調整。	泥(1-3mm大の砂粒を含む)	良好	外面面褐色。内面淡褐色。	Y-4	
M22号埴輪 土師器	213	109	51	117	① 30.6 ② 6.8	「く」の字状の口縁。口縁部は外反して大きくひらく口縁部は無い。	外面→口縁部→線部ヨコナデ。肩部以下ナデ。 内面→口縁部ヨコナデ。線部以下左右方向ナデ。	中や粗(1-2mmの石灰を含む)	良好	内外面淡青色。内面褐色。	Y-17
M23号埴輪 土師器	214	109	51	117	① 23.0 ② 4.2	「く」の字状の口縁。口縁部は外反して大きくひらく口縁部は無い。	外面→ヨコナデ。 内面→口縁部ヨコナデ。線部以下右方向ナデ。	泥(100meshの石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	Y-11
M23号埴輪 土師器	215	109	88	① 12.3 ② 4.8 ③ 13.6 ④ 1.4	立ち上がりはゆるやかに内傾しながら内傾し肩部に定る。腹部は丸くおさめる。肩部は上方へ引き出される。	外面→全体同心円文ナデ。下部は平打ち後のカキ目調整。体部中央の孔を円筒状に削り、底部へ向けて削り出す。内面→一部線部も張る。後は同転ナデ。	泥(微砂含む)	良好	外面面褐色。内面淡褐色。	I-3	
M23号埴輪 土師器	216	109	100	① 1.4 ② 3.0 ③ 1.1 ④ 9.5	立ち上がりはゆるやかに内傾しながら内傾し肩部に定る。腹部は丸くおさめる。肩部は上方へ引き出される。	内外面とも同転ナデ。	泥(微砂含む)	良好	内外面褐色。	Y-25	
M23号埴輪 土師器	217	109	81	① 23.0 ② 2.7	口縁部は中や外傾しながら下へ下る。肩部は無い。天字の肉脰に線部が入る。	内外面とも同転ナデ。	泥(微砂含む)	良好	内外面淡青色。	F-144	
M23号埴輪 土師器	218	109	126	① 13.2 ② 4.5 ③ 14.6 ④ 9.3	立ち上がりは緩く傾く。内傾して肩部に定る。腹部は丸くおさめる。肩部はやや上方へ引き出される。	外面→1/4線部下平打ち後のカキ目調整。内面→1/4線部下平打ち後のカキ目調整。内面→1/4線部下平打ち後のカキ目調整。内面→1/4線部下平打ち後のカキ目調整。	泥(1-3mm大の砂粒を含む)	不良	内外面淡褐色。	Y-21	
M23号埴輪 土師器	219	109	89	113 115 140	厚みがあるやいもの。	外面→一部同心円文ナデ。下部は平打ち後のカキ目調整。体部中央の孔を円筒状に削り、底部へ向けて削り出す。内面→一部線部も張る。後は同転ナデ。	泥(微砂含む)	良好	外面面褐色。内面淡褐色。	F-152	
M23号埴輪 土師器	220	109	81	① 30.6 ② 7.2	腹部はゆるやかに内傾しながらラッパ状に内傾し、肩部は「く」字状に短く屈曲して、その肉脰に線部が入る。	外面→同転ナデ。 内面→炭化が激しいが不明。自然焼かか。	泥(1-3mm大の砂粒を含む)	良好	外面面褐色。内面淡褐色。	クシ番号15番 I-11	
M23号埴輪 土師器	221	110	51	501	深縁口縁部傾斜である。	外面→口縁部は外反して大きくひらく口縁部は無い。口縁部は平打ち後のカキ目調整。体部中央の孔を円筒状に削り、底部へ向けて削り出す。内面→一部線部も張る。後は同転ナデ。	1-3mmの石灰灰。	良好	内外褐色。	黒土目F-175	
M23号埴輪 土師器	222	110	156	① 13.6 ② 2.9	口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部は丸く、口縁部は平打ち後のカキ目調整。体部中央の孔を円筒状に削り、底部へ向けて削り出す。内面→一部線部も張る。後は同転ナデ。	全体的に炭化している。 外面→口縁部は平打ち後のカキ目調整。体部中央の孔を円筒状に削り、底部へ向けて削り出す。内面→一部線部も張る。後は同転ナデ。	粗(1-2mm程度の石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	Y-10	
M23号埴輪 土師器	223	110	261	① 15.1 ② 2.6 ③ 1.7	外傾して短く立ち上がる。口縁部は丸く、口縁部は平打ち後のカキ目調整。体部中央の孔を円筒状に削り、底部へ向けて削り出す。内面→一部線部も張る。後は同転ナデ。	外面→口縁部は平打ち後のカキ目調整。体部中央の孔を円筒状に削り、底部へ向けて削り出す。内面→一部線部も張る。後は同転ナデ。	泥(0.5-2mmの石灰灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-162	
M23号埴輪 土師器	224	110	13	① 22.2 ② 3.0	上部に面をもつ口縁部。	内外面とも同転ナデ。	泥(100meshの微砂を含む)	良好	内外面淡褐色。	I-9	
M23号埴輪 土師器	225	110	188	① 19.3 ② 2.9	口縁部は左右に内傾し、上部に面をもつ。	内外面とも同転ナデ。	微砂(砂粒を多く含まない)	良好	外面面褐色。内面淡褐色。	F-147	
M23号埴輪 土師器	226	110	4 98 104	① 13.0 ② 3.7	口縁部はゆるやかに内傾し下方に下る。肩部は段を打ける。全体的に薄手。	内外面とも同転ナデ。	泥(1-3mm大の石灰灰を含む)	良好	内外面淡青色。	Y-24	
M23号埴輪 土師器	227	110	107	① 13.4 ② 2.4	口縁部はゆるやかに内傾し下方に下る。肩部は段を打ける。全体的に薄手。	外面→口縁部より上部は同転ナデ。内面→同転ナデ。	泥(微砂含む)	良好	内外面淡褐色。	F-143	
M23号埴輪 土師器	228	110	69 81 108 113 135	① 12.3 ② 2.4 ③ 2.8 ④ 1.1	立ち上がりはゆるやかに内傾しながら内傾し肩部に定る。腹部は丸くおさめる。肩部はやや上方へ引き出される。	内外面とも同転ナデ。	泥(1-2mm大の石灰灰、石灰を含む)	良好	内外面淡褐色。	F-149	
M23号埴輪 土師器	229	110	51	2 69 81 108 113 135	最大径部は体部中央の1/3にある。断面は平ら。	外面→体部中央は平打ち後のカキ目調整。下部は平打ち後のカキ目調整。体部中央の孔を円筒状に削り、底部へ向けて削り出す。内面→一部線部も張る。後は同転ナデ。	泥(1-3mm大の石灰灰を含む)	良好	外面面褐色。内面淡褐色。	I-10	

挿図22 南谷夫婦塚遺跡・南谷古墳群出土土器観察表 ④

出土遺構	土器番号	種類	採取	取上番号	法量(m)	形態上の特徴	手法上の特徴	出土	焼成保存	色調	備考
US101	●230	111		24	①14.8 ②4.3 ③3.4	外観してたちあがる筒口縁。口縁部は外側より立ちあがる外唇をもち外唇は肥厚する。口縁部下縁は、外方へ突出する。口縁部内面の段は明確。	内外面ともヨコナテ。	吉(砂粒含む。0.3mmの石炭を含む。)	良好	外面淡茶褐色一褐色。内面淡茶褐色。	口縁部外面に黒線あり。F-187
US101	●231	111	51	28	①14.2 ②3.2 ③2.9	口縁部は外観してたちあがる筒口縁。口縁部は引き出したように光輝る。口縁部下縁は強化しているが、外方へ突出する。口縁部内面の段は明確。	外観一扁平のため不明。内面ヨコナテ。	吉(0.3mmの石炭を含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-189
US101	●232	111	52	63	①15.9 ②4.6	浅い椀状の杯部。口縁部は外反する。	扁平化が進んでいる。外側一テラコッタ状認められる。内面ヨコナテ。	桃太郎(砂粒、雲母を含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-192
US101	●233	111	54	34	①22.1 ②3.1	口縁部は外観してたちあがり、そのまま口縁部に至る。口縁部は光輝る。口縁部は丸味をもって肥厚する。	外観一口縁部ヨコナテ。口縁部一唇部テラコッタ状。内面一口縁部ヨコナテ後ヨコナテ、胴部以下、左方向ズリ。	吉(1mm程度の石炭を含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-184
US101	●234	111	31	28	①14.1 ②2.5 ③2.7	口縁部は外反してひらき、そのまま口縁部に至る。口縁部はひき出したように光輝る。胴部内面は「く」の字状に肥厚する。	外観ヨコナテ。内面一口縁部ヨコナテ後ヨコナテ、胴部以下不明。	吉(0.5-1mm程度の石炭を含む。雲母を含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-185
US101	●235	111	61	61	①10.8 ②2.7	内外5辨に外観してたちあがる。	内外面ヨコナテ。	吉(砂粒含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-191
U4号墳	●236	111	52	49 50 51 52 53 54 56	①10.5 ②12.7 ③13.5	胴部には2条の線状入りその間にクレ加工による段状が施される。胴部はゆるやかに内湾しながらテラコッタ状に肥厚する。胴部に段を有する。胴部は底部がよく圓る。	外観一作部1半部はクキ目調。下部は段状へラクリの状に平ナテ。内面一底部段状肥厚。後出段状ナテ。外唇部は表出部がある。	吉(砂粒含む。)	普通	外面青緑褐色。内面青灰色。底部淡褐色。	アン層5号。F-203
U7号墳	●237	111	70	41	①21.7 ②7.5	底部した径大きくひらいて裏面にたちあがる杯部。口縁部は外方へ突出する。	内外面一平ナテ。ヨコナテ。	吉(0.5mm程度の石炭を含む。)	良好	内外面淡褐色。内面に茶色塗彩あり。	F-194
U7号墳	●238	111	52	21	①25.4 ②4.1	縦線の口縁。作部片。	非常に磨滅している。作部片外側にテラコッタ状突起を貼り付けるための穴が認められる。	吉(砂粒含む。)	やや不良	内外面淡褐色。	F-197
U8号墳	●239	111	43			腹面直線部。胴部の縮片。	外観一作部平ナテ。腹面段状ナテ。内面一作部平ナテ。腹面段状ナテ。	吉(炭粒を含む。)	良好	外面作部淡褐色。内面黄褐色。	F-199
U1土屋	●240	111		48	①14.3 ②4.8 ③3.2	外観外観してたちあがる筒口縁。口縁部は引き出したように光輝る。口縁部下縁は強化しているが、外方へ突出する。口縁部内面の段は明確。胴部内面は丸味をもって「く」の字状に肥厚する。	外観一扁平化のため不明。	吉(砂粒含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-188
U1土屋	●241	111	22	①7.7 ②6.9	平底。	外観一扁平段状ナテ。底部不明。	吉(0.5-3mmの石炭を含む。雲母を含む。)	やや不良	内外面淡褐色。	F-190	
U1土屋	●242	111	40	①4.6 ②7.8	大きな平底。	内面直線に滑らかな段がつけられる。裏は扁平化のため不明。	吉(0.5-3mmの石炭を含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-195	
U3遺構	●243	111	52	186	①15.3 ②4.3 ③2.7	口縁部は、内面5辨に外観してたちあがる強化した複合口縁。口縁部は外側をもつ。口縁部下縁は強いヨコナテによる段状で、外方へ強く突出させる。口縁部内面の段はゆるやか。	内外面ヨコナテ。	吉(0.2mmの石炭を含む。雲母を含む。)	良好	外側淡褐色。内面淡褐色。	F-186
U3遺構	●244	111	57	①22.4 ②1.2	胴部が丸く肥厚する口縁。	内外面ヨコナテ。	吉(砂粒含む。)	良好	内外面淡褐色。	F-196	

挿表23 乳母ヶ谷第2遺跡・宇野古墳群出土土器調査表

出工品種	土器番号	時期	図版	取上番号	法 量 (cm)	重 量 (g)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎 土	焼 成 状 況	色 調	図 号
H S I 02 上瓦	245	112	52	53	径 2.6 - 3.0 穴径 0.6 - 0.7	20.6	やや、びつな球状。ほぼ中心に穿孔してある。	手捏成形後ナテ。		良 好	淡茶褐色～ 緑褐色。	F-67
H S I 05 上瓦	246	112	52	209	径 2.9 穴径 0.5 - 0.7	21.2					淡褐色～ 暗緑褐色。	F-68
H S K 01 上瓦	247	112	52	327	径 2.4 - 2.6 穴径 0.6	12.0					淡茶褐色。	F-69
H S K 03 上瓦	248	112	52	350	径 2.2 - 3.4 穴径 1.0	35.9					淡茶褐色～ 暗褐色。	F-64
H S K 03 上瓦	249	112	52	350	径 3.0 - 3.5 穴径 0.8 - 0.9	33.9					淡茶褐色。	F-65
H S K 03 土瓦	250	112	52	350	径 3.1 - 3.6 穴径 0.8 - 1.0	37.0					淡茶褐色。	F-66
H S K 03 上瓦	251	112	52	350	径 3.0 - 3.5 穴径 0.7	35.4					淡茶褐色。	F-62
H S K 03 土瓦	252	112	52	369	径 2.8 - 3.2 穴径 0.8 - 0.9	36.1					淡茶褐色。	F-63
日置橋外 土瓦	253	112	52	310	径 2.8 - 2.9 穴径 1.0 - 1.3	18.7					茶褐色。	V-223
日置橋外 土瓦	254	112	52	310	径 2.9 - 3.0 穴径 0.7 - 0.8	23.4					淡茶褐色～灰色。	黒曜石？ F-222
M S I 01 土瓦	●255	112		285	径 2.9 穴径 0.5 - 0.4	10.8					茶褐色～暗褐色。	半分穴径。 F-179
M S I 01 土瓦	256	112	52	245	径 2.5 - 2.6 穴径 0.4	12.4					淡茶褐色。	F-206
M S I 01 土瓦	257	112		226	径 3.8 - 3.9 穴径 0.9	19.1					淡茶褐色～ 暗緑色。	一部穴径。 F-177
M19号墳 南方部 土瓦	258	112		262	径 3.4 - 3.6 穴径 0.8 - 0.8	14.8	淡茶褐色。	F-176				
M S I 05 土磚	259	112		108	長 5.6 幅 2.1 穴径 0.5	20.7	楕圓形の上縁。		茶	茶褐色。	F-70	
日置橋外 赤つむぎ の瓦葺	260	112	52	18	径 2.0 厚 0.6		磁器。		極めて緻密。	極良好	白色。	F-230

挿表24 土製品観象表

出土品種	遺物番号	押 凹	頂 凹	取し番号	種 類	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形 態 の 特 徴	備 考
H S 1 03	F 1	113	53	257	鉄鏃	3.4	0.8	0.3	鉄鏃基部の断面が長方形を呈する。	F-232
H S 1 05	F 2	113	53	241	鏃	4.7	0.9	0.3	先端部が尖り両刃、刀身長1.2cm。断面基部を呈す。	F-241
H S 1 06	F 3	113	33	192	鉄鏃	3.3	0.5	0.5	鉄鏃基部が、鋭化のため不明、断面長方形。	F-243
H F 2 G	F 4	113	33	22	刀子?	3.8	1.1	0.3	刀子基部が、断面長方形を呈す。	F-242
M S 1 01	F 5	113	53	243	鉄鏃	5.0	0.9	0.6	鉄鏃基部が、断面長方形を呈す。	F-250
M S 1 01	F 6	113	53	242	刀子?	3.6	1.6	0.3	刀子基部が、断面は扁平な長方形を呈す。	F-246
M S 1 01	F 7	113	53	177	刀子?	4.0	2.2	0.4	刀子四角。鋭化のため不明、頂は片四角。	F-249
M S 1 01	F 8	113	53	175	刀子	3.3	1.4	0.2	先端はねじれ曲がついている。断面は扁平な長方形。基部近くには4mmの孔が開いている。基部は丸くおさまられる。	F-251
M19号墳 墓上下埋存施設	F 9	113	53	190	鉄製鏃 (鏃) 先	11.6	13.5	0.4	刃部ノ字部、断面V字形の両内縁を指す、両内縁基部は鋭化している。	F-240
M19号墳 墓上下埋存施設	F 10	113	33	227	刀子	9.1	1.4	0.3	刀身0.6cm以上。先端を欠く。刃部は基部がやや内湾する。頂は均角鈍頭、基部は鋭。	F-239

挿表25 鉄製品観察表

出土品種	番号	採掘	採取	取し番号	種 類	石 材	最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	形 態	備 考
銅製鏃	S 1	117	53	70	管玉		2.45	径 0.83	穴径 0.3 - 0.1	3.1	片側穿孔。 淡緑色。	F-136
M23号墳	S 2	117	53	116	管玉	碧玉	2.00	径 0.75	穴径 0.3 - 0.1	2.3	片側穿孔。 淡緑色。	F-137
M23号墳	S 3	117	53	86	管玉		2.63	径 0.7	穴径 0.3 - 0.1	2.5	片側穿孔。 淡緑色。	F-138
M23号墳外 19号墳墓 色土層内	S 4	114	54	261	スライ パー	ガラス質安山岩	7.6	5.6	1.5	53.6	V字形を呈す。刃部は鈍い鈍頭でギザギザになっている。表面はかなり風化している。	F-228
M23号墳外 19号墳墓 色土層内	S 5	114	54	261	スライ パー	ガラス質安山岩	8.8	5.5	1.6	85.0	刃部は大きな割痕によって作る。表面かなり風化。	F-227
M23号墳外 19号墳墓 色土層内	S 6	114	54	151	銅片	安山岩	8.1	6.2	1.4	90.0		F-208
M23号墳外 19号墳墓 色土層内	S 7	114	54	261	不明	安山岩	6.8	5.6	1.1	48.8	片側をよく磨削している。基部の一部みかく。	F-237
M19号墳 墓土中	S 8	114	54	102	磨製石斧	霞石質花崗岩 (アブライト)	14.8	3.3	3.0	310.0	断面不定形な梯形を呈す。刃部は両方、中央部に鋭頭あり、各側面に割痕が付き、	I-8
M23号墳外 19号墳墓 色土層内	S 9	114	54	111	磨製石斧	霞石質花崗岩 (アブライト)	6.6	3.0	1.5	40.0	磨製石斧の刃部、基部・基部を欠く。刃部一部欠損。	Y-14
M S 1 02	S 10	115	54	86	磨石	閃緑岩	15.6	8.8	5.0	1044.0	断面三角形を呈す。両側面に起刃あり。	F-226
M S 1 02	S 11	115	54	82	磨石	黒雲母角閃石安山岩	9.0	5.6	3.4	248.0	尖形した長方形の管玉を呈す。両側、両側面に起刃あり。	F-221
M S 1 02	S 12	115	54	84	磨石	角閃石安山岩	6.7	5.8	1.5	78.0	扁平な管形。両端に、両面からの打ち欠き。	F-72
M S 1 02	S 13	115	54	69	磨石	角閃石安山岩	7.1	6.2	1.4	81.5	管形を呈す。両端に、両面からの打ち欠き。	F-73
M S 1 02	S 14	115	55	58	磨石	角閃石安山岩	6.4	4.6	2.1	92.0	管形を呈す。両端を両面から打ち欠く。	F-74
M S 1 05	S 15	115	55	287	磨石	角閃石安山岩 重量が大きい				184.0	管形を呈す。両端に両面からの打ち欠き。	F-75
M S 1 05	S 16	115	55	282	磨石	角閃石閃緑岩	5.9	5.5	1.6	64.0	尖部がかなり風化している。片側起刃。両側面を両面から打ち欠く。	F-235
M S 1 04	※ 17	116	55	251	磨石	石英片岩	9.1	5.8	1.9	147.0	断面管形を呈す。片側だけを使用したものか。	F-238
M S 1 01	S 18	116	55	163	磨石	石英安山岩	△ 4.5	△ 4.3	0.7	26.0	片側及び側面を下側に尖っている。基部 一端のみ残る。他は欠損。	F-139
M S 1 01	S 19	116	55	257	磨石	緑色の成層状質 閃緑岩	△ 4.5	2.3	△ 1.1		断面三角形を呈す。先端部分を欠く。基部は二面あり。よく使われている。	F-207
M S 1 01	S 20	116	55	201	磨石	基岩片	7.36	3.2	1.6	50.3	全体が磨削されている。磨石の可能性ある。	F-202
M S 1 01	S 21	116	55	201	磨石	流紋岩質閃緑岩	11.4	4.4	4.3	220.0	平らな断面は2面あり。片側はよく使われている。もう片側は内凹している。他の面は粗った跡が認められる。両端及び基部を欠削しているが、欠削後も磨った跡がある。つや出しに使用したのと思われる。	F-201
M S 1 01	S 22	116	55	203	磨石、石 鏃	酸性成状安山 岩	15.1	9.2	2.5	512.0	両面を欠いている。基部は2面あり。表面は一部よく使われて削れている。	F-206
M S 1 01	S 23	117	55	281	石鏃	安山岩	32	29.6	10.2	14.5kg	両側面に厚い。両面に起刃あり。	

挿表26 管玉・石器観察表